

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	ギリシア古代都市メッセネのアスクレピオス神域の建築 及び考古学的国際共同調査：中間報告
Author(s)	伊藤，重剛
Citation	
Issue date	2007
Type	Research Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8023
Right	

ギリシア古代都市メッセネのアスクレピオス神域の 建築及び考古学的国際共同調査

中間報告

日本学術振興会科学研究費補助金 基盤 (A) 海外
課題番号 16254005

林田義伸 伊藤重剛 吉武隆一

研究代表者 伊藤重剛

熊本大学ギリシア古代建築調査団
2007

ギリシア古代都市メッセネのアスクレピオス神域の
建築及び考古学的国際共同調査

緒言

本書は、ギリシアの古代都市メッセネで発掘されたアスクレピオス神域のストアに関する建築調査の中間報告書である。アスクレピオス神域の調査は、アテネ大学の故オルランドス教授によって、1950年代から70年代にかけて行われ、一応完結したものの、同教授の逝去によって最終報告書は完成しなかった。その後1986年からは、クレタ大学のテメリス教授がメッセネ考古学協会を設立し、アスクレピオス神域の再発掘や、その周辺を中心にした都市施設の発掘が大規模に行われている。熊本大学の調査団は、この調査に共同研究者として参加し、ギリシア隊が発掘して出土して建築遺構の調査を行ってきた。アスクレピオス神域の建築調査は、2002年頃から徐々に始めていたが、2004～2006年度にかけて今回の日本学術振興会の科学研究費補助金を得て行なわれ、そして終了した。

本書は、科研費を終了するに当たっての調査の中間報告書であり、現在の時点で、調査の結果どのような成果物が得られたか、を示すものである。実測図面、写真、そして文章により調査により、どのような事実が判明したかという遺構の調査記録を基本としており、これに基づく分析も一部含まれている。記述内容の大半は、共同研究者の都城高専の林田義伸教授と国士舘大学の吉武隆一客員研究員が行ない、部分的に調査団長の伊藤が補完し、また最終的な監修を行なった。研究としては、まだ関連文献の調査などが残っており、今後そうした研究を行なったうえで、なるべく短い期間で最終報告書を出版する予定である。

今回の科研費の調査では、本来の目的であるアスクレピオス神域のストアの調査のほかに、古代都市メッセネの市域内にあるマヴロマティ村の民家調査を途中から研究計画に追加し、遺跡の調査と並行して行なった。村の住宅は、殆どが伝統的な石造の住宅である。しかし、近代化の進行と子孫への継承によって、農村住宅としての本来の形と機能がかなりの部分の変容しつつある。したがって、これらをギリシアの伝統的住宅遺産として、また、変容しながらも現代に生きる住宅として、その形態、機能、住み継ぎ方について、研究することは意義あることだと思われる。結果は非常に興味深いものであったが、ここではとりあえず建築学会九州支部に発表した報告を転載することで仮報告とし、全体をまとめた報告はあらためて公にしたい。

熊本大学の調査団が、ギリシアで古代建築の調査を始めたのは1993年からであるから、今年度で14年が過ぎた。振り返ると、よくここまで毎年やってきたという些かの感慨がある。最初の調査地は、神託で有名なデルフィのアテナ・プロナイア神域で、メッセネに調査地を移したのが1997年であった。メッセネは、現在、ギリシアで最も大規模に発掘調査が行われている遺跡である。テメリス教授は、日本の建築調査団を寛容にも受け入れて下さって、まずスタディオン地区の家型墓の調査をした後、アスクレピオス神域のストアの調査にとりかかった。この神域はメッセネにおける主神域であり、民会場（エクレシアステリオン）や評議会（ブウレウテリオン）が附属して政治的な役割も担っていた重要な建物である。調査団としては、そのようなストアを調査できたのは実に光栄なことであり、その幸運を感謝しなければならない。

謝辞

メッセネにおける日本隊の調査は、多くの人々の協力によってなされた。まず、第一にメッセネ考古学協会の会長で、クレタ大学名誉教授のペトロス・テメリス教授を挙げねばならない。教授は1980年代からメッセネで発掘を行っており、教授は自分たちが発掘した建築遺構について、我々が実測調査するという許可を快く与えて下さった。我々は非常に良好な関係を持ちながら、共同研究を進めることができた。同じく同考古学協会の考古学者クレアンシ博士には、現場での実際の作業などに様々な支援を頂いた。エリザ・スュンパラ博士はアスクレピオス神殿について、学位論文を書いた考古学者であるが、同じサイトを研究する人として、公私両面において協力いただいた。私の留学時代の恩師ヨルゴス・ラバス博士には、いつものことながらギリシアの調査における様々な局面でお世話になった。残念ながら2006年に鬼籍に入られ、ここに深い感謝と哀悼の意を表する。オックスフォード大学のジム・クールトン名誉教授、ベルリン自由大学のウォルフラム・ホプフナー名誉教授には、学問上のいくつかのアドバイスを頂いた。

日本の共同研究者にも心からの感謝の意を表したい。ギリシアではいつも調査のパートナーである都城高専の林田義伸教授は、今回のアスクレピオス神域のストアについては主たる担当者として、調査に当たり、本書の執筆も彼が大半を行なった。また国土舘大学の岡田保良教授、大阪市立大学の横山俊祐教授、前橋工科大学の星和彦教授には、科研費の共同研究者としてサイトでの調査に多大なご協力をいただいた。実測技術に関しては、(有)宮塚文化財研究所の宮塚義人氏と宇野慶子氏、そして(株)計測リサーチから西村正三氏、倉重裕俊氏、加藤淳氏の技術協力を得た。

研究室の学生諸君、あるいは他学部や他大学から参加してくれた学生諸君に対して謝意を表したい。彼らの現場での実測作業がなければ、調査は不可能であったし、また帰国後の研究室での整理作業がなければ、このような報告書も出来なかったであろう。特に博士後期課程での学位論文の一部として、研究を担当してくれた現在テサロニキ大学に留学中の吉武隆一君（現国土舘大学客員研究員）は、本研究に大きく貢献してくれた。

最後に、科学研究費によって調査費を助成いただいた日本学術振興会、学長裁量経費として研究助成いただいた崎元達郎熊本大学学長、対して、甚深の謝意を表したい。

平成 19 年 3 月 調査団長・熊本大学教授 伊藤重剛

アスクレピオス神域関係調査概要

現地調査

平成 13 年 (2001)	アスクレピオス神域調査・墓廟Ⅲの仮復元
平成 14 年 (2002)	アスクレピオス神域調査
平成 15 年 (2003)	アスクレピオス神域調査
平成 16 年 (2004)	アスクレピオス神域調査・マヴロマティ民家調査
平成 17 年 (2005)	アスクレピオス神域調査・マヴロマティ民家調査・ 墓Aの調査・メッセネ神殿調査
平成 18 年 (2006)	アスクレピオス神域調査・メッセネ神殿調査

助成金

日本学術振興会科研費 基盤A 海外

平成 16 年 (2004)	7,100,000	直接経費
	2,130,000	間接経費
平成 17 年 (2005)	6,100,000	直接経費
	1,830,000	間接経費
平成 18 年 (2006)	5,600,000	直接経費
	1,680,000	間接経費
合計	¥ 24,440,000	

その他の助成金

平成 17 年 (2006)	¥ 500,000	受託研究 (株) 計測リサーチ
	¥ 1,000,000	熊本大学学長裁量経費

調査参加者

平成 13 (2001)

伊藤重剛 (団長・熊本大学助教授), 林田義伸 (都城工業高等専門学校教授),
勝又俊雄 (女子美術大学教授)
武田明純, 島田 啓, 吉武隆一, 山田健太, 立石涼一, 緒方智子 (熊本大学大学院生)
古賀智博, 富岡大, 中村重陽 (熊本大学学部生)
宮塚義人, 宇野慶子 ((有) 宮塚文化財研究所)

平成 14 年 (2002)

伊藤重剛 (団長・前掲), 林田義伸 (前掲)

吉武隆一，古賀智博，中村重陽（熊本大学大学院生），仲矢咲紀（同学部生）

平成 15 年（2003）

伊藤重剛（団長・前掲），林田義伸（前掲）

吉武隆一，西村確，米岡太志，廣田奈津子（熊本大学大学院生）

平成 16 年（2004）

伊藤重剛（団長・熊本大学教授），林田義伸（前掲），岡田保良（国土舘大学教授），
横山俊祐（大阪市立大学助教授）

吉武隆一，青木康浩，小川圭子，加生祥啓，近藤綾子，土山清子（熊本大学大学院生）

平成 17 年（2005）

伊藤重剛（団長・前掲） 林田義伸（前掲） 横山俊祐（大阪市立大学 教授）

小川圭子，加生祥啓，木本啓介，末安聡子（熊本大学 大学院生）

安井伸顕（熊本大学 学部生）

西村正三，倉重裕俊，加藤 淳（㈱計測リサーチ）

平成 18 年（2006）

伊藤重剛（団長・前掲） 林田義伸（前掲）

國竹真由美，末安聡子，亀山洋祐，小柳 勇，安井伸顕（熊本大学 大学院生）

加藤旭光（前橋工科大学 大学院生）

執筆分担

第 1 章 伊藤重剛

第 2 章 林田義伸、吉武隆一

第 3 章 林田義伸、吉武隆一

第 4 章 伊藤重剛

目次

第1章 序章

1-1. 研究の背景	1
1-2. 研究の目的と方法	3

第2章 ストアの現状

2-1. 調査および遺跡の概要	6
2-2. 基壇及び円柱の心々間柱間寸法	8
2-3. 背壁とストアの長さ及び深さ寸法、及び、床面のレベル	14
2-4. 排水設備	20

第3章 オーダーと小屋組

3-1. 円柱	21
3-2. エンタブラチュア	48
3-3. ストアの復元	66

第4章 終章

	74
--	----

表	76
---	----

図版	85
----	----

付録	143
----	-----

発表論文

1 米岡太志、伊藤重剛、林田義伸、吉武隆一 地中海古代都市の研究 (113) メッセネのアスクレピオス神域の泉水場 日本建築学会九州支部研究報告第43号 2004年3月 pp.621-624	146
2 廣田奈津子、伊藤重剛、林田義伸、吉武隆一 地中海古代都市の研究 (114) メッセネのアスクレピオス神域の入り口について 日本建築学会九州支部研究報告第43号 2004年3月 pp.625-628	150

- 3 西村確、伊藤重剛、林田義伸、吉武隆一 154
地中海古代都市の研究 (115)
 メッセネのアスクレピオス神域のセバステイオンについて
日本建築学会九州支部研究報告第 43 号 2004 年 3 月 pp.629-632
- 4 中村重陽、伊藤重剛、林田義伸、吉武隆一 158
地中海古代都市の研究 (116)
 イオニア・コリント式オーダーにおけるフリーズ装飾のモチーフに関する研究
日本建築学会九州支部研究報告第 43 号 2004 年 3 月 pp.633-636
- 5 米岡太志、伊藤重剛、林田義伸、吉武隆一 162
地中海古代都市の研究 (117)
 メッセネのアスクレピオス神殿の北プロピロン
日本建築学会九州支部研究報告第 44 号 2005 年 3 月 pp.797-800
- 5 吉武隆一、伊藤重剛、林田義伸 166
地中海古代都市の研究 (118)
 メッセネのアスクレピオス神殿のストアに関する建築史的考察
日本建築学会九州支部研究報告第 44 号 2005 年 3 月 pp.801-804
- 7 加生祥啓、伊藤重剛 170
地中海古代都市の研究 (119)
 ギリシア・メッセネにおける家型墓（墓 A）に関する研究
日本建築学会九州支部研究報告第 45 号 2006 年 3 月 pp.833-836
- 8 安井伸顕、伊藤重剛 174
古代都市メッセネにおけるメッセネ神殿の復元に関する研究
日本建築学会九州支部研究報告第 45 号 2006 年 3 月 pp.829-832
- 9 安井伸顕、伊藤重剛、林田義伸 178
地中海古代都市の研究 (120)
 古代都市メッセネにおけるメッセネ神殿調査報告 2006
日本建築学会九州支部研究報告第 46 号 2007 年 3 月 pp.705-708
- 10 吉武隆一、林田義伸、伊藤重剛 182
ギリシア古代都市メッセネのアスクレピオス神域におけるストアの研究
 オーダー及び小屋組の復元
日本建築学会計画系論文集第 585 号 2004 年 11 月 pp.207-212

- 11 青木康浩、伊藤重剛、横山俊祐、小川圭子、近藤綾子 188
集落構成と民家の基本的な特徴
ギリシア・マブロマティにおける民家の持続的変容に関する研究 その1
日本建築学会九州支部研究報告第44号 2005年3月 pp.29-32
- 12 青木康浩、伊藤重剛、横山俊祐、小川圭子、近藤綾子 192
オリジナルプランの構成原理とその変容
ギリシア・マブロマティにおける民家の持続的変容に関する研究 その2
日本建築学会九州支部研究報告第44号 2005年3月 pp.33-36
- 13 小川圭子、伊藤重剛、横山俊祐、青木康浩、近藤綾子 196
民家における増改築の実態と要因
ギリシア・マブロマティにおける民家の持続的変容に関する研究 その3
日本建築学会九州支部研究報告第44号 2005年3月 pp.37-40
- 14 近藤綾子、伊藤重剛、横山俊祐、青木康浩、小川圭子 200
分家システムの特性と持続的居住への作用
ギリシア・マブロマティにおける民家の持続的変容 (その4)
日本建築学会九州支部研究報告第44号 2005年3月 pp.41-44
- 15 小川圭子、伊藤重剛、横山俊祐、末安聡子 204
近年の増改築の実態と特性
ギリシア・マヴロマティにおける民家の持続的変容に関する研究 その5
日本建築学会九州支部研究報告第45号 2006年3月 pp.1-4
- 16 末安聡子、伊藤重剛、横山俊祐、小川圭子 208
民家のバルコニー、タラツァの特性
ギリシア・マヴロマティにおける民家の持続的変容に関する研究 その6
日本建築学会九州支部研究報告第45号 2006年3月 pp.5-8

第1章 序論

1-1. 研究の背景

メッセニアは、ペロポネソス半島の南端に広がる平野である (Pl.1-a)。北はアルカディアの山脈、東はラコニアと隔てる山脈によって囲まれている。歴史的には、スパルタのあるラコニアによって長く支配されていたが、紀元前 371 年、レウクトラの戦いによって、ラコニアの支配から解放され、その後紀元前 369 年、メッセネはメッセニアの首都としてエパミノンドスによって建設された。

メッセネは、メッセニアの平野を東に臨む山間部に位置している。イトメ山をアクロポリスとしながら、その南側に広がる緩斜面にその市域が広がっている (Pl.1-b)。城壁もかなり良好な状態で数百メートルが残っている。現在までの発掘状況から見ると、市域の中央部にアゴラがあり、その北西に劇場、その南側にアスクレピオス神域が隣接しており、さらに南側にはスタディオンを含むギムナシオンがある。市域の広さからすると、おそらく古代の人口は少なくとも数万人はあったと思われるが、古代の崩壊ともに滅亡し、さらに中世を経て現在に至るが、現在の市域の殆どはオリーブの畑と化している。

メッセネに関する古代の記述としては、紀元 2 世紀のローマの旅行家パウサニアスの「ギリシア記」がある。彼はメッセネも訪問しており、アスクレピオス神域については西側のアルテミシオンなど西側の部屋群の彫刻などについて記述している¹⁾。近代になってメッセネの調査を最初に行なったのは、フランスの調査隊である。19 世紀の前半、フランス隊はペロポネソス半島一帯を調査しており、メッセネにおいてはスタディオンの一部などを発掘し平面図や、城壁やクレプシドラの泉などの遺跡を描いたエッチングなどを描いている²⁾。

その後 20 世紀になって第二次大戦後、ギリシア人考古学者でアテネ大学教授のオルランドスが、1957 年から 1974 年にかけてアスクレピオス神域を発掘した。その後、暫く発掘活動は中断していたが、1980 年代半ばから、クレタ大学のテメリス教授が、ギリシア考古学協会からメッセネ調査を委託され、メッセネ考古学協会を設立して再開された。アスクレピオス神域についても、テメリス教授によって再調査が進められ、また遺構の復元や整備が行なわれた。20 年を経た今日、テメリス教授による発掘調査はアスクレピオス神域にとどまらず、スタディオン、劇場、泉、アゴラなど広範囲に及び、古代都市メッセネの都市、建築をはじめ、歴史などについて非常に多くの学問的知見が得られている。また遺構の保存や修復、復元なども大きく進展し、一般の人々にも広く知られるようになった。現在まで、総合的な学術書は出版されてはいないが、遺跡のガイドブックが出版されている³⁾。

アスクレピオス神域はアゴラの南側にあって、中央にドリス式の神殿を配し、その四周をストアが矩形に取り囲んでいる (P.1-c,35-a)。ストアの東側には、中央にプロピロン、その南側にブウレウテリオン (評議会場)、北側にエクレスシアステリオン (民会場) が隣接し、ともにその東側の大通りに面している。ストアの北側は約 4 メートル高くなっており、中央に階段を伴った北プロピロンがあり、その両側にセバステイオン (宴会場) が左右対称に配置されて、アゴラの南側の街路に面している。

西側にはアルテミシオンを含む一連の室が並んでおり、特にアルテミシオンには、入口から入ると両側にイオニア式円柱が2本ずつ立ち、正面を中心に両側に円弧を描くように、彫刻が配置されていた。南側はストアのみで附属室はない。神殿の基壇の周囲や、ストアの基壇に沿っても、彫刻を載せたいくつもの半円形のエクセドラやベンチが並んでいた。ストアは、コリント式の円柱を中庭側にもち、内部にも一列のコリント式列柱をもっていた。ストアの奥には壁があり、その壁の周囲に上記のような室が附属していた。

アスクレピオス神域については、前述のようにオルランドス教授が発掘したのであるが、テメリス教授が再度調査を行なうようになって、四つの部分に分けて調査研究が行なわれている。東プロピロンとエクレスiasテリオンについては、パナヨティス・ビルタカス氏が調査と復元を長年続けて行っており、近年その報告書が出版される予定である⁴⁾。西側に並ぶアルテミシオンをはじめとした一連の部屋については、エレニーアンナ・フレパ氏の研究があり、すでに出版されており、内部の建築的状况の説明と上部構造の復元などがなされている⁵⁾。またアスクレピオス神殿については、エリザ・スュンパラ氏が行っており、これも近々出版される予定となっている⁶⁾。そして我々日本の調査隊は、この神域の建物の中で周囲を取り囲むストアに関して調査研究をするよう、テメリス教授から依頼されたものである。

我々日本隊のメッセネにおける調査は1997年に開始したが、アスクレピオス神域のストアの実測は、2001年から始められ2004年まで毎夏約2ヶ月間行ない、2005年と2006年は遺構の記述、データの整理や確認を行なった。

注：

- 1) Pausanias, *Description of Greece*, 4.26, 3.4, 27.8, 4.31, 4.4, 33.2.
- 2) Abel Blouet, *Expédition Scientifique du Morée*, Paris, vol.1, 1831, pp.19-46. Pl. 18-47. 遺跡全体の地図、城壁、市門、スタディオなど、図面は26枚が掲載され、遺跡の現況図、復元図などが示されている。
- 3) P. G. Themelis, *Ancient Messene*, Athens, 2001, pp. 2-3
- 4) Birtachas, P., *Architectural Studies of the Odeion and East Propylon of the Asklepieion at Ancient Messene*, Archaeological Society, Athens, 1992 (in print)
- 5) Chlepa, E.-A., *The Artemision and the Oikoi of West Stoa of the Asklepieion at Messene*, Archaeological Society, Athens, 2001.
- 6) Siunpara, P. E., *Der Asklepiodtempel von Messene auf der Peloponnes*, Berlin, 2006, (in print)

1 - 2. 研究の目的と方法

1) 研究目的と視点

前述のようにアスクレピオス神域は、1956-76年にアテネ大学のオルランドス教授によって発掘され、その発掘成果の一部は学会誌に報告されたが¹⁾、高齢であったこともあり、調査と研究成果をまとめた最終報告書は出版されなかった。彼の調査によって発表された建築図面は、平面図（縮尺約 1/500）及び立・断面図（縮尺約 1/300）²⁾と、ストアの外部列柱オーダーの立面とエンタブラチュア断面の復元図（縮尺約 1/30）³⁾の他、神域全体のアイソメ図⁴⁾である。これらは学会誌の中で発表されているが、詳細な情報については全く不足している。

したがって本研究の目的は、第一に、ストアの建築遺構に関して改めて調査を行ない、詳細な建築図面を作成し、寸法データを取得し、正確な調査記録を作成することである。第二に、その資料によって新たに研究を進め、復元図を作成し、このストアの建築的特徴を明らかにし、そしてギリシア建築の歴史の中でのこのストアの学問的評価をすることである。

建築遺構の調査では、復元図を作成することも重要な仕事である。一方で、建築の専門家としての我々の研究のもうひとつの関心は、それがいかに作られたかという技術的問題である。したがって、調査はその視点に立って行なわれ、出来るだけ正確な遺構の記録を作成しようと心がけた。その点でひとつの重要な点は寸法であるが、これについてもなるべく詳しく寸法を計測し、データを記録した。本報告書は、客観的な事実の記録を中心とした内容になっており、設計方法や施工技術の分析までは行っていないが、最終報告書では、そこまで言及するつもりである。

2) 実測方法

実測データを得る過程は、データの信頼性を示すものとして重要であり、また他の調査の参考にもなると思われるので、以下に少し詳しく述べておく。現地での実測調査において、ストアの平・立・断面図の実測図を作成し、重要な部材についても実測図を作成した。実測方法は、デジタル写真測量と、従来の手作業的な実測の2つの方法を組み合わせて行った。すなわち、遺構の平面については、トータルステーションを用いてストアの正面円柱（外部円柱）、内部円柱、後壁に沿って基準線を引き、エスロンテープ、コンベックス、曲尺、下げ振りをを用いて基準線からのオフセット量を測る方法で行い、平面図を50分の1の縮尺で作成した。立・断面図は、デジタル写真測量によってオルソ画像（正射影画像）をつくり、これとレベルによって測量した基準点の標高をもとにして図面を作成した。また、ストア周囲に残る出土部材については、コンベックス、曲尺、直尺を用いて実測し、10分の1の縮尺で図面を作成した。コリント式柱頭のように複雑な形状を持つ部材には、遺構の立面と同様にデジタル写真測量を試みたが、基本的には手作業による実測とスケッチで行なった。

3) ストアに関する既往研究

古代ギリシアのストアに関しては概括的な研究がすでになされている。クールトンは、アルカイッ

クからヘレニズム期までのストアを網羅的に取り上げており、その発展過程を追った研究を行っているが、小屋組に関しては詳しく言及していない⁵⁾。一方、ストア個別の研究としては、遺跡の発掘調査と研究をまとめた報告書の中に、ストアの復元案が示されている。例えば、ブーラスによるブラウロンのアルテミス神域のストアに関する研究や⁶⁾、コリントの南ストアに関する研究などがある⁷⁾。また学会誌に発表されたストアの復元的研究では、アテネのバシレイオスのストアに関する研究や⁸⁾、アルゴス・ヘライオンの南ストアに関する研究などがある⁹⁾。ストアの小屋組は木造であるため現存していないので、これらの復元案も痕跡に基づいた推定復元の域を出ない。しかし、ストアの屋根架構を研究する上で有用な数少ない資料であり、今回復元する際に参考とした。また、ギリシア建築の屋根架構に関してはホッジによる研究¹⁰⁾があり、小屋組の架構方法や小屋組部材の断面寸法、コーニス部材の加工、屋根の仕上げ方など、屋根架構に焦点を当てた研究を行っている。しかしホッジの研究では、神殿や宝庫のみを研究対象としており、ストアや他の建物の屋根架構についてはふれていないので、一部の考え方を参考とするに留めた。

以上のようにストアの復元に関する既往研究はいくつかあるが、まず現地で得られる資料が大事であることは言うまでもない。したがって、アスクレピオス神域のストアの復元にあたっては、可能な限り現地の実測調査で得られた資料によって復元することを第一とし、不明な点については他のストアの復元的研究の成果を参考にするという方法をとった。

注：

- 1) オルランドスは発掘結果をギリシアの *Ergon*、ドイツの *PAE*、フランスの *BCH* などに年報として報告している。H. von U. Jantzen (ed.) , *Neue Forschungen in Griechischen Heiligtumern*, Tübingen, 1974. にもこれらはまとめられている。各国の年報については、以下のとおり。
A. K. Orlandos, "Excavation Messene (in Greek) ," *PAE* 1957, pp. 121-125, Pl. 53-58; *PAE* 1958, pp. 177-183, Pl. 137-142; *PAE* 1959, pp. 162-173, Pl. 136-145; *PAE* 1960, pp. 210-227, Pl. 162-169; *PAE* 1962, pp. 99-112, Pl. 103-120; *PAE* 1963, pp. 122-129, Pl. 94-105; *PAE* 1964, pp. 96-101, Pl. 99-109; *PAE* 1969, pp. 98-120, Pl. 121-136; *PAE* 1970, pp. 125-141, Pl. 172-184; *PAE* 1971, pp. 157-171, Pl. 191-203; *PAE* 1972, pp. 127-138, Pl. 103-116; *PAE* 1973, pp. 106-111; *PAE* 1974, pp. 102-109, Pl. 83-87; *PAE* 1975, pp. 176-161, Pl. 154-161
A. K. Orlandos, "Messene (in Modern Greek) ," *Ergon* 1957, pp. 75-80; *Ergon* 1958, pp. 142-148; *Ergon* 1959, pp. 110-117; *Ergon* 1960, pp. 159-167; *Ergon* 1962, pp. 119-132; *Ergon* 1963, pp. 88-102; *Ergon* 1964, pp. 90-101; *Ergon* 1969, pp. 97-132; *Ergon* 1970, pp. 100-131; *Ergon* 1971, pp. 144-173; *Ergon* 1972, pp. 67-83; *Ergon* 1973, pp. 79-82; *Ergon* 1974, pp. 62-73; *Ergon* 1975, pp. 107-116
A. K. Orlandos, "Messene," *BCH* 82, 1958, pp. 714-717; *BCH* 83, 1959, pp. 636-639; *BCH* 84, 1960, pp. 695-700; *BCH* 85, 1961, pp. 697-703; *BCH* 87, 1963, pp. 768-777; *BCH* 88, 1964, pp. 734-742; *BCH* 89, 1965, pp. 729-732; *BCH* 94, 1970, pp. 984-989; *BCH* 95, 1971, pp. 892-895; *BCH* 96, 1972, pp. 60-66;
A. K. Orlandos, *AJA* 67, "Messene," 1963, pp. 281-282; A. K. Orlandos, *AJA* 75, "Messene," 1971, pp. 308-310
オルランドス教授が高齢で死去したため、最終報告書は出版されなかった。発掘の年次報告を上記の学会誌に発表しているが、図面に寸法はなく、図面に関する詳しい説明もない。
- 2) オルランドスによる平面図および立・断面図は、A. K. Orlandos, *PAE*, 1973, Athen, p.109, fig. 71. を参照。オルランドスの平面図に新たな発掘成果を加えたものとして P. G. Themelis, *Ibid.*, p.16, plan. 7. があるが、いずれも縮尺が小さく、寸法情報が全くない。

- 3) A. K. Orlandos, *Ergon*, 1973, Athen, p. 81f, figs. 72, 73. この復元図には、オーダー各部の寸法は全く示されておらず、円柱高さも不明なものとして描かれている。すなわちこれらの立・断面図は、部材の実測を全くせずに描かれたいわばスケッチであり、例えば、コーニス部材上面が傾斜しておらず水平に描かれていたり、バックカーが描かれていなかったり、柱頭の形状が実際の部材と異なっているなど、筆者らの調査によってこれらの図面に明らかな誤りがあることも判明した。
- 4) A. K. Orlandos, *Ergon*, 1973, Athen, p. 82.
- 5) J. J. Coulton, *The Architectural Development of the Greek Stoa*, Oxford, 1976.
- 6) Ch. Bouras, *The Reconstruction of the Stoa of Brauron*, Athens, 1967. 〈原文ギリシア語〉を参照。
- 7) O. Broneer, *The South Stoa and its Roman Successors*, Corinth vol. 1.4, Princeton, 1954.
- 8) T. L. Shear, *The Athenian Agora: Excavation of 1970*, *Hesperia* 40, 1971, Athen, pp. 246-7, figs. 2-3.
- 9) J. J. Coulton, *The Columns and Roof of the South Stoa at the Argive Heraion*, *BSA* 68, 1973, Athen, p. 73, fig. 6.
- 10) A. T. Hodge, *The Woodwork of Greek Roofs*, Cambridge, 1960.

第2章 ストアの現状

2-1. 調査および遺跡の概要

アスクレピオス神域のストアは、神殿の建つ中庭を取り囲んだ四方に建設されていた (Pl.1-c,35-a)。それぞれ、北ストア、東ストア、南ストア、西ストアと呼ぶ。ストアは、イソミ山の南の麓の緩やかな傾斜地に建設されている。敷地の自然な形状は、南西方向に向かって傾斜しているので、北東側では敷地を削り、南西側では地盤を人工的に積み上げて整地された平地に、ストアは建設されている (Pl.1-b)。地盤は砂岩で、東ストアの大部分や北ストアの一部では、砂岩の岩盤上に直接建設されていると思われる。実際、東ストアや北ストアでは、床面に岩盤が見えている箇所がある。

4つのストアは、2つの列柱と背壁をもち (Pl.35-b,36-a)、その上に屋根が架かっていたが、現在は主に基壇までしか残っていない。中庭に面する外部列柱の長さは、南北ストアは約 52 m、東西ストアは約 47 m で、各ストアの外部列柱はほとんど直角に交わっている¹⁾。外部列柱のクレピスは、ほぼ全ての部材が建設当初の状態に残っている。スタイロベイト部材は、隅部分に一部が残っているだけで、プリンスは北東と北西の隅にしか残っていない。内部円柱はスタイロベイトとプリンスまでが残っているが、外部列柱同様、円柱から上部の部材は、遺構の周囲から発掘された。背壁は、最も残りのよいところで約 6 m 近くあり、当初の状況がよく残っている。

このストアに使用された石材の材質は、基礎や基壇、背壁などは石灰岩であり、円柱やエンタブラチュア部材はポロスであった。また、ドラムや柱頭、エンタブラチュア部材にはスタッコが表面に残るものが多く存在している。また、背壁面にもスタッコ仕上げがなされていたと思われる。

石材の材質を明確にするために、広島大学の早坂氏²⁾に依頼し、その成分分析を行った。分析を行った石材は、スタイロベイト、円柱のドラム、フリーズ、コーニスの各石材の断片、ドラムに残存していたスタッコと北プロピロンに残存していたスタッコ、敷地の岩盤、古代の採石場と言われている所から採取した石である。採石場 (Pl.36-b) は古代メッセネからおよそ 15 km ほど離れたカロゲロラヒ村 (Kalogerorrachi) にあり、ストアの柱礎などの石材が採石された場所として知られている。

早坂氏の分析結果を纏めれば、下記ようになる。

「スタイロベイトは純粋な石灰岩であり、ドラムやフリーズ、ゲイソンの石材は、砂質石灰岩（岩石学的には不純な石灰岩）である。ここで使用された砂質石灰岩に比べればスタイロベイトの石灰岩はかなり風化に強い石材であると思われる。採石場から採取した岩石も砂質石灰岩で、ストアの石材がこの採石場から採取された石材かどうかは判断できないが、ドラムやゲイソンと大変よく似た石材であることは判る。

円柱のドラムに薄く塗られたスタッコと北プロピロンに厚く塗られたスタッコの成分は殆ど変わらず、純粋な結晶質石灰岩を人工的に砕いた粉を固めて作ったものであり、成分的な相違は見られない。また、スタッコを作る材料となった石灰岩は、分析した石材サンプルとは異なる場所から採掘された

ものである。岩盤は砂岩であり、石灰質を殆ど含まず、構成粒子の大部分が石英で、石英砂岩と呼べる岩石で、風化していなければ相当固い岩石である。」

尚、本稿では早坂氏の言う「砂質石灰岩」をポロスと呼んでいる。また、石材の分析結果、成分分析表、偏光顕微鏡写真は、付録として掲載した³⁾。

注：

- 1) 実測の結果、東ストアと北ストアの角度は 90.008 度、北ストアと西ストアの角度は 89.973 度、西ストアと南ストアの角度は 90.022 度、南ストアと西ストアの角度は 89.997 度であった。尚、それぞれのストア間の角度は、各ストアのクレビス石材がぶつかる入り隅の点の座標を実測し、各点を直線で結んで出来る四角形の内角として算出した。
- 2) 早坂康隆、広島大学大学院理学研究科、理学博士
- 3) 試料の分析は、2003 年度にドラムとゲイソンを、他は 2004 年度に実施した。その為、若干分析方法が異なり、また、2003 年度分析試料の顕微鏡写真は無い。

2- 2. 基壇及び円柱の心々柱間寸法

1) 外部列柱の基礎とユーティンテリア

ストアの外部列柱を支える基壇の下には、石灰岩のユーティンテリアが敷設される。ユーティンテリア石材上面と、ユーティンテリア前に敷設されている排水溝石材の上面はほぼ合わせて敷設されている。ただ、排水トンネル前では排水溝石材が取り払われており、ユーティンテリア石材の中庭側側面と、その下の基礎石を見ることができる (Pl.37-a)。そこでは、ユーティンテリア石材の厚さは約 16 cm¹⁾ で、その下に厚さが約 25 cm の石灰岩の基礎石が、さらにその下には厚さが約 40 cm の砂岩質石灰岩の基礎石が置かれていることが観察された。また、東ストアでは、ストア内の基壇近くの多くの箇所では岩盤が露呈しており、ユーティンテリアは直接岩盤を削り出してつくられた基礎の上に敷設されていると考えられる。その他のストアでも、岩盤の上に直にユーティンテリアが敷設されるか、或いは、基礎が岩盤まで到達していると思われる。

ユーティンテリア石材のクレピス下面から突き出ている箇所の上面は、平らに仕上げられている。また、ユーティンテリア石材の中庭側側面は、通常は埋められる部分であるから粗く仕上げられるのが一般であるが、このストアでは平らに仕上げられており、排水溝石材と密着させるための仕上げと推察できる。

2) 外部列柱のクレピス

基壇は下段のクレピスと上段のスタイロペイトの 2 段で構成されており、その材質は石灰岩である (Pl.37-b)²⁾。クレピスは、北ストアの中央部分にある 1 枚のクレピスの半分ほどが欠けて無くなっている他は全て残っており、ユーティンテリア上面端から 3 cm ～ 5 cm 程度後退した位置に載せられている。クレピス石材の高さは、東西南北のストアすべてでほぼ同じ寸法となっており、84 カ所の実測値を平均して、0.223 m と求めた (Table 1)。また、クレピスの踏面は、クレピスの中庭側正面から各ストアの隅に残存しているスタイロペイトの中庭側正面までの距離として 30 箇所³⁾ を実測し、その平均値 0.234 m を算出した (Table 2)。

クレピスの石材長さは、隅部を除いて東ストアでは 1.028 m ～ 1.394 m、西ストアでは 1.049 m ～ 1.368 m、北ストアでは 1.125 m ～ 1.230 m、南ストアでは 1.021 m ～ 1.391 m と、若干のバラツキが見られる (Table 3)。後述するように、クレピスの接合面上に円柱は立ち、クレピス 2 枚分が一柱間に相当すると考えられる。更に、外部列柱は東西、南北ストアでそれぞれ等間隔に配置されたと考えられる。そこで、各ストアにおいて、クレピスの端からクレピス石材の各継ぎ目までの距離の実測値 (実測値) と、端部材を除いたクレピス石材が全て同寸法であった場合の継ぎ目までの距離 (理論値) との差を算出した (Table 4)。その結果、円柱が載ると考えられるクレピス接合面と、円柱が載らないクレピス接合面での理論値と実測値との差の絶対値の平均値 (括弧内は標準偏差) は、東ストアで前者が 1.3 cm (0.8 cm)、後者が 5.5 cm (5.1 cm)、西ストアでは 0.5 cm (0.4 cm) と 2.8 cm (4.4 cm)、北ストアで 1.3 cm (0.6 cm) と 2.1 cm (1.7 cm)、南ストアでは 2.8 cm (1.8 cm) と 7.2 cm (4.6 cm) となった。即ち、

クレピス石材の接合面は、円柱が載らない箇所より円柱の載る箇所で、実測値と理論値が小さくなっており、ある程度長さにバラツキのあるクレピス石材を使用しつつも、円柱中心の位置の下に石材の継ぎ目が設置されるよう調整して敷設されたと考えられる⁴⁾。

クレピス上面の水平高さを実測したところ、北ストアでは東から西へ、東ストアでは北から南へ、西ストアでは北から南へ、南ストアでは東から西へ傾斜していることが判った。すなわち、北東から南西へ向かって水勾配が付けられている (Table 5、Pl.4-a)。クレピス高さはどのストアでもほぼ同じであり、排水溝はユーティンテリアに沿って設置されているので、排水溝も同様に北東から南西へ勾配がつけられたと考えられる⁵⁾。

3) 外部列柱のスタイロペイト

クレピスの上にはスタイロペイトが敷設されるが、スタイロペイト石材はほとんど消失しており、ストアの南西部を除く 3 隅周辺と東ストア中央より南寄りの箇所に残存するだけである (Table 6、Pl.2,3,35-a,37-b,40-b)。北ストアにおけるスタイロペイト長さは、東隅から順に、1.267 m (N01)⁶⁾、1.050 m、1.209 m (N02)、1.219 m、1.200 m (N03) となっている。また、南ストアの東端にも、東から順に、1.125 m (S01)、1.071 m、1.198 m (S02) の長さのスタイロペイト石材が残っている。残存するスタイロペイト石材の長さは、端から 2 つの石材を除いて、凡そ 1.2 m 程度の近似した長さになっていることがわかる。

北ストアの東端の石材には円柱を立てる正方形のプリンスが載っており、また、東から 3 番目と 5 番目のスタイロペイト上にも、プリンスが載っている。プリンスの中心間距離は 2.419 m と 2.436 m で、わずかな違いしかない。また、スタイロペイト石材の中心は、ほぼクレピス石材の継ぎ目の位置に合わされている。

東ストアの北端 (Pl.2) に残るスタイロペイトの長さは、北端から 0.963 m (E21=N01)⁷⁾、1.185 m、1.172 m (E20)、1.206 m、1.237 m (E19)、東ストアの中央部よりやや南側に残存しているスタイロペイト石材の長さは、0.991 m (E06)、1.248 m、1.273 m (E07)、東ストアの南端に残るスタイロペイトは 1.349 m と約 0.96 m (E01=S01) であった。西ストアの北端 (Pl.3) に残るスタイロペイトは、北端の石材が消失しているが、残存する 2 番目の石材から、1.449 m、1.018 m (W20)、1.266 m であり、バラツキが大きいように見える。東ストアの北端には、北から 1 番目、3 番目、5 番目のスタイロペイト上に正方形のプリンスが載っており、その中心間距離は 2.399 m と同寸法であった。

現存するスタイロペイトとその上に残存しているプリンス石材から、円柱はスタイロペイト石材の一つおきに立てられ、しかも端の柱間寸法とその他の柱間寸法は、基本的に同一であったことがわかる。ただし、東西ストアと、南北ストアでは、柱間寸法は異なっており、若干、南北ストアの柱間寸法が、東西ストアの柱間寸法より長いように思われる。

現存するスタイロペイト石材を見る限り、各ストアの端と端から 2 番目の石材は、他の石材とは明らかに長さが異なり、その他のスタイロペイト石材は類似した長さではあるものの、ある程度のバラツキがある。しかし、円柱の載るプリンスは、スタイロペイト石材の中央に置かれ、スタイロペイト

石材の中心が、クレピス石材の継ぎ目におおよそ合うよう調整されている。

プリンス間のスタイロベイト上面には、スタイロベイト外側端から 8 cm ほど内側の部分に、上方に 6 mm ほど盛り上げられており、盛り上がりの部分の幅（奥行き寸法）は約 0.76 m、長さは東西ストアでは 1.37 ～ 1.38 m、南北ストアでは 1.33 ～ 1.34 m と、スタイロベイト石材の長さとは無関係に、ほぼ一定の寸法で施されている。この様な仕上げは、ブーレウテリオンの出入口の敷居にもみられる⁸⁾。スタイロベイト石材の上面の盛り上げられた部分の奥、スタイロベイト石材の内側端は、再び面が落とされており、中央の盛り上げられた部分を平らな帯状の面が四方を取り囲んだ状態にある。そして、スタイロベイトの内側端の部分は、おおよそ直線的に削り落とされていたり、或いは、全く直線造ることなく粗く削り落とされたりしている⁹⁾。削り落とされた面も粗く仕上げられており、ストアの内側に敷石は敷設されなかったことを示している。即ち、ストアは床土で埋められていたと推測される。

一方、プリンスの載るスタイロベイト石材上面は、プリンスの載る部分が若干粗く仕上げられている。粗く仕上げられた面の角から 5 ～ 6 cm ほど内側の部分に、対角線上に 2 か所、約 5 cm 正方のダボ穴が掘られている。1 か所はスタイロベイト石材の外側に近い場所で、鉛を流し込む溝（以下「鉛導溝」と呼ぶ）は側面に刻まれる。また、他の一つは内側に近い場所に穿たれ、鉛導溝はストアの奥に向かって刻まれている¹⁰⁾。

スタイロベイト石材の継ぎ目には、アナシロシスが施され、石材は緊密に接合される。アナシロシスの平らに仕上げられた端部の幅は 8 cm 程度で、下方を除く 3 面に巡らされている。

なお、スタイロベイト高さについては、断片として残存している石材も含め、27 個の石材の寸法を実測し、0.202 m という平均値を得た。

4) 外部列柱のクレピスとスタイロベイトの施工痕

クレピス石材の奥行き幅は 30 cm ～ 40 cm から 1 m を超えるまで様々である。石材幅が小さなクレピスの内側には、不整形の後詰め石材が 1 個、或いは数個置かれている (Pl.37-d)。正面から見て左右のクレピス石材はクランプで連結されているが、クレピス石材と後詰め石材は連結されていない。

クランプ穴はクレピス正面端から約 30 cm を超えるあたりに穿たれている。また、クレピス上にはクランプ自体もよく残存しており、長さは 15 cm ～ 16 cm 程度、幅は 13 mm 程度の鉄製の II 字型であり、石材に埋められた上から、鉛で被覆されている。鉛上面には一辺が 5 mm 程度の正方形の窪みが多数見られる。これは、鉛を隙間に充填するために金物で押さえられた跡とも、或いは鉛をはぎ取ろうとしたときに付いた窪みとも想像され、その意味は判然としない (Pl.37-c)。

クレピス上面は正面端から 23.5 cm ～ 24.5 cm 程度まで平らに仕上げられるが、その内側は幾分表面が荒らされている。クレピス上のスタイロベイトは、表面が荒らされた部分が完全に隠れ、平らに仕上げられた面に数ミリかかる程度に、載せられる。

Pl.37-d に見られるように、クレピス石材の粗く仕上げら得た面には、ダボ穴が見られる。中庭側か

ら見てクレピス石材のおおよそ中央辺りに約 4 cm 正方のダボ穴が穿たれている (Pl.37-d の左奥にある穴)。これはスタイロベイト石材の接合面に配されたダボ穴である。また、クレピス石材の外側端から凡そ 35 cm、石材の接合面から 40 cm 程度の所にもう一つ類似した大きさのダボ穴があり、鉛導溝が掘られている (Pl.37-d の手前側、クレピス石材の継ぎ目の左側に見られる穴)。この鉛導溝の付いたダボ穴は、基本的には円柱の載るスタイロベイトの下だけにあり、円柱の載らないスタイロベイトの下には無い。

一方、クレピス石材には、石材を動かすためのバール穴が見られるものもある。バール穴はスタイロベイト石材の接合面下に配されるダボ穴の近くに穿たれている。(Pl.37-d では左上に見られるダボ穴の右隣にある穴)。ダボ穴とバール穴の関係から、Pl.37-d の箇所では、スタイロベイト石材が写真の左側のダボに石材の右端端が被るようにバールで調整されながら設置され、ダボを埋め、その後その右側に新たなスタイロベイト石材が置かれたという、石積みの順序が判る。バール穴は東ストアで良く残っており、東ストアでは、北から南の方向にスタイロベイト石材が配されたことが判明した。また、円柱の載るスタイロベイトは、東ストアでは、石材の北側の鉛導溝のあるダボ穴と、南端の石材の継ぎ目にあるダボ穴の 2 か所で固定されることになる。

東ストア以外では、クレピス上にダボ穴が明確には確認できないものが多いが、スタイロベイト石材の継ぎ目と鉛導溝の付いたダボ穴の位置関係から、スタイロベイト石材を積んだ順序を推測することができる。即ち、東ストアと同様に、スタイロベイト石材はクレピス石材の継ぎ目を覆うように配され、鉛導溝の付いたダボ穴からスタイロベイト石材の継ぎ目に配されるダボ穴の方向へ向かって順に積まれていったと考えることができる (Pl.4-b)。従って、北ストアでは東から西へ、西ストアでは北から南へ向かって、順にスタイロベイト石材が敷設されていったことになる。

ところが、南ストアでは若干事情が異なる。上記のルールより、東から 11 番目の円柱 (S11) の下に置かれたスタイロベイト石材より東側では、東に向かってスタイロベイトが敷設され、また、東から 13 番目の円柱 (S13) の下に置かれたスタイロベイト石材より西側では、西に向かって敷設されたと考えられる。一方、東から 12 番目の円柱 (S12) 位置のスタイロベイト石材が敷設されたクレピス上面には、鉛導溝の付いたダボ穴が確認できない。確認できる全てのクレピス上において、円柱の立つスタイロベイト石材は、クレピス石材と 2 つのダボで固定されていることを鑑みれば、東から 12 番目の円柱 (S12) 位置のスタイロベイトも、石材の両端のダボにより固定されたと考えられる。また、S12 位置の西隣に配されたスタイロベイト石材は、西端がダボでクレピスと結合されていたことが、クレピス石材上面のダボ穴から推測できる。このダボ穴の直ぐ西側にバール穴が開けられており、このスタイロベイト石材は、その東側にある石材の後から敷設されたことが判る。即ち、南ストアにおいては、東から 12 番目の円柱 (S12) 位置のスタイロベイト石材が最初に敷設され、その後、東西へ向かってスタイロベイトが敷設されていったことになる¹¹⁾。

5) 外部円柱の基壇におけるストアの長さと方位

方位の計測は、クレピスの保存状況が良好であるので、クレピス入り隅部を繋いだ線で各ストアの

方位を実測した。その結果、東ストアのクレピスは北から 20.03 度、東側に傾いており、また、それぞれのストアがなす角度は、ほぼ正確に 90 度となっていることが判明した¹²⁾。またストアのクレピス上での長さは、東ストアが 46.789 m、西ストアが 46.823 m となり、平均は 46.806 m となった。一方、北ストアは 51.943 m、南ストアは 51.939 m、平均 51.941 m である。東西ストアのクレピス上での長さの差は 34 mm、南北ストアでは 4 mm と僅かで、施工精度の高さや、現在に至るまでの石材のズレがあまりなかったことを示している。

スタイロベイト上におけるストアの長さは、クレピス上での東西ストア及び南北ストアの長さの平均値に、クレピスの踏面寸法 (0.234 m) を加えて、東西ストアで 47.274 m、南北ストアで 52.409 m と求めた。また、列柱長さ (各入り隅部に置かれる円柱の心々間距離) は、プリンスの中心間距離として算出した。プリンスは後述するように、一辺が 0.860 m の正方形であり¹³⁾、スタイロベイトから 0.020 m 後退して置かれている¹⁴⁾。従って、スタイロベイト端からプリンスの中心までは 0.450 m と計算できる。これにスタイロベイト上におけるストアの長さを加えて、列柱長さを東西のストアで 48.174 m、南北のストアで 53.309 m と求めた。北東隅や南東隅に残るプリンスや、クレピス等から、東西のストア正面には 21 本の円柱が、南北のストアには 23 本の円柱が並べられていたと考えられる。また、隅の心々柱間寸法は他の部分の柱間寸法と大きな差異がないことから、各ストアにおいて柱間は同寸法として割り付けられたと考えられる。そこで列柱の長さを柱間数で除して心々柱間寸法を算出すれば、東西ストアでは 2.409 m、南北ストアで 2.423 m となった。計算結果より、東西ストアと南北ストアの心々柱間寸法は微妙に異なった寸法となっていることが判明した。

6) 内部円柱礎石と内部円柱の位置

ストア内部のほぼ中央に、外部円柱の 2 柱間間隔で、内部柱が載せられる礎石が敷設されている。この上に、円筒形のプリンスが載り、円柱が立てられていた。内部柱の礎石石材の形状はほぼ方形であるが、石材の 4 周は仕上げられていないものが多い。この石材は、かなり大まかに見れば、一辺の長さが 1 m 強の正方形と言えなくもない。ただし、南ストアの南西隅の内部円柱 (PSW) から 2～4 番目の円柱位置 (PS11、PS10、PS09)¹⁵⁾ にある礎石は通常のものよりかなり小さく¹⁶⁾、オリジナルのものではないと考えられる。

プリンスは基本的には礎石のほぼ中央に載せられるが、礎石の形状が必ずしも明確な矩形を成していないものも多く、礎石の中心から外れて載っているものも多い。ただ、プリンスの位置は比較的そろっており、外部円柱のスタイロベイト端から内部円柱までの距離は、内部プリンスの中心までの距離として実測した (Table 7)¹⁷⁾。実測した箇所は、内部プリンスが残存している箇所であるが、南ストアでは、東から 2 番目 (PS01) の内部プリンスしか残っていないため、内部柱の礎石のおおよその中心までの距離として実測した。各ストアで実測した距離を平均して、東ストアで 5.244 m、北ストアで 5.278 m、西ストアが 5.272 m、南ストアは 5.273 m と求めた。

注：

- 1) 排水トンネル上に渡されたユーティンテリア石材の長さは ca.1.82 m で、その幅は ca.1.08 m である。
- 2) 広島大学の早坂康隆氏（理学博士・広島大学大学院理学研究科）に依頼し、アスクレピオス神域内の石材等の成分分析を行った。早坂氏の分析によれば、スタイロベイトの石材は「細粒で純粋な石灰岩」であり、「石灰岩らしい石灰岩」ということである。また、円柱等に使用されている岩石に比較すれば「風化に強い」石材であるとのことである。
- 3) クレピス踏面の幅は、クレピス中庭側正面端からクレピス上に残存しているスタイロベイトまでの距離を実測し、その平均値とした。残存しているスタイロベイトは 16 個で、各スタイロベイトに対し基本的には 2 箇所ずつ実測した。
- 4) ストアのクレピスは、常にこの方法で作られたわけではなく、ブラウロンのアルテミス神域のストアのクレピス部材は、ばらばらな長さに作られており、柱位置とクレピス部材の長さに、常に一定の関係があるとは限らない。(Ch. Bouras, *The Restoration of stoa at Brauron, Athens*, 1967, p. 30, Fig. 14.)
- 5) 南ストアでは不規則でよく分からないが、他の 3 つのストアのクレピスのレベルを比較すると、列柱の中央付近でむくりがついているように思われる (Table 5、Pl.4-a)
ストアの基壇のむくりは、ブラウロンのアルテミス神域のストア (Bouras, *ibid.*, p. 30, Fig. 14)、オロポスのアンフィアレイオンのストア (J. J. Coulton, "The Stoa at the Amphiarraion, Oropos," *BSA* 68, 1973, pp. 156-7, Fig. 6)、コリントの南ストア (O. Broneer, "The South Stoa and its Successors", *Corinth; Results of Excavations Conducted by American School of Classical Studies at Athens* (1932-); vol. 1.4, Princeton, 1954, Fig. 10, b) にも見られる。
- 6) スタイロベイト石材の円柱が立つと考えられる箇所に、番号を付けた。北ストアでは、東から順に N01、N02・・・N20 となる。
- 7) これは、北ストアの東端に敷設された石材と同一石材である。
- 8) 北プロピロン階段の最下段（ユーティンテリアと同じ層）の上面も、類似した盛り上がりか施されている。しかし、その表面は平らではなく、粗く仕上げられている。
- 9) スタイロベイト石材自体の奥行き寸法は、90 ～ 98 cm 程度である。
- 10) 石材の外側に近い箇所にあるダボの鉛導溝がストアの外側に向けて掘られていたり、ストアの内側の方にあるダボの鉛導溝が側面に掘られているものもあるが、事例は少ない。
- 11) 南ストアの東から 11 番目と 12 番目の円柱位置 (S11、S12) の間に置かれたスタイロベイト石材が配されるクレピス上面には、鉛導溝の付いたダボが敷設される位置に、ダボ穴が見られる。しかし、鉛導溝はなく、従って、誤ってダボ穴が穿たれたものの、実際には使用されなかったダボ穴であると考えられる。
- 12) 東ストアと南ストアのなす角度が 89.997 度、東ストアと北ストアのなす角度は 90.008 度、北ストアと西ストアのなす角度は 89.973 度、西ストアと南ストアのなす角度は 90.022 度と計測された。
- 13) スタイロベイト上に残存するプリンスは 7 個で、縦横の寸法、合計 13 箇所を実測した。最大値は 0.866 m、最小値は 0.857 m、平均値は 0.860 m で、正方形と見なすことができる。
- 14) 残存するプリンスの内、ストアの南西部の 1 個を除いた 6 個のプリンスにおいて、各 2 カ所、計 12 箇所実測し、その平均値として求めた。
- 15) 内部柱においても、外部柱と同じく、その場所に記号を付けた。記号は、北東・北西・南東・南西の隅をそれぞれ、PNE、PNW、PSE、PSW とし、他は北ストアにおいては東から PN01、PN02・・・PN11、PN12 と順に番号を付けた。南ストアも東より PS01 から PN12 まで順に番号を付けた。東西ストアは南から北へ番号を付け、東ストアでは PE01 から PE11 まで、西ストアでは PW01 から PW11 まで番号を付けた。
- 16) 石材の形状は正確な矩形ではないが、これらの寸法は、およそ 80 × 66 cm (PS11)、55 × 60 cm (PS10)、66 × 71 cm (PS09) である。
- 17) 実際に実測した距離は、クレピスの端から内部プリンスの中心までである。この実測値からクレピスの踏面寸法の平均値 0.234 m を減じて、外部スタイロベイトの端から内部プリンス中心までの距離の実測値とした。また、各ストアの隅部にあるプリンスは、外部スタイロベイトからの距離が測れないので、実測からは除外している。

2- 3. 背壁とストアの長さ及び奥行き寸法、及び、床面のレベル

1) ストア背壁の一般的構成

ストア背壁の内側面は、下から順にユーティンテリア、トイコベイト、オルソスタット、これにフリーズ面を持つ蓋石が被せられ、その上部は表面を粗くした切石の整層積みとなっている。ユーティンテリアの上面は平らに仕上げられ、内側の面は粗く切り落とされた形状となっている。従って、ユーティンテリアは埋められていたと考えられ、ユーティンテリア上面がストアの床と揃えられていたと推測できる (Pl.7,38)。

トイコベイトは、ユーティンテリアの上面から数センチ後退して載せられている。トイコベイトの高さは 27 箇所で実測した平均値として 0.239 m と求めた。また、トイコベイトの端から 4 cm 程度後退してオルソスタットが載せられる。オルソスタットの高さも 15 箇所で実測し、その平均値は 0.719 m となった (Table 8)。オルソスタット石材の左側または右側には、幅が約 4 cm の引き込み目地が刻まれており、ほとんどの石材は一つの目地を含んだ一石で切り出されている¹⁾。従って、石材の継ぎ目は、目地の片面と一致し、石材の継ぎ目が目立たない²⁾。オルソスタットの長さは、目地を含み、1.1 ～ 1.3 m 程度のものが多いが、短いものは 0.84 m、長いものは 1.90 m 等と、かなり寸法にバラツキがある。

オルソスタットの上には、高さが 20 ～ 27 cm 程度の石材が載せられる。この石材は、オルソスタットとの接触面と正面とが平らに仕上げられており、正面にはフリーズが形作られている。フリーズ面はオルソスタットから 2、3 cm 程、ストア側に突き出ており、その高さは 16 cm 程度である³⁾。また、フリーズ面にもトイコベイトと同様、幅が約 3 cm の引き込み目地が入っており、オルソスタットの目地間の中央に位置するように配されている。この石材も基本的には一つの石材に一つの目地が入るように造られている。石材のフリーズ上部は、エッジが明確に造られた後は、粗い仕上げで 5 cm 程後退している。これに面を揃えて、粗く仕上げられた切石が載せられ、壁が構成される。壁石の高さはおよそ 30 cm で、長さは様々である。壁石と壁石の隙間には、多くの箇所でスタッコが残存しており、壁石の表面はスタッコ仕上げであったことが察せられる。

以上が、ストア内壁に見られる壁面の石材構成である。しかし、各ストアの表面に見えない壁積みに関しては、ストア背後の部屋等の存在により、幾つかのバリエーションが見られる。

2) 北ストアの背壁

北ストアの背壁は凡そ 3.6 m のレベル差のあるセバステイオンの壁基礎若しくは擁壁となっている。擁壁の厚さがどの程度であるかは明確でない (Pl.37-e)。しかし、擁壁部分の上面が、セバステイオン上部に現れている箇所がある。そこでは、壁石は、ストア側に現れる面は粗く仕上げられた面となっているが、その背面、即ち埋められる面は、不成形な形に切り落とされ、後詰め of 石が置かれている箇所もある。壁石の中には、幅が 80 ～ 90 cm のものもあり、擁壁の厚さはこの程度か、これ以上であると考えられる。

また、セバステイオンの東西にある階段室では、階段室とストアの間の壁に積まれた壁石の幅は ca. 65 cm であり、これがそのまま壁の厚さとなっている (Pl.5, 38-d)。また、ストア側にオルソスタットが見えている箇所の階段室側では、表面を粗く仕上げた切石が積まれている。壁石は、ストア側、階段室側、共に表面が粗く仕上げられているが、階段室側が幾分、より粗いように見える。

北ストアの北東隅にある泉では、ストア背壁のトイコベイトがそのまま泉内部のユーティンテリアとなる。オルソスタットの上面もこれに応じて高くなるので、ストア側のフリーズのある石材上部の壁石が、泉内部に現れるとき、フリーズのある石材として仕上げられる。

3) 東ストアの背壁

東ストアの背壁は、ストアに面する建物の壁と一体化しており、東ストアのエクレシアステリオンやブーレウテリオンに隣接する壁は厚くなっている。エクレシアステリオンの壁では、ストア側にはトイコベイトが敷設されるが、エクレシアステリオン側では、表面が粗く仕上げられた切石積みとなり、その厚さは、ストア側の入口でおよそ 1.1 m となっている (Pl.38-e)。また、ブーレウテリオン開口部の間にある壁の厚さもエクレシアステリオンの壁厚とほぼ同じである。

一方、東ストアとストア南東部にある文書保管庫との間の壁は、トイコベイト部分での壁厚は 65 cm 程度であるが、文書保管庫側にはトイコベイトではなく、粗仕上げの切石が積まれている (Pl.7)。また、文書保管庫内部の岩盤が、オルソスタットの上面程度まで盛り上がっていることを鑑みれば、岩盤の上面、或いはそれより高いレベルが文書保管庫の床面であったと推測でき、粗仕上げの切石部分は埋められていたと考えられる。トイコベイト上部にはフリーズの付いた蓋石が載せられている。ただ、蓋石は幅が狭く後詰め石材が置かれているものもあり、この部分も埋められていた可能性が考えられる。

4) 南ストアの背壁 (南プロピロンより西側)

南ストアのプロピロンの西側のストア背壁 (Pl.39-a) は、独立した壁となっており、基礎石の上に載せられている。基礎石の高さは約 45 cm で、現在、4 段の基礎石が確認できる。基礎石の表面は粗く仕上げられているが、エクレシアステリオン外壁の壁石のように、若干円弧状の膨らみがある。その上に載せられるユーティンテリアは、高さがおおよそ 25 cm で、上面は平らに仕上げられているが、側面はストアの内外とも粗く仕上げられており、背面では基礎石より若干張り出している。

トイコベイトの幅は 73 cm 程度で、トイコベイト同士はⅡ型のクランプで連結されている⁴⁾。トイコベイト上面には、石材の端から 3.5 ~ 4 cm 程度の所に、オルソスタットの設置線と思われる刻線が見られ、その内側は表面が幾分荒らしてある。また、トイコベイトの上には、オルソスタットが平行に 2 枚載せられるが、オルソスタット石材を並べた内側の列上にテコ穴が確認できる。一方、オルソスタットの外側の列上にもテコ穴が確認できたが、その数は内側に比べてかなり少ない。トイコベイトのストア内側の面は平らに仕上げられている。ストア外側では内側と同様、平らに仕上げられているが、若干、仕上げが粗く、また、数カ所でボスが残ったままとなっている。

オルソスタット石材の一枚の厚みは 20 ～ 30 cm 程度で、2 枚の石材は隙間をおいて設置され、オルソスタットでの壁厚、即ちストア内側に置かれた石材の表面と外側に置かれた石材の表面との距離は、凡そ 64 cm となっている⁵⁾。外側のオルソスタット石材には、引き込み目地は付けられていない。また、その表面の仕上げは、平らに仕上げられているものの、ストア内側に比べて、ストアの外側を向く面は幾分粗い仕上げとなっている。オルソスタット石材は、内側の列、外側の列同士は、Π型のクランプで繋がれている。クランプ穴は幅が約 2 cm、長さは 5 ～ 9 cm で、クランプ自体の長さは 14 ～ 15 cm 程度と思われる。その上部は現在残っていないが、フリーズの付いた蓋石が被せられ、その上に荒く仕上げられた切石が整層積みで積みあげられたと推測される。

南ストアのプロピロンの西側のストア背壁には、凡そ 7 m 置きに、4 か所、ストア背壁より 41 ～ 42 cm 程突き出した控壁が配置されている (Pl.39-a)⁶⁾。控壁の構造は、ストア背壁と同じくオルソスタット石材の下にトイコベイト、ユーティンテリアと配され、その下に基礎石が置かれている。オルソスタット石材はストア背壁の外側のオルソスタット石材の間に差し込まれており、その石材の幅は 38 ～ 39 cm、長さは 75 cm 程度である。トイコベイトやユーティンテリアの石材はストア背壁に差し込まれていないが、ユーティンテリアから下方に数えて、1 番目と 3 番目の基礎石はストアの基礎に差し込まれている。控壁の基礎石も、ストアの基礎石と同様、表面が粗く仕上げられているが、ストアの基礎石と控壁の基礎石の接合面は、平らに仕上げられている。

控壁のオルソスタットより上の構造は不明であるが、トイコベイトの存在は、その上にも壁石が載せられていたことを暗示している。もし、オルソスタット上部に壁石が積みあげられないとしたら、この控壁はストア背壁そのものには何の構造的意味はなく、基礎の控壁ということになる。しかしそれではオルソスタットの存在意味が見いだせない。従って、オルソスタットの上には、ストア背壁の石材と絡みながら、控壁の壁石が積み上げられていたと考えるのが妥当であると思われる。

5) 南ストアの背壁（南プロピロンより東側）

南ストアの南東隅には出入口が存在しており、ストア側から 3 段の階段を上って小部屋に通じている (Pl.6)⁷⁾。その小部屋から東側に入るための敷居が存在している。敷居のある壁線から西へおよそ 6.5 m のところに、ストア背面に直行し、敷居のある壁線と平行する壁の基礎が残存している。これが、敷居側から入る部屋の西端と考えられる。ストア背壁の裏側、即ち、部屋側では、フリーズのある蓋石の下には、オルソスタットではなく粗仕上げの切石積みとなっている。この部屋の壁の基礎石は、ストア背壁の切石に部分的に組み込まれ、ストアと同時に建設されたことを示している。また、敷居や部屋内部に露出している岩盤のレベルが、この部屋の床面であると考えられるので、ストア背壁の粗仕上げの切石部分は、文書保管庫の場合と同様に、埋められていたと思われる (Pl.39-c)。

ストアの南東にあるこの部屋と南プロピロンの間にはヘローンが建っている。南ストアの背壁の、ヘローンに向かい合う部分は、南プロピロンから約 3.5 m の所まで、プロピロンの西側と同じく、オルソスタットが敷設され、トイコベイトにはボスを残して平らに仕上げられている。ところが、それより東側は、南東の部屋と同じように、粗仕上げの切石積みとなっている。トイコベイト部分も、オ

オルソスタット部が、切石積みになったとたん、粗く仕上げられた状態で残されている (Pl.39-b)。テメリス氏は、ストア南東の部屋より西側にも部屋があり、ヘローンはその部屋を取り壊して建設されたと言っている。文書保管庫や南東部の部屋から推測して、粗仕上げの切石積み部分は人目に晒されず埋設されていたと考えれば、この部分も埋設され、ストア南西の部屋と類似したレベルで床面が構成されていた可能性を見ることができる。しかし、この位置のストア背壁から壁がのびされた痕跡は全く確認できなかった。

なお、オルソスタットの上部に載せられるフリーズの付いた蓋石は、ストア内外共にオルソスタットの石材が配される場所では、一枚の石から構成されているが、外側に切石が積まれる箇所では、文書保管庫と同様に、後詰め石材が置かれた箇所もある (Pl. 39-c)。

6) 西ストアの背壁

西ストアは列柱廊の背後にアルテミシオン等の部屋があり、その境壁がストアの背壁となる。アルテミシオンの床レベルはストアのトイコペイトのレベルであり、ストア側のトイコペイトを、アルテミシオンではユーティンテリアとして、その上に高さがおよそ 23 cm のトイコペイトが載せられる。その上に、約 65 cm の高さのオルソスタットが載せられている。従って、トイコペイトのレベルは部屋の内側がストア側より 15 cm ほど高くなり、フリーズの付いた蓋石がそれぞれのレベルで載せられている (Pl.7, 39-d)。また、トイコペイトのレベルでの壁厚は凡そ 66 cm である。

他の部屋とストアの境壁でも、基本的な石積みの構成は同じとなっている。また、トイコペイトの幅は 71 ～ 75 cm 程度⁸⁾で、オルソスタットも段違いの 2 枚で構成され、2 枚を合わせた厚さが約 65 cm となっている。

7) ストア出入口の収まりと背壁表面の仕上げ

ストアに面する部屋の出入口等には、基壇部分がストア側に 7 ～ 8 cm 程突き出している箇所がある⁹⁾。突き出しているのは北プロピロンと東プロピロン、プーレウテリオン、アルテミシオン、それに、西ストアの部屋 M、部屋 N、部屋 ㉓と西プロピロン (㉓ 1) である。

この様な出入口の両端にはポロスの付け柱があり、それらはスタッコで表面が仕上げられていたと考えられる (Pl.38-a,b,40-a)¹⁰⁾。また、この様な付け柱は、隣接するトイコペイトや壁石を覆うように彫り込まれて、付け柱のモールディングはトイコペイトや壁石の表面に被せられている。

8) ストア背壁の長さ

ストアの背壁のトイコペイト上での長さは、トータルステーションで直接実測し、北ストアでは 71.999 m、東ストアでは 66.968 m であった¹¹⁾。一方、ストアの深さ (スタイロペイト端から背壁のトイコペイトまでの距離) は、各ストア 3 ～ 6 カ所計測し、その平均値として算出した。その結果、北ストアの深さは 9.774 m、南ストアでは 9.776 m、東ストアの深さは 9.843 m、西ストアでは 9.664 m となった (Table 9)。背壁の内法でのストア長さは、スタイロペイト上でのストア長さにストアの深さ

を加えて、北ストア及び南ストアで 71.917 m、東ストア及び西ストアで 66.824 m と求めた¹²⁾。

9) 床面の傾斜

内部列柱のスタイロベイト及び背壁のトイコベイトの相対的な水平高さを実測し Table 5 に示している¹³⁾。背壁のトイコベイトの水平高さは、外部柱と内部柱を繋ぐ線の、延長線上で取った。Table 5 には、実測箇所を外部柱の番号で示している。即ち、同じ番号で示される水平高さは、ストアの中庭側から背壁方へ向けての断面での水平高さということになる。

表を縦に見て判るように、内部列柱スタイロベイト及び背壁のトイコベイトはそれぞれ緩やかに傾斜して敷設されており、その傾きはおおよそクレピスの勾配に類似している。即ち、内部柱スタイロベイトや背壁トイコベイトも、クレピス同様、水勾配に沿って傾けられていると見なすことができる。

先に、外部柱スタイロベイト、内部柱スタイロベイト、背壁ユーティンテリアの上面が、ストアの床面と同じ水平高さであることを記した。そこで、外部列柱スタイロベイトと内部列柱スタイロベイトとの水平高さ差、外部列柱スタイロベイトと背壁のユーティンテリアの水平高さの差、更に、内部列柱スタイロベイトと背壁のユーティンテリアの水平高さの差を計算し、同表に示す¹⁴⁾。その結果、外部柱のスタイロベイトより内部柱のスタイロベイトの水平高さがほとんどの箇所で高くなっており、また、内部柱のスタイロベイトより背壁ユーティンテリアの水平高さもほとんどの箇所で高くなっていることが判る。特に、東ストアでは、この傾向が明瞭に現れている。東ストアでは、各部の基礎が岩盤上に直接載っていると推測されることから、各部の水平高さ差は地盤の変動に寄るとは考えにくい。従って、上記のことは床面が背壁から中庭側に向かって傾斜していることを示しているものと考えられる。

なお、外部列柱スタイロベイトと内部列柱スタイロベイトの水平高さの差は、各点の水平高さ差の平均値を算出し、0.062 m と求めた。また、外部列柱スタイロベイトと背壁ユーティンテリアの水平高さの差も、同様に、各点での水平高さ差の平均を算出し、0.126 m を求めた。

注：

- 1) その他、目地 2 つ分までを一石材で造られているものも個確認される。また、泉の西側にあるオルソスタットは、通常の石材の 2/3 程度の長さに加えて、3 目地分が一石で造られており、石材の長さは 4.23 m に達する。
- 2) 入り隅部では、壁内まで差し込まれる石材に、直角方向にぶつけられるオルソスタット端に目地が付けられる。
- 3) 北ストアの北プロピロンの西側で 0.163 m、東ストアの北隅近くで 0.155 m、西ストアのアルテミシオンの正面で 0.166 m であった。
- 4) トイコベイトの端には幅が約 2.5 cm、長さが約 8 cm のクランプ穴が見られる。従って、クランプの長さは約 16 cm となる。
- 5) トイコベイト上におけるオルソスタット設置線間の距離は、65 ～ 66 cm であった。
- 6) 控壁は、南プロピロンと便所のある部屋までの間に 4 つの控壁が立てられている。控壁間の距離は、壁の心々で、南プロピロンの東壁から最も東側の控壁までが 8.78 m、それら西へ順に、6.96 m、7.04 m、7.06 m、そして最も西の控壁壁から便所の東壁まで 7.25 m の間隔で配置されている。また、突き出した寸法はトイコベイトでの実測値である。
- 7) この出入口には扉が付けられていた痕跡がある。扉はストア側から見て外開きであった。また、このストアの出入口には全て扉が付けられているが、北プロピロン、東プロピロン、西側の出入口、南プロピロンは内開きである。また、セバステイオンへ続く東ストア東西の出入口や、アルテミシオンやその他のストア西側の部屋に開けられたストアから

の出入り口は全て外開きである。即ち、神域外から神域内への出入り口は内開きで、神域内から部屋等へ通じる出入り口は外開きとされている。これらは当時の鍵の構造からも推測でき、従って、南ストアの東端の出入り口は、ストアから何らかの部屋へ通じるものであると考えられる。

- 8) 部屋 N2 (英雄エパミノンドスとヘラクレスの部屋) で 71 cm、部屋 Y の西プロピロンの近くで 73 cm である。また、ストア側ではトイコペイトとして仕上げが成されているが、部屋の内側ではユーティンテリアとして、粗く切り落として仕上げられている。
- 9) 突き出し長さは、トイコペイトで実測した。それぞれの長さは、北プロピロンが 78 mm (西側)、77 mm (東側)、東プロピロンでは 81 mm (北側)、75 mm (南側)、プーレウテリオンの北側の出入口では 75 mm (北側)、80 mm (南側)、プーレウテリオンの南側の出入口では 82 mm (北側)、80 mm (南側) である。また、西ストアのアルテミシオンでは 80 mm (北側)、79 mm (南側)、部屋 M (テュケの部屋) では 78 mm (北側)、71 mm (南側、石が割れている)、部屋 N (テーベの部屋) では北側が 77 mm、南側はトイコペイトが残っていないが、ユーティンテリアが突き出しているのが確認できる。また、部屋 ㉓ (アポロンとミューズの部屋) の北側が 63 mm で、部屋 ㉓ 1 (西プロピロン) まで続き、部屋 ㉓ 1 の南側が 81 mm となっている。ユーティンテリアを見れば、部屋 ㉓ の北側では突き出しておらず、部屋 ㉓ の部屋の途中でユーティンテリアの突き出しがある。その位置は、部屋 ㉓ 1 (西プロピロン) の南側の突き出し部分から、ca. 7.25 m であり、これが元来の部屋の入口であったと考えられる。即ち、西プロピロンは後の時代に開けられたものであり、建設当初は部屋 ㉓ 1 の南端から約 7.25 m の幅の入口がある部屋が在ったと推測できる。
- 10) 北プロピロンの東側の付け柱には、厚さが 18 mm のスタッコが残っている。同じく北プロピロンの西側の付け柱にもスタッコが残っているが、厚さが約 25 mm と、東側に比べて非常に厚くなっている。
- 11) スタアの南西隅のトイコペイトは残存していないので、西ストア、南ストアのトイコペイト上での背壁長さは実測していない。
- 12) 実測における基準線上での背壁トイコペイト間のストア長さは、北ストア (A2-A3 線上) が 71.967 m、南ストア (A1-A4 線上) が 71.964 m、東ストア (A1-A2 線上) が 66.919 m となった。西ストア (A3-A4 線上) の長さは、南ストアにおける実測点にオルソスタットが残存していないため、実測できなかった。
- 13) 水平高さは、A 4 点を 0 m とした相対的な高さで実測した。A 4 点とは、南西入り隅部分のクレピス上面の置いた基準点である。その標高は 323.328 m と計測できた。
- 14) 外部スタイロペイトは残存数が少ないため、外部列柱スタイロペイトの水平高さは、クレピスの水平高さの実測値にスタイロペイトの高さの平均値 (0.202 m) を加えた値とした。また、背壁ユーティンテリアの水平高さは、土に埋まった箇所が多く実測が困難であったので、背壁トイコペイト上面の水平高さからトイコペイト石材の高さ (0.239 m) を引いた値とした。

2-4. 排水設備

アスクレピオス神域の中庭には、ストアの外部列柱基壇に沿って排水溝が施設されている。排水溝は、幅が約 70 cm、長さが約 120 cm 前後の石灰岩の部材でできている。部材長さは約 100 ～ 140 cm のものが多いが、かなりばらつきがあり、最大で約 220 cm 最短で約 90 cm であった。部材の上面は、幅 50 cm 弱の溝がおよそ 10 cm の深さで U 字形に彫ってある (Pl.2,3,40-b)。

排水溝は北東から南西に向かって傾斜している。神域北東にある泉水場の水は、まず、地下の水道管を通して外部列柱の北東隅へ流れだし、二手に分かれる (Pl.37-b)。排水は、途中ストアの屋根から集まる雨水を取り込みつつ、一方は西へ流れてさらに南に、もう一方は南へ流れて西に流れて、南西隅で再び合流し、地下のトンネルを通して神域の外へ排出される仕組みになっている。排水溝には、掃除するために 16 の沈殿槽が設けられている (Pl.3,40-b)。南北ストアでは約 13 m おきに、東西ストアでは約 11.5 m おきにおかれている。貯水槽の大きさは、長さ 0.76 m、幅 0.46 m で、深さ 0.33 m であった。

南西隅のトンネル (Pl.37-a) はストアの基礎と同じく、石灰岩で作られており、表面には防水のためにスタッコが塗られていた。またトンネル内に水勾配をつけるために、神域の中庭側から南に向かって、ステップがつけられている (Pl.40-c)。

第3章 オーダーと小屋組

3-1. 円柱

1) プリンス

スタイロベイト上には、外部・内部ともプリンスが置かれ、その上に円柱が載せられている。外部円柱のプリンスの内、7個の石材がほぼ完全な形、或いは実測可能な形で残存している。その7個のプリンス石材の各辺の長さとし高さについて実測した (Table10)。プリンス石材はほぼ正方形であり、実測値の平均値として、一辺の長さを 0.860 m と求めた。また、高さの平均値は 0.185 m となった。

プリンス側面の四周は、幅は約 3 cm ほど帯状に仕上げられているが、その内側は 4 mm 程度突き出されている。プリンスの上面の内側は僅かに粗く仕上げられているようにも見えるが、明確ではない。また、ダボ穴や円柱を設置する刻線などは一切見られなかった。

一方、内部円柱のプリンスは、装飾等は一切ない全くの円筒形の石材である。内部プリンスの直径が、残存する全てのプリンス、32 個を実測した。その平均値は 0.900 m である (Table11)。また、高さに関しては、残存するプリンスの内 15 個について実測し、その平均値は 0.265 m となった (Table12)。

2) フルーティングによる円柱ドラムの分類

このストアの円柱は、残存する柱頭から、外部柱及び内部柱、共にコリント式であると考えられる。フルートは、コリント式の通常のフルートと、通常のフルートとは異なる胡麻殻装飾が付けられたフルート (以下、「胡麻柄フルート」と呼ぶ) が見られる¹⁾。また、フルートの数はコリント式であるにも拘わらず 20 本となっている。ドラムに施されたフルーティングの形式は、5 種類のタイプが存在しており、これを以下のように A-type ～ E-type とした²⁾。

A-type : 全てのフルートが胡麻殻フルート

(cf. 石材 D03 : Pl.9,41-e)

B-type : 下方が胡麻殻フルートで、上方は通常のフルート

(cf. 石材 D20 : Pl.10-a,42-a)

C-type : 全てが通常のフルート

(cf. 石材 D06 : Pl.9,41-f、石材 D48 : Pl.10-a,42-d)

D-type : 20 条のフルートの内、11 条が通常のフルートで、残り 9 条が胡麻殻フルート

(cf. 石材 D22 : Pl.9,42-b)

E-type : 下方が D-type と同様のフルートで、上方は通常のフルート

(cf. 石材 D31 : Pl.9,42-c)

以上のフルーティング形式より、2 種類の円柱が想定できる。即ち、下方に胡麻殻フルートが施され、上部は通常のフルートが施されている円柱 (A-type+B-type+C-type) と、円柱下方の 9 条が胡麻殻フルートで、その他の部分は通常のフルートが施されている円柱 (D-type+E-type+C-type) の 2 種類である。

前者は、メガロポリスのフィリップのストアの内部柱に見られる柱身の形式である (Pl.42-e)。また、後者は片面から見れば、下から上まで通常のフルートが施されており、他方から見れば、前者と同じ柱身の形式のフルーティングとなる。

ストアでは、円柱上部にフルートが施され、円柱の下部にはフルートが施されていない円柱が使用される場合がある。これは、人の出入りが激しい建築においてアリスを保護する目的で採用された仕上の手法であると、クールトン³⁾は指摘している。胡麻殻フルートもその手法の一つであると考えられる。また、外部円柱にはフルートを施した円柱を使用し、内部柱にはフルートが施されない円柱を使用するという手法がヘレニズム期に流布したことも、クールトンは示している。これは、労働量の節約のため、フルーティングによる陰影の効果が十分得られない内部柱ではフルーティングが施されなかったということのようである⁴⁾。以上のことから、下部までフルートが施される後者の円柱 (D-type+E-type+C-type) が外部円柱であり、フルートが施されている面が中庭側に向けられていたと考えることができる。

ドラムの直径は、直径が実測可能なドラム 26 個について実施した。タイプ毎に実測した結果は、上下 2 箇所まで実測できたものも、片面でしか実測できなかったものもあるが、全ての実測値を単純に平均して求め、A-type が 0.607 m、B-type が 0.624 m、C-type が 0.557 m、D-type が 0.602 m、E-type が 0.566 m となった。しかし、ほとんどのドラムにおいて石材の風化が激しく、また、ドラムの片面しか実測できないものも多い。従って、C-type のドラムが、内部柱、外部柱、何れに属するものか、ドラム直径からは判別は不可能であった。

ドラムの長さについては、36 個の石材で実測が可能であった。A-type のフルートを有するドラムについては、長さが実測可能なものは 1 例だけで、1.118 m であった。その他のタイプのそれぞれの平均値は、B-type が 1.050 m、C-type が 0.970 m、D-type が 1.038 m、E-type が 1.063 m となった。どのタイプのドラムにおいても、長さにバラツキはあるものの、ほぼ 1 m 前後の石材で円柱が構成されていたことが判る。尚、ドラムの各部寸法については、Table13 にまとめて示している。

ドラムの上面や下面には、5～8 cm 正平方のダボ穴があるものもあるが、ダボ穴が無いものもある (Pl.43-a,b)。また、ドラムの側面の端には、幅が 3 cm 程度で、長さが 7 cm 程の縦溝が、ドラムの四方のフルートの中に掘られている (Pl.43-c)。この溝は、上下のドラムに刻まれて、溝に何かを埋め込み、スタッコで固められたと考えられる。この意味は説明しがたいが、如何にもクランプのように扱われており、当時の人々はクランプの効果を期待して施したように思える⁵⁾。ただ、ドラム中央のダボと、ドラム側面の縦溝の組み合わせは様々であり、確認できた範囲で、ダボと縦溝が同時に存在しているものが 23 例、逆にどちらも無いものが 8 例、縦溝は在るがダボはないものが 4 例で、ダボが在って縦溝のない事例は見いだせなかった⁶⁾。また、一つの石材において、片面にはダボ穴と縦溝が在るものの、他面にはダボ穴も縦溝も無いドラム (D22) も存在している。

尚、D10 の石材には、スタッコがフルートの部分に残っており (Pl.43-d)、ポロスの円柱はスタッコにより仕上げられていたことを物語っている。

3) 柱礎

柱礎は柱身の一部が一体化し、一つの部材になっている。柱礎の柱身部分のフルーティングは、A-type (cf. B04 : Pl.8-a, 41-c) であるものと D-type (cf. B09 : Pl.8-a, 41-d) であるものが存在している。神域内には、20 個の柱礎が残存しており、その内、16 個をフルーティングのタイプで分類することができた。A-type のフルートを有する柱礎は 9 個存在しており、その内円柱下部直径が実測可能であったのが 7 個であった。また、D-type のフルートを有する柱礎は 7 個で、4 個の円柱下部直径が実測できた。それぞれのタイプの円柱下部直径を、これらの実測寸法の平均値として求めた (Table14)。その結果、A-type のフルーティングを持つ柱礎は、柱身部分の直径 (0.667 m) が大きく、一方、D-type のフルーティングを有する柱礎は、柱身部分の直径 (0.626 m) が小さいことが判った⁷⁾。この結果はほぼドラム直径とも整合しており⁸⁾、A-type、B-type のフルートを有する柱礎やドラムは内部柱、D-type、E-type のフルートを有する柱礎やドラムは外部柱であり、内部柱に比べて外部柱は、円柱の直径が小さいことになる。

柱礎にはトルス・スコティア・トルスの順序にアッティカ式のモールディングが施されている。この内、実測が可能であった箇所は、A-type のフルーティングを有する柱礎で、柱礎高さが 5 例、下部トルス直径が 6 例、また D-type のフルートを有する柱礎では、柱礎高さが 3 例、下部トルス直径が 4 例であった (Table14)。従って、柱礎部分の各部の寸法は実測値の平均値として求め、A-type、D-type のフルートを有する石材別に、高さが 0.588 m と 0.574 m、柱礎の下部のトルス直径が 0.710 m と 0.675 m となり、何れの寸法も A-type のフルートを有する柱礎が大きくなっている。また、下部のトルスの下には、円形に突き出ている部分があり、その直径は円柱の下部直径程度で、プリンスと柱礎の間には、数ミリの隙間が開くことになる (Pl.8)。

一方、上面には、ダボの痕などが認められる部材もある⁹⁾。また、底面が確認できたのは 1 例だけあり小さな穴が見られた。しかし、プリンス上面にダボ穴が確認できるものはなく、基本的にはプリンスと柱礎はダボによる連結はなかったと考えられる。

4) 柱頭

アスクレピオスの神域付近に残された柱頭には、様々な形状のものがあるが、基本的にはコリント式の柱頭である。アカンサスの葉は 2 層巡らされ、その上に茎状部が延ばされた第 3 層目となり、その上にモールディングが最上部に付けられたアバクスが被せられている。これらの柱頭は、アカンサスの葉の数によって大まかに 2 種類に分類できる。一つは、アカンサスの葉の数が一つの層に 8 枚あり (cf. C24 : Pl.10, 46-a)、他方は 12 枚となっている (cf. C25 : Pl.11, 46-b)。一層に造作されるアカンサスの葉の数が少ななければ、当然、葉の幅は広くなりその背丈も高くなる。葉数 8 枚の柱頭の第 1 層目のアカンサスの葉の背丈はおよそ 20 cm、葉数 12 枚の柱頭ではおよそ 15 cm となっている。

2 種類の柱頭の第 1 層目では、アカンサスの葉の一枚は柱頭の正面中央に配置される¹⁰⁾。2 層目のアカンサスの葉は第 1 層目のアカンサスの葉の間から出され、第 1 層と同じく葉数は 8 枚及び 12 枚となる。従って、斜め 45 度方向には、8 枚の柱頭の場合は第 1 層目のアカンサスの葉が、12 枚の柱

頭の場合は第2層目のアカンサスの葉が配置される。葉数8枚の柱頭では、第1層目のアカンサスの葉の上から茎 (caulis) が上方に伸び、小さなヴォリュート (volute) が置かれていたものと考えられる。一方、葉数12枚の柱頭では、第2層目のアカンサスの葉の上面に接してアバクスまで大きなヴォリュートが置かれている¹¹⁾。

以上のことから、葉数8枚の柱頭では、第1層目のアカンサスの葉の背丈が約20cmで、柱頭の斜めに突き出されたヴォリュートが小さく、葉数が12枚の柱頭では、第1層目のアカンサスの葉の背丈が15cmほどで、柱頭の斜め45度方向に大きなヴォリュートを有していると考えられる。アスクレピオスの神域付近で、ストアに属すると考えられる柱頭、37例¹²⁾を確認したが、一つの層に巡らされる葉の数で分類し、葉数が確認できない場合は、アカンサスの葉の並び方、第1層目のアカンサスの葉の背丈やヴォリュートとの大きさ等を基準に、葉数8の柱頭か葉数12枚の柱頭に分類した。その結果、葉数8枚の柱頭の種類に属すると考えられるものが11例、葉数12枚の柱頭の種類に属すると考えられるものが18例であった。

また、葉数8枚の柱頭ではあるが、他のものと明らかに異なっているものが3例あった。一つの柱頭 (C01: Pl.43-e) は葉数8枚の柱頭に極めて類似しているものの、アカンサスの葉の位置が、他のものと異なり、第2層の葉が中央に配されている。また、中央部の彫像を含めて各部の寸法が全て大きめでもある¹³⁾。他の一つの柱頭 (C23: Pl.45-e) は、葉数8枚であるが、第1層目のアカンサスの葉の背丈が約15cmと低く、また、大きなヴォリュートがあり、しかも柱頭の形態自体が台形を逆さにしたような形になっている。最後の一つはC26の柱頭である。この柱頭も第1層目のアカンサスの葉の背丈が約16cmと低く、また、第2層目の葉が中央に置かれている¹⁴⁾。

柱頭の下にはアストラガル、その下にフィレットのモールディングがあり、その下に柱身の最上部が造られている。葉数8枚の柱頭では、柱身部分の直径を測ることができたのが4例で、その平均値は0.552mであった。また、柱頭部分の高さ¹⁵⁾を実測できたのも4例で、0.593mの平均値となった。葉数12枚の柱頭では、柱身部分が実測可能であったのが4例で、その平均値は0.526m、柱頭部分の高さは6例を実測し0.457mという平均値を算出した (Table15)。従って、柱身部分の直径が大きく背も高い葉数8枚の柱頭は、円柱直径が大きい内部柱に属し、葉数12枚の柱頭は、外部柱に属するものと考えられる。

柱頭の上面には、柱頭部分に円形の膨らみがあり、アーキトレーズを乗せるための座床 (setting seat) が形成されている。その直径はおおよそネッキングの直径に類似している¹⁶⁾。また円柱石材の中央には幅がおおよそ3cm、長さが9cm程度の穴が穿たれ、深くなるにつれて長さが広がっている穴が穿たれている。これは石材を吊すときに用いられた穴と考えられる¹⁷⁾。柱頭上面には石材を動かすときに用いられたと思われるパール穴が見られるものがある¹⁸⁾。また逆に、パール穴が無いものもある。葉数8枚の円柱では、上面が確認できた4例全てで、パール穴を確認できなかった。これは内部柱上部に載る梁が石材でなく、木の梁であったことを示しているとも考えられる¹⁹⁾。

アバクスは、2段のモールディングが最上部に確認できる事例もあるが、その形式を確定するほどには残存状況がよくない。アバクスの平面的な形状は内側に向かって緩い円弧状にカーブの付いた四

角形で、その角は面取りされており、アバクスの側面は幾分下を向く形となっている。従って、アバクスの面取りされた角部分は、台形を逆さまにしたような形となる。アバクスの下には、釣鐘を逆さにしたような形の柱頭の胴体が形作られている。その胴体部に、アカンサスやヴォリユートが彫りつけられる。胴体部の最上部には、フィレットが巡らされているが、その側面は若干上方向に向けられている。

柱頭正面の中央上方には、人形の彫像が配されるものと植物文様 (cf. C30 : Pl.12,47-a,b) が配されるものがある²⁰⁾。人形の彫像は一つの種類ではないように思えるが、最も多いのは翼を持つ人型像であり、8例確認した²¹⁾。その内、弓筒を背負う為の紐が掘り出されているものもあり、エロス像であると考えられる (C24 : Pl.10-b,46-a)²²⁾。また、翼を有する彫像ではあるが、矢筒を背負っていないものがある (C25 : Pl.11,46-b)²³⁾。

第1層のアカンサスの葉の間から、上方に茎が伸び、その上に萼が、その上面側を幾分正面に傾けて付けられ、その上に翼を持った人形の彫像が配される。彫像は太腿から始まり、頭部の先端がアバクスの上面まで達し、手も翼も横に広げた姿勢となっている。この姿勢は、葉数8枚の柱頭と葉数12枚の柱頭で、基本的には大きな違いは見られない。

植物文様も、第1層のアカンサスの間から、先ず茎が伸び、その上方に萼が加えられる。この萼は、萼片が左右に広げられたような形として彫られており、その中央から細い一本の蔓 (helix) が真上に伸ばされ、アバクス側面に付けられたパルメットとつながる²⁴⁾。

前記したように、葉数12枚の柱頭のヴォリユートは大きく、第2層目のアカンサスの葉の上に配される。従って、この箇所のアカンサスの葉は、他のアカンサスの葉より幾分押しつぶされた形になり、ヴォリユートに下に潜り込む。また、ヴォリユートの両脇の第1層目のアカンサスの葉の上から、茎が伸ばされ、萼が付けられる。その上に、更に茎が付けられ、ヴォリユートを両側から挟むように伸び、ヴォリユートの上面を覆う。特に大きなヴォリユートを持つ C11 (Pl.44-c)、C17 (Pl.45-a,b) の柱頭では、ヴォリユートに覆いかぶさる茎は、第1層目のアカンサスの葉の上部からではなく、その隣の第2層目のアカンサスの葉の上部から始まっている。また、ヴォリユートの下に来るアカンサスも、その付け根の部分からヴォリユートの下に巡り始める。特に C17 の柱頭では、第1層目のアカンサスの葉の背丈も低い (約 12 cm) ことから、特に大きなヴォリユートとなっている²⁵⁾。人形の彫像が在る場合には、ヴォリユートを上から覆う茎が載る萼上部から、細い蔓が真上に向かって伸び、小さな渦 (ヘリックス) が中央部の方向に巻かれる。この小さな渦は彫像の広げた手の下に来る。人形の彫像が無い場合には、この小さな渦 (ヘリックス) は見あたらない。

葉数8枚の場合は、第2層のアカンサスの葉の上から茎が始まり、萼が付けられる。その上からヴォリユートの渦が始まっているが、ヴォリユートが残存しているものはない。しかし、ヴォリユートの始まる部分から判断して、通常のコリント式のような、小さなヴォリユートであると推測できる。人形の彫像のある柱頭では、萼からは細いカリキュラスも伸びており、中央へ向かって伸び、彫像の手の下で渦を巻く。彫像の無い柱頭の場合は、この部分の状況が明確に判る遺構が残存していない。

以上のように、1層に巡らされたアカンサスの葉の数により2種類に大別したが、大まかにはどの

柱頭も細部の各要素の構成方法や形状は類似している。しかし、柱頭を個々に見れば、ヴォリュートの大きさ、アカンサスの葉の形、中央の植物文様、カリキュラスの形などが微妙に異なるものも多い。

ストアの外部列柱が中庭に倒れた状態で残っている部材があったことはすでに述べた (Pl.47-c,d)。このうち東ストアの前に倒れていた部材の中に、柱頭の断片が含まれていた (C28:Pl.45-f)。断片には、柱頭上部のアバクスから植物模様の装飾までが含まれていた。大きな渦巻きの一部が含まれていたことから、この柱頭はアカンサスの葉が 12 枚の柱頭に分類される。したがって、外部列柱にはアカンサスの葉が 12 枚の柱頭が使われていたと考えられる。このことは、前記した柱頭に残る柱身上部直径から導き出される結論と矛盾しない。

柱頭部材には、スタッコが残っている部材もあった (C21:Pl.45-d,e)。このスタッコは、建設当初のものというよりも、地震等でダメージを受けた部分を修復したもののように見える。

また、柱頭石材下部の柱身部分には、ドラムと同じく縦溝のあるものもあった。特に、C15 の柱頭では縦溝にスタッコが残っており、スタッコの内側は四角い空洞となっていた (Pl.44-e,f)。

5) 円柱の構成

明確な証拠が乏しいので、円柱高さ、部材の数、部材同士の組合せなどの議論は、一般的にならざるを得ない。しかし柱礎、円柱ドラム、柱頭の特徴から、2 種類の円柱が存在していたことが明らかになった。

一方の円柱では D-type の柱礎の上に、同じく D-type のドラム、E-type のドラムが載せられ、その上に C-type のドラムが載せられる。そして、最上部には一つの層に 12 枚のアカンサスの葉が並べられ、大きなヴォリュートのある柱頭が載せられた。この組合せは外部円柱であり、これら石材の高さの平均値を合計すれば 4.240 m となる (Table16)。また、他方の円柱においては、A-type の柱礎の上に、A-type、B-type、C-type のドラムが順に載り、頂部にアカンサスの葉が一つの層に 8 枚並べられる柱頭が載せられた。この組合せは内部円柱であり、これらの石材の高さの平均値の合計は 4.401 m である (Table17)。

ところで、中庭の祭壇東側と神殿西側には、ストアの外部オーダーの部材が倒れた状態で残っていた (Pl.47-c,d)。おそらく地震等の水平応力を受けて倒れたものと思われるが、特に、祭壇東側に倒れている部材は、東ストアに平行におよそ 5 柱間分に相当しており、積み上げられていた当時の状態を良好に示している (Pl.47-c) ²⁶⁾。ここに残る部材は、柱頭の断片、アーキトレヴ・フリーズ部材、コーニス、それにシーマ部材である。スタイロバイト端からアーキトレヴ底面までの距離は 5.29 m であったので、円柱の高さはおおよそ 5.3 m 程度であると推測できる ²⁷⁾。したがって先に算出した外部円柱を構成する石材高さの合計との差は、およそ 1 m、ドラム 1 本分に相当する。即ち、同じタイプのドラムが円柱に 2 本使用されていることになる。その可能性があるのは、外部柱では D-type のドラムか C-type のドラムであり、内部柱では A-type のドラムか C-type のドラムである。しかし、D-type や A-type のドラムが 2 本重ねられていたとしたら、胡麻殻フルートの高さは柱礎を含んで 3 m 程の高さとなる。前述したように胡麻柄フルート部分は、人の出入りが激しい建築においてアリスを保護する

目的で採用された仕上げの手法の一つと考えられる。クールトンは、その高さは円柱の高さは人の背丈ほどに近い標準的な高さがあったと述べ、1.6 m ～ 1.8 m としている²⁸⁾。従って、胡麻殻フルートの高さが約 3 m では高すぎると考え、外部柱、内部柱共に C-type のドラムが 2 本使用されたと推察できる。また、すべてが通常のフルートで作られた C タイプのドラムは、ほかのタイプのドラムよりも特に残存数が多い (22 個) ことも、これを裏付けしていると考えられる。以上のことから、外部柱は、下から順に、D-type の柱礎、D-type のドラム、E-type のドラム、C-type のドラムが 2 本、アカンサスの葉数 12 枚の柱頭により構成される。また、内部柱は、下から順に、A-type の柱礎、A-type のドラム、B-type のドラム、C-type のドラムが 2 本、アカンサスの葉数 8 枚の柱頭により構成されると、考えられる。

6) 円柱を構成する石材

石材 B04 (Pl.8-a,41-c)

柱礎と最下部ドラムが一体化した石材である。石材の高さは 0.619 m で、上面はかなり風化している。しかし、上面中央には、ダボの穴が風化して広がったものと考えられる大きな窪みが見られ、本来の石材の高さもさほど大きくは異なっていないと推測できる。

石材の柱礎部分は、高さが 0.219 m で、上からトルス (torus)、スコティア (scotia)、トルスの組合せで、アッティカ式のモールディングが施されている。上部トルスのプロフィールは、上面が緩やかなカーブを描き、下面はより丸味を帯びている。逆に下部のトルスのプロフィールは上面が丸味を帯び、下面が緩やかな曲線となっている。下部のトルスの直径は 0.851 m で、この石材の直径の最大寸法となる。トルスの間のスコティアの上下には幅 1 cm 程の水平な帯 (フィレット・fillet) が巡らされ、上方のフィレットより下方のフィレットが 2.8 cm ほど突き出ている。スコティアのプロフィールはこれに従い、上部より下部の方が緩やかな曲線となっている。尚、柱礎の底部には直径 62 cm 程の円形の突起部が付けられており、その高さは 7 mm ほどである。

柱身部分は 20 条のフルーティング (fluting) が施されている。フィレットを含んだフルート (flute) の幅は最下部分で約 10.5 cm で、フルート間は幅 1 cm 程のフィレット (平たい帯状平縁・fillet) を呈している。フルートは両側のフィレットから斜めに切り込まれ、そこから、通常のフルートの彫り込みとは逆の、外側へ向かって緩やかに膨らむ形状となっている。いわゆる胡麻殻フルート (reeded flute) と呼ばれるものである。

柱身最下部のモールディング B04 の石材ばかりでなく、どの石材も本来の形状を留めているものは無い。ただ、北プロピロンの柱礎と最下部のドラムが一体となった石材は、フルーティングの形式や柱礎のモールディングの形状 (Pl.8-b,37-e) が極めてよく似ていることから、柱身最下部のモールディングの形状も類似したプロフィールになっていたものと推測できる。

北プロピロンでは、フルート間のフィレットの面が連続して末広がり下方まで降りて、次第に上を向くように湾曲している。その下には、水平に巡らされたフレットが、若干下を向いて巡らされる。

B04 の石材でも、このようなモールディングであったとしても、残存部分との矛盾は無い。

フルートは、最下部のモールディング上部で水平に刻まれるが、外側に膨らむ最下部の左右下側が僅かに彫り込まれ、フルート最下部は微かに丸みを帯びているように仕上げられている。

(下記の内容をどこに書くべきか?)

柱身部上部、特にその縁部分は破損して、その本来の状態を知ることはできない。柱身部上部が良く残る石材 B03 (Pl.41-a,b) の部材では、上部端側面のフルート中央に、縦方向に細長い溝が刻まれており、この溝はフルート 5 条おきに彫られ、合計 4 本確認できた。

石材 B09 (Pl.8-a,41-d)

石材 B04 と同じく、柱礎と最下部ドラムが一体となった石材である。石材の高さは 0.551 m、直径の最大寸法(柱礎部分の下方のトルスの直径)は 0.808 m と、石材 B04 より小さくなっている。

上面は、その一部には本来の状況が残存しているものの、中央のダボ穴があった辺りは欠損しており、ダボ穴を確認することはできない。尚、石材 B09 と同じく、石材 B04 より小さい柱礎に属すると思われる石材 B14 や石材 B15 の上面には、明らかにダボ穴が穿たれた痕跡は無かった。

柱礎部の高さは 0.190 ～ 0.204 m と、最大と最小で 14 mm の差があり、特にスコティア部分で顕著であった。柱礎モールディングは、石材 B04 と同じく、トルス・スコティア・トルスのアッティカ式で、スコティアの上下にはフィレットが巡らされる。上部トルスは、上部は緩やかな曲面のプルフィールとなっており、下部はそれより丸みを帯びたプロフィールで、石材 B04 や北プロピロンの柱礎と類似している。しかし、下のトルスは上部と下部で、際だった相違を確認することができなかった。これは単に、トルスそのものが小さく、微妙なプロフィールが作成できなかっただけとも考えられる。

柱身部分には 20 条のフルーティングが施されている。フィレットを含んだフルートの幅はおよそ 9.8 mm と石材 B04 よりせまくなっているが、フルート間にあるフィレットの幅は約 17 mm と、石材 B04 のそれより広がっている。20 条のフルートの内 11 条のは胡麻殻フルートであるが、残りの 9 条は通常イオニア式やコリント式で見られる半円形状に彫り込まれたフルートとなっている(フルート自身の幅は ca. 8 cm、深さは ca. 3.8 cm)。通常の形状の彫り込みのあるフルートの最下部は、1/4 球面状に彫り込まれ、正面から見たフルート最下部は半円形となる。また、胡麻殻フルートの最下部も、半円形に彫り込まれており、石材 B04 とは仕上げが異なっている。その下にはフィレット表面から連続した面が徐々に末広がりに広げられ、端にいたって上側を向く曲面が形成され、その下にはフレットが水平なリングとして巡らされている。

石材 D03 (Pl.9,41-e)

石材 D03 は、全面に胡麻殻フルートが施されたドラムである。石材の上面は、大きく破損している。ただ、石材の残存状態が悪く、この面が上面か底面かを、直径やフルートの幅から判別することは出来ない。従って、ここでは大きく破損している方を、仮に上面と呼んでいる。尚、残部石材の高さは約 75 cm、直径はおよそ 63 cm である。

石材の側面も風化が激しいが、15条のフルートの存在は確認することが出来き、風化した部分に5条のフルートが施されていたことが推測できた。従って、フルートの数は20条と考えられる。フルート間のフィレットの幅は、その底部で約25 mm、フィレットとフィレットの中心間距離は約10 cmである。フィレットの断面形状は底部が広い台形状に見える。フルートの幅はおよそ75 mmほどで、外側に膨らんだ緩やかな円弧状となっており、フルートの端を直線で結んだ線より外側に、中心部で10 mm程高くなる。しかし、残存状態が悪く、そのプロファイルを正確に捉えることは出来ない。

側面の底面端に接する所に、幅が約3 cmで、高さが約10.5 cm、深さが4 cmほどの縦溝が、フルート中央に彫られている。その左右5番目のフルートにも、それらしき溝が在るが、溝は浅く、形も明確ではない。

石材 D20 (Pl.10,42-a)

石材 D20 は、上部は通常のフルート、下部は胡麻殻フルートが施してあるドラムである。石材の側面の一部が大きく破損しているものの、12条のフルートは確認することができる。また、残存部より推測して、側面には20条のフルートが施されていたことが推測できた。また、上面、底面の半分以上の部分が残存しており、石材の高さは約1.070 m、上部直径が約62.5 cm、下部直径がおよそ64.1 cm、胡麻殻フルートが施されている部分の高さがおよそ27.0 cmと実測できた。

フルート間のフィレットの幅は約12 mm、通常のフルートの幅は約87 mm、深さは46～50 mm程度であった。胡麻柄フルートは底部の幅が85 mm程度、フルートの端を直線で結んだ線より外側に、中心部で1 cm程高くなる。胡麻柄フルートの頂部は、正面から見て緩やかな円弧を描くように彫り込まれている。

側面の上下端部には、下面側では長さ75 mm、幅20 mm、深さ5 cm程の縦溝が、フルート5つつ置きに彫られており、3カ所が確認できた。通常のフルート溝が掘られている上面側では、長さが約95 mm、幅20 mm、深さがフルート溝の底面から4 cm程の縦溝を、2カ所確認できた。

上面及び底面の中央には、おおよそ正方形のダボ穴が彫られており、上面では7.0 cm × 6.8 cm、底面では約5.5 × 5.3 cmで、深さは共に8 cm強であった。

石材 D06 (Pl.9,41-f)

石材 D06 は、全体の様子をおおよそ確認できる石材であり、通常のフルートが側面全体に施されているのが確認できる。ただ、表面は破損や風化が激しく、細部寸法は実測不可能であった。

石材の高さは約1.058 m、比較的残存状態の良い箇所を実測して、直径は底面側で約63.6 cm、上面側では61.0 cmという寸法を得た。

他の石材にはよく見られる、側面の上下端部に見られる縦溝は1個も確認できず、縦溝は掘られていないようだ。また、ダボ穴は上面にはなく、底面には極めて小さな穴が穿たれているに過ぎず、ダボ穴とは言い難いものである。

石材 D22 (Pl.9,42-b)

石材 D22 は、1 個のドラムの様子をほぼ確認できる石材であり通常のフィレットが 9 条、胡麻殻フルートが 11 条、計 20 条のフィレットが施されている。フィレットの幅は 15～20 mm、フルート幅は 80 mm 弱程度である。通常のフィレットの彫り込みの深さは 40～43 mm 程度であり、胡麻殻フルートとなっている箇所では、フィレットとフィレットの表面を結ぶ線内にフィレットの膨らみが収まり、フィレットの切り込みは 7 mm 程度となっている。

石材の寸法は高さが 80 cm 程度、下部直径が約 61.0 cm、上部直径が約 60.1 cm である。ただし、石材の上端部が破損しており、上部直径は最上面より幾分下側を実測した。石材の上面側端の側面には、幅が 20～25 mm、高さが 70～75 mm の縦溝が刻まれており、通常のフルートの中央、胡麻殻フルートの端 2 カ所、胡麻殻フルートの中央の、計 4 カ所（フルート 5 個置き）に位置しており、溝の深さは、通常のフルートにあるものが、フルート底面から約 25 mm、胡麻殻フルートでは 30～35 mm 程度となっている。また、上面中央には約 65 mm 正方のダボ穴（深さはおよそ 85 mm）が彫り込まれている。しかし、底面側には縦溝もダボ穴も無い。

石材 D31 (Pl.9,42-c)

石材 D31 は、全体の形状をおおよそ確認できる石材であり、石材の高さは約 1.041 m であった。直径は残存状況が比較的良好な箇所を実測して、底面側で 56.0 cm、上面側で 53.6 cm という寸法を得た。

20 条のフルートが彫られているが、上から下まで通常のフルートとなっているものと、上方は通常のフルートで、下方の底面から約 30.4 cm の位置までは胡麻殻フルートとなっているものがある。下の方まで通常のフルートとなっているものは 9 条確認できた。一方、下方が胡麻殻フルートであるものは 7 条は確実で、残部の状況から見て残り 4 条も下方は胡麻殻フルートであると推測できる。

側面の底面側には、通常のフルートに隣接する胡麻殻フルートと、それから数えて 5 番目の胡麻殻フルート（中央の胡麻殻フルート）に、縦溝が彫られている。中央の胡麻殻フルートに施された縦溝は、幅が約 3 cm、長さが 5 cm 程度、深さは 2.5 cm 程であったが、通常フルートに隣接する胡麻殻フルートに刻まれた縦溝は、フルート中央部からずれた位置にあり、且つ、彫りも非常に浅いものであった。他の事例では、フルート 5 つつ置きに縦溝は彫られているが、通常のフルート部分では、縦溝が在るべき箇所が破損しており、縦溝の存在を確認することができなかった。底面の中央部分には、およそ 5.5 cm 正方で、53 mm 程の深さのダボ穴が穿たれていた。

上面側の側面端にも縦溝は彫られており、底面側で深い縦溝があったフリーズの上面側には、幅 25 mm、長さ 95 mm、深さが 3 cm 程の縦溝が彫られている。浅い溝があったフルートの上面側には、幅 22 mm、長さ 60 mm、深さが 16 mm 程度の溝が確認できたが、他の縦溝が在るべき箇所は破損しており、縦溝の存在は確認できない。尚、上面中央に、65 mm 正方で、深さが約 7 cm のダボ穴を確認できた。

フィレットの幅は 15～17 mm 程で、通常のフルートの幅は 6.5 cm 程度、深さおよそ 39 mm、また胡麻殻フルートはフィレットから 7～8 mm 程彫り込まれ、中央部の膨らんだ部分との差が 9～10 mm 程度であった。

石材 D48 (Pl.10-a,42-d)

石材 D48 は、側面全面に通常のフルートが確認できる石材で、底面近くの直径が 56.7 cm、上面近くの直径が 53.5 cm、石材の高さはおよそ 92.5 cm であった。ただ、上面は破損しており、石材本来の高さは不明であるが、他の石材で上面近くに彫られている縦溝の一部が残存している。これから推測して、石材本来の高さは 95 ～ 98 cm 程度であると推測した。

石材の周囲には 20 条のフルートが施されており、底面側の側面端には、フルート 5 条置きに縦溝が彫られていた。縦溝の寸法は、「幅・長さ・深さ」が、それぞれおよそ「2 cm・9 cm・3.5 cm」、「2 cm・7 cm・1.3 cm」、「2 cm・11 cm・1.8 cm」、「2 cm・6.5 cm・1 cm」程度と、幅はどれも 2 cm 程度であるが、長さや深さは様々である。上面近くには、1 か所で縦溝の存在を確認できたが、他は破損しており確認できなかった。上面近くに残る側面の縦溝は、幅 15 mm、長さは 4 cm 程度、深さはおよそ 2 cm である。この溝にはスタッコが充填されていた。

石材 C24 (Pl.10-b,46-a)

石材 C24 は、柱頭である。この石材は、底部にアストラガル、柱頭部第 1 層目は丈の低いアカンサス葉、第 2 層目は丈の高いアカンサスが大きく葉を広げる部分であり、その上にはヴォリュートや彫刻等の装飾が施される部分、そして最上部にはアバクスが置かれており、以上、5 層から構成されている。

石材全体の高さは 0.618 m で、アストラガル部分を除いた、所謂柱頭の高さは 0.588 m である。また、残存している石材の最大幅は約 0.777 m で、底部アストラガルの直径はおよそ 0.561 m であった。

アストラガル部分は破損が激しく、その断面形状を正確には読み取ることはできない。第 1 層目のアカンサスの葉は 8 枚で、正面中央及び斜め 45 度方向に突き出されたヴォリュートの真下に置かれている。その高さは底部アストラガスから 18 ～ 19 cm 程、葉の幅は残存状況の良い部分の代打位置が 18 cm である。第 2 層目まで伸びるアカンサスの葉も 8 枚で、第 1 層目のアカンサス葉の間から立ち上がり、正面中央部の装飾彫刻や斜め 45 度方向に突き出されたヴォリュートを下から挟み込むように配せられ、その高さはアストラガルから 31 ～ 32 cm 程となっている。また、その幅は第 1 層目のアカンサス葉より若干広く、最大で 19 cm 程度と実測できた。(第 1 層目のアカンサスを第 1 アカンサス、第 2 層目まで伸びるアカンサスを第 2 アカンサスと呼ぶ。)

アカンサス葉造形の基本的な構成方法は、第 1 層目に配されるものと第 2 層目まで延びるものとで類似している。アカンサスの葉の形の基本的な骨格を作り出す要素は、先ず、中央に垂直に立ち上がる葉脈（中央葉脈）で、これに加えてその左右に配される太い葉脈（太葉脈）である。

中央葉脈は、正面部は平らで、下方が太く、上方へ行くに従って細くなり、また、前方に突き出される。中央葉脈の左右に配される太葉脈は、根元の部分は中央葉脈より幾分後退して配され、葉脈断面の形状は丸味を帯び、上方ほど幅広となる。また、中央葉脈から離れるように外側に広がり、外側の葉脈ほど背は低い。太葉脈はその先端に円い穴が彫られ、穴の周囲の縁部分はやや高く盛り上げられ、そのまま葉先の輪郭部をつくり出している。基本的に、小さな尖った形が複数繰り返され、ギザギザの

葉先が構成される。

中央葉脈に最も近い左右一対の太葉脈の穴の上方から葉は折れ、その先端部分は正面側へ大きく湾曲しながら突き出されている。その先は破損しており明確なことは分からないが、現存する部分から推測するに、先端部分は首を傾げるように下方に曲がっていると思われる。正面側へ大きく湾曲する部分では、葉の裏側が上を向く。そこには溝が数条彫られているが、中央部の溝が最も深い。これらの溝は葉表の葉脈に対応するもので、溝の部分が大きく下を向き、葉先の凸部が形成されるように見える。

中央葉脈の左右に配される太葉脈は、第1層目のアカンサス葉には3対あり、最も外側に配される葉脈から広がる葉先は、アストラガルの上に這うように広がり、隣接する別のアカンサス葉と繋がっている。

第2層目まで立ち上がるアカンサス葉は、中央葉脈の左右に2対の太葉脈が配される。その内、外側の太葉脈は第1層目のアカンサス葉の輪郭に沿って配され、その先端の穴は、第1層目のアカンサス葉の左右端の上で、アカンサス葉が折れ曲がる箇所のやや上部に彫られている。その穴から、第1層目のアカンサス葉の上に乗るかかのように、第2層目まで達したアカンサスの葉先は作られ、第1層目のアカンサス葉が折れ曲がった上面の中央で、隣のアカンサス葉と繋げられる。

柱頭正面の中央部、第1アカンサス上部から縦溝の付いた茎 (caulis) が僅かに立ち上がり、その頂部には節 (node) が配されている。節には溝が斜めに彫られ、その位置は第2アカンサス葉にある2つの太葉脈の先端部穴の間辺りとなっている。

節の上から萼 (calyx) が立ち上げられる。破損しており、その形状を正確に読み取ることは難しい。ただ、残存部分から、萼は正面とその左右の3枚で構成されているように見える。萼に空けられた複数の穴や葉脈の様な形状が見られることから、アカンサス葉の形状と類似したものであったと推測できる。3枚の萼片の先は、やはりアカンサス葉と同じく、上部先端部分が折れ曲がり、外側に開いているように見える。萼の頂部は、第2アカンサスの葉の折れ曲がっている位置より、幾分高い位置まで伸ばされている。

3枚で構成された萼の中から、人形の彫像が彫り出されている。彫像は太股から頭部まで現され、斜め前方に傾けて立ち上げられ、頭部はアバクス上面近くまで達している。3枚で構成される萼の中から、一枚の萼片が彫像の前部、彫像の前部を隠す様に股間まで立ち上げられている。

彫像は両腕を左右に広げた形で、顔面は顎より前部が破損しているが、頭部には髪の毛が表され、髪は肩までかかる長さである。胸部は大きく突き出され、腹部は丸く膨らんでいる。太股は大きく張っており、股間には膨らみが見られる。両腕はやや下方左右に軽く広げられ、肘は若干曲げられ、手の甲が上を向き、親指が正面側に向けられる。彫像の肩から左右に大きく翼が広げられ、アバクスと一体化している。翼の上部は、アバクス最上部のモールディングの直ぐ下まで達すると思われる。翼の下部は左右に広げられた腕近くまで広がっている。彫像の左肩から右の腰へ掛けて、矢筒を背負う為の紐が表現されている。これらのことから、この彫像はエロス像であると思われる。彫像の寸法は、太股から頭頂までの高さがおよそ 23 cm、翼を広げた幅が約 35 cm、胴部の幅が約 7 cm である。

正面から 45 度方向に配された第 1 アカンサス葉の上からも、縦溝が施された茎が立ち上げられ、最上部はフレットが巡らされて収められる。フレット上部には円盤の様な形状の節となる。節の置かれる位置は第 2 アカンサス葉の上面近くである。

節上部からはヴォリユート (volute) が立ち上げられる。ヴォリユートの大部分は破損しているが、残存している付けの部分からその形状を推測でき、ヴォリユートの存在が確認できる。ヴォリユートは節上部から斜め上に、非常に緩やかな曲線を描きながらアバクス底面まで達する。ヴォリユートとコリント式柱頭の同退部との間は彫り抜かれている。ヴォリユートの渦は両側に 1 cm 程度の縁部が形成され、その間は浅く削り込まれている。ヴォリユート付け根部分の外側 (或いは底面側) には、ヴォリユートの幅より広く造作され、葉脈らしきものが刻まれている部分がある。その先端は破損しているが、多分、1 枚の萼片 (若しくはアカンサス葉) が、ヴォリユートの底部に沿うように配されていたと推測される。

節の上、ヴォリユートの付け根側面から蔓が斜め上、正面中央方向に延び、渦を巻いている。この渦、即ちヘリックス (helix) は下向きの渦となっており、その上面に彫像の掌が置かれる。またヘリックスの付け根、中央側には小さな萼片 (アカンサス葉) が添えられる。

柱頭胴体部は、上方ほど口が広がる花瓶のような、或いは釣鐘を逆さにしたような形となっており、アバクスの下、胴体部の最上部には、15 mm 程のフィレットが巡らされる。

アバクスの高さは約 85 mm で、アバクス最上部には何らかのモールディングが施されていた様に見える。しかし、アバクス部分の破損は大きく、その平面形状は全く読み取ることはできない。

アバクスの上面には、アーキトレーブを乗せるための台 (setting seat) が作り出されており、その高さは約 6 mm、平面の形は直径 567 mm 程の円となっている。

上面中央には、幅がおおよそ 3 cm、長さが約 9 cm、深さが 17 cm 程度の穴があり、穴の底ほど長く広がっている。これは石材を吊り上げる金具を挿し込んだ穴と考えられる。更に、この穴に対して斜めに、そしてこの穴に重なるように、幅が約 2 cm、長さが約 6 cm、深さが 8.5 cm 程の穴が穿たれている。この小さい方の穴は底が広がってはいない。これらの穴が同時に彫られたものか、或いは彫られた時期は異なるものか、不明であるし、小さな穴が何のための穴かも不明である。

ここで述べた各部の形状や位置関係は、残存している箇所の中で良好な部分について観察し、記したものである。同じ箇所であっても、位置関係や寸法が若干異なっている。ヴォリユートの付け根部分は 1 カ所のみ残存しており、また、彫像はその形状を読み取ることができるのが 2 カ所である。他の 2 カ所では、残存部の状況から鑑み、残存している彫像と類似したものがあつたと推察できる。即ち、この柱頭には、4 側面の中央上部に、翼を広げたエロス像があつたと判断した。

石材 C02 (Pl.43-f)

石材 C02 の石材は柱頭であり、柱身頂部、その上のアストラガル、柱頭胴体部、アバクスの 4 層から構成され、石材の全高はおおよそ 70 cm である。柱身部分に彫られた 20 条のフルートは、1/4 球面状の頂端部分のみが形成されており、柱頭各正面中央部分のフルート最下部には縦溝が穿たれている。

その上には幅 8 mm 程のフィレットが巡らされ、その上に高さが約 35 mm のアストラガルが巡らされる。アストラガルは下部のフィレットより 15 mm 程、上部のアカンサス葉より 30 mm 程突き出されている。

アストラガル上部からアカンサス葉が立ち上がるが、第 1、第 2 アカンサス葉共、8 枚で構成され、第 1 アカンサス葉上部、第 2 アカンサス葉の間から中央の装飾彫刻やヴォリュートに続く茎が立ち上げられる。アカンサス葉の基本的な造形は石材 C24 や C25 と共通しているように見えるが、中央葉脈の下部は、第 1 アカンサス葉、第 2 アカンサス葉共に二股に分かれている（石材 C17 と類似している）。それぞれの葉は比較的垂直に立ち上げられており、外側へ突き出される葉先も、破損しているので推測の域を出ないが、余り大きくはなかったように思える。

正面中央上部には、翼を有し、両手を広げ、紐を袈裟にかけた男性像が彫刻されているのが、柱頭の 3 側面で確認できる。他の 1 面は破損しており不明である。それぞれの彫像は三体とも類似しているが、彫像が乗る茎や萼片等の形状や大きさ、構成が、隣接する 2 面と他の面とで異なっている。

一つだけ異なる部分では、中央の第 1 アカンサス上部からは、縦溝の彫られた太い茎が立ち上がるが、その先端は茎が開いた形となって終了し、節は置かれていない。その上部には 3 枚の萼片が上を開くように立ち上がり、先端部は折れ曲がり、外に開いている。萼片細部の造形はアカンサス葉と類似している。開いた萼片から、太股から上の部分の彫像が乗せられる。

上記の左側に隣接する面においては、次の通りである。中央にある第 1 アカンサス葉の上から茎が立ち上がるのは同じであるが、その茎は極めて短く、殆ど見えない状態である。また、茎の先端には節が置かれることも異なっている。節の上面から上方に花が開くような格好で、多分、萼片が乗せられ、その上面中央から更に萼片が乗せられる。この萼片の形状と、その上に配される彫像の形状は、上記のものと類似しているが、萼片が幾分小さくなっている。ここで見られる上下 2 段に萼片が重ねられた形式は、石材 C17 の場合と類似している。重ねられた萼片の上段の萼片の側面から、左右横方向へ茎が伸ばされ、ヴォリュート近くで上方へ曲がる。茎には捩れた縦溝が刻まれている。その先端部は上を向き、萼片のようなものが形作られ左右に開いている。その上から中央側に渦を巻いた蔓（ヘリックス）が乗せられる。

最後の 1 面の中央部装飾は、上下 2 段に萼片が重ねられるなど、全体の構成としては 2 番目の面と類似している。若干異なる箇所は、第 1 アカンサス葉の上に立ち上げられた茎が、2 番目の面のそれではなく、1 番目の面の茎に類似していることである。この径は 1 番目の面の茎に比して小さい。また、2 段目の萼片の側面から伸びる茎は、2 番目の面では横方向外側に向かって伸ばされるが、ここでは上へ向かって外向きの曲線で茎が伸び、茎先端に配された萼片のような部分で反曲して、内側に渦巻く蔓（ヘリックス）へと繋がっていく。

斜め 45 度方向の部分では、深い縦溝の彫られた太い茎が第 1 アカンサス葉上から立ち上げられ、その頂部には節が乗せられる。節の下にはフィレットが巡らされているように見え、まるで円柱の形を模したように作られている。節上面からヴォリュートが立ち上がっているように見えるが、付け根の部分より先は破損している。

柱頭胴体部は釣鐘を逆さにした形として形成されて、その頂部にはフィレットが巡らされる。また、柱頭胴体部とヴォリュートの間は彫り抜かれている。

アバクスの側面は殆ど破損しており、その断面形状を読み取ることはできない。アバクス上面には円形の座床が見られ、上面中央には幅が約 3 cm、長さが 9 cm 程の吊具を差し込む穴が穿たれている。また、この穴に重ねるように他の形をした穴も穿たれているように見える。アバクス上面には、パール穴らしき痕跡は見られなかった。

石材 C03 (Pl.44-a)

石材 C03 は、20 条のフルートが施されている柱身部、アストラガル、釣鐘を逆さにしたような形の胴体部、それにアバクスで構成される柱頭である。石材の高さはおよそ 75 cm、アストラガルより上の柱頭の高さは約 60 cm である。

柱身部の高さはおよそ 125 mm、下部直径は約 56 cm で、フルートの間隔は約 85 mm、フルート頂部は 1/4 球面状に彫り込まれている。柱身部上部にはフィレットが巡らされ、その上にアストラガルが配される。柱頭胴体部の頂部にはフィレットが巡らされるが、上方に幾分広がっているように見える。

アカンサス葉は、第 1、第 2 共に 8 枚で構成され、第 1 アカンサス葉が正面中央に配される。アカンサス葉は、先端の外側へ突き出す部分が、石材 C24 の柱頭のそれに比べて若干小さいように見えるが、破損しており明確ではない。第 1 アカンサスの葉の基本的な造形は石材 C24 や C25 と類似しており、高さも約 19 cm と、石材 C25 の第 1 アカンサス葉の高さとほぼ同じであるが、幅が若干狭いように見える。また、アカンサス葉は底部で隣接するアカンサス葉とは繋がられていない。第 2 アカンサス葉は、中央葉脈の左右に配される太葉脈が、石材 C25 のそれと比較し、高い位置から始められているように見える。また、第 1 アカンサスの葉の最上部分は、2 番目の太葉脈先端の丸い穴の幾分下に配されている。

正面中央の第 1 アカンサス葉上、第 2 アカンサスの間から、縦溝のある太くて短い茎が立ち上げられ、節が配される。節の上には正面を向いた萼片が観察できる。ここから真上に向かって細い茎が立ち上げられ、その先端はアバクスに達する。その部分には花飾（フリューロン）のようなものが配されていたと推測されるが、破損により明確な形状は不明である。ただ、彫刻の痕跡より、縦長の楕円形のものであったと思える。

正面中央にある萼片の左右から、2 本の細い茎が外向きに弧を描きながら伸びている。その内、上方に配された茎は反曲し、小さな節が付けられる。茎には捻れた縦溝が掘られていることが辛うじて確認できる。小さな節の上には左右に開く、小さな額葉が配され、その間から細い蔓（ヘリックス）が立ち上げられる。蔓は内向きに弧を描きアバクス底面に達し、そのまま渦を巻く。（石材 C24 では、このようなヘリックスはヴォリュート下の茎の方から伸ばされている。）

斜め 45 度方向に配された第 1 アカンサス葉の上部から、縦溝の掘られた太い茎が立ち上げられ、節が置かれる。その上からヴォリュートが斜め上方向に立ち上がるが、渦の部分は破損している。ヴォ

リュートの付け根の外側には、多分、小さな萼片が彫刻されており、太い茎、萼片、ヴォリュートという構成が石材 C24 の場合と同じであることが判る。また、ヴォリュートの渦と円柱胴体部分の間は掘抜かれているのも石材 C24 の場合と同様である。

アバクスの高さはおよそ 86 mm、その上に施された座床の高さは約 13 mm である。アバクス側面は垂直な平たい面となっているが、最頂部のモールディングについては不明である。座床中央部には幅 25 mm、長さ 85 mm 程の長方形平面の吊具用の穴が穿たれている。また、穴の中央部に幅 25 mm、長さ 65 mm 程度の長方形の穴が、先の吊具穴に直行して掘られている。座床上面にはパール穴らしきものは見あたらず、アバクス上面の平面形は破損部が多く読み取ることができない。

石材 C25 (Pl.11, 46-b)

石材 C25 は、翼を有する彫像が石材四側面に配された、柱頭である。底部側面は破損しているものの、その全体の姿は良く残っている。石材の大きさは、残存している高さが約 51.3 cm で、石材 C24 の柱頭と比較して、10 cm ほど小さくなっている。石材残存部の最大幅はおよそ 72.6 cm で、石材 C24 の柱頭より 5 cm ほど小さい。残存部の石材寸法の比較であるが、その本来の形状を推測すれば、石材 C25 の柱頭は、石材 C24 の柱頭に比較して、幾分小さく造作され、特に石材の幅に対する高さの比が小さくなっていると思われる。

現状の石材から、柱頭が少なくとも 4 つの層から構成されていることが分かる。即ち、第 1 アカンサスの層、第 2 アカンサスの層、ヴォリュートや彫像が配される層、がそれにアバクス部分である。底部側面は、前述したように破損しているが、第 1 アカンサス葉の形状から推察して、アカンサス葉の下から柱頭底部まで幾分スペースがあると思われる、ここにアストラガルが巡らされていたことが推測できる。即ち、この柱頭も C24 と同じく、5 層による構成となる。最上部のアバクスの下には、ヴォリュートや彫像の奥にある柱頭胴体部が見える。釣鐘を逆さにした様な形状となっており、アバクスと接する箇所には薄くフィレットが巡らされている。この胴体部の周囲に、アカンサスや彫像などの装飾が施される。

第 1 アカンサスの葉の高さは 15 cm 程度、幅は約 11 cm ほどで、石材 C24 の柱頭に比べれば小さくなっている。これは柱頭自体の寸法が小さくなっていることにも起因しているが、第 1 アカンサスの葉の数が 8 枚ではなく 12 枚で構成されていることが、小さなアカンサス葉となった最大の理由であろう。その内 1 枚は、石材 C24 と同じく、正面中央に配される。アカンサス葉の全体や細部の形状は、石材 C24 の柱頭と全く同じと見なせるが、第 1 アカンサスの隣り合う葉が最下部で繋がっているかは、破損しており明確ではない。

第 2 アカンサスの葉は第 1 アカンサスの葉の間から立ち上げられ、高さはおよそ 22 cm、幅は 13 cm 程で、石材 C24 の柱頭のそれと比較し、かなり小さい。第 2 アカンサスも 12 枚配されており、その為、斜め 45 度方向に突き出されたヴォリュートの下に、第 2 アカンサスの葉が配されることになる。その葉はヴォリュートの下端を包み込むように、前方へ突き出される。第 2 アカンサスの葉の形状やその葉脈の数や形、第 1 アカンサス葉との位置関係など、石材 C24 の第 2 アカンサス葉と類似してい

る。

正面中央の第1アカンサス葉の上、第2アカンサス葉の間から、縦溝の施された茎が立ち上がり、節が置かれて、その上に萼が3枚乗せられるのも、石材 C24 の場合と同様である。三枚の萼の中から翼を有した彫像が立ち上げられる。彫像は、股間の直ぐ下あたりから始まっており、石材 C24 で見られたような、彫像の太腿の前に配され、股間を隠すような萼は存在しない。彫像の頭部や翼は、アバクス最上部のモールディングまで達している。彫像の姿は、石材 C24 とかなり類似しているが、矢筒を背負うための紐は無いように見受けられる。彫像の正面、胸から顔面にかけて削がれ落ちており、胸の膨らみがあるか否か、確認できないが、股間に膨らみが施されているように見える。彫像の寸法は、やはり石材 C24 より小さく、高さが約 19 cm、広げた翼の幅が 27 ～ 30 cm 程度、腰幅は約 5.5 cm である。

中央に配された彫像の隣の第2アカンサスの葉と、斜め 45 度方向に突き出され、ヴォリュートの下に配された第2アカンサス葉の間から、縦溝が刻まれた茎が僅かに立ち上げられ、節が被せられる。節の上面は、ほぼ第2アカンサス上面に揃って配されている。その上に、2枚の萼片が左右に立ち上げられる。外側に伸びる萼片上に沿って、縦溝が刻まれた茎が、斜め 45 度方向に曲線を描きながら伸ばされ、アバクス下面に達したところで水平となり、節が置かれる。その先には大きな萼片が頭を垂らしながら、ヴォリュートの上面を覆うように突き出される。ヴォリュートは、覆い被さった萼の下に、大きく渦を巻いており、その直径はおよそ 21 cm もある。従って、ヴォリュート下に配された第2アカンサスの葉は、ヴォリュートの下葉に沿って大きく折れ曲がっている。ヴォリュートの渦は、両端に縁部が形成され、その間はU字型に削り込まれている。渦の中心には、半球状の目が配され、この目に向かって渦は次第に外側に盛り上げられている。斜め 45 度方向から見ると、ヴォリュートや、その上に被せられた萼片は、左右から伸ばされ、突き出たところでそれらが合わさるが、ヴォリュートは左右の渦の間に深い溝が彫られて、それぞれのヴォリュートは区別されている。一方、その上に被せられた萼片は、中央に括れのある1枚の萼片として表現されている。

ヴォリュートに被せられる萼片へ繋がる茎の根元にある2枚の萼片の間から、一本の蔓（ヘリックス）が中央側へ渦を巻きながら立ち上げられる。ヘリックスの上端には、石材 C24 の場合と同様に、中央部の彫像の腕が置かれる。彫像の腕は、石材 C24 に比べれば高い位置にあり、アバクスの直ぐ下に配される。

アバクスは、最上部にオヴォロ、その下にフィレットのモールディングが冠せられ、その下のアバクス本体は僅かに内側に反ったプロフィールとなっており、高さはおよそ 7.2 cm であった。アバクス上面は、正方形の四辺が内側に弓形に凹みが付けられた、所謂糸巻きの形状で、四隅は面取りが施される。アバクスの幅は最大で約 70 cm であった。

アバクス上面には円形の座床（setting bed）が彫り出されており、周囲より 5 ～ 7 mm ほど高くなっている。上面はほぼ平らに仕上げられているが、全体に丸鑿で僅かに荒らされている。座床の中央には、幅が約 3 cm、長さが 9 cm 程度の長方形の穴があり、穴の底部が広がっているの、吊り上げようの金具を挿し込んだ穴であることは間違いないであろう。ただ、石材 C24 と同じく、吊金具用の穴に対

して斜めに彫られた穴がある。その形状は大凡正方形にも見える。ただ、その穴の意味は不明である。

上面から見て吊金具用の穴の長手方向前後に、バール穴と思われる穴がある。穴の形状はほぼ長方形であるが、吊金具用の穴の長手方向の中心線から、若干左右にずれた位置に彫られている。これらの穴とその位置関係から、柱頭に乘せられるアーキトレーブは2枚で構成され、外を向くアーキトレーブは円柱左側から、バッカーは円柱の右側から乗せられたことが判る。

一方、石材 C24 の上面にはバール穴と思われる穴は無く、石材 C24 の上には、石の梁ではなく木製の梁が乗せられていたと推測できる。

石材 C24 と石材 C25 の柱頭は、高さと幅のプロポーシヨンや、各層に巡らされているアカンサス葉の枚数の違いはあるものの、その図柄の構成手法や細部の彫り方など、極めて類似していることが観察できる。

石材 C30 (Pl.12,46-a,b)

石材 C30 は、正面中央に、人形の彫像ではなく、植物をかたどった装飾（フリューロン・fleuron）が3面に確認できる柱頭である。柱頭は、上部よりアバクス、アカンサス葉やヴォリュートで装飾された柱頭胴体部、アストラガルと最下部に柱身（シャフト）の一部で構成されるネッキングがある。

ネッキングのシャフト部分には20条のフルートが刻まれ、フルート幅はおよそ75～80 mm、フルート間のフィレットの幅は15 mm 前後である。フルートの頂部は1/4 球面状に彫り込まれている。アストラガルの厚みは3 cm 程となっている。フルートの頂部は1/4 球面状に彫り込まれている。アストラガルの厚みは3 cm 程となっている。フルートの最下部に、長方形の縦溝が彫られているものがある。これは、ドラムのフルート内に見られた縦溝と同じ目的で刻まれたものと思われる。溝の幅は2～3 cm 程度でドラムの溝と類似しているが、高さは3～4 cm 程度と短い。確認できた縦溝は1 側面、フリューロンの真下のフルート部の1 カ所であるが、各面、同じ場所に縦溝は彫られていたと思われる。

柱頭胴体（核）は、釣鐘を逆さにしたような形状で、最上部のフィレットは、上方が内側に彫り込まれており、その高さは2 cm 程度である。柱頭胴体の周囲には装飾が施されており、第1 アカンサス部分、第2 アカンサス部分、フリューロンやヴォリュート等で装飾される部分に分けられる。

第1 アカンサス、第2 アカンサスは共に12 枚巡らされており、正面中央下方に第1 アカンサス葉の一枚が配される。また、大きなヴォリュートが斜め45 度方向に突き出され、第2 アカンサス葉はその下に添えられている。以上の様に、アカンサス葉やヴォリュートの構成形式は、石材 C25 に類似している。また、アカンサス葉の彫刻方法も、石材 C24 及び石材 C25 に共通しており、敢えて相違点を挙げるならば、中央葉脈の左右に配される1 対の太葉脈だけが、他の太葉脈に比べ得て細くなっていることぐらいである。

おおまかな寸法であるが、第1 アカンサス葉の高さは約12.5 cm、幅は12 cm 程度、第2 アカンサス葉の高さは約19 cm、幅は13 cm はあると思われる。アカンサス葉の上部は殆ど破損しており、前方へ折れ曲がる付け根の部分しか残存していない。従って、アカンサス葉の高さについては明確なことは言えないが、それでも石材 C25 のアカンサス葉と比べて低いように見える。その分、フリューロ

ンやヴォリユート等で装飾される部分のスペースが大きくなっている。

正面中央の第1アカンサス葉上部、第2アカンサス葉の間から、縦溝の彫られた茎が立ち上げられる。茎は石材 C25 に比べて細く、また、茎の上部先端には節は置かれず、縦溝が彫られたまま上方に開く形になっている。その上に萼が乗せられるが、萼の正面側が破損しており、その形状を掴むことは困難であるが、少なくとも左右に開く形で萼が形作られていたことだけは判る。

花模様（フリューロン）の部分は完全に削り落ち、どの様な模様が刻まれていたかは不明である。中央部の隣にある第2アカンサス葉の外側上部から、斜め上に向かって縦溝の彫られた茎が立ち上げられる。茎の先端は中央部分の茎と同様、節は置かれず、溝が彫られたまま開く形に作られている。その先には左右から萼片で挟まれた茎が斜め上方に立ち上がる。茎には縦溝が彫られ、アバクス下面で縦溝が彫られたままやや開き、終了する。その先から葉が伸ばされ、ヴォリユートの上面に沿って大きく曲がりながら前方へ突き出される。ここには、石材 C24 や C25 で見られた、内側へ立ち上がる渦（ヘリックス）は見られない。

アバクスの高さは約 75 mm、その上面には円形の座床（setting bed）が作り出されており、高さは 9 mm 程である。アバクス上端には、残存部から推測してオヴォロに類似したモールディングが施されているように見えるが、その上部にフィレット等はない。また、モールディングの下は垂直な面となる。アバクスの平面の形は石材 C24 と類似しているが、その角の面取り部分が、石材 C24 と比べて幾分大きくなっている。座床の直径は 50 cm 強で、アバクス上面は座床部も含めて平らに仕上げられている。座床の外側、アバクス上面に平行に 2 本の線が刻まれている。その間隔はおよそ 54 cm で、アーキトレーヴの設置線であると推測される。即ち、この線に平行な面が、柱頭の正面、若しくは背面となり、この線に垂直な面が柱頭の側面となる。また、斜め 45 度方向に突き出されているヴォリユート上部のアバクス上面端には、座床と同心をなす円の刻線の一部が見られる。

座床の中央にはヴォリユートを繋ぐ線上（対角線上）に、約 7 × 2.5 cm の長方形の吊具用の穴が穿たれている。この穴に重なるように 5 cm 正方の穴が彫り込まれている（アルテミシオンのイオニア式円柱上部に、類似した形の穴が見られる）。この穴の前後（アーキトレーヴ設置線がある方）に小さな浅い穴があるが、パール穴と推測できる。これらの穴は、吊具用の穴の中心から、同方向の側面側に幾分ずれた位置に穿たれており、2 枚で構成されるアーキトレーヴ石材は、外側に配されるものも、バックカーも、同じ方向から乗せる作業が行われたと考えられる。

石材 C10 (Pl.44-b)

石材 C10 は、石材の 1 面は完全に破損し、装飾の突き出た部分も殆ど壊れ、細部の風化が激しい石材であるが、全体の概要がよく判る柱頭石材である。石材は、柱身とモールディングのネッキング部、柱頭胴体、アバクスから構成され、石材の高さはおよそ 60 cm、モールディングより上の柱頭部分の高さは約 459 mm である。

柱身部直径、所謂円柱上部直径はおよそ 517 mm で、柱身部分には 20 条のフルートが施してあり、フルートの幅はフィレットの心々間で、きわめて大まかであるが 8 cm 程である。フルートの底、石

材の端部側面には幅が約 2 cm、長さが 7～8 cm 程度で、深さが 2～3 cm 程の縦溝が刻まれており、確認できた 3 つの縦溝は、柱頭の正面中央の位置に配される。フルートの上端部は 1/4 球面状に彫り込まれ、その上には高さ 1 cm 程のフィレットが巡らされ、その上にアストラガルのようなモールディングが施される。

柱頭胴体部は、第 1 アカンサス、第 2 アカンサス、彫刻装飾部の 3 層で構成され、アカンサスの葉は、第 1、第 2 共に 12 枚巡らされている。第 1 アカンサス葉の高さはおおよそ 15 cm 程度で、1 枚は中央正面に配され、モールディング上で隣接するアカンサス葉と繋がられている。第 1 アカンサス葉の間から立ち上がる第 2 アカンサス葉は、高さがモールディング上から約 22 cm で、1 枚はヴォリュートの下に配されている。第 2 アカンサス葉は、隣接するアカンサス葉と第 1 アカンサス葉の背面で葉先が繋がっている。これらのアカンサス葉の葉脈の基本的な造形は、C24 や C25 と基本的には同じであると考えられる。

中央の第 1 アカンサス葉上部から縦溝の彫られた太い茎が立ち上げられ、上部に節が被せられる。その上から萼片が左右と正面に付けられているように見える。さらにその上に何らかの彫刻が立ち上げられるが、人形の彫像でないことだけは確かである。僅かな痕跡から察するに、萼片の上には細い茎が立ち上げられ、アバクス正面中央部には花飾りが施されていたように見える。

ヴォリュートの下に配された第 2 アカンサス葉と、その隣の第 2 アカンサス葉の間から、太い茎が、ヴォリュート上部へ向かって斜めに立ち上げられる。茎には縦溝が刻まれており、その頂部には節が置かれているように見える。節の上には萼片が配され、その上から茎のような形状のものがアバクスの下まで立ち上げられている。そこから先の外側へ突き出ている部分は破損しているが、多分、ヴォリュートが付いていたと推測できる。(痕跡から推測して、ヴォリュートの高さは、アバクス下からおおよそ 17～18 cm 程度であったと思われる) 萼上部からは、中央へ向かう蔓（ヘリックス）のようなものが立ち上げられていた痕跡が、僅かに見られた。

柱頭胴体部は釣鐘を逆さにした形となっており、頂部のフィレットの幅は 1 cm 以上はありそうだ。アバクスは高さが 8 cm 程で、頂部にモールディングが施されているようだが、その形を特定することはできない。アバクス上面は風化が激しく、座床の存在も確認できないが、その平面形状は糸巻き状であったことは判る。アバクス上面中央には、幅が約 3 cm、長さが約 8 cm で、深さが 16 cm 程の穴が空いている。この穴は底面で広がっているため吊具を差し込む穴であると思われる。この穴に重なるように、1 辺が 55 mm 程の正方形の穴が、長方形の穴と 45 度回転して穿たれており、その深さは 95 mm 程で、長方形の穴よりは浅い。

石材 C12 (Pl.44-d)

石材 C12 の石材は、下部が大きく破損している柱頭で、残存する石材の高さはおおよそ 40 cm である。側面の内、一面も大きく破損しているが、中央上部の装飾が 3 面に残存しており、一面では明らかに植物模様であり、その左右側面では翼を広げた人形の彫像となっている。

石材は、第 1 アカンサス葉の上部だけが辛うじて残っており、第 1 アカンサス葉、及び第 2 アカン

サス葉は、それぞれ12枚で構成されており、各面の中央部には第1アカンサス葉が、斜め45度方向に突き出されたヴォリュートの下には第2アカンサス葉が配されていることが判る。翼を有した彫像は、激しく風化し細かいところは不明であるが、彫像の下の方や茎、彫像のポーズや位置、大きさ、また、左右のヴォリュートへ伸びる茎や萼片、その萼片から伸びる蔓等の形状が、C25のそれらとよく似ている。

一方、植物模様が中央上部に配される面は、残存状況が他の面より良好である。中央の第1アカンサス葉上部から、縦溝のある細い茎が立ち上げられる茎とその上部は風化が激しく、明瞭な形状が掴めないが、残存部から、茎の上部には萼片が左右と前へ開くように取り付けられているように見える。萼片の上部中央あたりから真上に伸びる茎と、左右に広がる蔓が立ち上げられている。中央の茎の上部には花飾り（フリューロン）が付けられ、左右に広がる蔓は、外側に小さく渦を巻く。

花飾りは、アバクスの上端のモールディングの下辺りから柱頭胴体部上部のフィレットに達する大きさで取り付けられている。花飾りの中央には円い窪みがあり、それを中心として花卉が放射状に広出されていたと思われる。

柱頭胴体部は、釣鐘を逆さにした形で、最上部のフィレットは幅が約25 mm程、その面は垂直ではなく内側に若干傾いている。

ヴォリュート上面に回り込む茎等は、ヴォリュート真下の第2アカンサス葉と、その隣の第2アカンサス葉の間から立ち上がる。先ず、細い茎が立ち上げられているように見えるが、茎に縦溝が刻まれているか、茎の先に節が置かれるかなど、細部は不明である。茎の先には萼片が配され、その先からヴォリュート上面へ向かって縦溝のある茎が立ち上がる。茎はアバクス下面まで達し、水平となり、アバクスから突き出るヴォリュート上面に沿って、萼片、若しくはアカンサス葉が、下方に垂れ下がる。

ヴォリュート上面へ伸びる茎の根元の萼片は、正面側と柱頭の中央側に広げられているのが観察できる。翼を有する彫像のある面では、中央側に広がる萼片と、ヴォリュート上面へ向かって伸びる茎の間から、中央側へ向かって斜め上へ蔓（ヘリックス）が伸び、アバクスの下辺りで内向きに渦を巻いているように見えるが、花飾りを有する面には、この蔓（ヘリックス）は見られない。

アバクスの高さは、座床を含めて約8 cmの高さで、座床の高さはおよそ7 mm程である。アバクスの上端には、多分オボロのモールディングがあったと思われる。一方、アバクスの平面形状は、通常のものと同じく糸巻き形で、彫像や花飾りの中心からアバクス端までの距離はおよそ36 cmであった。アバクスの端は面取りしてあり、その幅は6 cm程である。

アバクス上面の座床の平面の形は、風化が激しく読み取りにくいだが、円形であり、その直径はおよそ62 cmであると思われる。アバクス上面にはその中央に幅が約3 cm、長さが7.5 cm程の長方形の穴が穿たれ、その穴は底面で広がっており、彫像のある柱頭側面に直行して配されている。また、アバクス上面は、風化によって酷く荒れており、ボール穴の存在の有無を確認することはできない。

石材 C28 (Pl.45-f)

石材 C28 は、柱頭上面の一部が残る石材である。この柱頭断片は、アスクレピオス神殿正面に置か

れている祭壇の東側に埋まっていたものである。祭壇東側には、エンタブラチュアの石材が複数埋まっていた。これらは、東ストアの外側のオーダーが倒れ込み、エンタブラチュアの部材が立っていた状況そのままに倒れ込み、埋まっていたものと考えられる。エンタブラチュアの石材は複数発見されているが、柱頭はこの断片一つであった。

残存している部分は、アバクスを含んだ柱頭の上方部分で、側面には中央部分に配されたと思われる装飾部分が残っている。この装飾部分は、残存している最下部に、大きく広げられた萼が見られる。萼の上部から細い茎が真上に伸ばされ、茎は「く」の字形に折れ曲がり、その頂部はアバクスに達し、丸い形の装飾が施されている。多分花飾であろうが、破損しており、明言はできない。

中央部装飾の立ち上がる萼上の左右から、多分細い茎のようなものが斜め外側に開くようにアバクス底面あたりまで立ち上げられる。そこから蔓のようなものが、中央側に曲がりながら、アバクス側面に彫りつけられる。

斜め45度方向にはヴォリユートが配されていたと考えられるが、ヴォリユート部分は破損している。しかし、縦溝のある茎部は正面側から斜め方向に向かって曲がりながらアバクス底面まで達しており、この茎部に沿ってヴォリユートの渦が作られたと推測することができる。茎の根元には左右から挟み込むように萼が配されている。茎の形状から推測して、ヴォリユートは石材 C25 等に見られるような大きなものであったと思われる。

アバクスは頂部にオヴォロのモールディングが施されていたようだ。その下にはフレット、その下に平らで面が配されるように見えるが、風化が激しくハッキリしない。アバクスの高さは約 65 mm と小さい。アバクスの平面形は糸巻き状であったと推測でき、隅部は面取りがなされており、隅面の幅はおおよそ 7 cm である。中央部分の装飾の中心から隅部までの距離は約 38 cm、従って、アバクスの幅はおおよそ 76 cm 程度であったことが推測できる。アバクス上面には円形の座床が付けられており、その高さは 7 mm 程であった。

柱頭胴体部は釣鐘を逆にしたような形状であったと推測でき、アバクスの下には高さ 2 cm 程のフィレットが巡らされている。

石材 C17 (Pl.45-a,b)

石材 C17 の石材は、1 側面が大きく破損しているが、他の 3 側面は良く残っている柱頭である。その内、背中合わせの側面の上部中央には彫像が見られるが、他の 1 側面のその部分は破損しており、彫像の付け根の部分の痕跡だけが残っている。その痕跡から、他の 2 側面の彫像と類似した彫像が在ったと推測できる。

この柱頭も、柱身頂部、その上のアストラガル、柱頭胴体部、アバクスの 4 層から構成されている。石材の高さはおおよそ 53 cm で、柱身頂部の高さは約 5 cm、アストラガルの高さが約 3 cm、その上部の柱頭部分の高さはおおよそ 45 cm である。また、アバクスの高さは、上面の座床の高さを含めて約 6.2 cm、座床の高さは 5 ～ 10 mm 程度と思われる。

柱身頂部には 20 条のフルートが施され、フルート間にはフィレットが配される。フィレットの柱

身間距離はおよそ 8 cm である。フルート間に挟まれたフィレットの上方、アストラガルの付け根の部分に、フルート間のフィレットの中心あたりに垂直に延びる刻線が観察される。その刻線の左右にも、これに平行に垂直に刻まれた短くて淡い刻線が見える。中心の刻線間の距離はお 82 mm、淡い刻線のは 11 mm ほどの間隔が空いている。これらの刻線は、フィレットの中心線と、フィレットの幅を示すものと考えられるが、フルート間のフレット上部に確認できない箇所もあり、明確ではない。フルートの溝の頂部は 1/4 球面状に彫り込まれている。また、側面中央彫像の真下にあるフルートの溝の底に、四角い縦溝が確認できた。

アストラガルは外側先端がやや尖ったプロフィールとなっており、柱身頂部より約 18 mm 突き出ている。またアストラガルの上に配される第 1 アカンサス葉の中央葉脈は、アストラガル先端より 16 mm 程後退した位置に作り出されている。

アカンサス葉は 2 層で構成され、それぞれ 12 枚巡らされ、正面中央には第 1 アカンサス葉が、ヴォリュートの下には第 2 アカンサス葉が配される。アカンサス葉の細部の造形は、石材 C25 のものと若干異なっているように見える。アカンサス葉の中央に配される太い中央葉脈は、下から上へ真っ直ぐ伸ばされるが、他の太葉脈より若干突き出されており、下部が太く、先端部分が細くなる。その葉脈の正面は、石材 C25 では平らな面となっているが、この石材では丸みを帯びた形状に仕上げられている。特に異なる点は、葉脈の最下部が二股に分かれていることである。

中央葉脈の左右には太葉脈が形成される。石材 C25 の第 1 アカンサスでは 3 対の太葉脈が形作られているのに対し、この石材では 2 対の太葉脈と少ない。これは、第 1 アカンサス葉の高さが石材 C25 のものと比較し、小さくなっていることに起因していると考えられる（石材 C25 の第 1 アカンサス葉の高さはおよそ 16 cm であるのに対し、石材 C17 のそれは約 12 cm である）。また、アカンサス葉の根元の部分では、石材 C25 と同じように隣接する葉と繋がられているものもあるが、離れているものもあるなど、様々である。

アカンサス葉の付け根よりやや上部、太葉脈の間から、細い葉脈が立ち上げられる。中央葉脈に比較して太葉脈はセットバックして形作られるが、細葉脈は太葉脈より更にセットバックされる。細葉脈は葉の端近くで複数の葉脈に分かれ、それらの先端部分が葉先のギザギザの引っ込んだ部分となる。細葉脈の明確な造形が、石材 C25 の場合は確認できない。

第 2 アカンサス葉でも、中央葉脈と 2 対の太葉脈、更に太葉脈間から延びる細葉脈という造形形式は、第 1 アカンサス葉の場合と類似している。ただ、第 1 アカンサス葉の間の隙間が狭いせいか、第 2 アカンサス葉の太葉脈を 2 対とも底部から造形できなかったようである。その為、中央葉脈の左右に配せられる太葉脈は、中央葉脈と 2 番目の太葉脈の間の幾分高い位置から伸びている。これは石材 C24 や C25 の場合と類似した処置である。また、第 2 アカンサス葉では、外側の太葉脈と中央寄りの太葉脈の間辺りから、葉先が前方へ折れ曲がっているように見える。一方、第 2 アカンサス葉の外側の葉脈の先端の穴の直ぐ下に、第 1 アカンサス葉の腰折れ面が配され、そこで第 2 アカンサス葉の刃先が繋がられていたりするのは、石材 C25 の場合と同様である。

ヴォリュート上面へ伸びる茎などは、ヴォリュート左右隣に配される第 2 アカンサスのヴォリュエー

ト側の方の部分から始まる。先ず、幾分細めの縦溝のある茎が立ち上げられる。その先端には節は置かれず、ただ先端部が僅かに開いたような形として納められる。その上に再び縦溝の付いた茎が立ち上げられるが、その根元は左右から萼片によって包み込まれるように造形されている。茎は曲線を描きながらアバクス下面に達し、水平となり、やはり先端は開いた形となる。その先には葉が垂れ下がりがりながら形作られると思われるが、完全に破損しており、不明である。

ヴォリュートはかなり大きいようで、ヴォリュートの真下に配されたアカンサス葉は、ヴォリュートにより押しつぶされるように大きく曲がり、下方へ垂れている。アバクス下面からヴォリュート下の垂れ下がったアカンサス葉の下端までの距離はおおよそ 27 cm であり、特に大きいヴォリュートを有する石材 C30 と類似している（石材 C30 では、約 26 cm）。

中央部においては、第1アカンサス葉の上、第2アカンサス葉の間から細い茎が僅かに立ち上げられ、先端に節が置かれる。茎には縦溝が刻まれていたようだ。節の上面から萼片が花が開くような形で作られる。その中心から、根元が細く、先端で大きく花を開くような形が再び形成される。その開いた花に乗っかるような形で太ももより上の人形の彫像が立ち上がる。彫像は男性像で、正面から見て体全体が幾分右側を向いており、その右足は下方へ、左足は右側へ伸びているようだ。右側へ伸ばされた男性像の太股の上に、人の形をした彫像が乗っており、左手をやや上げたようなポーズとなっている。

アバクスの断面形状（プロフィール）は石材 C25 に類似しているように見えるが、風化損傷が激しく、明確ではない。アバクス上面も風化が激しく明確なことは判らないが、円形の座床が作り出されていたと思われ、その高さは 5 ～ 10 mm 程度と推測される。上面中央にはアバクスの対角線を長手方向として幅が約 3 cm、長さがおおよそ 5.5 cm、深さが 13 cm 程の穴が穿たれている。底部で長方形の長辺部が広がっており、吊具を差し込む穴であると考えられる。この穴の中央部分に、この穴に重ねるように 5.5 cm 四方の正方形の穴が掘られている。穴の深さは長方形の穴と同じであるが、底に行くほど次第に狭くなっている。これらの穴は最初からこのような形状で彫られたのか、或いは時期を違えて彫られたのかは不明である。

アバクス上面にはバール穴と覚しき穴が二つ並んで彫られている。二つともおおよそ長方形の形状で、長手方向が柱頭側面に直交するように、吊具穴と側面との間に配される。その内一つは 2 × 7 cm 程の穴で、中心からややずれた位置にあるが、他の一つは 2.5 × 4.5 cm 位で、ほぼ上面の中心線上に配されている。吊具穴なの反対側は破損しておりバール穴の存在を確認することはできない。

石材 C23 (Pl.45-e)

石材 C23 の石材は、柱頭ではあるが、特に変わった形状のものである。石材の高さはおおよそ 45 cm、アバクスの幅は約 58 cm 程である。

アバクスの平面形は糸巻き状で、四つの隅が面取りされており、その断面形状は頂部に何らかのモールディングが施された、通常の形式となっている。しかし、柱頭胴体部は釣鐘形ではなく、大まかに見れば四角い箱のような形をしている。

最下部には第1アカンサス葉が8枚巡らされているが、極端に底面側が狭められている。第2アカンサス葉も8枚で構成され、正面中央には第2アカンサス葉が配される。その上からアバクス下端まで、パルメットのような模様で装飾されている。また、ヴォリュートは大きなものであったと推測できる。

石材 C01 (Pl.43-e)

石材 C01 の石材は、他のものと比べてかなり大きな柱頭ではある。石材の高さはおよそ 78 cm、アストラガル上部からアバクス上面までの柱頭部分の高さが約 67 cm である。

アカンサス葉は各層 8 枚で構成されているが、正面及び 45 度方向のヴォリュート下に配されている。アカンサス葉の葉脈の彫り込みが深く、中央葉脈は上に行くに従い細くならず、むしろ太くなっているように見受けられる。深く彫られた葉脈の間の底に、非常に細い葉脈が彫られている等、他の柱頭とは細部の造形も異なっている。中央の第2アカンサス葉の上に、縦溝のある茎が僅かに立ち上がり、先端が開いている。その上に節のようなリングが配され、そこに人の形をした彫像が刻まれる。彫像は腰辺りから頭部までの形が表され、頭部はアバクス頂部のモールディングまで達する。また、彫像には翼はないように見え、男性像か女性像は判別できない。

45 度方向に配された第2アカンサス葉の上部からヴォリュートが立ち上げられるが、ヴォリュートと円柱胴体部の間は彫り抜かれていない。

中央部の第2アカンサス葉とその左右のアカンサス葉の間から彫像に向かって萼のようなものが立ち上がっているが、残存状況が悪く、ハッキリしない。

柱頭胴体部は釣鐘を逆さにした形で、頂部のフィレットの高さは 2 cm 程度である。アバクス頂部には何らかのモールディングが施され、その下にはフレットが巡らされているように見えるが、ここも明確ではない。アバクス上面には座床が作られているように見え、中央には長さは不明であるが幅が約 35 mm で深さが 15 cm 程度の穴がある。穴は底面で広がっており、吊具を差し込むものと考えられる。

注：

- 1) 胡麻殻線形のフルート (reeded flute) は、通常のフルートとは逆に、アリス間で外側に膨らんでいる。ストアのような、一般に柱が人の手に触れやすい建物の円柱に多くみられる。クールトンは彼の著作の中で、胡麻殻フルートについて、「ヘレニズム期のストアではかなり一般的な例である。・・・胡麻殻線形のフルートの目的はたぶん列柱を行き交う人々によって、フルートのアリスが破損するのを防ぐためであろう」と述べている。(J. J. Coulton, *The Architectural Development of the Greek Stoa*, 1976, p. 112)。
- 2) 神域内には 55 本のドラム石材が神域内に残存していた。その内、47 本のドラムをフルーティングのタイプで分類することができた。またこれらのドラムには D01 ～ D55 の番号を付けた。
- 3) J. J. Coulton, *ibid*, p.112-113
- 4) J. J. Coulton, *ibid*, p.111
- 5) この縦溝は、アスクレピオス神域内のアルテミシオンの円柱や、北プロピロンや北西隅の泉の半円半角柱にも見られるばかりでなく、スタディオンをコの字型に囲むストアの円柱にも見られ、古代メッセネにおいて、流布していた手法であると考えられる。
- 6) 事例数は、ドラムの数である。例えば、ダボ穴・縦溝がドラムの上下面共に存在している場合を「1 例」と数え、また、ダボ穴・

縦溝が上面には存在し、下面にはどちらも存在しない場合は、それぞれを「1例」として数えている。

- 7) ここで言う直径は円柱下部直径をさす。イオニア式やコリント式オーダーの場合、柱礎があるために、どの位置を円柱下部直径とするかばきか判断が難しい。今回は柱礎に付属する柱身が、トルスの終わる位置からやや立ち上がって、緩やかなカーブがほぼ終わりきった位置を円柱下部直径とした。
- 8) A-type のフルートを有するドラムは D-type のフルートを有するドラムより直径が小さいものが多いが、A-type のフルートを有するドラムは残存状況が芳しくなく、また、B-type のフルートを有するドラムは E-type のフルートを有するドラムより直径が明らかに大きいと言える。
- 9) 柱礎石材は、B01 ～ B20 までの番号を付けた。B03 の柱礎には、約 5 cm 四方で、深さが 7 cm 程度の穴が開いている。また、側面には縦溝も施されている。その他、B16、B07、B11 にもダボ穴らしき痕跡が確認できる。
- 10) C01、C26 だけは、中央に、第 2 層のアカンサスの葉がくる。
- 11) C11 は、アカンサスの葉が 1 層に 12 枚で、渦が大きいタイプの柱頭の中でも、特に特に渦が大きかった。
- 12) 柱頭には、C01 ～ C37 の番号を付けた。
- 13) この柱頭部材はおそらく北プロピロンのストア側の円柱に使われていたものと考えられる。北プロピロンの円柱下部直径は 0.698 m とストアの円柱下部直径よりも大きく、この上にコリント式柱頭が載ると仮定すれば、ストアのコリント式柱頭よりも明らかに大きかったと考えられるからである。
- 14) ここでは葉数 8 枚の柱頭の例外として 3 例を示した。しかし、葉数 8 枚の柱頭、葉数 12 枚の柱頭に分類しているものの中には不明な部分もあり、葉数 8 枚、葉数 12 枚に分類した柱頭が、必ずしもまったく同一の形式を持った柱頭とは限らない。
- 15) 柱頭高さはモルディングを除いた、第 1 層のアカンサスの付け根から実測した。
- 16) 葉数 8 枚、葉数 12 枚の柱頭共に、上面を確認できた全てに円形の膨らみはあった。C24 (葉数 8 枚) の円柱では、その直径は 0.567 m、厚みは 7 mm、C25 (葉数 12 枚) の円柱では、直径が 0.530 m、厚みが 7 mm であった。
- 17) C24 の柱頭では約 30 × 90 mm の穴で深さが 173 mm である。また、この様な穴の中には、穴の幅が中央付近で広がっているものがある。C25 の柱頭では、長さは約 90 mm であるが、幅が中央付近で 60 mm となっている。穴の深さは 92 mm である。長方形に開けられた穴の幅が中央付近で広がっているものは多く、C03、C04、C25、C27 などの柱頭で見られた。柱頭上面に開けられた穴の形は、長方形ではなく、十字形になっているものもあった。例えば C15 の柱頭では、約 25 × 90 mm の長方形の穴に直行して、約 25 × 75 mm の穴が穿たれている。また、C18 の柱頭では、25 × 100 mm の長方形の穴に直交して、20 × 85 mm の穴が開けられているが、後者の穴の深さは 120 mm 程度であるのに対し、前者の穴の深さは相当深くなっている。また C14 の柱頭では、20 × 95 mm、深さが 117 mm の長方形の穴に直交して 25 × 75 mm で深さが 175 mm の長方形の穴が開けられている。さらにその交差部には正方形で深さが 55 mm のあなが開けられていた。この様に、単純な長方形でない穴は、石材を吊り上げるための穴には違わないと考えられるが、解体したり落ちたりした柱頭を、再び柱身上部に載せるために、石材を吊り上げる為の穴を改めて開けたとも考えられる。
- 18) パール穴が明確に見られるのは C17、C25、C30 の柱頭である。C30 の柱頭には、上部の円形に突き出た部分の外側に 2 カ所、平行な刻線が見られる。これはアーキトレヴの設置線であると考えられ、その線間の距離は 0.540 m となっている。
- 19) 葉数 12 枚の柱頭では、C12 の柱頭の上面が確認できている。葉数 12 枚の柱頭で上面にパール穴が無かったのはこの事例のみである。
- 20) 葉数 8 枚の柱頭では、人型像の付いているものが C02、C04、C06、C24 の柱頭で、植物文様の付いているものが C03、C08、C14、C35 の柱頭である。また、葉数 12 枚の柱頭では、人型像の付いているものが C07、C09、C12、C13、C15、C17、C25、C27 の柱頭で、植物文様の付いているものが C11、C12、C18、C28、C29、C30、C31 の柱頭である。尚、C12 の柱頭は、人型像の付いた隣面には、植物文様が付いている。
- 21) 葉数 8 枚の柱頭では、C02、C04、C06、C24 の 4 例、葉数 12 枚の柱頭では C07、C09、C13、C25 の 4 例で確認した。C01 の人型像は、明らかに他の物より大きな彫像となっている。
C01 の柱頭の胴部寸法は 105 mm であるのに対し、葉数 8 枚の柱頭の C02 が 72 mm、C04 が 64 mm、C24 が 72 mm、また、葉数 12 枚柱頭の C25 が 57 mm となっている。C17 の柱頭の彫刻も特殊である。翼を持つ人型像は正面を向いているが、この柱頭の人型像は斜め横を向いており、更に膝の上に他の人型像のようなものが彫られており。人型像の腰部の寸法は 44 mm と、他のものに比してかなり小さくなっている。

- 22) 明確にこの形式の彫像と思われるのは C02、C24 の柱頭である。また、C15 の柱頭では、翼の有無は明確ではないが、ペニス³が確認された。
- 23) C25 の柱頭は、女性像のようにも見え、ニケ像の可能性もある。また、明確ではないものの、C09 の柱頭も、矢筒を背負うための筒紐が無い。
- 24) C12 の柱頭では、萼とパルメットを繋ぐ部分に、細い渦を巻いた茎状部が配されている。
- 25) C25 の柱頭では、アバクスからヴォリュート下面までの寸法が、凡そ 29 cm と推測されるが、C11 の柱頭では約 32 cm、C17 の柱頭では約 33 cm である。
- 26) 中庭にある祭壇の東側には、東ストアのエンタブラチュアが倒れたまま状態で、長さ約 13 m にわたって残っていた。神殿を挟んで反対側には、同じように中庭にある神殿西側のエンタブラチュアが、長さ約 9 m にわたって残っていた。おそらく地震等の水平力を受けて倒れたものと思われるが、特に、祭壇東側に倒れているエンタブラチュアは、部材が積まれていた状態を良好に示している。Pl.46-c の写真は、祭壇の東側に倒れているエンタブラチュアであり、左から、アーキトレーヴ・フリーズ部材、ゲイソンの背面が見えており、右下に見えるのがシーマである。これが祭壇にピッタリと接して倒れているのが分かる。
- 27) 実際に実測したのはクレピス端からアーキトレーヴ底面までで、約 5.06 m であった。これにクレピス踏面幅 (0.234 m) を加えて、スタイロバイトからアーキトレーヴ底面までの長さ (5.294 m) とした。
- 28) J. J. Coulton, Ibid., p.113

3-2. エンタブラチュア

1) アーキトレーヴ・フリーズ

外部円柱上に乗せられる部材は、アーキトレーヴとフリーズが一体となった形式で作られ、正面（以下、アーキトレーヴ・フリーズ部材）と背面（以下、バックカー）の2枚の石材で構成される。

アーキトレーヴ・フリーズ部材におけるアーキトレーヴ部分には3段のファスキアがあり、その上に、フィレットとシマ・レヴェルサで構成されるモールディングが施される。その上部のフリーズ部分には牛頭骨（ブクラニア・bucranium）と聖杯（phialae）が交互に並ぶ浮彫が施されており、頂部はフィレットのモールディングが付けられる（cf. E42 : Pl.48-a）。彫刻が施されているフリーズ本体の部分は、基本的には大きなカヴェットとして形作られているようだ。

一方、バックカーのアーキトレーヴ部分も3段のファスキアが施され、その上にはアーキトレーヴ・フリーズ部材と同じ形式のモールディング（フィレット+シマ・レヴェルサ）が配される。フリーズ部分は、頂部にはフィレットが施され、その下方は、円弧状に穿たれ、アーキトレーヴ・フリーズ部材と同じく大きなカヴェットとして形作られている。ただ、アーキトレーヴ・フリーズ部材と異なり、そこには何の彫刻も施されていない（cf. A01 : Pl.48-b）。

遺構近くに散在するこれらの石材において、アーキトレーヴ・フリーズ部材については47例を確認し、E01～E47の番号を振り、背面部材では14例にA01～A14の番号を付けた。部材のほとんどは割れており、基本的にはそれぞれのブロックを1例として数えたが、明らかに一つの部材を構成するブロックであると考えられる場合は、併せて1例と数えた¹⁾。これらのブロックの内、保存状態の良い石材を選び、アーキトレーヴ・フリーズ部材については7例、バックカーについては4例について実測し、各部寸法をTable 18とTable 19にまとめ、それぞれの平均値を求めた。また、各部材における主要部分寸法相互の比を算出し、その平均値を求め、Table 20とTable 21に掲載している。

アーキトレーヴ・フリーズ部材については、3つの部材のみが実測可能であり、平均は2.426 m（E16+E11 : Pl.14、E41 : Pl.18,52-c、E42 : Pl.18,48-a）であった。バックカーについては直接その長さを実測できるものはなかった。アーキトレーヴ・フリーズ部材の高さは0.757 mであるのに対し、バックカーの高さは0.509 mと、高さに0.249 mの差がある²⁾。アーキトレーヴ・フリーズ部材のアーキトレーヴ部分の高さは0.415 mで、フリーズ部分の高さは0.343 m、それぞれの部材高さに対する比は0.544と0.456（=1 : 0.838）となった。一方、バックカーのアーキトレーヴ高さは0.300 m、フリーズ部分の高さが0.210 m、部材高さに対する比は0.582 mと0.418 m（=1 : 0.699）で、アーキトレーヴ・フリーズ部材とは異なる比例関係となっている。しかし、3段のファスキアとアーキトレーヴ部分最上部のモールディングのアーキトレーヴ高さに対する比は、アーキトレーヴ・フリーズ部材で、下から順に0.244 : 0.287 : 0.335 : 0.144で、バックカーでは0.244 : 0.290 : 0.324 : 0.142で類似した比例関係であると見なすことができる³⁾。

底面の幅は、アーキトレーヴ・フリーズ部材では0.26～0.29 m（平均0.270 m）、バックカーでは0.29～0.33 m（平均0.309 m）となり、背面側の部材が幅広となっている。一方、底面には、アーキトレーヴ・

フリーズ部材とバックカーが接合する側に、アーキトレヴ・フリーズ部材では幅 2～6 cm（平均 0.043 m）、バックカーでは幅 6～8 cm（平均 0.074 m）ほどの帯状の彫り込みが施される（深さは 1 cm 程度）。また、石材の表面から溝までの距離は平均値で、アーキトレヴ・フリーズ部材では 0.227 m、バックカーでは 0.235 m となり、2 枚の部材が合わせられ、その底面のほぼ中央に帯状の溝が掘られていたと考えられる。以上のことから、アーキトレヴの幅は、2 枚併せて 0.578 m、その中央部に帯状の彫り込みが成され、その幅は 0.116 m と算出した。一方、円柱上面には円形に僅かに突起している部分があり、その直径は 0.534 m（C25）と 0.512 m（C30）であった。この突起部分にアーキトレヴは載せられるが、アーキトレヴの幅は突起部分の直径より凡そ 4.4 cm、6.6 cm 大きい。また、C25 の柱頭上面には円形の突起部分の両脇には、おおよそ平行な線が刻まれており、その間隔は約 54 cm であり、アーキトレヴの幅より 3.8 cm ほど小さい寸法であった。

アーキトレヴ・フリーズ部材、バックカーの向かい合う面の下方には、おおよそ 10 cm の幅で表面をある程度平らにした面が作られており、それより上部は、粗く仕上げられるようだ。バックカー上面の両端には、端から 35 cm 程度まで 1～2 cm 程突き上げられている部分があり、端から 20 cm 程の所に、下方に突起のあるクランプを差し込む穴が穿たれている。これに対応するアーキトレヴ・フリーズ部材には、ただ単に水平に穴が穿たれているだけで、正面部材と背面部材は L 型のクランプで接合されていたことになる（PL.48-c）⁴⁾。

アーキトレヴ・フリーズ部材上面の両端にはアーキトレヴ・フリーズ部材同士を繋ぐクランプ用の穴が掘られている（PL.49-a）。その穴は、幅 7 cm、長さ 17 cm、深さ 6.5 cm 程の大きな穴で、接合面の幅が狭くなっており、一見、ダブテール型のクランプ穴のように見受けられるものや、単に長方形のものがある。また、バックカー上面の両端にも、同じように、幅 7.5 cm、長さ 10 cm、深さ 6 cm 程の大きなクランプ穴が刻まれている（PL.49-b）。この穴にどのような形のクランプが置かれ、隙間は何で埋められていたのか、全く不明だが、クランプ穴が大きいことや石材がもろいポロスであることを鑑みれば、木製クランプであった可能性も考えられる。

アーキトレヴ・フリーズ部材上面には、クランプ穴以外にも様々な穴が開けられてあるものもあり、大きさや形も様々である。穴の中には、上面の形状が長方形で、穴の断面形状は深くなるほど広がっているものもある。このような穴は石材を吊り上げるのに使用されたと考えられるが、このような穴が必ずしもあるとは限らない⁵⁾。また、バックカーの中央あたりにも、これに類似した、石材を吊り上げるときに使用されたと考えられる穴があるものがある⁶⁾。

アーキトレヴ・フリーズ部材正面に彫られた牛頭骨の浮き彫りは各ストアに 100 頭分並べて、中庭中央の神殿に捧げる意図があったという説もある。牛頭骨彫刻は、基本的にはフリーズ石材の左右にそれぞれ半分が配されたと思われる。また、アスクレピオス神域内に残存していたアーキトレヴ・フリーズ部材の内、17 個の石材で牛頭骨間の距離を実測した結果、0.473 m～0.500 m であった。心々柱間寸法は東西ストアで 2.409 m、南北ストアでは 2.423 m、それぞれを牛頭骨間距離で除すと、4.967、4.996 となる。即ち、一柱間に 5 個分の牛頭骨彫刻が配されており、20 柱間ある東西ストアでは 100 個の牛頭骨彫刻が、22 柱間ある南北ストアでは 110 個の牛頭骨彫刻が置かれるスペースがあることに

なる。しかし、入り隅部では半分の牛頭骨と1個の聖盃が削られ (cf. E17: PL.51-c)、牛頭骨彫刻の数はストアで1個減り、99個、南北ストアでも109個となる。また、牛頭骨間の距離が0.601mと、他の部材よりも明らかに長い部材が1例のみ存在していた (E36、Pl.17)。この場合は、一柱間に4個分の牛頭骨が彫られていたことになる⁷⁾。

祭壇東側に倒れていたアーキトレヴ・フリーズ部材の一つに、スタッコが残っている箇所を発見した。E44のアーキトレヴ・フリーズ部材のフリーズのフィレット部分には、白いスタッコが残っており、スタッコの上に塗られた赤い色も残っていた (E44: Pl.49-c)。この石材上面には円形の刻印も刻まれていた (E44: Pl.50-a)。また、同じく倒れたエンタブラチュアに含まれていたアーキトレヴ・フリーズ部材の中に、アーキトレヴ正面の三段目のファスキアに、文字のように見える刻印があった (E41: Pl.50-b)。エンタブラチュアは、倒れた当時から今日まで地中に埋もれていたと考えられることから、これらの刻印は石工のマークとも単なる古代の落書きとも考えられるが、詳しくは不明である。

2) フリーズ部分に施される装飾

残存するアーキトレヴ・フリーズ石材に彫刻されたフリーズ部分の装飾は、個体によって若干の相違があったり、残存状況の違いから判別しにくい箇所もあるが、大半が非常によく似ていると言える。ここでは、良好に残存する部材から読み取れる、牛頭骨、聖盃、葉飾りの装飾の典型と考えられる形態について示す。

牛頭骨 (bucranium・ブクラニア)

牛頭骨彫刻の頭頂部には、中央縦方向に線が刻まれ、二つの丸みを帯びた頭頂骨を表している。その左右から弓形に上に反り上がった角が突き出される。角は先端が細く、その断面は円く削り出される。

顔面部分の最上部の左右、角の付け根の直ぐ下に目の部分が半円形状に彫り抜かれ、その縁は眼窩 (がんか) に沿って心持ち盛り上がっている。顔の輪郭は、目の部分が最も広くなっており (眼窩上で10 cm、眼窩の下で9 cm程度)、眼窩の下から鼻先に向かってほぼ直線的に、極めて僅かに内側に弧を描きながら細くなり、鼻先の上、2～3 cm 辺りから下が円く彫られている。

顔部の水平断面形は、顔の中央の縦溝で括れる二つの円い頂部を有する山形とされるが、鼻先の上、4～5 cm 辺りで中央縦溝は無くなり、中央に円い頂部を有する一つの山形となる。山形の左右は頂部とは反曲する曲線となる。輪郭部は幾分、彫刻の内側に向かって、直線的に彫り込まれる。

縦断面形状は、眼窩の間よりやや下辺りを頂点とする山形として形成される。頂点から鼻先に向かって直線的に、且つ緩やかに傾斜し、顔面中央縦に刻まれた線が消える辺りから、心持ち膨らみ、その先は鼻の先端に向かって丸みを付けながら彫り込まれている。

牛頭骨の頭頂部には紐が掛けられている。紐は額に緩やかに垂れており、角の付け根から角の背後にまわり、そのまま下方に垂れ下げられる。紐は下に向かって真っ直ぐ垂れさせられるか、幾分下方が広げられたり、僅かに内向きの円弧を描いたりする。

紐は糸を束ねたものとして表現され、束ねるためおよそ 3 cm おきに輪状のもので糸の束が絞められている。従って、3 cm 程の楕円の玉と 1 cm 程の輪が交互に配され、先端部分では糸の束が広がった形となる。また、糸束を絞める輪状のものが表現されないものもある。この場合、楕円の玉だけが連続している表現となる (E41, E42, E43, E45 等)。紐の先端部分には縦溝が彫られて糸の束であることを表現される場合が多く、楕円の玉の部分にも縦溝が施されているものもある。

聖盃 (phialae、フィアレー)

聖盃は正面から見て、三重の同心円平面として表現される。最も外側の円は、聖盃彫刻の内側に向かって、およそ 5 cm 程彫り込まれる。また、外側の円から 2 番目の円までは、正面側に膨らんだ緩やかな曲線を描きながら、円の中心側に向かって彫り込まれる。その内側にある盃の底面は、平らな面とされ、聖盃の端から 3 ~ 3.5 cm の深さとなる。中心には直径 3 cm 程の半球が削り出される。半球の中心には、円を描くためのコンパスの芯を置いたと思われる、小さな穴があいている。

花綱装飾 (festoon、フェストゥーン)

花綱装飾は、聖盃の頂部から聖盃の輪郭に沿って垂れ下がり、反曲して、左右の牛頭骨の鼻下まで巡らされる。花綱装飾は聖盃頂部で 3 本 (希に 4 本) の輪で絞められている。花綱模様は、一本の茎の左右に葉が交互に配される形として作られている。葉先は、聖盃の頂部から垂れ下がる方向に向けられ、牛頭骨の鼻下で左右の花綱模様の葉先が突き合っている。葉の中央には 1 本の葉脈が刻線として刻まれる。ただ、希に葉脈を盛り上げてある場合もある。尚、牛頭骨の角の背後から垂れ下がった紐は、この花綱模様に重なるところまで下げられる。

3) ゲイソン

ゲイソンの部材は 18 個発見された。その内、保存状態が良かったり、特徴のあるゲイソンを選び、各部の寸法を実測し、Table 22 にまとめた。ゲイソンの正面にはデンティル (歯形飾) が施してあり (cf. Pl.56-c)、その幅は平均 0.068 m、隙間の幅は平均 0.031m であった。ゲイソン正面のコーニス部分の高さは、平均 0.292 m であった。部材の全長が残っているものは少ない (実測した石材では G11、G12、G15 の 3 例のみ) が、両端が残存している石材の部材長が約 1.2 m ほどあることから、柱間間隔のおよそ半分の長さで作られていたのだろう。ゲイソンの背面には垂木を差し込む穴が切り込まれている。しかしゲイソンの背面及び上面の残存状況は極めて悪く、実測した石材の内、背面の穴を実測できたのは 2 例のみ (G12: Pl.25,56-b、G17) であった。穴の幅は 0.163 ~ 0.190 m 程度、高さは 0.149 m ~ 0.190 m 程度、また、穴の心々間距離は 0.40 ~ 0.45 m 程であった。高さについては、野地板などが置かれる可能性もあり、切り込みの寸法からだけでは推測できない。残存状況も悪く、しかも事例も少ないことから、ここで示した垂木の断面寸法や、設置された間隔は、大きな誤差を伴うと理解すべきであろう。

また、ゲイソンの底面に対する上面の勾配から屋根勾配は、各部材の平均値をとって 18/100 と求めた。しかし、垂木寸法と同様に、屋根勾配も、ゲイソンそのものの残存状態が悪く、実測値もばらついており、また、実測数も少ないので確かではない。

一方、いくつかのゲイソンは、アーキトレヴ・フリーズ部材が転用された部材であることが判明した (G14、G16)。G14 (Pl.26,56-d,e) のゲイソンでは、1 段目のファスキアが、コーニス上端のモールディングによって半分ほど切り取られているものの、2 段目と 3 段目のファスキアが残っており、その高さは 0.107 m、0.129 m であった。また G16 のゲイソンでも同じように 1 段目のファスキアが半分までしか残っていないが、2 段目と 3 段目のファスキアの高さは 0.137 m、0.143 m であった (Pl.26,57-c,d)。これらの値は、アーキトレヴ・フリーズ部材のファスキアの平均値 0.118 m、0.138 m に近く、同じストアのアーキトレヴ・フリーズ部材を再利用したと考えられる。

ところで、アーキトレヴ・フリーズ部材の上面幅は 0.344 m、その上に乗るゲイソン幅は、デンティルより正面側の部分を除いて 60 cm を超えるものがあり、ゲイソンは後側のアーキトレヴ+フリーズ部材の上部まで張り出すことになる。そこで、木製横断梁の梁背はアーキトレヴ・フリーズ部材とバッカーの高さの差の 0.234 m となるが、これでは小さすぎると考えられる。しかし、ゲイソンの後側角部が削られている部材を 2 個確認しており (G11 : Pl.24,55-c,d、G15 : Pl.27,57-a,b)、0.234 m より高い梁背の横断梁が掛けられていた可能性を示唆している。

4) シーマとアンテフィックス

シーマ部材は 2 例発掘され、現在は博物館に保存されている (S01 : Pl.29,57-e、S02 : Pl.30,58-a)。シーマの正面には、ライオンの頭部でできた樋口があり、その間を花綱模様で装飾してある。ライオン頭部の間隔は心々で約 0.47 ~ 0.49 m で、外部列柱 1 柱間に 5 個のライオンが並ぶことになる。シーマ部材の正面上端には、アンテフィックスを立てるためのダボ穴があり、その後ろには平瓦を 2 枚並べた形状につくられていた。シーマの一体化して着けられている平瓦は、幅約 0.484 m、長さ約 0.81 m で、その形状からコリント式の屋根瓦⁸⁾ が載っていたとことが分かる。

このシーマ部材の上に載るアンテフィックスも発掘されており、底面にはシーマ部材と接合するダボ穴が残っているものがあった (Pl.31,58-b,c)。テメリス氏によると、アスクレピオス神域のストアと神殿のシーマおよびアンテフィックスは、紀元前 2 世紀とされている⁹⁾。

5) エンタブラチュアを構成する石材

石材 E04 (Pl.13,50-c)

石材 E04 は、アーキトレヴとフリーズが一体となった石材である。石材の寸法は、高さがおおよそ 75 cm、幅が約 34 cm、長さは 1.14 m 程であるが、正面から見て右側が欠けている (石材 E02 と一体の石材であったと考えられる。ただし、石材 E04 と E02 の間には、フリーズ部に聖盃が残る小さなアーキトレヴ・フリーズ部材が入る)。石材の左側は上から見て斜め 45 度方向に切断されており、入り隅部材であることを示している。入り隅部の接合面にはアナシロシスとしての仕上げが施され、接合面の内側は粗く仕上げられている。

正面フリーズ部分には、二つの牛頭骨と一つの聖盃が残存しており、入り隅部分近くに牛頭骨が配

されている。フリーズ上部のモールディングは殆ど欠損している。

上面の入り隅部分側の端には、斜め方向にクランプ穴が彫られている。クランプ穴は幅がおよそ 8.5 cm で、入り隅部分側が若干狭くなっており、ダブテール (dovetail) 型とも見えるが、明確ではない。またその深さは約 7.6 cm と深い。

背面下部の 10 cm 程には細かな鑿痕が残り、平らに仕上げられていたことが判る。また、背面の入り隅部側近くには、バッカーとの接合に使用されたと思われるクランプ穴が彫り込まれている。クランプ穴は幅が約 24 mm、高さが約 64 mm の縦長で、穴の内側底面は心持ち斜め下方向に彫り込まれている。

底面はほぼ平らに仕上げられるが、底面の背面側の隅部に幅 3 cm 程の溝が彫られている。ただし、入り隅側の石材端から 22 cm までは、この溝はない。

石材 E16 (Pl.14,51-a,b)

石材 E16 は、アーキトレヴとフリーズが一体となった石材である。正面から見て左側が欠けている。石材の高さは約 76 cm、幅がおよそ 32 cm、長さは 135 cm 程度である。正面側は比較的残存状態が良好で、アーキトレヴ部分のファスキアやモールディングには仕上げの鑿痕が見て取れる。モールディング上面は奥行き方向が高くなるよう傾斜して彫り込まれている。フリーズ部分には三つの聖盃と三つの牛頭骨があり、石材の継ぎ目である右端の牛頭骨は、正確に縦半分だけ彫刻されている。

石材上面の残存状況は必ずしも良好とは言えないが、正面側が僅かに低く削り落とされているのが判る。上面右端には幅が約 9 cm、長さが 13 cm 程で深さがおよそ 6 cm のクランプ穴が見られる。その形状はダブテール型にも見える。上面右端から 1 m 程のところに浅い穴が刻まれているが、おそらくコーニス石材を設置する際に使用されたバール穴であると考えられる。また、残存している石材の左端近く、幅 2 cm、長さが約 6 cm、深さが 8 cm ほどの石材の長手方向に横長の穴が開けられている。この穴は、側面が残存する右端からはおよそ 1.2 m の距離辺りにあり、ほぼ石材の中央に穿たれており、また、穴は、底に向かって若干広がっているように見えるので、石材を吊り上げる際に使用されたものと推測される。

石材の背面では、上部は欠損しているように見える。また下部は大まかに見れば平らであるが、風化のためか、仕上げの具合か、表面は粗れている。石材の継ぎ目近く、底面より 45 cm 程の高さのところには、バッカーとの接合に使用されたと思われるクランプ穴が見られる。

この石材は石材 E11 と共に一体のアーキトレヴ・フリーズ部材となる。E11 の石材の正面左側には、石材 E16 と同じく、縦半分の牛頭骨が彫刻されている。

石材 E11 と E16 をあわせた長さはおおよそ 2.435 m となる。更に、石材 E11 の上部及び背面には、石材 E16 で見られたものと類似したクランプ穴やバール穴が見られる。石材 E11 と E16 に刻まれたバール穴間の距離はおおよそ 1.15 m である。この寸法はこの石材の上に乗せられたコーニス部材の大きさを示すものと推測できる。

石材 E11 の背面の下部は平らに仕上げられ、小さな鑿痕が僅かに残っているのが観察できた。

石材 E17 (Pl.15,51-c)

石材 E17 は、アーキトレヴとフリーズが一体となった石材である。正面から見て、石材の右側は欠けており、石材の長さはおよそ 2 m 弱、高さは 751 mm、石材の幅は約 366 mm である。石材の左側は、上から見て斜め 45 度方向に切り落とされており、入り隅部材であったことが判る。石材のフリーズ部分には、入り済み部分側から牛頭骨と聖盃が交互に彫刻されており、3 番目の聖盃部分まで残存している。

アーキトレヴ部のファスキアには細かな鑿痕が残る。石材上面の入り隅部側には、幅が約 5.5 cm、長さがおおよそ 13 cm の四角いクランプ穴が、45 度方向の切断面に直行する方向に穿たれている。また、入り隅部端から約 1.1 m 辺りから幅が約 3 cm、長さが 7.5 cm ほどで、深さがおおよそ 5.5 cm の穴があるが、石材を吊り上げる際に使用されたものと考えられる。心々間柱間寸法はおおよそ 2.4 m であるので、この穴も、本来の石材の中心あたりに穿たれたものと思われる。その他、3 つの浅い穴が彫られているが、全て石材上部にコーニス石材を設置する際使用された、バール穴であると考えられる。複数のバール穴の存在から、コーニス石材を設置する際、石材設置位置の変更があったか、或いはコーニス石材が落下などして、後に新しいコーニス石材を積み直した等の状況が推測される。

石材の背面は、比較的良好に残存している。背面では上から 30 cm 辺りまで、突き出されている。また、下から幅 10 cm 程度は平らに仕上げられ、細かな鑿痕が残存している。

この石材は石材 E18 と一体であり、これら二つの石材を合わせた長さは約 2.34 m となる。また、入り隅部の接合部を除いて、正面の長さは、下から 2 番目のファスキア面で、約 2.11 m であった。E18 の石材の上面には石材 E17 の上面のバール穴と対応するように、バール穴が彫られている。バール穴の間の最大距離は約 1.15 m、最小距離はおおよそ 76 cm であった。

石材 E41 (Pl.18-a,52-c)

石材 E41 は、アーキトレヴとフリーズが一体となった石材である。この石材は神殿祭壇の東側に埋まっていたものであり、2004 年に掘り起こされた石材である。背面はオランダスの発掘後から露呈していたため風化しているが、正面側は 2004 年まで地中に埋まったままであった。その為、モールドイングやフリーズ彫刻等、細部の残存状況が良好な状態で、保持された石材である。

石材は大きく 4 つに割れているが、左右両側面に仕上げの部分が残っており、石材の本来の長さを実測することができる。石材の寸法は、高さが 75.1 cm、長さが約 243 cm、幅は最大でおおよそ 41 cm 程となっている。正面ファスキアの最上段には、c と ϕ を縦に繋げたような刻線がある。ファスキア上部のモールドイングも良く残っており、フィレットの下にシマ・レヴェルサの組み合わせであることが判る。フィレット上面は、ほぼ水平に彫り込まれていたり、先端の 25 mm 程が水平に彫られ、その後やや上方に傾斜を付けて彫られるなど、仕上げ方が一定ではない。また、フリーズ部分の上端では、幅 4 cm 程のフィレットが施され、その下が直線的に斜め下に向かって彫られている。その面には仕上げの細かな鑿痕が残っている。フリースの装飾は、左右に縦半分の牛頭骨が配され（左側の牛頭骨部分は破損しているが、丁度牛頭骨縦半分が施されるのに適当なスペースとなっている）、牛頭骨と聖

盃が5パターン繰り返えされて、花綱装飾によって繋がれるという、一般的なものとなっている。

側面においては、正面側端に平らに仕上げられた部分があり、他の部分は粗く仕上げられているのが判る。上面は、ほぼ水平ではあるが、幾分粗めに仕上げられている。部分的には、先端が平らな鑿を使用し、大まかに平たくされた後、先端が円いのみで敢えて粗しているように見える箇所もある。上面の正面側は約7 cmの幅で2～3 mm程低く落とされ、その面は細かな鑿で平らに仕上げられている。上面の右端には、幅7.6 cm、長さが18 cm、深さが7.5 cm程のクランプ穴が彫られている。クランプ穴は側面から遠い方に幾分広がっているように見えることから、ダブテール型のクランプを示唆している。また、上面左側は欠けており、クランプ穴は確認できなかった。

上面の右端から40 cm程のところに、およそ幅が9 cmで長さが15 cm、深さが6 cm程の長方形の穴が、背面側端に彫られている。これに類似した穴が上面の左側面から60 cm程の所にも見られる。穴の形状や位置から、クランプ穴のようにも見えるが、明確な用途は不明である。上面の右側面から55 cm程の所には、幅3 cm、長さが10 cm弱、深さが5 cm程の穴が穿たれている。パール穴にしては穴の形が整い過ぎており、ダボ穴にしては穴の深さが浅すぎる。石材を吊り上げる穴にしても浅すぎたり、偏心しすぎている。これも用途不明の穴である。尚、この石材上面には、石材を吊り上げる際に用いられたと思われる穴の存在は確認できなかった。

背面の下部は、バッカーが接触する部分として4 cm程突き出して作られる。また、背面から見て左側面から約48 cm、右側面から約27 cm 辺りに2カ所、クランプ穴が見られる。二つのクランプ穴は、突き出されている下部より若干上方の、底面からおおよそ47 cmの高さの所に穿たれている。背面から見て右側のクランプ穴には、鉄製のクランプが残存しており、クランプ穴に充填された鉛も残っているように見える。

石材底部の幅は、およそ33 cmほどで、背面側端に、幅11 cm程の浅い溝が確認できた。また、背面から見て左側面から約30 cm 迄は、この溝は彫られていない。

石材 E42 (Pl.18-b,53-a)

石材 E42 は、アーキトレヴとフリーズが一体となった石材で、石材の寸法は、高さは75.8 cm、長さは241.3 cmである。この石材も神殿祭壇東側に埋まっていたものであり、石材の背面はかなり風化破損しているものと思われるものの、正面側は細部まで良く残っている。

ファスキア上部のモールディングは、フィレットに下にシマ・レヴェルサが付けられている。フィレット正面は僅かに上方に向かって傾斜しており、フリーズ上部には高さ43 mm程のフレットが配され、その下は抉られた感じの曲面となっている。多分、フリーズ全体がカヴェット状に造形され、その面に装飾の彫刻が施されているという形式であったと推測できる。フリースの装飾は、左右に縦半分の牛頭骨が配され（左側の牛頭骨部分は破損しているが、丁度牛頭骨縦半分が施されるのに適当なスペースとなっている）、牛頭骨と聖盃が5パターン繰り返えされて、花綱装飾によって繋がれるという、一般的なものとなっている。

側面、特に正面から見て左側の側面では、正面側の端10～13 cm程、带状に平らに仕上げられている。

また、側面の下方端部も同様な仕上げとなっており、残りの部分は先の円い鑿で粗く仕上げられている。

上面はほぼ平らに仕上げられるが、正面側の端から 75 mm 辺りまで、4 mm 程の深さで削られている。上面の左右端には長方形のクランプ穴が彫られている。その寸法は正面から見て右側が、幅が 10 cm、長さが 12 cm、深さが 6 cm 程で、左側では幅が 8 cm、長さ 14 cm、深さが 6 cm 程度となっているが、左側のクランプでは彫り込みが底面まで達していない部分がある。上面にはこの他 7 個の穴が刻まれている。その内、クランプ穴を除き、左から 2 番目と、右側面に最も近い位置にある穴は、その形状からバール穴と推測できるが、他の穴はその目的を推測することが困難である。尚、バール穴間の距離は約 1.22 m で、コーニス石材の大きさを示していると考えられる。尚、この石材においても、石材 E41 と同様、石材を吊り上げるのに用いたと思われる穴は確認できない。

背面の残存状況は良好ではないが、背面から見て左端から 20 cm 辺り、底面から 52 cm 程の高さの位置にクランプ穴が穿たれている。この穴より更に右側へ寄った所にもう一つ、クランプ穴らしきものがある。一方、右側のクランプ穴が在りそうな箇所は、石材が破損しており、確認できない。

石材 E25 (Pl.16,52-a)

石材 E25 は、アーキトレヴとフリーズが一体となった石材ではあるが、他のものと異なりかなり変わった石材である。先ず、他のアーキトレヴ・フリーズ部材は、ポロス（砂質石灰岩）で作られているが、この E25 の石材の材質は、基壇に使用されている石灰岩に類似している。また、石材は幅がおおよそ 21 cm と薄い。背面は緩やかではあるが歪な曲面となっており、剥離した可能性もあるが、正面から見て右の側面には上下 2 カ所に背後の石材と繋ぐためのクランプが存在している。石材の長さは 90 cm 弱であるが、正面から見て左側が欠けている。高さは 77.4 cm 余りと、ポロス製の他の同種の石材より 15 ～ 20 mm 程高くなっている。

アーキトレヴ部には 3 段のファスキアとその上部のモールディングが見られるが、モールディングのフィレット部分の下面は、斜めに直線的に彫り込まれているだけである。フリーズ部分の左端には牛頭骨と判別できる彫刻が見られ、その右側には聖盃と下部と思える円の一部、更にその右側には牛頭骨の鼻下に巡らされる花綱装飾の輪郭が確認できる。左端の牛頭骨から石材の右端までの距離は約 95.5 cm で、その中間に花綱装飾の中心が配される。即ち、石材の右端には牛頭骨縦半分が彫刻され、牛頭骨の中心間距離は 47.8 cm であったことが判る。牛頭骨や聖盃の背面は、曲面ではなく平らな面として仕上げられている。

この石材は、背面が剥離した後、クランプ等で修復されたものと考えられる。従って、実際柱頭上部に乘せられ、ストアのアーキトレヴ・フリーズ部材として使用されていたとは考えにくい。また、モールディング等がかなり簡略化して彫刻してあること考慮すれば、装飾のスタンダードを示すものとも考えられない。従って唯一残る可能性は、各部の寸法を示すスタンダードという解釈であるように思える。

石材 E36 (Pl.17,52-b)

石材 E36 は、アーキトレヴとフリーズが一体となった石材ではある。高さは 75.6 cm、幅は最大で 38.4 cm、石材の正面から見て左側は欠けて無くなっており、残存する部分での長さはおおよそ 169 cm である。風化が激しく石材の表面はかなり荒れているが、装飾のおおよその形状は確認できる。

この石材は、他の石材と同じ装飾が施されており、正面から見てフリーズの右端には縦半分の牛頭骨が配されていたと見えるが、フリーズ部の牛頭骨と聖盃の間隔が他と大きく異なっている。他の石材における牛頭骨の心々間距離は 480 ～ 485 mm 程であるが、この石材の牛頭骨の心々間距離（ここでは、聖盃の中央にある半球状突起の中心間距離を計測した）は、約 59.3 cm であった。一方、石材上面には正面から見て右側の端から約 1.22 m の位置に石材を吊り上げるために使用された穴が彫られている。このような穴は本来の石材の中央辺りに穿たれることが多いことを鑑みれば、この石材も通常の石材と同じくおよそ 2.4 m 程の長さがあったと思われる。石材長さの 2.4 m を 4 で除すと 0.60 m となり、この石材の牛頭骨間に近い寸法となることから、この石材のフリーズ装飾は、左右両端に縦半分の牛頭骨が配され、牛頭骨と聖盃の装飾が、通常の 5 パターンではなく、4 パターン施されていたと推測することができる。

上面の吊具を差し込むための穴の近くには、深さが 4.5 cm ほどの穴が彫られているが、多分、ボール穴だと推測される。ただ、石材上面の右端には、隣の石材と緊結するためのクランプ穴の痕跡は見あたらない。同様に、背面において、バッカーと繋ぐためのクランプ穴も、残存している側面近くには確認できなかった。ただ、背面の、残存する側面側から約 70 cm、底面から 53 cm 辺りに、およそ 4 cm 正方の穴が穿たれていた。しかし、この穴の形状は、他のアーキトレヴ・フリーズ部材に見られるクランプ穴とは形状が異なっている。尚、底面には、背面側の端に沿って幅 65 mm 程で深さが約 1 cm の帯状の彫り込みが確認できた。

石材 E46 (Pl.53-b)

E46 の石材はアーキトレヴ・フリーズ石材で、その高さは約 76.5 cm である。また、フリーズ部分には牛頭骨、聖盃、花綱装飾が施されている。しかし、その牛頭骨の形状が、顔の幅が広く、鼻筋の線が深い、また、眼窩の縁が太いなど、他と異なっている。特に他と異なるのは、牛頭骨、聖盃の位置である。

石材 E46 では、正面から見て右側面が残存しており、フリーズの右端部には縦半分の牛頭骨ではなく、1 個全体の牛頭骨が配されている。この石材は正面から見て左側が欠損しており、その長さは約 1.66 m である。そのフリーズ部分には牛頭骨 4 個、聖盃 3 個が並んであるが、牛頭骨・聖盃の 1 パターンの間隔（牛頭骨の中心間距離、若しくは聖盃の中心間距離）は、45 ～ 54 cm の間でまちまちである。

本来の石材の長さを、心々柱間寸法の約 2.40 m とすれば、この石材の欠損部分の長さは約 74 cm となる。これを通常の牛頭骨の中心間距離、約 48 cm で割れば、1.54 と算出される。即ち欠損部分には、正面から見て右から聖盃、牛頭骨と 1 パターン配せられ、最後に聖盃 1 個が彫刻されていたと考えられる。

石材 E47 は、石材 E46 に極めてよく似ている。牛頭骨の彫刻がよく似ている。また、この石材は正面から見て左端部は残存しており、右側が欠損しているが、左端のフリーズ装飾は聖盃 1 個が配されている。

石材 E22、E23、E24（これらは一つのアーキトレヴ・フリーズ部材の断片であると考えられる）の牛頭骨の姿は、石材 E46、E47 のものと類似している。しかし、これら石材の牛頭骨間の中心距離はおおよそ 48 cm と通常のものと同じである。また、石材 E22 の正面から見て左側は、その側面が残存しており、フリーズの左端には牛頭骨の縦半分が彫刻されている。

製材 E46 及び E47 以外に、フリーズ端の装飾が縦半分の牛頭骨でないものが幾つかある。石材 E39 では正面から見て左端が残存しているが、牛頭骨の左の角の部分欠くものの、ほぼ 1 個の牛頭骨が彫刻されている。また、E37 の石材ではフリーズの右端部が残っており、底には牛頭骨の左側、1/2 ではなく、1/3 程度しか彫刻されていない。また、石材 E45 では、左端部分が残存しているが、フリーズ左端には右の角と下方へ垂れ下がる紐飾りだけが彫刻されている。

石材 A01 (Pl.19, 53-c)

石材 A01 は、所謂バックカーである。石材の正面から見て右側は破損している。残存部の石材の長さは約 1.20 m、石材の高さは 53.5 cm、最大幅は 35.3 cm である。この石材の右には、石材 A14 が繋がると考えられるが、その右側も破損しており、このバックカーの本来の全長は不明である。

バックカーも外側のアーキトレヴ・フリーズ部材と同様、アーキトレヴ部分とフリーズ部分で構成される。アーキトレヴ部分には 3 段のファスキアが施され、その上部にシマ・レヴェルサとフィレットのモールディングが施される。フィレット上面は、左端近くの 10 cm 程は水平に彫り込まれるが、他の部分は斜め上方に傾斜を付けて彫られている。

フリーズ部分は、上面端にモールディングを有する、大きなカヴェットとして形成されている。過別途上部には 1 cm 未満のフィレットが配され、オヴォロのモールディングが、バックカー石材上端部に形成されている。即ち、アーキトレヴ及びモールディングのプロフィールの造形は、外側のアーキトレヴ・フリーズ部材の場合と全く同一であると考えられる。

石材の上面は、正面から 5～6 cm 程が平坦に仕上げられ、その後方は先端が丸い鑿で若干粗く仕上げられている。この石材は左端部は残存しており、上面の左端より 30 cm 程が、他の上面部より約 2 cm、高くなっている。これは、ストアの横断梁を乗せるための座床であると推測される。また、上面左端には幅が 7.4 cm 程で、長さがおおよそ 10 cm、深さが 6～8 cm のクランプ穴が穿たれている。また、上面左端よりおおよそ 20 cm の位置には、3 cm 四方くらいの穴が穿たれ、その穴から上面奥に向かって溝が彫られていたように見える。これはバックカーと外側のアーキトレヴ・フリーズ部材を繋ぐクランプを埋め込むための穴、即ちクランプ穴であると考えられる。上面の左端から 30 cm 及び 35 cm 程の所にバール穴と覚しき浅い穴が、連続して 2 個、彫つてある。

石材 A01 の上面右端部には、石材の長手方向に平行した長方形の穴があり、石材 A14 の上面左端にはこれに続く長方形の穴が確認できる。この穴の長さは、石材 A01 と A14 の併せて 10 cm 程で、幅

は 3.6 cm、深さは約 9 cm で、穴の底部が若干広がっている。また、この穴はバッカー石材の本来の中央部に位置していることもあり、石材を吊り上げる際に用いられた穴であることが推測できる。

石材の左側面には、上端と正面側の端部は、5～7 cm 程の幅で平らに仕上げられており、所謂アナシロシスが形成されている。背面も下端部の 10 cm 程に同様の仕上げが見える。背面の上部にもいくらは平らにされた部分が確認できるが、明確ではない。底面は、おおよそ平らに仕上げられているが、背面側端部には、幅 82 mm、深さ 13 mm ほど、帯状に彫り込まれている。ただし、左端部に近い 27 cm 程には、この帯状彫り込みは見られなかった。

石材 A02 (Pl.20,54-a)

石材 A02 は、中央部で割れているバッカーである。割れた二つの断片を合わせて、残存部の石材の長さ約 1.63 m、高さは 52.2 cm で、最大幅は 36.7 cm と実測された。正面から見て、石材の右側は欠損しているが、左端部は残存している。

正面のアーキトレヴ部分には、3 段のファスキア、その上部にシマ・レヴェルサ、最頂部のフィレットのモールディングが施されているのが判別できる。ただ、シマ・レヴェルサはカヴェットと見えなことはないが、他のバッカーのモールディングや、外側のアーキトレヴ・フリーズ部材のモールディングとの類似性を考慮すれば、やはり、シマ・レヴェルサと考えた方がよいように思える。

フィレット上面は斜め上に傾斜して彫り込まれており、フリーズ部分には、カヴェットの大きな曲面上部に、フィレットとオヴォロのモールディングとして造形されている。尚、最頂部のオヴォロは、先端部分が殆ど欠けており、明確ではない。

関材上面は、ほぼ平坦に仕上げられており、丸鑿で粗してあるのが確認できる。また、上面の左端から 30 cm 程まで、石材上面から 12 mm ほど高く盛り上げて、横断梁の座床が形成されている。上面左端にはクランプ穴が彫られているのは判るが、破損しており、明確ではない。また、左端から約 25 cm の所におよそ 3 cm 四方の四角い穴が、座床上面から 8 cm 程の深さまで穿たれている。この穴から穴とほぼ同じ幅で、3 cm ほどの深さの溝が、背面に向かって彫られている。これは、バッカーと外側のアーキトレヴ・フリーズ部材を繋ぐクランプを埋め込んだ穴であると考えられる。この石材は、本来のバッカーの長さの 1/2 以上残存しているが、上面に石材を吊り上げる際に使用された穴は存在していない。

左側面は、面の中程が残存しているのみある。また、背面はほぼ平らではあるが、表面は鑿で粗されたか、風化している。底面は平らに仕上げられ、背面側の端部に幅 75 mm、深さ 12 mm の帯状の溝が彫られている。ただし、左端から 32 cm ほどは、この帯状溝は彫られていない。

石材 A08 (Pl.22-a,54-b)

石材 A02 はバッカーであるが、石材の右側とフリーズ部分の上部が大きく破損している。この石材の長手方向、ファスキアが施された面を正面とすれば、左側面にもファスキアが作られており、入り隅部を形成するバッカー隅部材であることが判る。

上記したように、この石材のアーキトレヴ部分には3段のファスキアが見られ、その上部のモールディングも残存している。ただ、モールディングの残存状況は良好ではなく、厳密なことは言えないが、石材 A01 と類似したものであったことが推測できる。モールディング上面は水平に彫り込まれ、その上面からフリーズが立ち上がる。フリーズは大きく破損しており、その形状を確認することはできない。

この石材の正面と左側面形成される角の上部は、階段状に欠けている。欠けた面の下段は、明らかに石材が割れてできた面であるが、欠けた面の上段上面には丸鑿の痕と思われる穴が複数見られ、意図的に削り落とされたものと考えられる。これが意図的に作り出された形であるならば、この面は、ストアの入り隅部斜め 45 度方向に渡された梁を乗せるために作り出されたものであろう。また、この面は入り隅部に向かって僅かに下方に傾斜しているように見える。その先端は、アーキトレヴ頂部のモールディング上面辺りまで下げられているように見える。

石材 A04 (Pl.21,54-c)

石材 A02 はバッカーであるが、石材の材質がポロスではなく石灰岩である。石材の寸法は、高さが 51.4 cm、最大幅が約 36.9 cm、長さがおおよそ 143 cm であるが、石材の左右共に破損しており、本来の長さは不明である。

アーキトレヴ部分には3段のファスキアの上にモールディングが施されている。モールディングはかなりの部分破損しており、残存しているのは付け根の部分のみである。しかし、その部分からも、モールディング下部は、ファスキアの垂直な面から 6 mm 程水平に出され、そこから斜め上方に直線的に突き出されていたことが判る。謂わば、他のバッカーに見られるシマ・レヴェルサのモールディングを刻む、前段階の状態が形作られていたと推測される。フリーズ部分も上方が大きく破損しているが、その正面部分は幾分曲面的に仕上げられており、フリーズ部分の他のバッカーと同じように、カヴェットのプロフィールとなっていたと思われる。

石材の上面は、正面側が破損しているものの、背面側の半分は残存している。その部分はおおよそ平らに作られてはいるが、表面は粗く仕上げられている。また、上面右端部分に近い約 25 cm 辺りまでが 7 mm ほど高くなっており、横断梁の座床が作り出されている。上面の右端から 90 cm の所には、石材の長手方向に対して垂直な長方形平面の穴が穿たれる。その穴の幅は約 4 cm、長さは 14 cm ほどで、深さはおおよそ 9 cm で、底面側に広がっているため、石材を吊り上げる際に使用された穴であることが判る。バッカー上面の座床が、他の石材の座床と同じく、端から 30 cm 辺りまで形成されていると仮定すると、吊具を装填する穴の位置は、石材の端から約 95 cm 辺りの位置にあったと推測できる。本来の石材の長さが心々柱間寸法と同じであったとすれば、この穴は石材の中心から 25 cm 程ずれていることになる。石材の底面には幅が約 8 cm、深がは 1 cm 程の溝が、背面側の沿って帯状に彫られている。また、背面は底部に近い 5 cm 程が平らに仕上げられている。

この石材の形状や各部の寸法は、他のバッカーと類似しているが、石材の素材の相違やモールディングの状態などから、実際のバッカーとして、ストアに使用されたものとは考えがたい。

石材 G01 (Pl.22-b,55-a)

石材 G01 はコーニス石材である。石材の背面は大きく欠損しているが、左右両側面、及び正面は残存している。石材の長さは約 87.3 cm、高さの最大値は 35.3 cm、奥行き方向の残存部最大幅は 53.7 cm である。

正面最下部にはモールディングがあるが、オヴォロと言うより、四角い断面の端のみに丸みを付けてあるような形状となっている。その上にはデンティルが配され、デンティルの底面の長さは 10.3 cm、高さは 9.4 cm 程度である。デンティルの歯部の幅は約 7.1 cm、その間の溝の幅がおおよそ 2.9 cm となってるが、左右端のデンティルの幅だけは約 5 cm、或いは 6 cm と狭くなっている。

デンティル上方にはモールディングがあるが、多分キマ・レヴェルサであり、その先にコロナが付けられるが、突き出て垂れ下がる部分は破損しており、その形状はつかめない。尚、シマ・レヴェルサの一部にはスタッコが残っており、コーニス部材がスタッコ塗により最終的な仕上げとなっていたことが分かる。

底面は、正面端から 20 cm 程しか残っていないが、比較的平らに仕上げられていたと思われる。側面の表面も風化して、仕上げの状況は判別しがたいが、正面から見て左側面部の正面側端の部分が平らに仕上げられ、その他の部分は鑿で粗されていたことが判る。

石材 G05 (Pl.23-a,55-b)

石材 G05 は、コーニス石材である。正面から見て左側と後方が大きく欠けており、石材の横方向の長さは約 60 cm、奥行きの幅はおおよそ 50 cm、高さは 27 cm 程である。

石材の底部には、高さ 24 mm のオヴォロのようなプロフィールのモールディングが僅かに見て取れ、その上に高さ 96 mm、正面から見た幅が 62 mm 程のデンティルが施されている。デンティルの溝の部分は、幅が 26 mm 程で、歯の部分の底面から上面へ向けて斜めに、且つ平らに彫られ、歯部の側面は直角二等辺三角形に近い形状を呈している。溝の表面には、特に多数の丸鑿を当てた痕跡が見られる。また、デンティルの正面や底面には、水平な線となった丸鑿の痕が見られる。

デンティルの上から、水平に突き出されたフィレットが形成され、その上にオヴォロのようなモールディングが施される。そこからコロナが施される。突き出されるコロナの下面は基本的にはトンネル状に削り貫かれ、その外側先端は大きく下に垂れ下げられる。コロナの垂れ下がった先端は、多分、幅 2 cm 程の平らな面として仕上げられたと思われる。コロナの正面は垂直な平面として仕上げられ、頂部には、欠けており明確ではないが、多分、オヴォロが施されていると推測される。

石材の右側面は、石材の縁部が平らに仕上げられ、その内側は粗されているように見える。他の面は、破損や風化のため、明確なことは不明である。

石材 G11 (Pl.24,55-c,d)

石材 G11 は、コーニス石材である。石材の表面は風化が激しく、細部や仕上げは判別しにくい、その全長が残存している石材である。石材の長さは 1.223 m、石材の奥行き方向の幅は、最大で 0.735 m、

高さは 0.396 m と実測された。

正面においては、シマ・レヴェルサ、若しくはオヴォロ＋フィレットのモールディングの下に、デンティル装飾が施されているが、歯の間の溝の造形は G05 の石材のそれと類似している。

上面においては、石材の左端に幅が 7 cm、長さが 13 cm、深さが 9 cm 程のクランプ穴が彫り込まれている。同じく、右端には幅が 6 cm、長さが 9 cm、深さが 9 cm 程度のクランプ穴が見られる。また、石材上面のおおよそ中央辺りに、奥行き方向に長い長方形の穴が穿たれている。穴の幅は約 4 cm、長さが 6.5 cm、深さが 14 cm 程であるが、穴の底ほど広がっているため、吊具を差し込むための穴であると思われる。

石材の背面には、側面から約 35 cm、底面の正面側端から 36 cm 程に、垂直に削り落とされた面が残っている。この底面に残存している 36 cm という幅は、アーキトレヴ底面幅に類似している。従って、この造作は、バッカー上部に配された木製の横断梁のためのスペースを作り出すために削り取られた箇所であると推測される。尚、底面のはダボ穴はなく、コーニス石材は、フリーズの上に単純に置かれていたことを示している。

石材 G12 (Pl.25,56-a,b)

石材 G12 は、コーニス石材である。石材の表面は風化によりかなり荒れているものの、コーニス石材のほぼ全体像が残存している。正面側にはデンティルや先端上部のコロナ、最上部のオヴォロのモールディング等の存在が確認できる。

石材の両側面は、その表面仕上げを判別することはできないが、左右両端とも破損してはおらず、石材の長さがおおよそ 1.12 m であったことが判る。この寸法は石材 G11 の長さと同様であり、心々柱間寸法のほぼ 1/2 である。

石材上面のほぼ中央には、石材 G11 と同様、石材の奥行き方向に長い、長方形の穴が彫られている。その幅は 45 mm、長さは 85 mm で、深さは 14 ～ 15 cm 程で、底部が広がっており、石材を吊り上げる際に使用された穴であることが判る。背面の上端には、垂木を設置するための彫り込みが 3 カ所ある。この彫り込みから推測して、石材底面からおおよそ 30 cm の高さの位置、デンティルの付け根から 60 cm ほど奥の部分に、垂木は架けられたようである。彫り込みは非常に粗く仕上げられているようで、ここから垂木の正確な形状を知ることはできない。しかし、大まかには垂木の幅は 16 ～ 19 cm、高さは 17 ～ 18 cm ほどで、垂木の心々間寸法は 40 cm 程度とされ、設置されていたと推測できる。

底面はデンティルの下にあるモールディングを含めて、約 65 cm の幅があり、アーキトレヴ・フリーズ石材の背面へ大きく張り出していたことが判る。この石材には、石材 G11 に見られたような、背面の切り込みは無い。また、底面にはダボ穴が無いのは、石材 G11 と同じである。

石材 G13 (Pl.23-b,56-c)

石材 G13 は、コーニス石材である。正面から見て左側と背面は大きく欠損しているが、正面部分は細部まで良好に残存している石材である。石材の最下部にはオヴォロ状のモールディングが施され、

丸みを帯びた表面には鑿痕も残存している。モールディングは底面から約 4 cm 突き出され、高さはおよそ 3 cm である。その上部にはデンティルが施される。デンティルの歯の幅は、7 cm、歯間の溝の幅は 3.3 cm、デンティル底面の長さが 8.5 cm で高さが 8 cm である。溝は石材 G05 や G11 と同じように、斜めに平らに彫られるが、デンティルの上端から 1 cm 程奥の部分に向かって彫られ、そこから水平となる。デンティルの上には、幅 1.4 cm のフィレットが付き、その上方に、緩い曲線のシマ・レヴェルサのモールディングが施される。その手間へ向けてコロナが彫り出されるが、内側上面の曲線が極めて緩やかで浅い。コロナの垂れた先端は幅が 2.5 cm 程の平らな面となり、その正面はほぼ垂直に立ち上げられた高さ 11 cm 程の平らな面として作られる。その頂部、所謂コーニスの頂部には高さ 6.2 cm のオヴォロのモールディングが施される。

残存している右側面では、正面側端部に 2～3 cm 程の幅で先端が小さな鑿で平らに仕上げられた帯が配され、その他の部分は大きく粗した仕上げとなっている。

石材 G15 (Pl.27,57-a,b)

石材 G15 は、コーニス石材である。神殿の祭壇東側に埋まっていた石材の一つで、残存状況が非常に良好である。石材は二つに割れてはいるが、背面以外はおおよそ本来の形で残存している。石材の正面から見て横方向の長さは、1.103 m で心々柱間寸法のほぼ 1/2 である。奥行き方向の幅の最大値は 88.2 cm、高さの最大値は 45.2 cm である。

正面最下部にはオヴォロのモールディングが施され、その高さは 5 cm、底面から 3.7 cm 突き出している。モールディングは、G05 に比べれば若干丸みが少なく、より直線的である。その上部には高さが 10.4 cm、歯の底面の長さは 9.0 cm、歯の間の溝は、デンティルの葉の底面付け根から上面付け根まで直線的に彫られている。歯は 9 個作られており、その幅の平均値は 80.7 cm、歯の間の溝は 3.8 cm で 10 個ある。その上には、明らかにシマ・レヴェルサのモールディングが施され、水平方向に 3 cm 突き出され、その高さはおおよそ 5 cm である。その手前がわにコロナが施されるが、石材 C13 に似て、内側上面の曲線が緩やかで浅い。垂れ下がった先端部分は幅 2.7 cm の平らな面となり、正面の垂直で平らな面の高さは 12.6 cm、シマ・レヴェルサから 8.5 cm 突き出される。その上部、コーニス正面の頂部にはオヴォロのモールディングが施され、コロナの垂直な面から 2 cm 突き出され、高さは 2.6 cm である。ただ、このオヴォロも丸みは少なく、直線的なプロフィールとなっている。

底面は全面が一様に平らに仕上げられている。側面は正面側の端部の 2～3 cm 程が平らに上げられ、その他は粗く仕上げられる。また、底面にはグボ穴などは一切見られない。

石材の背面には、正面から見て左側面から約 30 cm、底面の正面側端からおおよそ 25 cm の所に、垂直に削り落とされた面が見られる。石材 G11 と同じく、横断梁のためのスペースが作られているものと考えられる。

石材 G17 (Pl.28)

石材 G17 は、コーニス石材である。入り隅部に設置された石材であり、神殿の建つ中庭側からみて

入り隅部の右側を構成するものであったことは、その形状から明らかである。

石材 G17 は、通常のコーニス石材を正面から見て、左側を斜め 45 度方向に切断した形状となっている。正面側には、最下部に高さ及び底面からの突き出しや高さが約 3 cm のオヴォロのモールディングが配せられており、モールディングの断面は、緩やかな丸みが付けられたものとなっている。モールディングの最下端は約 15 cm まで作られ、その先左側が切り落とされている。

オヴォロの上にはデンティル装飾が配せられる。デンティルには 3 個の歯飾りが付けられるが、その幅は、右から 7.4 cm、6.7 cm、6.0 cm と様々である。また斜め切断部側に配される歯飾りは、入り隅部分側へ向けてその付け根の部分が広がっている。歯飾りの底面は約 9 cm、高さはおよそ 10 cm、歯の間の溝の幅は、右から 3.2 cm、3.5 cm、3.8 cm となっている。

デンティル上部のモールディングは、辛うじてシマ・レヴェルサであることが確認できた。その先のコロナは、先端部分が殆ど破損しており、その形状を推測することはできない。コーニスに最頂部にはオヴォロのモールディングがあったと推測できるが、その断面形状は余り丸みを帯びておらず、かなり直線的であった。なお、石材底面から頂部のオヴォロ先端までの高さは 26.9 cm と実測できた。モールディングの断面は余り丸みが無く、下面はかなり直線的である。

底面は平らではあるものの、面は鑿で粗されて仕上げられている。側面は、右側面も斜めに切り落とされている面も、正面側の端部分を除き大きく荒らされている。正面側の端は総じて平らに仕上げられるが、特に、右側面においては正面端から 10 cm 程の所まで先端の細い鑿で仕上げられた痕跡が確認できた。

上面のほぼ中央には、正面と平行に 3 cm × 10 cm 程の長方形の穴が穿たれ、穴の深さは 14 cm 程であるが、底に向かって若干広がっており、石材を吊り上げるのに用いられた穴であると考えられる。上面の斜めに切断された側面側には、長さが 15 cm 程のクランプ穴が開けられる。クランプ穴の深さは約 5 cm と深く、幅は側面部端で 5 cm 程、中央よりの箇所約 8 cm と、ダブ・テール型となっている。

上面の背面側端部には、垂木を挿したと思われる切り込みが 2 つある。その内一つは幅が約 18 cm 程度と実測できた。また、切り込みは、隣の切り込みと約 22 cm の間を開けて施されており、垂木の間隔が心々間でおおよそ 40 cm であることを示唆している。

石材 G16 (Pl.26-b,57-c,d)、参考：石材 G14 (Pl.26-a,56-d,e)

石材 G16 は、コーニス石材である。この石材は神殿西側に埋まっていた石材で、石材正面の長さは約 706 cm、奥行き方向の幅は 73.3 cm、高さは 32.5 cm 程である。

コーニス石材ではあるものの、石材上面には 3 段のファスキアとファスキア上部のモールディング、その上には牛頭骨の鼻先の部分や聖盃の一部、花綱装飾の一部が見られ、元来、アーキトレヴ・フリーズ部材であったことが判る。中央段のファスキアの高さは約 13.7 cm、上段のファスキアの高さが 14.7 cm と、他のアーキトレヴ・フリーズ部材のファスキア寸法の平均値と比べれば幾分大きいようだが、類似した寸法のものもある。また、石材 G14 もコーニス部材ではあるものの、その上面に 3 段のファスキアが残存している。中央段のファスキアの高さは約 11.4 cm、上段のファスキアの高さ

が 12.9 cm と、他のアーキトレヴ・フリーズ部材のファスキア寸法の平均値と比べれば、石材 G16 の場合と逆に幾分小さいようだ。何れにしろ、どちらも元来アーキトレヴ・フリーズ部材として使用されていたものが、何らかの理由でコーニス部材として作り直されたものであると考えられる。

石材 G16 の正面側の造形は、下からオヴォロのモールディング、デンティル、シマ・レヴェルサのモールディングと施され、コロナが突き出されている等、他のコーニス部材と変わらない。また、その各部寸法も他のコーニス部材と大きく異なるものではない。

石材の左側面は残存しているが、その状況は良好ではなく、底面端の一部に平らに仕上げられた箇所が確認できるのみである。側面の正面側の端部は破損しており、他の部分は粗く仕上げられているようだ。尚、石材の右側は欠損している。

上面の左端部、残存する上部ファスキアの部分に、幅が約 4.3 cm、長さが 17 cm、深さが 4 cm 程の溝がある。クランプ穴であることは間違いないが、他のコーニス部材のクランプ穴に比べれば、狭く浅い溝となっている。石材上面の背面端、且つ左端部に幅 22 cm 程の切り込みがあり、垂木を差し込んだ穴と考えられる。石材の右側にも類似した切り込みがあり、その間隔は 35 cm ほど開いている。

注：

- 1) 後に同じ部材と判明したものも多くある。
- 2) バッカー両端の上面の突き上がった部分を含めると、バッカーの高さは 0.522 m となり、アーキトレヴ・フリーズ部材との高さの差は 0.325 m となる。
- 3) 背面部材のファスキアやモールディングの高さを、正面部材のアーキトレヴ分高さに対する比を用いて長さを算出し、実測値の平均値との差をみれば、下より順に、0.000 m、0.001 m、-0.003 m、0.000 m となる。尚、この計算をする際、石材 A04 のアーキトレヴ部分最上部のモールディング高さを、その平均値の 0.042 m として、アーキトレヴ高さを算出し、計算式に加えた (Table 21)。
- 4) アーキトレヴ・フリーズ部材 (E41) には、穴に金属 (多分、鉛) が残っている。正面部材に水平に差し込まれたクランプは、鉛で隙間を埋められ固定されていたと考えられる。実測した正面部材のクランプ穴の位置は、底面から平均 0.486 m (0.45 ~ 0.53 m) で、一方、背面部材のクランプ穴の位置は、底面から平均で 0.496 m (0.489 m、0.502 m) である。
- 5) 石材 E08 のアーキトレヴ・フリーズ部材上面には、端からおよそ 28 cm の所を長辺の中心として、長さが約 8 cm、幅は約 2.5 cm、深さは 10 cm 以上はある穴がある。石材 E16 のアーキトレヴ・フリーズ部材上面には、端から 1.24 m 辺りを中心とする長さが約 6.5 cm、幅が約 2.5 cm、深さが約 7 cm の穴が開けられている。また、石材 E36 のアーキトレヴ・フリーズ部材上面の端からおよそ 1.2 m あたりを長辺の中心として、長さ約 13 cm、幅は約 4 cm、深さは約 12 cm ほどの穴がある。これらの穴は、深くなるにつれ広がっている。
- 6) 石材 A10 のバッカー上面には、端から約 0.55 m の位置に、長さ約 8 cm、幅が約 3 cm、深さは 8.5 cm 以上はある穴がある。石材 A11 のバッカー上面には、端から約 1.2 m の位置に、長さ約 8 cm、幅がおよそ 4 cm、深さが約 9.5 cm の穴が、また、石材 A14 のバッカー上面には、端からおよそ 1.18 m の位置に、長さ約 10 cm、幅約 3.5 cm、深さ約 9.2 cm の穴がある。これらは、穴の底部が広がっており、石材を吊り上げるのに使用されたものと推測される。
- 7) 牛頭間距離が 0.593 m であるので、これで柱間寸法を除すと、「 $2.409 \text{ m} / 0.593 \text{ m} = 4.062$ 、 $2.423 \text{ m} / 0.593 \text{ m} = 4.086$ 」となり、一柱間に 4 個の牛頭骨彫刻があったことが分かる。
- 8) ギリシア時代の瓦幅は通常 50 ~ 60cm 程度であったと言われている。Coulton, p.153
- 9) P. G. Themelis, "Hellenistic Architectural Terracottas from Messene," *Greek Architectural Terracottas of the Classical and Hellenistic Periods*, Princeton and New Jersey, 1994, pp. 16-165, figs. 20-23, pl. 48-56.

3- 3. ストアの復元

1) 実測調査から直接導き出されるストアの各部寸法

アスクレピオスのストアは、神殿の建つ中庭を囲んで、その四方に一体として建設された。その各部寸法について詳細な実測を行い、各部の復元寸法をそれぞれの平均値として求め、或いはそれらの平均値を使用し計算して求めて、Table 24 ～ Table 26 に纏めた。

ストアの長さは、スタイロベイト上で、東西が 52.409 m、南北が 47.247 m、また、背壁では東西が 71.917 m、南北が 66.824 m となった。ストアの深さは、スタイロベイト端から背壁のトイコベイト端までの距離で、北ストアが 9.774 m、南ストアが 9.776 m、また東ストアが 9.843 m、西ストアは 9.664 m となった。円柱の心々間距離は、南北ストア、東西ストアで若干異なり、南北ストアが 2.432 m、東西ストアは 2.409 m となる。

ストアの外部列柱における基壇は、ユーティンテリアの上に、クレピス、スタイロベイトの 2 段で構成される。クレピスの高さは 0.223 m、踏面幅は 0.234 m、スタイロベイトの高さは 0.202 m である。また、スタイロベイトの上には一辺が 0.860 m、高さが 0.202 m の正方形のプリンスが載せられる。

外部円柱は、アッティカ式のモールディングが施された柱礎と柱身の下部を含む石材と、ドラム 4 個、コリント式の柱頭で構成される。柱身には、通常のコリント式と異なり、20 条のフルーティングが施されている。ただ、フルートは、正面側の 9 本は通常の形式で柱身の下から最上部まで施されるが、内側に向けられる部分の 11 条のフルートは、柱礎を含み、下から約 2 m 程の所までが胡麻柄線形のフルートとなっている。外部柱のコリント式柱頭は、アカンサスの葉が 12 枚、2 段に巡らされ、その上に大きなヴォリュートが四隅に配される。柱頭のヴォリュート間には、翼を有する人形の彫像や植物文様が彫刻される。円柱の高さは実測したドラム石材から算出して、約 5.21 m となった。

ストアの内部柱は礎石の上に載せられた円筒形のプリンス上に立てられる。円筒形プリンスの直径は 0.900 m、高さは 0.265 m である。内部柱も、アッティカ式のモールディングが施された柱礎と柱身の下部を含む石材と、ドラム 4 個、コリント式の柱頭で構成される。柱身には、外部柱と同じく 20 条のフルーティングが施されているが、柱礎を含み、下から 2.05 m 程の所までは胡麻柄線形の、それ以上は通常のフルートとなっている。内部柱頭は外部柱頭よりも縦長の形状のコリント式で、外部柱頭に同じく、アカンサスの葉が 2 段巡らされるが、その数は 8 枚であり、柱頭最上段の四隅には小さなヴォリュートが施される。柱頭正面中央部には、外部柱頭と同じく、翼を有する人形の彫像や植物文様が彫刻される。

円柱の上には、アーキトレヴとフリーズが一体となった部材が乗り、外側と内側の 2 枚で構成される。外側のアーキトレヴ・フリーズの石材高さは 0.757 m、その内アーキトレヴ部分の高さは 0.412 m、フリーズ部分の高さは 0.345 m である。アーキトレヴ部分は、3 段のファスキアが施され、最上部に配されたフィレットでフリーズ部分と区別される。フリーズ部分には牛頭骨と聖盃とが交互に彫刻される。一枚のフリーズには牛頭骨と聖盃が 5 パターン並べられ、端には牛頭骨半分が配されて、隣に設置される牛頭骨に連続する。

内側のアーキトレヴ・フリーズ部材（バッカー）の高さは、0.509 m と、外側のアーキトレヴ・フリーズ石材に比べて背が低い。バッカーのアーキトレヴ部分の高さは 0.300 m、フリーズ部分の高さは 0.209 m で、アーキトレヴ部分には外側と同じく 3 段のファスキアが施されるが、フリーズ部分には何の彫刻的装飾はなされない。

外側のアーキトレヴ・フリーズ石材上に、デンティルを有するゲイソンが載せられたと考えられ、オーダーの要素としてのコーニス部分の高さは 0.292 m となる。また、ゲイソン底面に対する上面の傾斜角は、18/100 であり、これを屋根勾配と考えた。

ゲイソンの上には、獅子頭の樋口を持つシーマが載せられる。シーマの高さは 0.162 m であった。また、シーマの上部にはパルメット文様のアンテフィックスが載せられている。また、シーマ石材から推測できる屋根瓦の幅は 0.484 m であり、これは心々柱間寸法の 1/5 に相当する¹⁾。従って、屋根瓦のカバータイル先端に置かれたアンテフィックスと、パンタイルの中心につくられた獅子頭の樋口が交互に配されるというパターンが、一柱間上で 5 セット繰り返されることになる。

ストアの背壁内側では、ユーティンテリアの上にトイコベイト、オルソスタットが載せられる。トイコベイトの高さは 0.239 m、オルソスタットの高さは 0.719 m で、オルソスタットは、およそ 1.1 ～ 1.3 m 毎に、幅 4 cm 程度の縦目地が切られている。オルソスタットの上には、高さ約 16 cm のフリーズ部分を持つ石材が置かれ、その上には粗く表面が削られた切石が積み上げられている。正層積みの切石表面はスタッコが塗られ仕上げられる。

ストアの床は、土を突き固めたものであると推測される。その床面が、外部スタイロベイト上面、内部柱礎石上面、背壁ユーティンテリア上面にほぼ一致すると考えられるので、床面そのものが背壁側から外部列柱に向かって傾斜していることになる。外部列柱のスタイロベイトの上面を基準（0 m）とし、内部柱礎石上面の相対高さは 0.062 m、背壁ユーティンテリアの相対高さは 0.126 m であった（Pl. 32-a）。

以上が、実測から判明した各部の状況であり、また、各部寸法の復元値となる。この復元値を用いて描いたオーダー復元図を Pl.33-a に示す。ただ、円柱高さについては、一本の円柱の高さを示す遺構は存在せず、極めて曖昧な推測であると言わざるを得ない。次節以降においては、屋根架構を復元しつつ、円柱高さの復元を試みる。

2) 遺構と部材に残された小屋組の痕跡からの木製部材の復元

屋根は通常木造の小屋組によって構成され、そのため、架構部材が残存することはない。しかし、架構木材を設置するための切り込みなどが石材に残る場合も多い。アスクレピオスのストアにおいても、手がかりとなる石材への切り込みが残っている。

まず、ゲイソンの背面には、垂木が差し込まれていたと思われる切り込みが残っている。2 例の実測から、垂木の幅は約 0.16 ～ 0.19 m、垂木の心々間距離は約 0.40 ～ 0.45 m、また高さは約 0.15 ～ 0.19 m の間に収まる寸法と推測した。一方、シーマ石材から推測できる屋根瓦の幅は 0.484 m であり、心々柱間寸法の 1/5 に相当する。屋根瓦が 2 本の垂木に渡されて葺かれたとすれば、一柱間上に垂木は 5

本渡され、垂木の中心間の距離は、南北ストアで 0.485 m、東西ストアでは 0.481 m となり、実測値と 3 ～ 8 cm の違いがある。垂木の心々間距離が 2 つの事例のゲイソンからの実測値であり不確かではあるとしても、この差は大きすぎる。従って、屋根瓦は直接垂木の上に渡されるのではなく、垂木と屋根瓦の間には、野地板などが張られたと推測した²⁾。垂木を設置するためのゲイソンへの切り込みの高さは約 0.15 ～ 0.19 m 程しかないので、野地板の上に土などを載せる余裕はないし、瓦屋根の形式がコリント式であるので、土は必要ないと考えられる。従って、約 0.17 ～ 0.19 m の切り込み内に、野地板と垂木が納められたと考えた。また、垂木を載せた切り込みの上部はコーニス上面に面しており、垂木のすぐ上にシーマが乗っていた。この切り込みの底面はコーニスの上面とほぼ平行なので、垂木はコーニス上面とほぼ同じ角度で傾いていたと考えられる。

垂木の断面寸法は 15 ～ 19 cm 正程度であるから、垂木のみで屋根瓦を支えたとは思えない。当然、垂木を支えるための母屋、及び母屋を支えるための横断梁が存在していたと考えられる。アーキトレヴ・フリーズ部材は、2 枚で構成され、外側と内側の部材でその高さがことになっており、高さの差は 0.235 m であった³⁾。これは内側に置かれるアーキトレヴ・フリーズ部材（バックカー）の上に木製の横断梁が載せられたと推測できる。外側のアーキトレヴ・フリーズ部材の上にはゲイソンがバックカー上部に張り出すように載せられる。従って、外側と内側のアーキトレヴ・フリーズ部材の高さの差分が横断梁の梁背のようにも思えるが、約 24 cm とは小さすぎる⁴⁾。

部材の全長が残るゲイソンが 3 例あり、その長さは何れも柱間寸法のほぼ半分であった。その内、G11 と G15 の石材の背面の下部に切り込みのあることを前記した。石材 G11 の切り込みは、コーニス部材の部材正面から約 35 cm の位置に、幅約 40 cm の大きさに切り込まれており、部材の底面から上面まで突き抜けていた (Pl.55-d)。また部材 G15 の切り込みは、コーニス部材正面から約 25 cm の位置に、幅 30 cm の大きさに切り込まれており、やはり部材の底面から上面まで突き抜けていた (Pl.57-a,b)。この切り込みのある位置に梁が置かれたと仮定すると、切り込みのない位置に梁を納めようとした時よりも、梁背を高くすることができる。従って、バックカー上面からコーニスの垂木の切り込みまでの間に、横断梁と母屋桁が納まることになるので、切り込みの寸法から母屋桁の高さを引いた値が、梁高になる。また、横断梁の幅は、切り込みの幅、約 30 ～ 40 cm 程度と推測される。

全長が残る 3 例の内、G12 ゲイソンには上記のような切り込みは見られない。もし横断梁が柱間の 1/2 間隔で架けられたとしたら、G12 にも上記のような切り込みがあるはずである。即ち、横断梁は外部列柱の 1 柱間毎に架けられたと考えられ、この場合は当然円柱上部に梁は載せられる。従って、内側のアーキトレヴ・フリーズ部材、即ちバックカーの両端上面に見られる突き上がった部分は、横断梁を乗せるための座床 (setting bed) であると考えられる。

東ストアの背壁は、エクレスiasステリオンの側壁としてよく残っている。その一部でもあるストア北東隅部に、梁を載せたと思われる斜め 45 度方向の切り込み（幅約 0.45 m）があることを確認した (Pl.32-b,58-d)。この切り込みの相対高さは、外部スタイロベイト上面のレベルを 0 m としたとき、5.939 m であった⁵⁾。また、ストア南東隅からは、外部列柱の入隅に使用されたとと思われるバックカー (A08) が出土し、やはり斜め 45 度の切り込みがあった（幅約 0.35 m、Pl.32-c,54-b）。このバックカーには、通

常であれば隣のバッカーと接合するはず面にファスキアがあることから、南東隅のバッカーであることが分かる。この部材の切り込みは、バッカーの上面を斜め 45 度方向に削り取ったもので、この上に梁の端部が乗っていたと推定でききる⁶⁾。

外部列柱バッカーと背壁の双方に、45 度方向の切り込みが見つかったことから、ストアの隅に平面で斜め 45 度方向の梁が載っていたと考えられ、その梁幅はおよそ 35 ～ 45 cm 程度であったと考えられる。また、この部分の高さは 0.315 m と、通常のバッカー（平均高さ 0.513 m）よりも 0.198 m 低くなっており、その分だけ斜め 45 度方向の梁が、通常の横断梁（列柱のアーキトレーヴに対して直行する梁）より低い位置に据えられていることになる⁷⁾。

3) 小屋組及び円柱高さの復元

クールトンは、アルカイック期からヘレニズム期までのストアの発展過程を追った研究を行っており、小屋組に関しても言及している⁸⁾。クールトンによれば、ストアの屋根の外観には基本的には陸屋根、片流れ、両流れの 3 タイプがあり、また、横断梁を水平に架ける場合とななめに架ける場合、横断梁を用いず垂木のみで屋根瓦の荷重を受ける場合など、様々な事例を示している。

アスクレピオス神域のストアにおいては、ゲイソンの形状から陸屋根はあり得ない。また、ゲイソン背面の垂木を差し込んだと思われる切り込みの寸法から、垂木のみで屋根瓦の荷重を受ける方法も考えにくい。また、ストアの背壁、特に東側のエクレスiasステリオンとの境壁や、北側のセバステイオンとの境壁は、ストアの高さより高くなると考えられる。実際、ストア北東隅の斜め 45 度方向の梁を置いたと思われる箇所が見て取れるが、東ストアの背壁（エクレスiasステリオンとの境壁）は更に高く積み上げられる。もし、ストアの屋根が両流れであったとしたら、背壁と屋根の間に出来る谷間に、雨水が溜まることになる。従って、ストア背壁がストアそのものの高さより高くなる場合の両流れの屋根は、収まりとしては好ましくない。もしあえて両流れにしたならば、背壁に雨樋を設けるなど何らかの処理をしたはずだが、そうした痕跡は遺構の中に全く見られなかった。従って、アスクレピオス神域のストアの屋根形状は片流れで、横断梁と垂木を組み合わせた小屋組を持つ形式と考えられる。

斜め 45 度方向に架けられる梁は、北東隅（以下、「背壁隅」と呼ぶ）ではスタイロベイトからの高さが 5.939 m となり、ストア外部柱の上では、上面が削り取られたバッカー（以下、「隅バッカー」と呼ぶ）の上に載せられることになる。片流れの屋根が架けられたということから、横断梁も背壁から中庭に向かって斜め下に架けられたとすれば、背壁隅から隅バッカーまでに梁が下がる寸法は、およそ 1.45 m となる⁹⁾。従って、外部柱の高さは 5.939 m から、1.63 m と隅バッカーの上面が削られている部分の高さ (0.315 m)¹⁰⁾、それにプリンスの高さ (0.185 m) を差し引いて約 3.81 m となる。これは石材寸法から推測した円柱高さ（約 5.21 m）より 1.4 m も低くなる。また円柱下部直径に対する高さの比が 6.09 (= 3.81 m / 0.626 m) と、コリント式円柱にしてはかなり寸胴なものとなる。

次に考えられるのは、横断梁が水平に架けられる場合である。横断梁の上に束が立て、母屋を渡して垂木を配する構成となる¹¹⁾。この場合、背壁隅の高さが隅バッカー上面の高さとなり、外部円柱の

高さは、5.939 m から、隅バッカーの上面が削られている部分の高さ (0.315 m) とプリンスの高さ (0.185 m) だけを引いて 5.439 m が算出される。円柱下部直径に対する円柱高さの比は $8.69 (= 5.439 \text{ m} / 0.626 \text{ m})$ となり、妥当なプロポーションと言える¹²⁾。

横断梁が水平に架けられると言うことは、内部柱上の横断梁の下面レベルも、外部スタイロベイト上面から 5.939 m と言うことになる。内部柱の高さは、5.939 m から、外部スタイロベイト上面と内部柱プリンス上面の水平高さの差 (0.327 m、Table 26 参照) と内部アーキトレーフの高さを引いたとして算出できる。ところが、内部アーキトレーフは木製であり、その寸法を直接示すような痕跡はない。ただ、内部柱頭上面には、外部柱頭上面と同じように円形に僅かに突起している部分があり、その直径は 0.567 m (C24) であった。外部柱上面の円形突起部の直径は、0.534 m (C25) と 0.512 m (C30) であり、これに載るアーキトレーフ幅は突起部直径よりそれぞれ 4.4 cm、6.6 cm 大きくなっている。内部柱頭上部に載る木製アーキトレーフにもこの関係が成立すると考え、アーキトレーフ幅を 0.61 m と算出した¹³⁾。木製の梁の形状は、正方形か、或いはそれに近い長方形が一般的と言えるので、内部アーキトレーフの高さは幅と同寸法と仮定する¹⁴⁾。ただし、内部円柱上部において、斜め 45 度方向に架けられる横断梁は、通常の梁より 0.207 m 低い位置にあるので、斜め 45 度方向に架けられる横断梁は、内部アーキトレーフ部分でも 0.207 m 低い位置に載せられることになる。従って、内部円柱の高さは $5.209 \text{ m} (= 5.939 \text{ m} - 0.327 \text{ m} - 0.61 \text{ m} + 0.207 \text{ m})$ となるが、円柱を構成する部材から求めた円柱高さ (5.287 m) より低くなるばかりか、直径が大きな内部円柱 (0.667 m) が直径の小さな外部円柱 (0.626 m) より約 0.23 m も低いことになり、極めて不自然である。

横断梁が水平でないとする、横断梁は斜めに架けられ、且つ内部柱が外部柱より高く、背壁隅部に架けられた斜め 45 度方向の梁位置が内部柱より低い位置にあると言うことになる。即ち、内部アーキトレーフ上面に架けられた横断梁は、中庭側と背壁側に下るように架けられるということである。内部円柱はストアのほぼ中央にあり¹⁵⁾、横断梁は中庭側と背壁側へ同じおよそ勾配で傾斜していると考えれば、背壁隅部に架けられた斜め 45 度方向の梁の位置と、外部円柱の隅部バッカーに載せられる梁の位置は同じレベルと考えられる。この時、外部円柱の高さは、横断梁を水平に架けた時と同じ過程で算出され、5.439 m となる。

一方、内部柱の高さは、横断梁が水平に架けられたとして求めた円柱高さ (5.209 m) に、横断梁が傾斜して高くなる寸法を加えて算することが出来る。横断梁の勾配を垂木と同じく 18/100 とすれば、内部円柱中心からバッカー端までの距離の 4.434 m に 18/100 を乗じて 0.798 m が求まる。これに 5.209 m を加えると 5.998 m となり、円柱下部直径 (0.667 m) に対する比は 8.99 と、これもほぼ妥当なプロポーションとなる。

さて、このまま屋根を葺けば両流れの屋根となり、背壁側の雨水処理に問題が発生する。そこで、柱廊の中庭側に架けられた傾斜屋根がそのままの勾配で背壁側の柱廊上部まで延ばされていたと考えた。背壁側の柱廊上部には横断梁が二重に架けられることになるが、アテネのアッタロスストアの 2 階部分やアルギブ・ヘライオンの南ストアにも同様の屋根架構が復元されており、あり得ないことではない。また、背壁側柱廊上部には、壁側に向かって下る横断梁の上に天井板が張られると推測した。

即ち、ストアの外観は片流れの屋根が葺かれるが、ストア内部ではあたかも両流れのストアの内観のように見えることになる。天井板がなければ背壁側に向かって昇る横断梁などの複雑な架構が見えるばかりでなく、構造的にはまったく必要のない背壁側に下る横断梁の意味を説明しがたい。

以上の考察より推察した、円柱高さや小屋組に使用された材木の各部寸法についてまとめると、次のようになる。

木製部材	各部寸法	復元図に描いた寸法
外部円柱高さ	5.439 m	同左
内部円柱高さ	5.998 m	同左
内部アーキトレーフの幅と高さ	約 0.61 m	同左
横断梁幅	約 0.30 ～ 0.40 m	0.35 m
斜め 45 度方向の横断梁幅	約 0.35 ～ 0.45 m	0.40 m
横断梁の心々間距離	外部列柱の 1 柱間分	同左
垂木の幅	約 0.16 ～ 0.19 m	
垂木の高さ	約 0.15 ～ 0.19 m 以下	
垂木の心々間距離	約 0.41 m	

横断梁の高さ、母屋桁の高さ、垂木の高さ、それに野地板の厚さは、バッカー上面からゲイソン上面から延長されるラインまでの間に収まらねばならない。この寸法を計算すれば、鉛直線上で約 70 cm となる¹⁶⁾。これをゲイソン上面の延長線に直角な線上での長さとして算出すれば約 69 cm となる。クルトン示すストアの小屋組に使用された木材の寸法は、内部アーキトレーフ、垂木はほぼ正方形、それ以外の木材は高さより幅の広いものが多い。これらを参考として、各部の寸法を決定することにする。

ゲイソン背面の設置するためのに切り込みの高さは約 0.15 ～ 0.19 m であり、ここに野地板と垂木が設置されなければならない。野地板の厚さについての手がかりは全くないが、これを 3 cm として、垂木の高さを 16 cm と考えた。また、母屋桁の寸法は、垂木より大きな寸法となるので、高さを 20 cm、幅を 25 cm とした。ただし、横断梁の上面に、深さ 2 cm ほどの溝が彫られ、母屋桁がはめ込まれると推測した。そして、従って、横断梁の高さは、 $69\text{ cm} - (3\text{ cm} + 16\text{ cm} + 20\text{ cm} - 2\text{ cm}) = 32\text{ cm}$ となる。母屋桁は外部列柱と内部列柱の間に 3 本載せられるとした。以上の結果より、ストアの復元図を描いた (Pl.34)。

注：

- 1) 心々間柱間寸法を 5 で除すと、南北ストアで 0.485 m、東西ストアでは 0.481 m となる。
- 2) ホッジは古代ギリシア神殿の木造小屋組に関する論文の中で、母屋桁の上に屋根瓦をのせる様々な形式を次のように整理し、示している。1) Tile + Clay + Sheathing + Battens + Rafter + Purlins、2) Tile + Sheathing + Battens + Rafter + Purlins、3) Tile + Battens + Rafter + Purlins、4) Tile + Battens + Rafter + Purlins。アスクレピオス神域のストアでは、3) の方法であると考えられる。

A. T. Hodge, The Woodwork of Greek Roofs, Cambridge, 1960., pp.60-75 (VII The Secondary Timbers)

- 3) 内側の部材、即ちバッカーの高さは、石材の両端において上面が盛り上がっている箇所での高さ (0.522 m) を採用した。
- 4) クールトンはストアの屋根架構に関して、様々な事例を示している。アスクレピオスのストアに建設年代の近いサモトラケのストア J (250 ~ 150 B.C.) では、傾斜した横断梁の上に母屋を架け垂木を載せるという構造である。ストア J の外部列柱の心々柱間寸法が 3.00 m、内部柱までのスパンは約 6 m と、アスクレピオスのストアより若干大きめではあるが、横断梁の梁幅は 0.40 m、垂木の断面は 0.23 m 正方となっている。クールトンの示す横断梁の梁背は、梁幅より若干小さい事例が多い。(Coulton, pp.149-165.)
- 5) 梁を載せた痕跡のある石材底面から、真下のトイコペイト上面までの垂直距離 (5.574 m) を実測し、これに外部柱のスタイロペイト上面から背壁トイコペイト上面までのレベル差 (0.365 m) を加えて 5.939 m を算出した。
- 6) A08 のバッカーには、入り隅部に確かに人工的に削られた痕跡が残っていた。ただ、残存状況が良好ではなく、梁を置くために加工されたのではない可能性も否定できない。その場合、斜め 45 度方向に配された横断梁は、通常の横断梁と同じレベルに載り、梁背も同じ寸法となる。
- 7) アスクレピオスのストアの様に、斜め 45° 方向の横断梁が、列柱と直角に架けられる横断梁より低い位置に配される例は、ブラウロンのアルテミス神域のコの字型ストアでも見ることが出来る。
Ch. Bouras, The Reconstruction of the Stoa of Brauron, Athens, 1967. (原文ギリシア語) , Pl. 7-10.
- 8) Coulton 1976, Chapter 8 (The Structure of Stoas)
- 9) 背壁隅から隅バッカーまでに梁が下がる寸法は、(背壁外面からバッカー内面までの距離×屋根勾配) で算出できる。背壁外面からバッカー内面までの距離は、スタイロペイト端から東ストアのトイコペイトまでの距離 (9.843 m) から、スタイロペイト端から円柱中心までの距離 (0.450 m) と、バッカー上面幅 (0.360 m) を引いて、9.033 m と求めた。屋根勾配は 18/100 であるので、 $9.033 \text{ m} \times 18/100 = 1.63 \text{ m}$ となった。尚、背壁隅と隅バッカー共に東ストアに属するものであるため、ここでは東ストアの寸法として算出している。
- 10) バッカーのアーキトレヴ部の高さは、平均値で 0.300 m (この部材では 0.299 m)、上面が削り落とされている箇所の高さは 0.315 m となり、アーキトレヴ上面より 0.015 m 突き上げられている。一方、バッカーの高さは 0.509 m、座床がある部分で 0.522 m となる。即ち、その差の 0.013 m が座床の高さであり、隅バッカーのアーキトレヴ上面からの突き上げられた寸法に類似している。即ち、隅バッカーでは、アーキトレヴ上面までの高さとなされ、それに座床として 0.015 m 突き上げられていると、考えることができる。
- 11) クールトンはこの形式の小屋組を有するストアの事例として、ペロポネソス半島に建設された 5 つの事例を紹介している。何れも内部列柱を持つストアである。オリンピアの南ストア (紀元前 4 世紀中頃)、コリントの南ストア (紀元前 3 世紀初め)、エピダウロスの北東ストア (紀元前 3 世紀前半)、コリントの北西ストア (紀元前 300 年頃)、エピダウロスのアバトン (年代不明)。
また、棟の位置に内部柱や壁がない場合 (メガロポリスのフィリップのストア、紀元前 340-330 年) や、列柱廊の背後にある部屋が列柱廊部分より狭い場合 (デロスの南ストア、紀元前 3 世紀) 等は、水平な横断梁が必要であると述べている。(Coulton 1974, pp.158-159.)
- 12) アテネのオリンピエイオンのコリント式円柱 (紀元前 2 世紀初め) の下部直径に対する高さの比は 8.81 である (Dinsmoor 1910, pp. 280, 339-340.)。またアテネのアッタロスのストア (紀元前 2 世紀半ば) の 2 階正面のイオニア式円柱における比は 8.78 となる (John Travlos, Pictorial Dictionary of Ancient Athens, New York 1980, fig.645.)。
- 13) 内部柱上の円形突起部直径の 0.567 m に、0.044 m を加えて 0.611 m を求めた。
- 14) ホッジは古代ギリシア神殿の木造小屋組に関する論文の中で、棟木や母屋桁の断面形状は正方形か、或いは、幅より背が若干大きい正方形に近い長方形であることを示している。
A. T. Hodge, The Woodwork of Greek Roofs, Cambridge, 1960., p.46, Table 2.
また、クールトンは様々なストアの垂木、母屋桁、棟木、内部アーキトレヴなどの形状を示しているが、内部アーキトレヴや棟木は、ほぼ正方形となっている (Coulton 1974, pp.158-159.)。
- 15) 背壁からスタイロペイト端までの距離は 9.843 m、内部円柱中心から背壁のトイコペイトまでの距離が $a = 4.599 \text{ m}$ 、内部円柱中心からスタイロペイト端まで距離が $b = 5.244 \text{ m}$ となる。また、外部円柱中心からスタイロペイト端までの距離が 0.450 m であるから、内部円柱中心から外部円柱中心までの距離は 4.794 m となる。バッカー上面の幅は 0.360 m であるの

で、内部円柱中心からバッカー上面端までの距離は $c = 4.434 \text{ m}$ と算出される (a との差は 0.165 m)。

- 16) 外部円柱中心からバッカー上面端までの距離は 0.3405 m 、円柱中心から外側のアーキトレヴ・フリーズ部材の上面端までの距離が 0.3705 m と計算できる。フリーズから、コーニス先端までの突き出された水平長さは 0.283 m となり、コーニス先端からバッカー上面端までの水平距離は 0.994 m となる。コーニス上面の傾斜は $18/100$ であるから、コーニス上面の延長線は、バッカー上面端の鉛直線上で、コーニス先端から 0.179 m 高くなる。また、バッカー座床上面からアーキトレヴ・フリーズ部材正面までの垂直距離は 0.235 m 、コーニスの高さは 0.290 m 、従って、バッカー上面からコーニス先端までの垂直距離は 0.525 m となる。従って、バッカー上面端からコーニス上面の延長線までの垂直距離は、 $0.179 \text{ m} + 0.525 \text{ m} = 0.704 \text{ m}$ と算出される。

第4章 結論と今後の展望

今回の調査で、アスクレピオス神域のストアについては、神域の内外に残る部材を含め遺構の現状について、平面図、立断面図、詳細図等を始め、写真の撮影、文章による記述など、遺跡の現状の調査が全て完了した。オルランドスによる発掘調査以後、これまで不完全であった遺構のドキュメントが完成したわけで、これをもとに今後建築的な分析をし、最終報告を出版するつもりである。ここでは、今回の調査によって得られた知見のあらましをまとめて述べ、この中間報告書の締め括りとする。

建築材料としての石材は2種類からなり、ひとつは地元産の白い石灰岩である。これは現在イトメ山と呼ばれるアクロポリスの西斜面を石切場として、切り出されたと考えられているが、その石切場はまだ発見されてはいない。主要な部材はこの石材で出来ているが、たとえばクレピス、スタイロペート、円柱、軒部材であるシーマなど、主要部材に使用されている。もう1種類は、近隣のカロゲローラホスと呼ばれる集落に露頭している砂岩質の柔らかい茶色の石灰岩である。柔らかく加工し易いため、ストアのフリーズの裏材 (backer)、そしてコーニスなどに使用されている。程度の差はあるものの、どちらの石材も脆いために部材を製作したときはともかく、現在ではかなり風化が進んでいる。とくに砂岩質の茶色の石灰岩は当初はスタッコで仕上げられていたようであるが、それもはげ落ちて表面が溶けたような状態になっていることが多い。したがって現在の状況では、個々の部材の寸法の精度は非常に悪いと言わねばならない。もちろん建築当初は、ストアの内側スタイロペートの全体長さ、柱間間隔の正確さ、排水のためのストアのスタイロペートの僅かな傾斜などから見て、その施工精度は非常に正確であったと思われる。

神域の歴史的な変遷については、まだあまり詳細には判明していない。神域の建設年代は前215年としているが、今のところ明確な根拠は示されていない。神域からは幾つかの碑文が出土しているが、紀元1世紀頃に地震の被害を受けたことがそのうちのひとつの碑文によって判明している。調査した部材の中にも明らかに当初部材の方向を変えて加工し直して転用した部材があり、確かに地震の被害があったことが裏付けられる。また、東側および西側ストアの中央部のエンタブラチャーが、数メートルの長さでそのままの形で内側へ倒壊した痕跡が残っていたので、ストアの最後もまた地震による倒壊であったと思われる。

アスクレピオス神域は市域の中央を南北に走る幅約10 mの主要街路に接している。神域の正面入口は建物の東側中央にあり、この主要街路に面しており、さらに街路の反対側には家形墓が置かれ、屋根の上にはスパルタからの独立を果たすための戦いであったレウクトラの戦いで死んだと思われる10人の英雄たちの彫像が飾られていた。また神域の北側はアゴラとの間にやはり道路が走っており、この神域が都市の市民生活の中心であったアゴラと隣接していた。このように神域は市の中心部にあって、人通りも多く非常に重要な位置にあり、都市施設として重要な役割を与えられていたことが推測される。特にここでは神域が神域としてだけ機能するのではなく、民会場(エクレシアステリオン)やブウレウテイオンを併設し、宗教施設でもありながら政治の中核的機能を兼ね備えているという聖俗兼用の施設であったことも重要な点である。もちろん、古い時代にもオリンピアに見られるように

広い神域の中にブウレウテリオンを別の建物として配置する例もあるにはあるが、同じ建物の中に複合させる例は、ギリシアの神域では他に殆ど例がない。このことがどのような意味を持っているかについては、今後検討の必要があるだろう。

メッセネは、前 369 年に建設されており、アスクレピオス神域が建設されたのは、発掘者によるとその約 150 年後の前 215 年頃と推定されている。アルカイック時代や古典時代の神域は、例えばエギナのアファイア神域に見られるように、いわゆるテメノス（神域）の壁と呼ばれる周壁で囲まれており、一部にストアが内側に向かって配置されていた。しかしヘレニズム時代になると、そのストアが大きく作られ、神域を列柱で囲むようになる。空間を列柱で囲む傾向はアゴラで顕著で、L 字形やコの字形のストアが組み合わされて、アゴラは列柱で囲まれた壮麗な空間と化していく。

神域もこのようなアゴラの空間の作り方の手法と軌を一にしているようで、テメノスの壁に代わってストアで周囲を囲むようになる。メッセネのアスクレピオス神域は、周囲を完全に矩形のストアで囲んだという意味で、その最初の例と言ってよい。これより少し遅く前 2 世紀初期に始められ前 130 年頃に完成された小アジアの巨大神殿、マグネシアのアルテミス神域もストアで囲まれているが、左右の奥の三方だけが囲まれた不完全な形である。メッセネと同様に完全に矩形のストアで囲まれた神域は、前 2 世紀に作られたコスのアフロディーテの大神域が類例として見られる。

このように、神域の四周をストアで囲むということは、これに伴い神殿、祭壇、プロピライアを全体の軸線上に配置することにもなる。これはプロピライアから入ると、神殿を視覚の中心にして両側の列柱が形作る左右対称な透視図的景観を形成することになった。こうして、比較的自然地形にしたがって緩やかに建物が配置するというアルカイック時代やクラシック時代の神域の計画概念が、ヘレニズム時代になると人工的で厳格な秩序の世界を現出するという計画概念へと、変化していったことを意味する。この意味で、ギリシアの神域の計画手法において、メッセネのアスクレピオス神域は画時代的な神域であると言えよう。さらにいうなら、ヘレニズム神域そしてそれを見習ったローマ神域の配置計画の起源となった神域と考えてよいだろう。この神域の建築は、クラシック時代以後、変化の兆しを見せていた空間の作り方において、過去のものとは明確に区別した新しい世界像を提示したといえるだろう。

もうひとつの新機軸は、コリント式をストアの内外に用いたことであろう。従来、コリント式は内部柱として使われてきたが、サモトラケのプロピロン（前 285-281）で最初に外部円柱として使われた。今後他の用例を探す必要があるが、それにしても外部柱にコリント式円柱を用いた早期の例のひとつである。コリント式の柱頭の形態については、本文で述べたように数種類が作られているが、これは違う形の柱頭が同じ列柱に用いられたことになり、これも非常に特異な点である。フリーズにはブクラニアと花綱の連続浮彫が施されており、花綱とロゼッタの違いこそあれサモトラケのプロピロンと類似点を示している。

以上のように、メッセネのアスクレピオス神域は、ヘレニズム時代の神域として非常に特徴的な点を示している。今後は、他の神域や建築との比較研究を重ねながら、この神域のギリシア建築史における位置づけを、さらに明確にしていく必要がある。

Table 1. Height of Crepis Blocks

East Stoa (m)		North Stoa (m)		West Stoa (m)		South Stoa (m)	
A1	0.220	A2	0.220	A3	0.216	A4	0.229
E02	0.220	N02	0.217	W20	0.215	S22	0.239
E03	0.226	N03	0.218	W19	0.215	S21	0.236
E04	0.225	N04	0.216	W18	0.212	S20	0.234
E05	0.219	N05	0.218	W17	0.216	S19	0.235
E06	0.223	N06	0.220	W16	0.219	S18	0.234
E07	0.219	N07	0.223	W15	0.224	S17	0.233
E08	0.219	N08	0.221	W14	0.225	S16	0.235
E09	0.222	N09	0.220	W13	0.215	S15	0.233
E10	0.221	N10	0.225	W12	0.228	S14	0.233
E11	0.222	N11	0.228	W11	0.230	S13	0.229
E12	0.220	N12	0.227	W10	0.233	S12	0.229
E13	0.221	N13	0.223	W09	0.230	S11	0.222
E14	0.224	N14	0.226	W08	0.225	S10	0.222
E15	0.217	N15	0.231	W07	0.224	S09	0.222
E16	0.216	N16	0.231	W06	0.229	S08	0.217
E17	0.215	N17	0.229	W05	0.222	S07	0.223
E18	0.215	N18	0.226	W04	0.232	S06	0.214
E19	0.213	N19	0.222	W03	0.233	S05	0.208
E20	0.218	N20	0.224	W02	0.233	S04	0.193
		N21	0.215			S03	0.214
		N22	0.217			S02	0.219
average	0.220	average	0.224	average	0.223	average	0.225
maximum	0.226	maximum	0.233	maximum	0.231	maximum	0.239
minimum	0.213	minimum	0.212	minimum	0.215	minimum	0.193
average (m)		0.223					
number of data		84					
maximum (m)		0.239					
minimum (m)		0.193					

- 1) 記号は、正面門柱の位置を示す。
A1-A4 は実測上の基準点が落とされた 4 間のクレピス石材を示す。
2) 実測は、ストアの外側から見て、門柱の左側の Crepis 石材で実施

Table 2. Breadth of Crepis Steps

		Breadth (m)	
East Stoa	from south	0.231	0.232
		0.231	0.227
	from north	0.235	0.239
		0.233	0.233
		0.232	0.236
		0.233	0.232
		0.238	0.238
		0.235	0.236
North Stoa	from east	0.236	0.239
		0.234	0.235
			0.217
		0.238	0.236
		0.237	0.230
West Stoa	from north	0.237	0.238
		0.238	
		0.236	0.233
average		0.234	
number of data		30	

Table 3. Length of Crepis Blocks

number of block	East Stoa (m)	North Stoa (m)	West Stoa (m)	South Stoa (m)
	(from South)		(from East)	
1	1.208	1.212	1.134	1.206
2	1.248	1.208	1.208	1.270
3	1.147	1.229	1.231	1.144
4	1.225	1.181	1.221	1.320
5	1.028	1.368	1.198	1.111
6	1.394	1.049	1.226	1.391
7	1.205	1.265	1.193	1.021
8	1.180	1.140	1.211	1.305
9	1.233	1.208	1.205	1.112
10	1.169	1.207	1.224	1.169
11	1.185	1.263	1.209	1.248
12	1.224	1.146	1.227	1.175
13	1.141	1.292	1.203	1.258
14	1.268	1.110	1.223	1.249
15	1.121	1.206	1.207	1.191
16	1.295	1.206	1.204	1.377
17	1.193	1.232	1.214	1.046
18	1.215	1.182	1.222	1.180
19	1.313	1.202	1.206	1.264
20	1.097	1.203	1.206	1.204
21	1.198	1.204	1.208	1.216
22	1.214	1.204	1.211	1.112
23	1.336	1.194	1.217	1.293
24	1.072	1.215	1.230	1.175
25	1.268	1.204	1.200	1.272
26	1.145	1.204	1.219	1.125
27	1.304	1.206	1.206	1.299
28	1.101	1.212		1.370
29	1.270	1.204		1.050
30	1.147	1.204	1.218	1.259
31	1.199	1.205	1.202	1.147
32	1.212	1.208	1.214	1.351
33	1.204	1.202	1.210	1.098
34	1.211	1.205	1.214	1.263
35	1.175	1.196	1.218	1.161
36	1.221	1.220	1.206	1.215
37			1.210	1.210
38			1.214	1.237
39			1.210	1.210
40			1.214	1.335
41			1.212	1.066
42			1.125	1.144
average (m)	1.205	1.205	1.208	1.211
number of data	36	36	40	42
maximum (m)	1.394	1.368	1.231	1.391
minimum (m)	1.028	1.049	1.125	1.021
standard deviation	0.075	0.049	0.020	0.093

- 1) Except for Crepis Blocks at reentrant angle

Table 4 - a. クレピス石材の継ぎ目の位置（東ストア、西ストア）

East StoaWest Stoa

円柱の位置を示す番号	Crepis隅からの距離		理論的な石材位置との差の絶対値	
	実測から計算した継ぎ目の位置	石材継ぎ目の理論的な位置	円柱の乗らない継目	円柱の乗る継ぎ目
edge	0.000			
E02	1.702	1.724		0.022
	2.910	2.928	0.018	
E03	4.158	4.132		0.026
	5.305	5.336	0.031	
E04	6.530	6.539		0.009
	7.558	7.743	0.185	
E05	8.952	8.947		0.005
	10.157	10.151	0.006	
E06	11.337	11.355		0.018
	12.570	12.559	0.011	
E07	13.739	13.763		0.024
	14.924	14.967	0.043	
E08	16.148	16.171		0.023
	17.289	17.375	0.086	
E09	18.557	18.579		0.022
	19.678	19.783	0.105	
E10	20.973	20.987		0.014
	22.166	22.190	0.024	
E11	23.381	23.394		0.013
	24.694	24.598	0.096	
E12	25.791	25.802		0.011
	26.989	27.006	0.017	
E13	28.203	28.210		0.007
	29.539	29.414	0.125	
E14	30.611	30.618		0.007
	31.879	31.822	0.057	
E15	33.024	33.026		0.002
	34.328	34.230	0.098	
E16	35.429	35.434		0.005
	36.699	36.638	0.061	
E17	37.846	37.841		0.005
	39.045	39.045	0.000	
E18	40.257	40.249		0.008
	41.461	41.453	0.008	
E19	42.672	42.657		0.015
	43.847	43.861	0.014	
E20	45.068	45.065		0.003
edge	46.789			
	平均値		0.055	0.013
	最大値		0.185	0.026
	最小値		0.000	0.002
	標準偏差		0.051	0.008
	個数		19	20

円柱の位置を示す番号	Crepis隅からの距離		理論的な石材位置との差の絶対値	
	実測から計算した継ぎ目の位置	石材継ぎ目の理論的な位置	円柱の乗らない継目	円柱の乗る継ぎ目
edge	0.000			
W02	1.716	1.725		0.009
	2.928	2.930	0.002	
W03	4.136	4.135		0.001
	5.365	5.340	0.025	
W04	6.546	6.545		0.001
	7.914	7.749	0.165	
W05	8.963	8.954		0.009
	10.228	10.159	0.069	
W06	11.368	11.364		0.004
	12.576	12.568	0.008	
W07	13.783	13.773		0.010
	15.046	14.978	0.068	
W08	16.192	16.183		0.009
	17.484	17.388	0.096	
W09	18.594	18.592		0.002
	19.800	19.797	0.003	
W10	21.006	21.002		0.004
	22.238	22.207	0.031	
W11	23.420	23.412		0.009
	24.622	24.616	0.006	
W12	25.825	25.821		0.004
	27.029	27.026	0.003	
W13	28.233	28.231		0.002
	29.427	29.435	0.008	
W14	30.642	30.640		0.002
	31.846	31.845	0.001	
W15	33.050	33.050		0.000
	34.256	34.255	0.001	
W16	35.468	35.459		0.009
	36.672	36.664	0.008	
W17	37.876	37.869		0.007
	39.081	39.074	0.007	
W18	40.289	40.278		0.011
	41.491	41.483	0.008	
W19	42.696	42.688		0.008
	43.892	43.893	0.001	
W20	45.112	45.098		0.014
edge	46.823			
	平均値		0.028	0.006
	最大値		0.165	0.014
	最小値		0.001	0.000
	標準偏差		0.044	0.004
	個数		18	19

Table 4 - b. クレピス石材の継ぎ目の位置（北ストア、南ストア）

North Stoa					South Stoa				
円柱の位置を示す番号	Crepis隅からの距離		理論的な石材位置との差の絶対値		円柱の位置を示す番号	Crepis隅からの距離		理論的な石材位置との差の絶対値	
	実測から計算した継ぎ目の位置	石材継ぎ目の理論的な位置	円柱の乗らない継目	円柱の乗る継目		実測から計算した継ぎ目の位置	石材継ぎ目の理論的な位置	円柱の乗らない継目	円柱の乗る継目
edge	0.000				edge	0.000			
	0.598	0.528	0.070			0.497	0.528	0.031	
N02	1.732	1.739		0.007	S02	1.703	1.739		0.036
	2.940	2.951	0.011			2.973	2.951	0.022	
N03	4.171	4.162		0.009	S03	4.117	4.162		0.045
	5.392	5.374	0.018			5.437	5.374	0.063	
N04	6.590	6.586		0.004	S04	6.548	6.586		0.038
	7.816	7.797	0.019			7.939	7.797	0.142	
N05	9.009	9.009		0.000	S05	8.960	9.009		0.049
	10.220	10.220	0.000			10.265	10.221	0.044	
N06	11.425	11.432		0.007	S06	11.377	11.432		0.055
	12.649	12.644	0.005			12.546	12.644	0.098	
N07	13.858	13.855		0.003	S07	13.794	13.855		0.061
	15.085	15.067	0.018			14.969	15.067	0.098	
N08	16.288	16.279		0.009	S08	16.227	16.279		0.052
	17.511	17.490	0.021			17.476	17.490	0.014	
N09	18.718	18.702		0.016	S09	18.667	18.702		0.035
	19.922	19.913	0.009			20.043	19.913	0.130	
N10	21.136	21.125		0.011	S10	21.089	21.125		0.036
	22.358	22.337	0.021			22.269	22.337	0.068	
N11	23.564	23.548		0.016	S11	23.533	23.548		0.015
	24.770	24.760	0.010			24.737	24.760	0.023	
N12	25.978	25.972		0.007	S12	25.953	25.972		0.019
	27.189	27.183	0.006			27.065	27.183	0.118	
N13	28.406	28.395		0.011	S13	28.358	28.395		0.037
	29.636	29.606	0.030			29.533	29.606	0.073	
N14	30.836	30.818		0.018	S14	30.805	30.818		0.013
	32.055	32.030	0.025			31.930	32.030	0.100	
N15	33.261	33.241		0.020	S15	33.229	33.241		0.012
		34.453				34.599	34.453	0.146	
N16	35.682	35.664		0.018	S16	35.649	35.665		0.016
	36.900	36.876	0.024			36.908	36.876	0.032	
N17	38.102	38.088		0.014	S17	38.055	38.088		0.033
	39.316	39.299	0.017			39.406	39.299	0.107	
N18	40.526	40.511		0.015	S18	40.504	40.511		0.007
	41.740	41.723	0.017			41.767	41.723	0.044	
N19	42.958	42.934		0.024	S19	42.928	42.934		0.006
	44.164	44.146	0.018			44.143	44.146	0.003	
N20	45.374	45.357		0.017	S20	45.353	45.358		0.005
	46.588	46.569	0.019			46.590	46.569	0.021	
N21	47.798	47.781		0.017	S21	47.800	47.781		0.019
	49.012	48.992	0.020			49.135	48.992	0.143	
N22	50.224	50.204		0.020	S22	50.201	50.204		0.003
	51.349	51.415	0.066			51.345	51.416	0.071	
edge	51.943				edge	51.939			
	平均値		0.021	0.013		平均値		0.072	0.028
	最大値		0.070	0.024		最大値		0.146	0.061
	最小値		0.000	0.000		最小値		0.003	0.003
	標準偏差		0.017	0.006		標準偏差		0.046	0.018
	個数		21	21		個数		22	21

Table 5. Relative hight of outer Crepis, inner Stylobate & Toichobate (Conner A4 = ±0)

Stoa	Point	measurements			calculation		
		Outer Colonnade	Inner Colonnade	Rear Wall	Difference of Level from outer Stylobate		from Eutyteria of rear wall to inner Stylobate (m)
		Crepis (m)	Base-slab (m)	Toichobate (m)	inner Base-slab (m)	Eutyteria of Rear Wall (m)	
SE corner	WSE			0.747			
East Stoa	PSE		0.441	0.747			
	A1	0.155		0.765		0.169	
	E03	0.187	0.461	0.794	0.072	0.166	0.094
	E05	0.223	0.480	0.789	0.055	0.125	0.070
	E07	0.255	0.547	0.821	0.090	0.125	0.035
	E09	0.298	0.566	0.857	0.066	0.118	0.052
	E11	0.331	0.574	0.846	0.041	0.074	0.033
	E13	0.363	0.611	0.916	0.046	0.112	0.066
	E15	0.388	0.678	0.960	0.088	0.131	0.043
	E17	0.406	0.671	0.999	0.063	0.152	0.089
	E19	0.422	0.687	1.020	0.063	0.157	0.094
	A2	0.453	0.705	1.018	0.050	0.124	0.074
	PNE		0.786	0.991			
NE corner	WNE			1.023			
North Stoa	PNE		0.786	1.049			
	A2	0.453	0.779	1.041	0.124	0.147	0.023
	N03	0.445	0.749	0.956	0.102	0.070	-0.032
	N05	0.457	0.724	0.950	0.065	0.052	-0.013
	N07	0.472	0.762	0.972	0.088	0.059	-0.029
	N09	0.468	0.789	0.956	0.119	0.047	-0.072
	N11	0.467	0.737	1.011	0.068	0.103	0.035
	N13	0.488	0.733	1.071	0.043	0.142	0.099
	N15	0.464	0.764	1.069	0.098	0.164	0.066
	N17	0.473	0.762	1.021	0.087	0.107	0.020
	N19	0.468	0.775	1.019	0.105	0.110	0.005
	N21	0.457	0.754	1.037	0.095	0.139	0.044
	A3	0.446	0.837	1.038	0.189	0.151	-0.038
	PNW		0.829	1.014			
NW corner	WNW			1.074			
West Stoa	PNW		0.829	1.049			
	A3	0.446	0.774	1.116	0.126	0.229	0.103
	W19	0.414	0.701	1.060	0.085	0.205	0.120
	W17	0.385	0.660	0.997	0.073	0.171	0.098
	W15	0.351	0.614	0.938	0.061	0.146	0.085
	W13	0.306	0.577	0.924	0.069	0.177	0.108
	W11	0.279	0.549	0.854	0.068	0.134	0.066
	W09	0.227		0.797		0.129	
	W07	0.195	0.399	0.736	0.002	0.100	0.098
	W05	0.144	0.279	0.645	-0.067	0.060	0.127
	W03	0.072	0.268	0.550	-0.006	0.037	0.043
	A4	0.000		0.575		0.134	
	PSW		-0.001	0.574			
SW corner	WSW			0.490			
South Stoa	PSW			0.561			
	A4	0.000	0.170		-0.032		
	S21	-0.007	0.192		-0.003		
	S19	0.004	0.231		0.025		
	S17	0.034	0.257	0.596	0.021	0.121	0.100
	S15	0.010	0.293	0.616	0.081	0.165	0.084
	S13	0.085		0.615		0.089	
	S11	0.090	0.364	0.629	0.072	0.098	0.026
	S09	0.095	0.385	0.654	0.088	0.118	0.030
	S07	0.165	0.393	0.715	0.026	0.109	0.083
	S05	0.150	0.372	0.735	0.020	0.144	0.124
	S03	0.166	0.408	0.766	0.040	0.159	0.119
	A1	0.155	0.411	0.752	0.054	0.156	0.102
	PSE		0.441	0.755			
SE corner	WSE			0.747			
Number of data					42	43	39
average					0.062	0.126	0.059
Altitude of poit A4 (m)					323.328		

Table 6. Length of Stylobate

Points of measurements		corner and next		normal
East stoa	E21 (N01)	0.963		
			1.185	
	E20			1.172
				1.206
	E19			1.237
	E07			1.273
				1.248
	E06			0.991
West Stoa			1.349	
	E01 (S01)	0.96		
			1.449	
	N20			1.018
average		0.962	1.267	1.176
Number of measurements		2	3	8

Points of measurements		corner and next		normal
North stoa	N01 (E21)	1.267		
			1.050	
	N02			1.209
				1.219
South Stoa	N03			1.200
	S01 (E01)	1.215		
			1.071	
average		1.241	1.061	1.207
Number of measurements		2	2	4

Table 7. 内部円柱位置 (Crepis 端から Plinth 中心までの距離)

East Stoa		North Stoa		West Stoa		South Stoa	
No. of inner Plinth	Stylobate端からの距離	No. of inner Plinth	Stylobate端からの距離	No. of inner Plinth	Stylobate端からの距離	No. of inner Plinth	Stylobate端からの距離
PE01		PN01	5.315	PW11	5.334	PS12	5.10
PE02	5.252	PN02	5.095	PW10	5.286	PS11	
PE03	5.097	PN03	5.302	PW09	5.308	PS10	
PE04	5.283	PN04	5.245	PW08	5.317	PS09	
PE05	5.263	PN05	5.088	PW07		PS08	
PE06	5.288	PN06	5.319	PW06		PS07	5.34
PE07	5.251	PN07	5.293	PW05		PS06	5.25
PE08	5.239	PN08	5.324	PW04		PS05	5.28
PE09	5.171	PN09	5.387	PW03	5.196	PS04	5.46
PE10	5.298	PN10	5.317	PW02	5.189	PS03	5.28
PE11	5.297	PN11	5.320	PW01		PS02	5.37
		PN12	5.334			PS01	5.103
average	5.244	average	5.278	average	5.272	average	5.273

- 1) South Stoa の PS02-PS07 は、内部柱 Stylobate のおよその中心までの距離
2) 内部柱 Stylobate は、ほぼ正方形ではあるが、端部が完全には仕上げられておらず、中心を求めるのは困難である。

Table 8. Height of Toichobate & Orthostate

	Part	Toichobate	Orthostate
East Stoa	South part	0.235	0.720
		0.240	
	council hall	0.250	
		0.236	
	propylon	0.242	
		0.238	
	odeion	0.246	0.714
		0.242	0.716
			0.729
			0.715
North Stoa	fountain	0.250	0.717
	propylon	0.234	0.714
		0.237	
		0.233	
		0.241	0.720
	West part	0.236	
West Stoa	North stairs	0.230	0.722
	Artemision	0.239	
		0.229	0.723
	Room M	0.234	
	Room N1	0.235	
	Room N2	0.237	
	Room Ξ	0.246	
	Room Υ	0.233	
South Stoa	West part	0.241	
	center	0.241	0.712
			0.716
	propylon	0.240	0.719
		0.241	0.711
	East part	0.236	0.730
	average	0.239	0.719

Table 9. Depth of Stoa from edge of Stylobate to Toichobate

	実測点	Stylobate端部から壁までの距離	平均値
East Stoa	A1	9.879	9.843
	10 m form A1	9.857	
	20 m form A1	9.786	
	30 m form A1	9.858	
	40 m form A1	9.861	
	A2	9.816	
North Stoa	A2	9.800	9.774
	10 m form A2	9.751	
	20 m form A2	9.766	
	30 m form A2	9.720	
	40 m form A2	9.779	
West Stoa	A3	9.829	9.664
	40 m form A4	9.742	
	30 m form A4	9.642	
	10 m form A4	9.662	
	A4	9.600	
South Stoa	40 m form A1	9.676	9.776
	30 m form A1	9.701	
	A1	9.782	
		9.845	

Table 10. Measurements of Outer Plinth

No. of outer Column	Width		height
E19	0.861	0.863	0.189
E20	0.866		0.179
N01 = E21	0.857	0.857	0.187
N02	0.858	0.859	0.180
N03	0.857	0.858	0.181
S01 = E01	0.859	0.860	0.189
W20	0.861	0.858	0.187
Average	0.860		0.185

Table 11. Diameter of inner Plinth

East Stoa		North Stoa		West Stoa		South Stoa	
No. of inner Plinth	diameter	No. of inner Plinth	diameter	No. of inner Plinth	diameter	No. of inner Plinth	diameter
PSE	0.879	PNE	0.919	PNW	0.892	PSW	
PE01		PN01	0.879	PW11	0.880	PS12	
PE02	0.915	PN02	0.875	PW10	0.908	PS11	
PE03	0.897	PN03	0.864	PW09	0.894	PS10	
PE04	0.916	PN04	0.884	PW08	0.894	PS09	
PE05	0.935	PN05	0.909	PW07		PS08	
PE06	0.903	PN06	0.889	PW06		PS07	
PE07	0.900	PN07	0.880	PW05		PS06	
PE08	0.910	PN08	0.904	PW04		PS05	
PE09	0.900	PN09	0.915	PW03	0.920	PS04	
PE10	0.908	PN10	0.898	PW02	0.915	PS03	
PE11	0.923	PN11	0.915	PW01		PS02	
		PN12	0.882			PS01	0.900
average	0.900						
count	32	max	0.935	min	0.864	standard deviation	0.017

Table 12. Height of inner Plinth

East Stoa		North Stoa		West Stoa		South Stoa	
No. of inner Plinth	height	No. of inner Plinth	height	No. of inner Plinth	height	No. of inner Plinth	height
PSE		PNE	0.273	PNW		PSW	
PE01		PN01		PW11	0.277	PS12	
PE02	0.265	PN02		PW10	0.265	PS11	
PE03	0.283	PN03		PW09	0.279	PS10	
PE04	0.267	PN04		PW08		PS09	
PE05		PN05	0.261	PW07		PS08	
PE06		PN06	0.276	PW06		PS07	
PE07	0.253	PN07	0.273	PW05		PS06	
PE08	0.227	PN08	0.270	PW04		PS05	
PE09		PN09		PW03		PS04	
PE10		PN10		PW02		PS03	
PE11		PN11		PW01		PS02	
		PN12	0.222			PS01	0.278
average	0.265						
count	15	max	0.283	min	0.222	standard deviation	0.018

Table 14. Measurements of Base

	No. of block	lower Diameter of Dram	Diameter of Base	Height of Base and Dram	Height of Base
A-type fluting	B01				
	B03	0.660	0.702	0.570	
	B04	0.665	0.704	0.619	0.219
	B05	0.672			0.218
	B07	0.651	0.705		0.244
	B11	0.669	0.713	0.562	0.227
	B12	0.673	0.712	0.600	0.213
	B13	0.677	0.723		
	B16				
	Aver.	0.667	0.710	0.588	0.224
D-type fluting	B02	0.630	0.666		
	B06	0.624	0.674		0.230
	B09	0.624	0.678	0.551	0.228
	B14	0.625	0.683	0.596	0.203
	B15				
	B17				
	B20				
	Aver.	0.626	0.675	0.574	0.220

Table 13. Measurements of Column Drum

	No. of block	Diameter of Dram		Height of drum	Height of reeded flute
A-type fluting	D01	0.549			
	D03	0.627			
	D09	0.632			
	D12				
	D17				
	D36	0.591			
	D56	0.636		1.118	
	Aver.	0.607		1.118	
B-type fluting	D02			1.200	0.364
	D08			1.015	0.507
	D11				0.307
	D15	0.638	0.593	0.831	0.300
	D20	0.641		1.070	0.270
	D51	0.633	0.615	1.133	0.332
	Aver.	0.624		1.050	0.347
C-type fluting	D04				0.956
	D05	0.601			0.932
	D06	0.636	0.610		1.058
	D07				0.906
	D10				1.021
	D13				1.227
	D18	0.543			1.083
	D19				0.893
	D21				0.732
	D24				0.963
	D29				0.642
	D30				0.986
	D34	0.516			0.794
	D37				1.024
	D38	0.542	0.512		0.933
	D39				1.141
	D44	0.511			0.879
	D46				1.123
	D47				0.799
	D48	0.567	0.535		0.925
	D49				1.350
	D55				0.964
	Aver.	0.557		0.970	
D-type fluting	D22	0.610	0.601		0.800
	D27	0.632	0.624		1.170
	D28	0.616			
	D40	0.599	0.576		1.309
	D41				
	D45	0.585			
	D50	0.595	0.589		0.872
	D52				
	D54	0.593			
	Aver.	0.602		1.038	
E-type fluting	D23	0.584			0.461
	D25	0.576		1.007	
	D26	0.576		1.142	
	D31	0.560	0.536	1.041	0.304
	Aver.	0.566		1.063	0.383

Table 15. Measurements of Capital

	No. of block	Diameter of Drum	Height of leaf at lower ring	Height of block	Height of Capital
Capital with 8 leaves	C02	0.551	0.19	0.684	0.601
	C03	0.561	0.19	0.752	0.595
	C04		0.20	0.65	0.591
	C05	0.55	0.20		
	C06		0.21		
	C08		0.18		
	C14				
	C16	0.544	0.19		
	C20		0.20		
	C24		0.21	0.619	0.586
	C35				
	Aver.	0.552	0.197	0.676	0.593
Capital with 12 leaves	C07		0.14	0.622	0.451
	C09				
	C10	0.517	0.15	0.607	0.455
	C11		0.145	0.522	0.458
	C12				
	C13				
	C15		0.15	0.626	
	C17		0.12	0.529	0.470
	C18		0.15	0.657	0.454
	C19		0.18		
	C21		0.15	0.66	
	C22		0.16		
	C25	0.536	0.16		
	C27	0.548	0.16	0.565	0.463
	C28				
	C29		0.17		
	C30	0.504	0.127	0.567	0.464
	C31				
	Aver.	0.526	0.151	0.595	0.459
8葉・特	C01		0.23		0.641
	C23		0.15		0.454
	C26		0.16		

Table 16. Height of outer Column

outer column	Average (m)	Samples
Base (D-type)	0.574	2
Drum (D-type)	1.038	4
Drum (E-type)	1.063	3
Drum (C-type)	0.970	22
Capital with 12 leaves	0.596	5
sum	4.240	
Column H with Two E-type Drums	5.210	
Height of reeded fluting in E-type	0.383	
Height of readed fluting with Base	1.994	

Table 17. Height of inner Column

inner column	Average (m)	Samples
Base (A-type)	0.588	2
Drum (A-type)	1.118	1
Drum (B-type)	1.050	3
Drum (C-type)	0.970	22
Capital with 12 leaves	0.676	5
sum	4.401	
Column H with 2×E-type Drums	5.371	
Height of reeded fluting in B-type	0.347	
Height of readed fluting with Base	2.052	

Table 18. Architrave & Friaeze block

elements	measurements (m)							average (m)	measurements (m)	
	E04 corner	E16 (E11)	E17 corner (E18)	E41	E42	E25	E36		G14	G16
Length of block		2.435		2.431	2.413			2.426	-	-
Height of block	0.752	0.759	0.751	0.751	0.758	0.774	0.756	0.757	-	-
Architrave height	0.412	0.417	0.409	0.393	0.415	0.424	0.413	0.412	-	-
Fascia (lower) height	0.099	0.097	0.103	0.100	0.106	0.100	0.098	0.100	-	-
Fascia (middle) height	0.121	0.117	0.115	0.121	0.118	0.116	0.120	0.118	0.114	0.137
Fascia (top) height	0.140	0.146	0.138	0.140	0.138	0.136	0.126	0.138	0.129	0.143
top moulding	0.052	0.057	0.053	0.059	0.053	0.072	0.069	0.059	-	0.065
Frieze height	0.340	0.342	0.342	0.358	0.343	0.350	0.343	0.345	-	-
bull unit length	0.485	0.4855	0.477	0.4848	0.483		0.601	0.483	-	-
thickness (bottom)	0.258	0.257	0.270				0.293	0.270	-	-
width of bottom line	0.033	0.021	0.051				0.065	0.043	-	-
distance of bottomlin from surface	0.225	0.236	0.219				0.228	0.227	-	-
thickness (top)	0.334	0.320	0.366				0.384	0.351	-	-
height of clamp to baker	0.492	0.447	0.479				0.526	0.486	-	-

- 1) バッカー用のクランプ高さは、クランプ穴底面で記録。
- 2) 石材 (E04) (E17) は入り隅部材、(E42) (E43) は、祭壇前に倒れておいた部材
- 3) 石材 (E25) は、バラディーグマと思われる
- 4) 石材 (E36) の Architrave 高さは推測（それほど大きな違いは無いと考えられる）
- 5) 石材 (E36) の bull 間の距離は、唯一、他と異なるので、平均値から排除

Table 19. Backer block of Architrave with Frieze

	measurements (m)				average (m)
	A01	A02	A08	A04	
block height with top projection	0.535	0.516		0.514	0.522
block height	0.515	0.504		0.507	0.509
Architrave height	0.304	0.296	0.299	0.310	0.302
Fascia (lower) height	0.071	0.076	0.071	0.072	0.073
Fascia (middle) height	0.088	0.085	0.091	0.081	0.086
Fascia (top) height	0.097	0.096	0.097	0.095	0.096
top moulding	0.048	0.039	0.040		0.042
Frieze height	0.211	0.208		0.197	0.205
top projection at edge	0.020	0.012		0.007	0.013
thickness (bottom)	0.312	0.304	0.292	0.326	0.309
width of bottom line	0.082	0.075	0.057	0.081	0.074
distance of bottomlin from surface	0.230	0.229	0.235	0.245	0.235
thickness (top)	0.353	0.367			0.360
height of clamp to flont block	0.502	0.489			0.496

Table 23. Sima Block

elements	measurements (m)		average (m)
	S01	S02	
height of sima	0.163	0.160	0.162
width of roof tile	0.481	0.488	0.484
incline (sima表面が垂直である場合)	0.120	0.141	0.130

Table 20. Proportion between each elements of Front block

elements	proportion							average
	E04	E17	E16	E42	E43	E25	E36	
Architrave height / Block height	0.548	0.545	0.549	0.523	0.547	0.548	0.546	0.544
Frieze height / Block height	0.452	0.455	0.451	0.477	0.453	0.452	0.454	0.456
Fascia (lower) height / Architrave height	0.240	0.252	0.233	0.254	0.255	0.236	0.237	0.244
Fascia (middle) height / Architrave height	0.294	0.281	0.281	0.308	0.284	0.274	0.291	0.287
Fascia (top) height / Architrave height	0.340	0.337	0.350	0.356	0.333	0.321	0.305	0.335
top moulding / Architrave height	0.126	0.130	0.137	0.150	0.128	0.170	0.167	0.144

Table 21. Proportion between each elements of Backer block

	proportion				average	実測値 平均 (m)	理論値 (m)	差 (m)
	A01	A02	A08	A4				
Architrave height / Block height	0.590	0.587		0.568	0.582	0.300	0.277	0.023
Frieze height / Block height	0.410	0.413		0.432	0.418	0.210	0.232	-0.022
Fascia (lower) height / Architrave height	0.234	0.257	0.237	0.248	0.244	0.073	0.073	0.000
Fascia (middle) height / Architrave height	0.289	0.287	0.304	0.279	0.290	0.086	0.085	0.001
Fascia (top) height / Architrave height	0.319	0.324	0.324	0.327	0.324	0.096	0.099	-0.003
top moulding / Architrave height	0.158	0.132	0.134	0.146	0.142	0.042	0.043	0.000

Table 22. Cornice Block

elements	measurements (m)							average (m)	measurements (m)	
	G01	G05	G11	G12	G13	G15	G17		G14	G16
length of block	-	-	1.223	1.121	-	1.103	-	1.149	-	-
height of cornice	0.299	-	-	0.270	0.307	0.306	0.269	0.290	-	0.288
from bottom to dentil	0.041	-	0.040	0.033	0.030	0.050	0.029	0.037	-	0.025
dentil hight	0.094	0.096	0.094	0.090	0.080	0.097	0.101	0.093	-	0.099
form top of dentil to top moulding	0.164	0.147	-	0.147	0.197	0.159	0.139	0.159	-	0.164
dentil width	0.071	0.061	0.060	0.069	0.070	0.081	0.067	0.068	0.065	0.063
via between dentils	0.029	0.027	0.033	0.029	0.033	0.034	0.035	0.031	0.033	0.028
incline	0.171	-	0.213	0.125	0.114	0.175	0.275	0.179	-	-
projection from bottom to top moulding	0.270	0.265	-	-	0.307	0.289	0.284	0.283	-	-
projection from inner eage of dentil to corona	0.243	0.231	-	0.232	0.235	0.232	0.221	0.232	0.252	0.240
projection of dentil	-	0.085	0.097	0.090	0.115	0.127	0.090	0.101	0.091	0.115
projection of lower moulding	-	-	-	-	0.040	0.037	0.031	0.036	-	-
Max bottom width of stone	0.265	0.240	0.526	0.638	0.271	0.593	0.595	-	0.309	0.489
bottom width without space for cross beam	-	-	0.364	-	-	0.255	-	0.310	-	-
width of space for cross beam	-	-	0.390	-	-	0.289	-	0.340	-	-

Table 24. Measurements on the Plan

elements		(m)	reference
Inner Length of rear wall	N & S Stoa	71.917	calculation
	E & W Stoa	66.824	
Distance between axes of corner Columns	N & S Stoa	53.309	calculation
	E & W Stoa	48.174	
Length of Stylobate	N & S Stoa	52.409	calculation
	E & W Stoa	47.274	
Length of Crepis	N & S Stoa	51.941	2 samples
	E & W Stoa	46.806	2 samples
Axial Intercolumniation	N & S Stoa	2.423	calculation
	E & W Stoa	2.409	
Depth of Stoa between front edge of stylobate and toichobate of rear wall	N Stoa	9.774	6 samples
	S Stoa	9.776	3 samples
	E Stoa	9.843	6 samples
	W Stoa	9.664	5 samples
Distance from outer edge of stylobate to Axis of inner Column	N Stoa	5.278	12 samples
	S Stoa	5.273	8 samples
	E Stoa	5.244	10 samples
	W Stoa	5.272	6 samples
Distance from centre of outer column to axis of inner Column	N Stoa	4.828	calculation
	S Stoa	4.823	
	E Stoa	4.794	
	W Stoa	4.822	
Tread Width of Crepis		0.234	30 samples
Width of outer Plinth(square)		0.860	13 samples
setback of Plinth from edge of stylobate		0.020	12 samples
distance from edge of stylobate to centre of plinth		0.450	calculation

Table 25. Measurements of Order

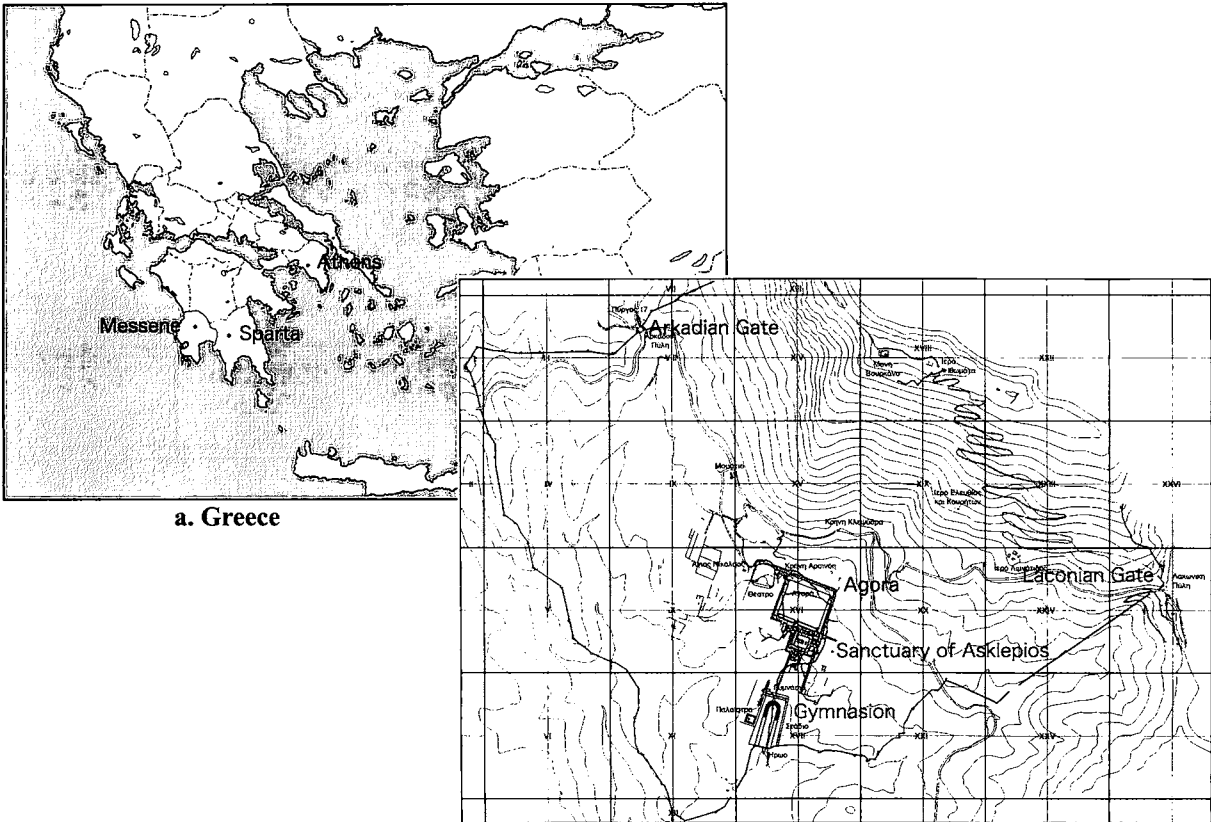
Outer Order		(m)	reference
Crepis height		0.223	84
Stylobate height		0.202	27
Plinth height		0.185	7
Height of Column with Base		5.210	calculation
Height of reeded fluting with Base		1.994	calculation
Diameter of Base		0.675	4
Height of Base		0.220	3
lower Diameter		0.626	4
upper Diameter		0.526	4
Capital Height		0.457	6
Architrave Thickness (bottom)		0.578	5 & 4
Height of Architrave & Frieze Block		0.757	7
Height of Architrave		0.412	7
Height of Frieze		0.345	7
Height of Baker		0.509	4
Height of Architrave		0.300	3
Height of Frieze		0.209	calculation
Height of Baker with top projection		0.522	3
Thickness of Architrave & Frieze Block (top)		0.351	4
Thickness of Backer (top)		0.360	2
Height of Cornice		0.290	5
Height of Sima		0.162	2
Height of Antefix (上部が若干欠けている)		0.243	1

Inner Order		(m)	reference
Diameter of Plinth		0.900	32
Plinth height		0.265	15
Height of Column with Base		5.371	calculation
Height of reeded fluting with Base		2.052	calculation
Diameter of Base		0.710	6
Height of Base		0.224	5
lower Diameter		0.667	7
upper Diameter		0.552	4
Capital Height		0.593	4

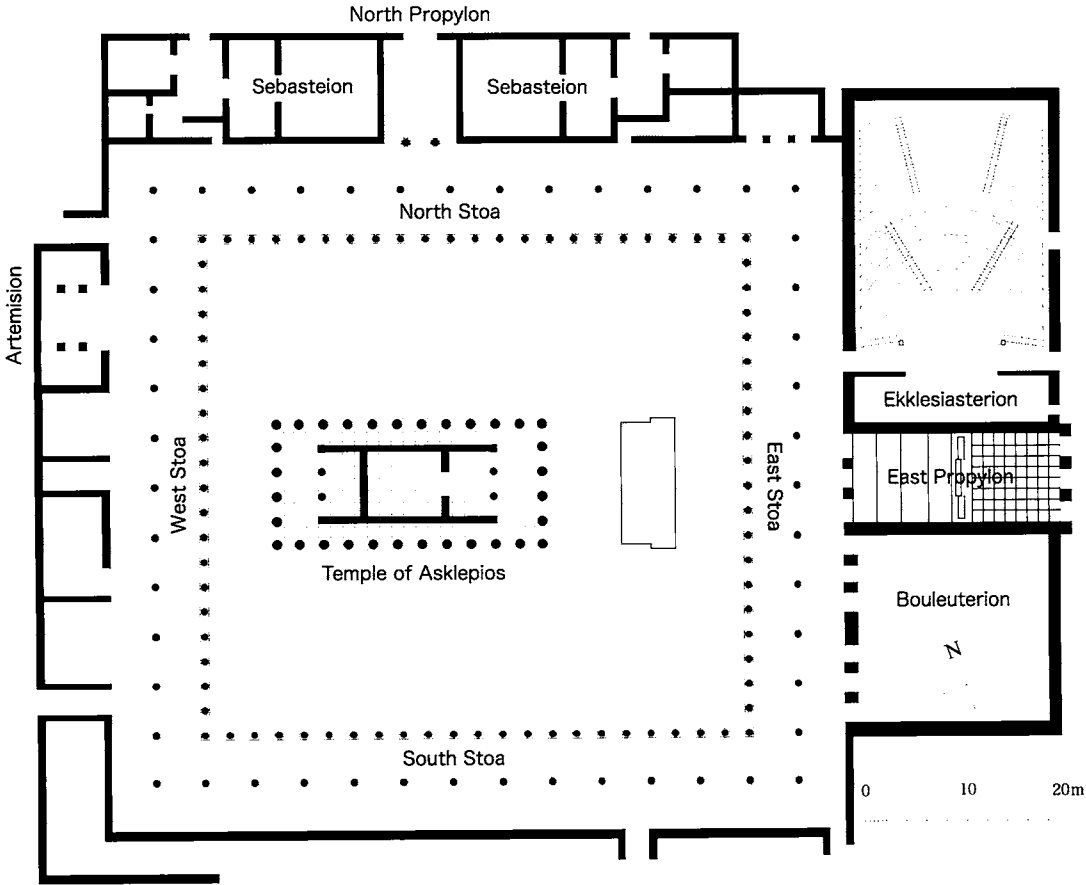
Rear Wall		(m)	reference
Height of Toichobate		0.239	27
Height of Orthostate		0.719	15

Table 26. Levels of Stylobate, Plinth & Toichobate

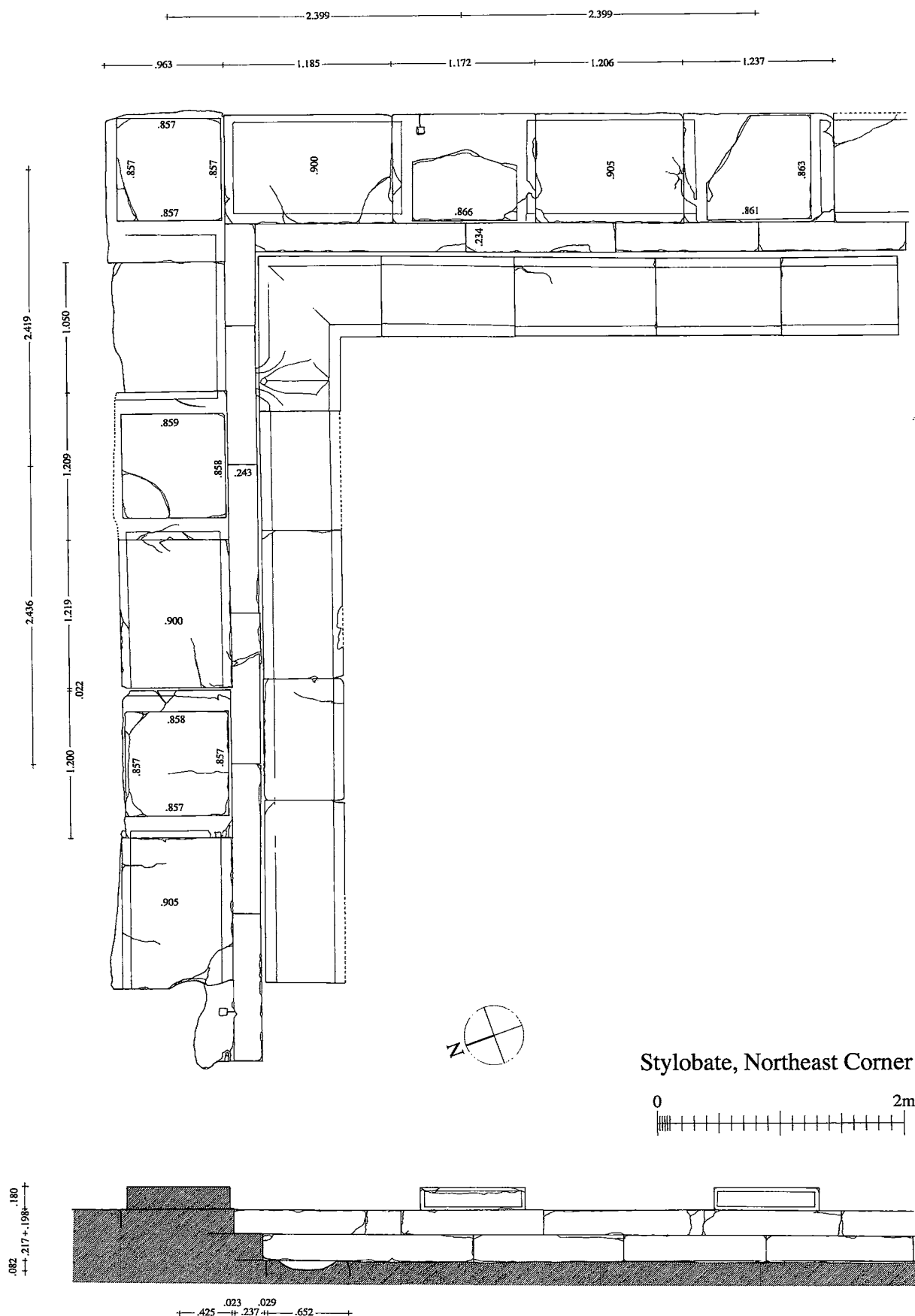
elements		height (m)	Level from Crepis	Level from Stylobate
outer column	Crepis	0.223	± 0.000	
	Stylobate	0.202	+ 0.202	± 0.000
	Plinth	0.185	+ 0.387	+ 0.185
inner column	Stylobate		+ 0.265	+ 0.062
	Plinth	0.265	+ 0.529	+ 0.327
Wall	Euthynteria		+ 0.329	+ 0.126
	Toichobate	0.239	+ 0.567	+ 0.365

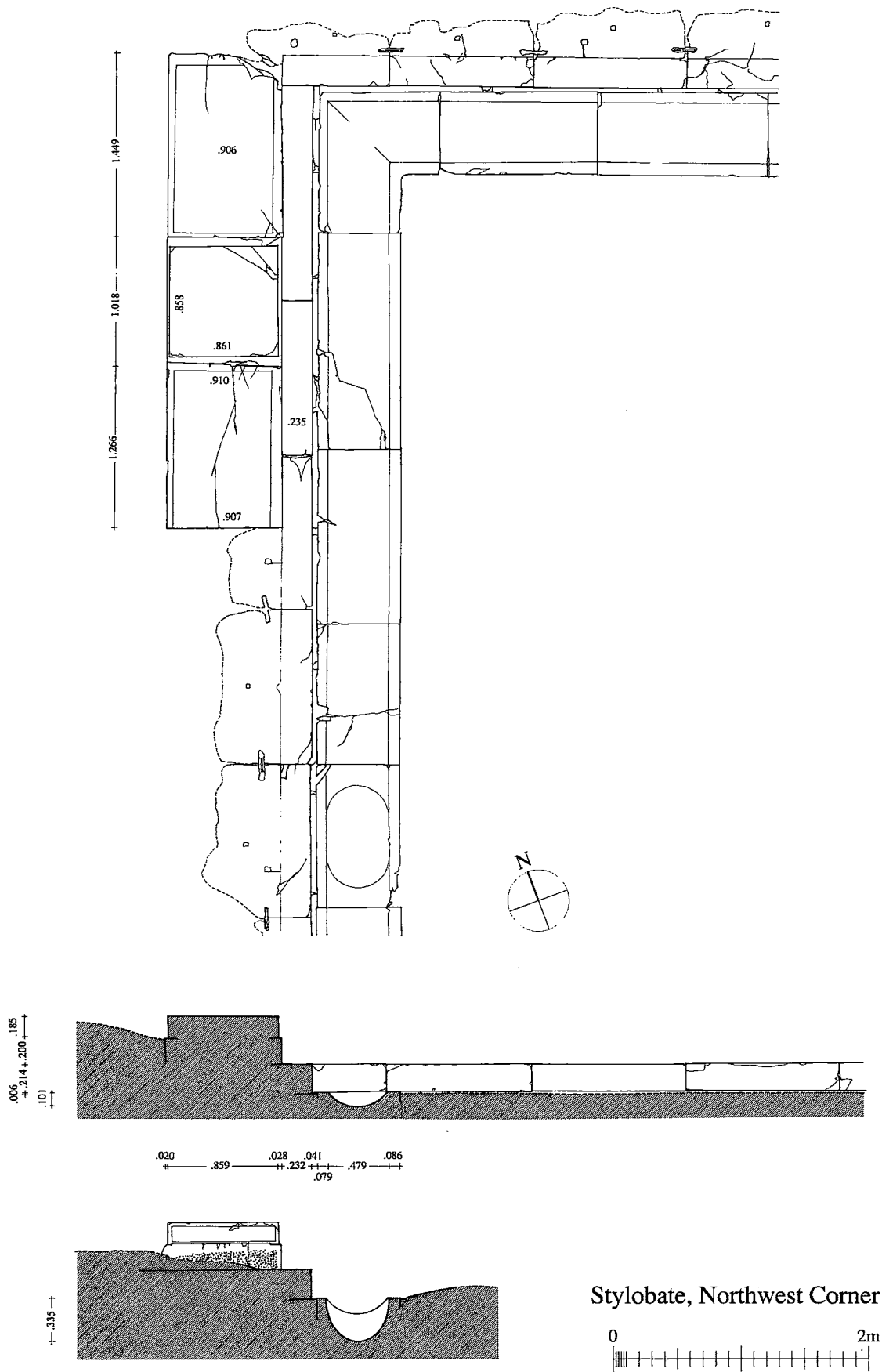


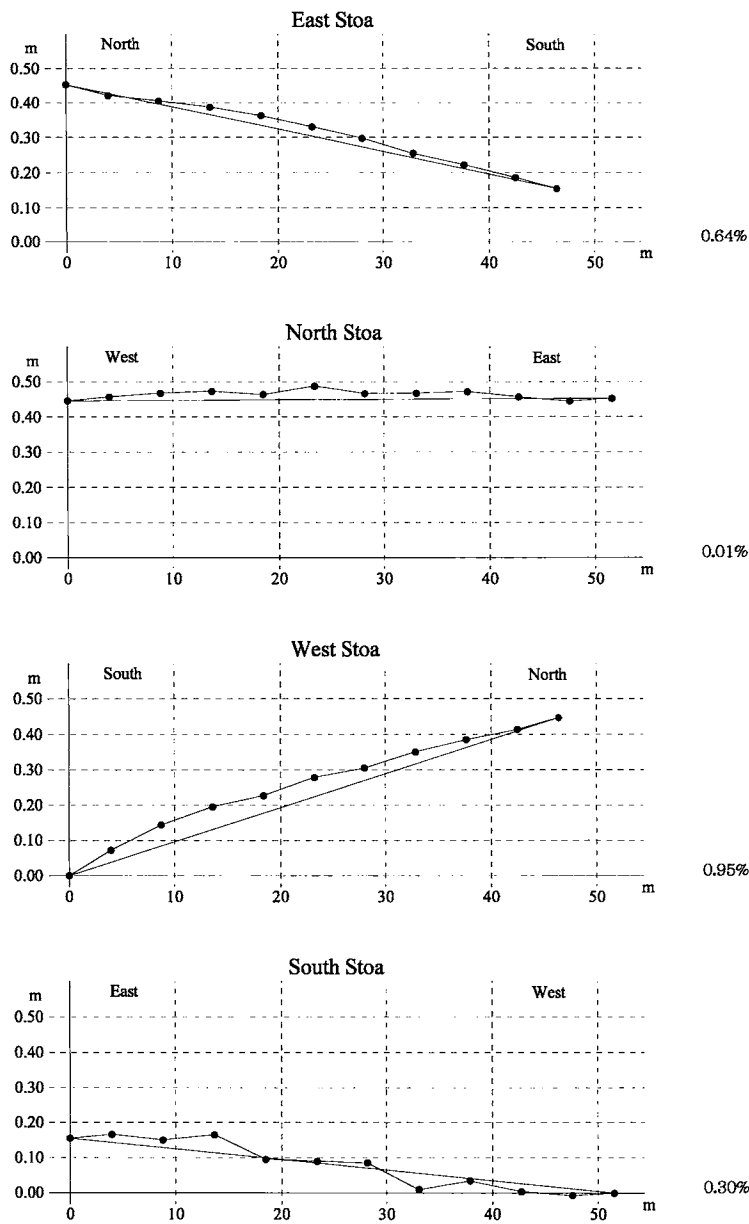
b. Ancient Messene (P. G. Themelis, Ancient Messene, Athens 2003, Fig.18)



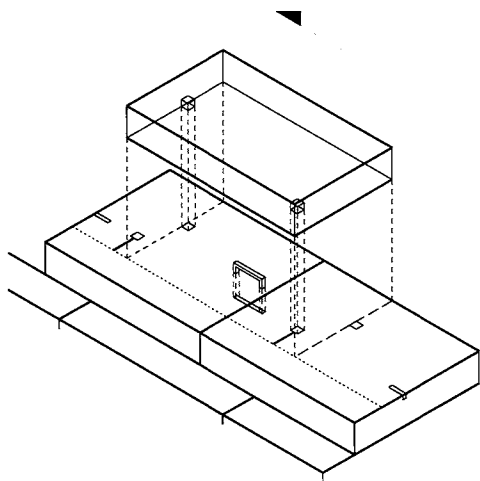
c. Reconstructed Plan of the Sanctuary of Asklepios



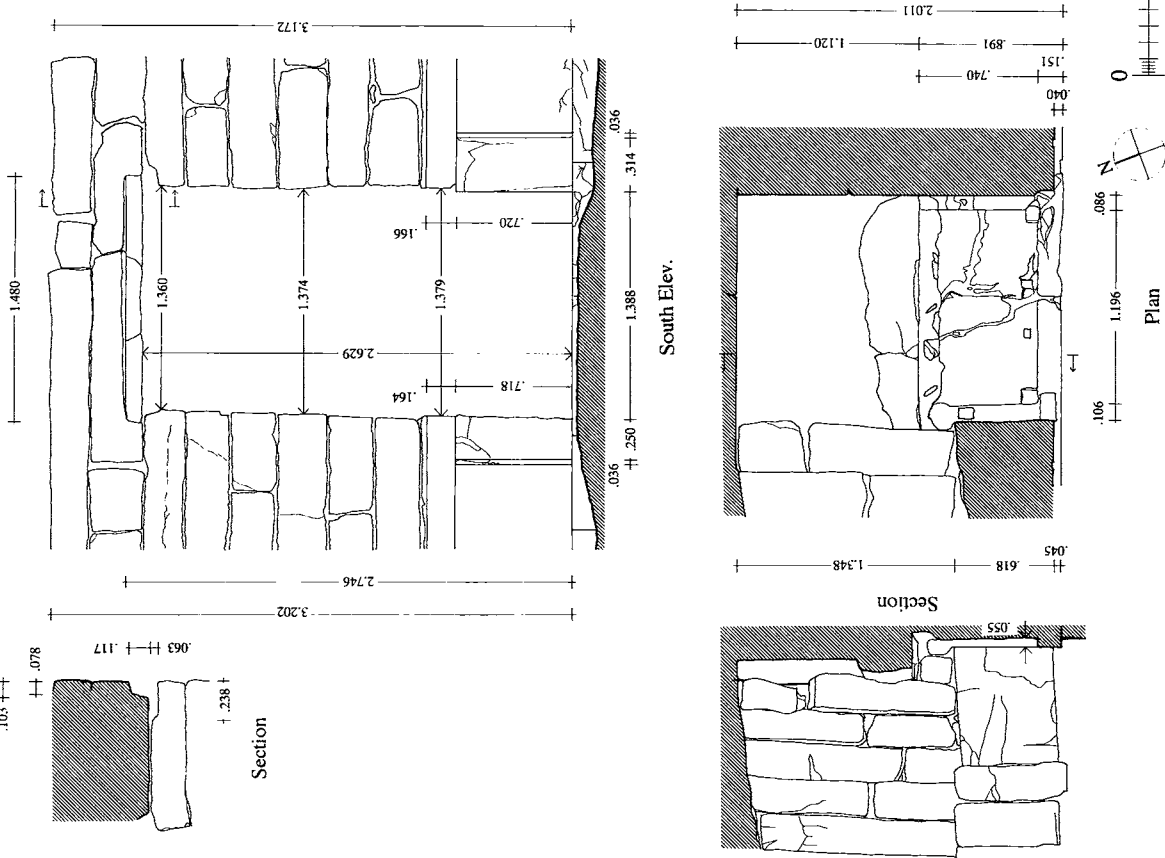
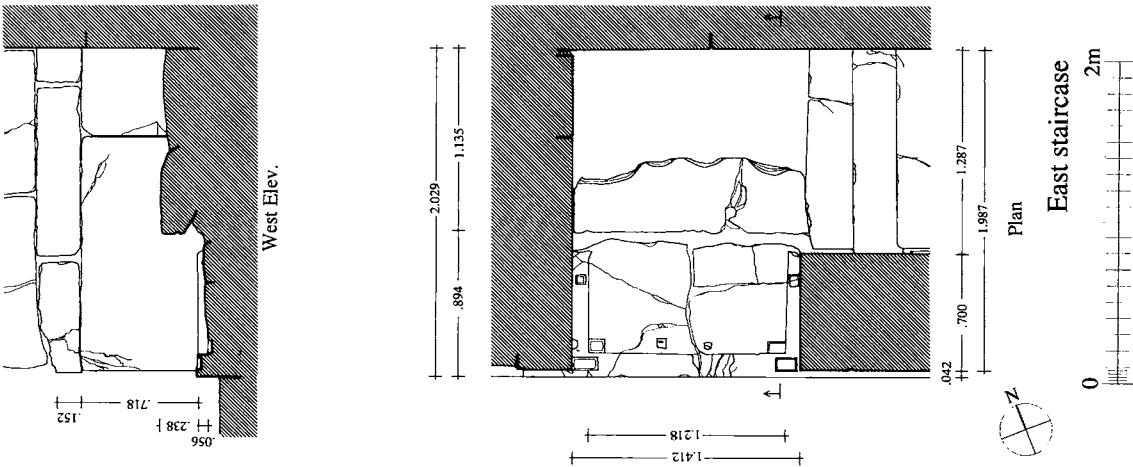


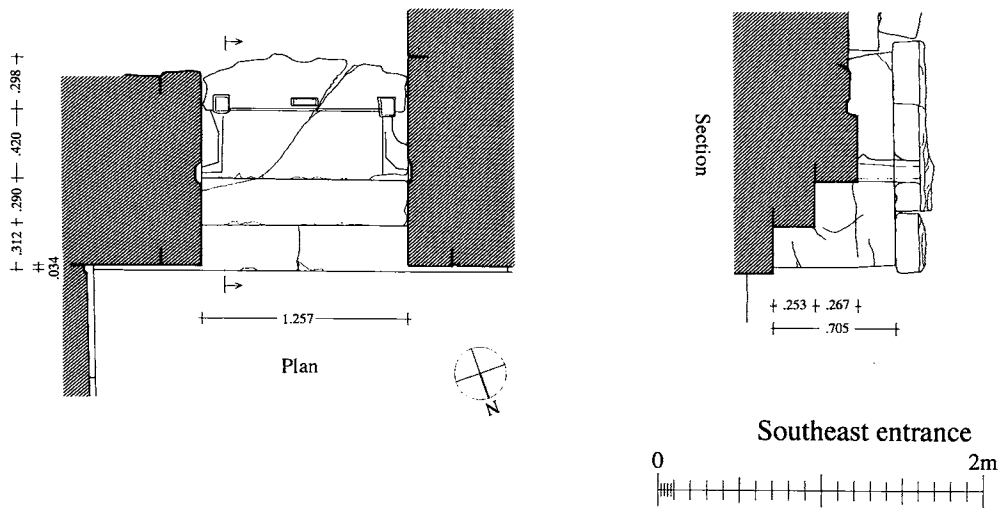
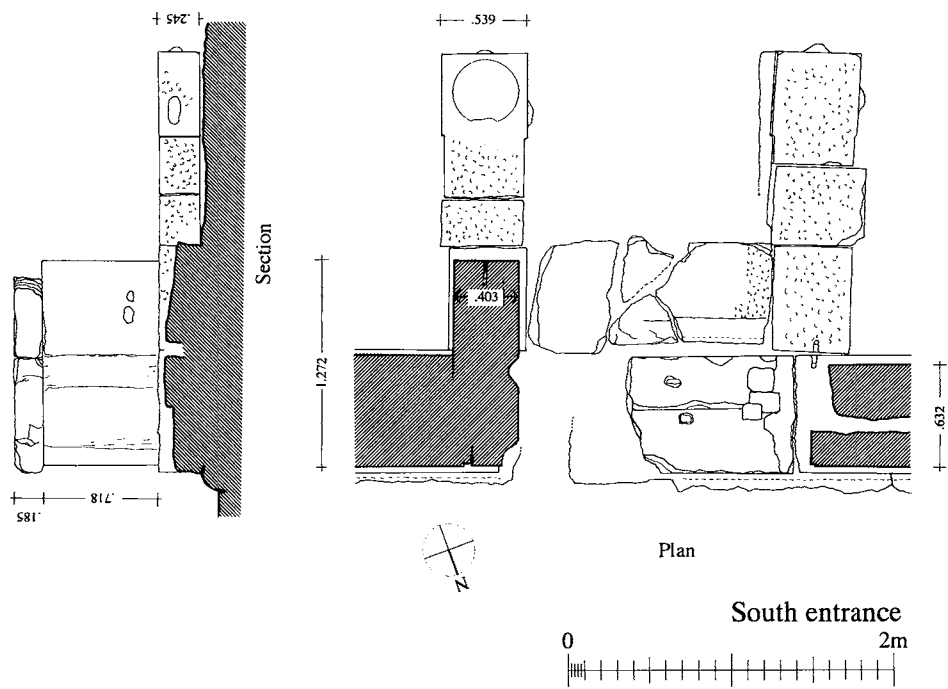


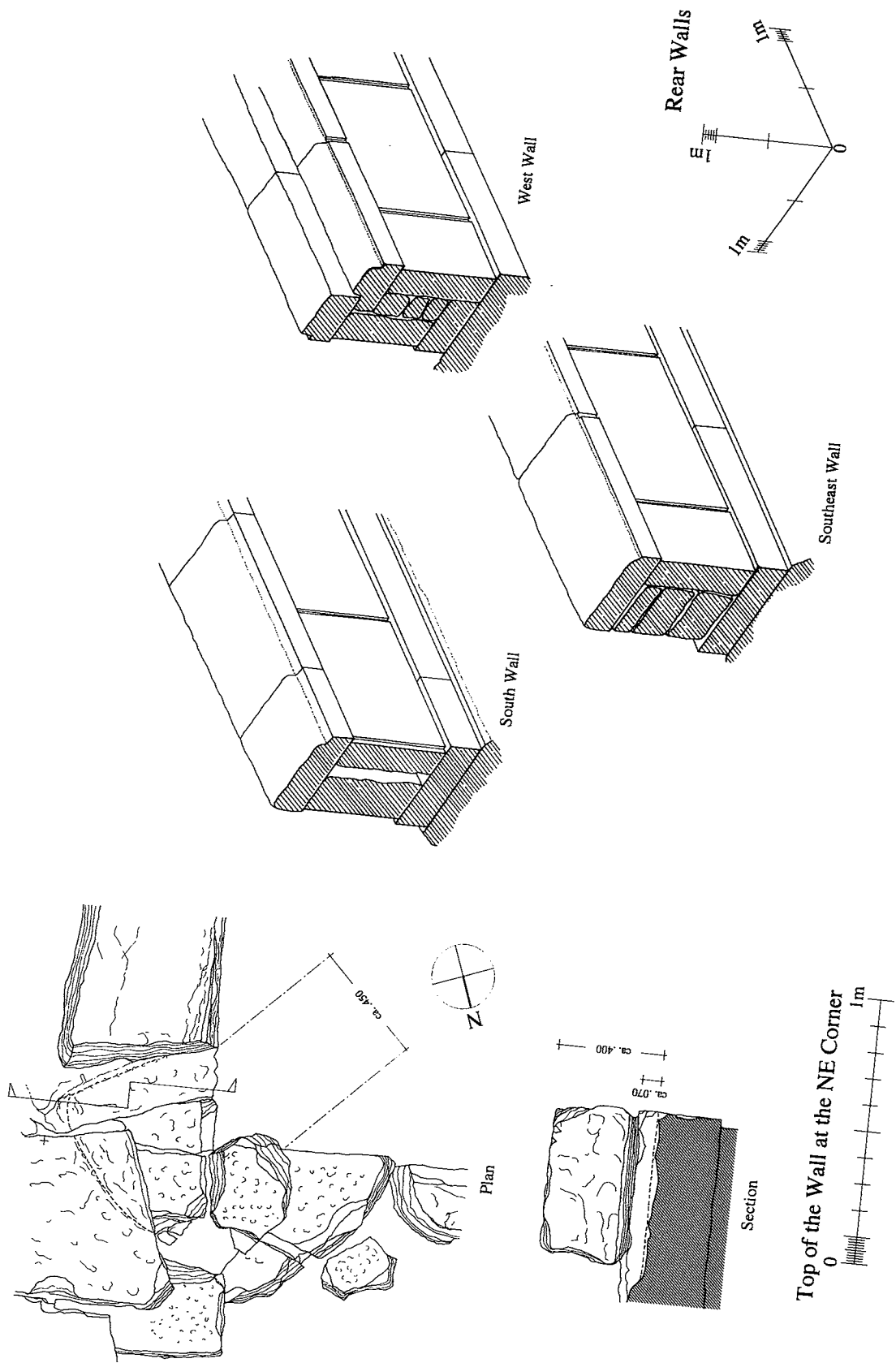
a. Level and slope of Crepis

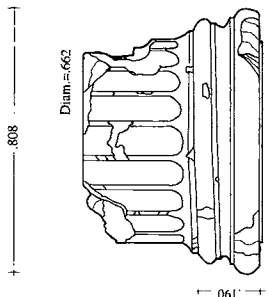
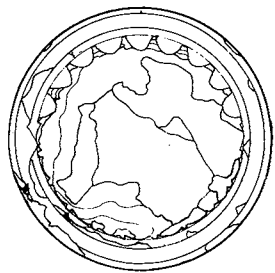
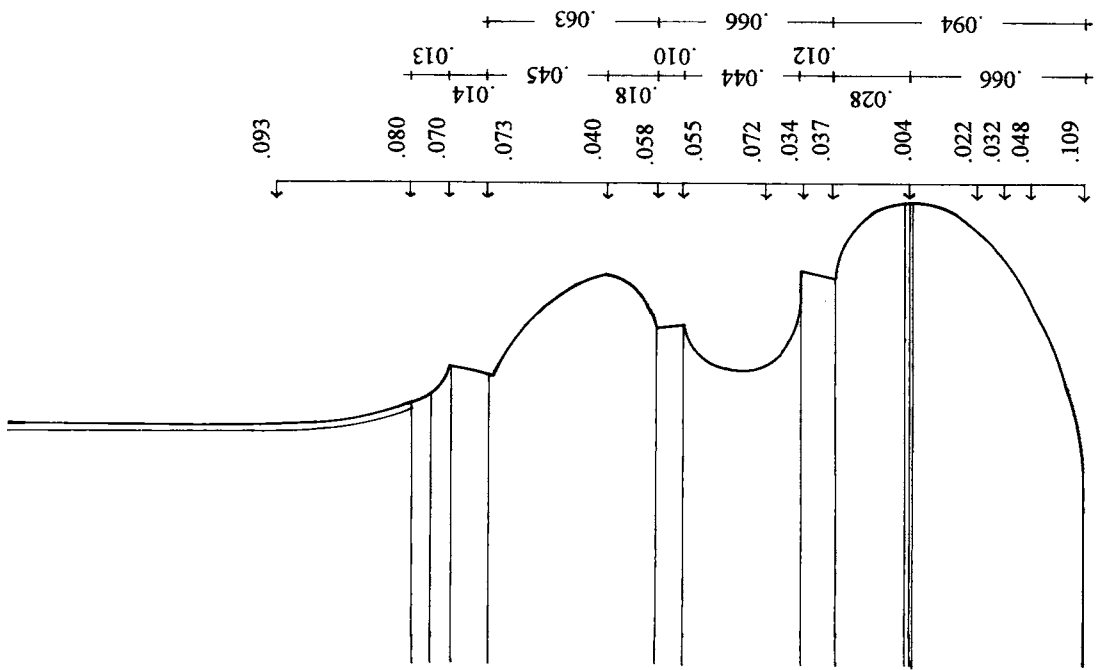


b. Placement order of bocks of Krepidoma

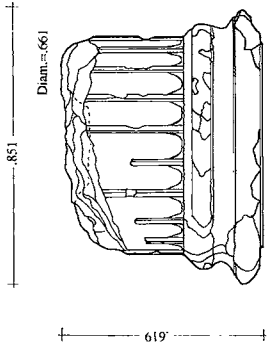
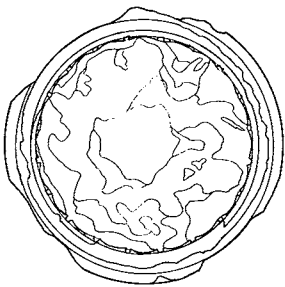




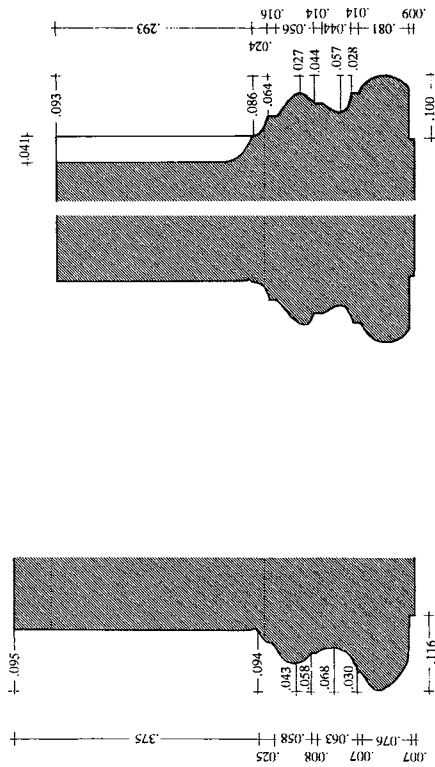


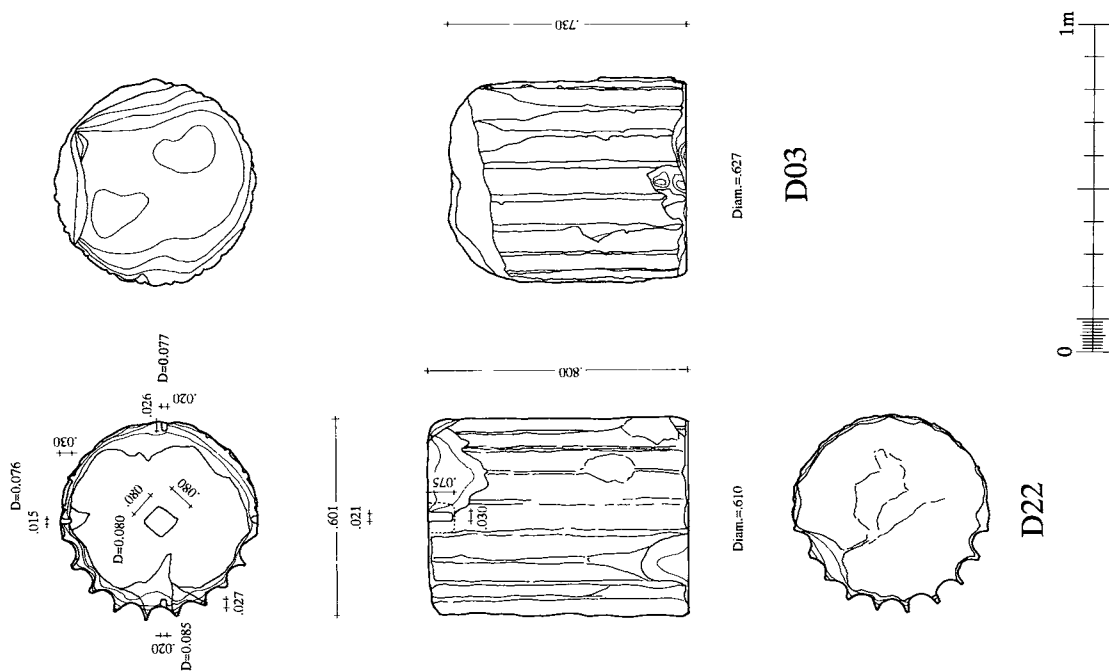
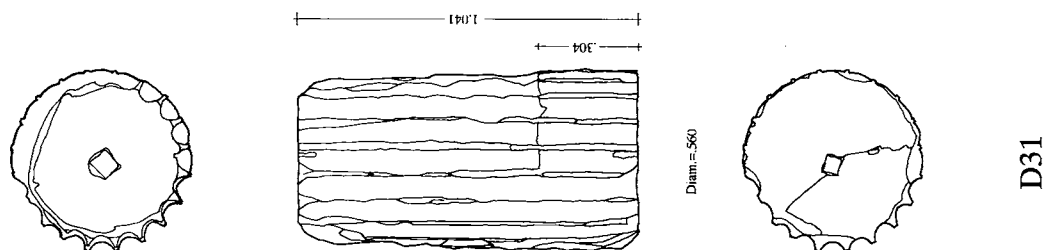
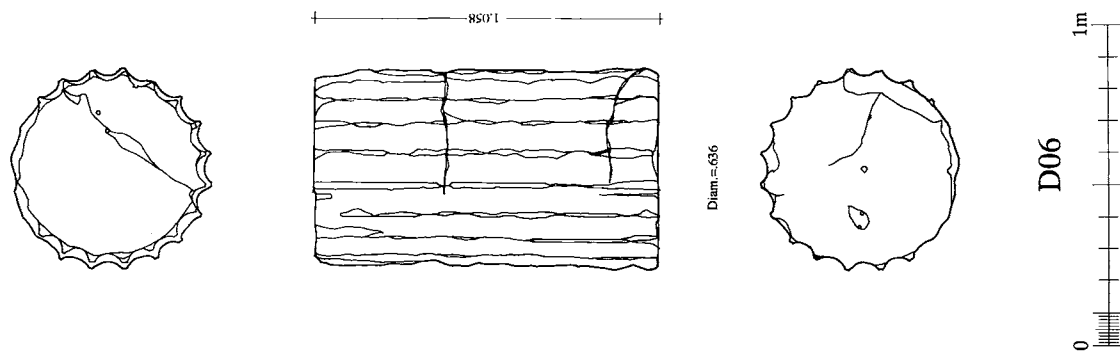


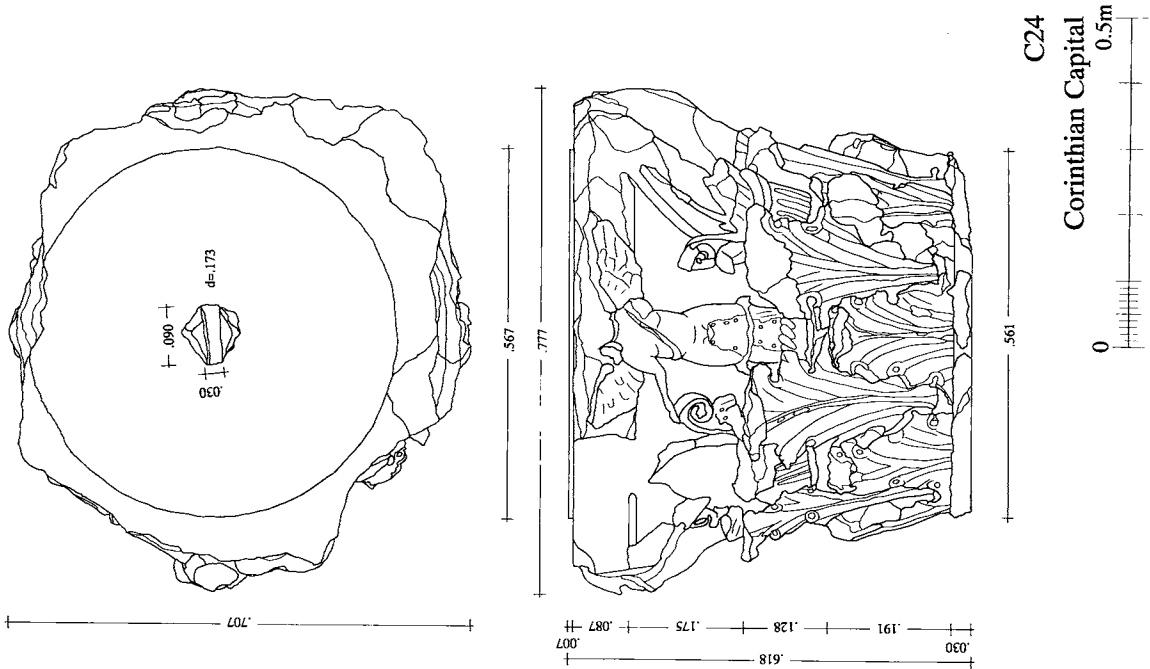
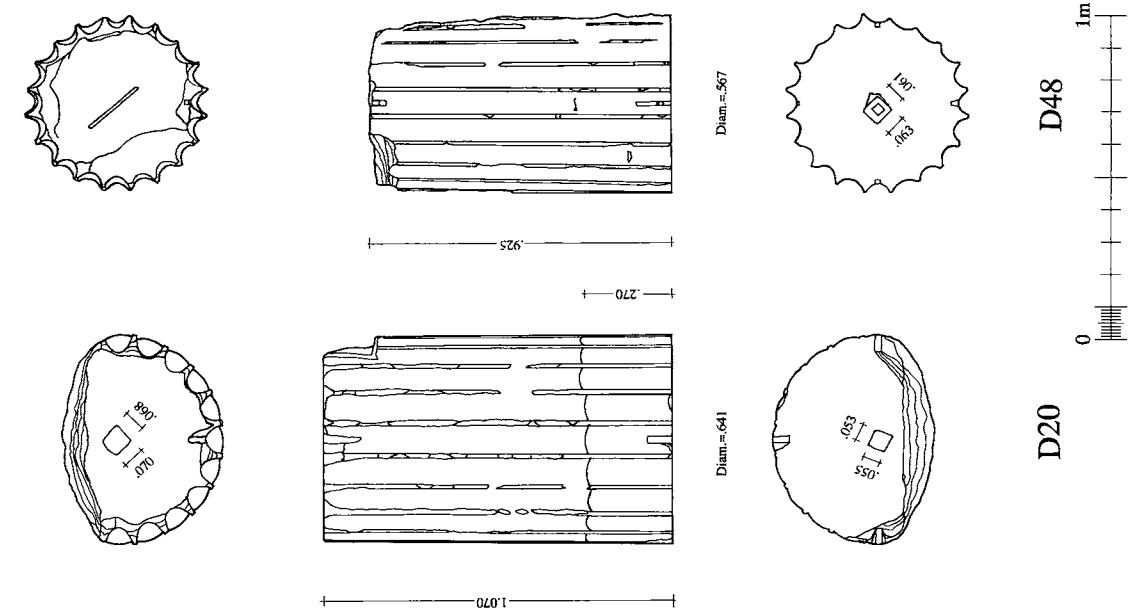
B09

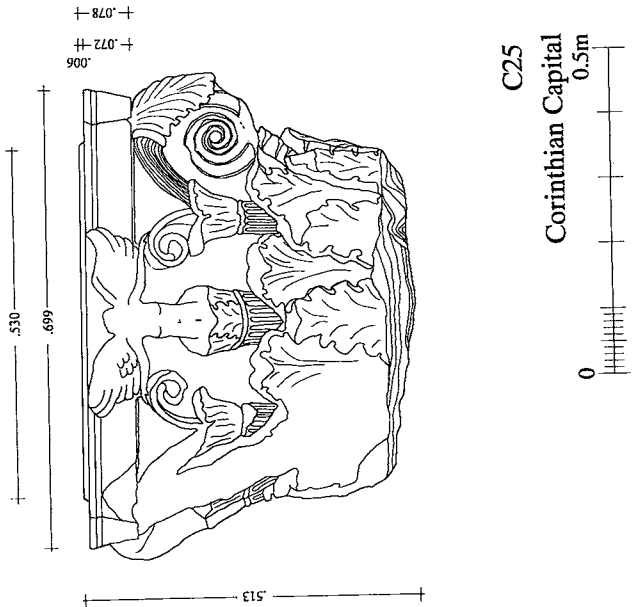
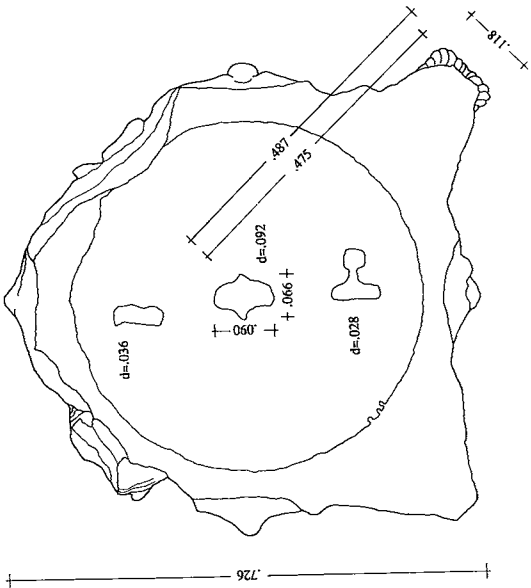
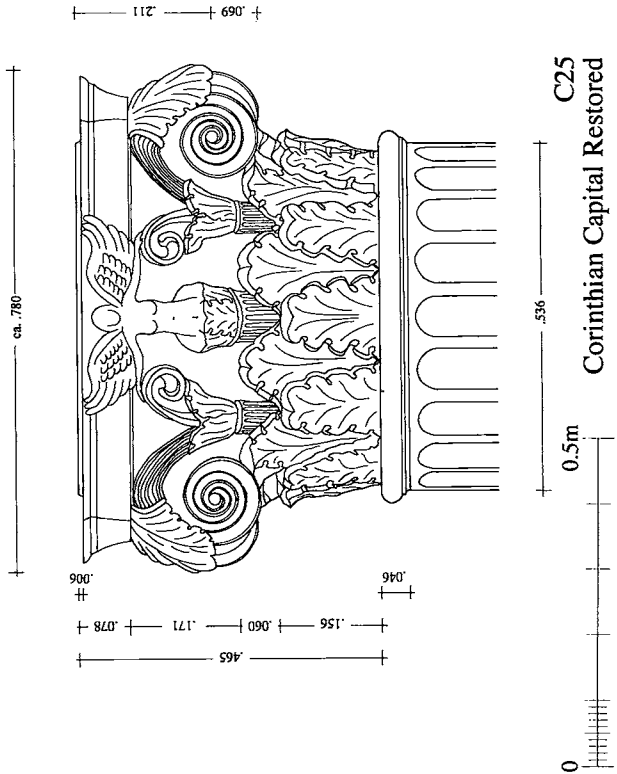
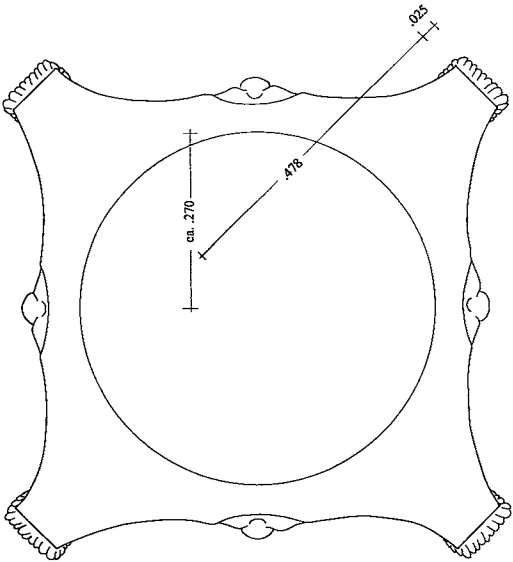


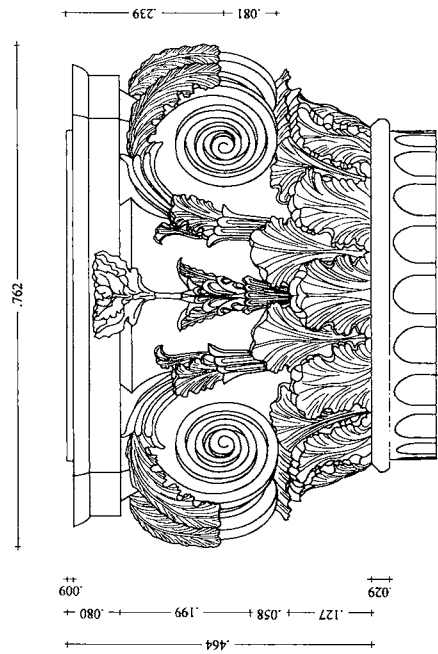
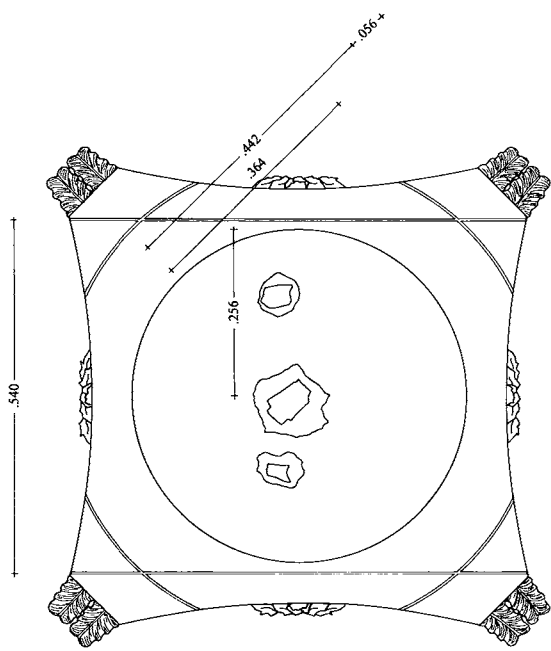
B04



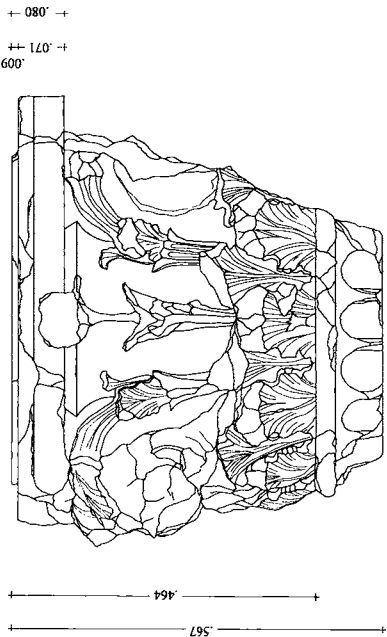
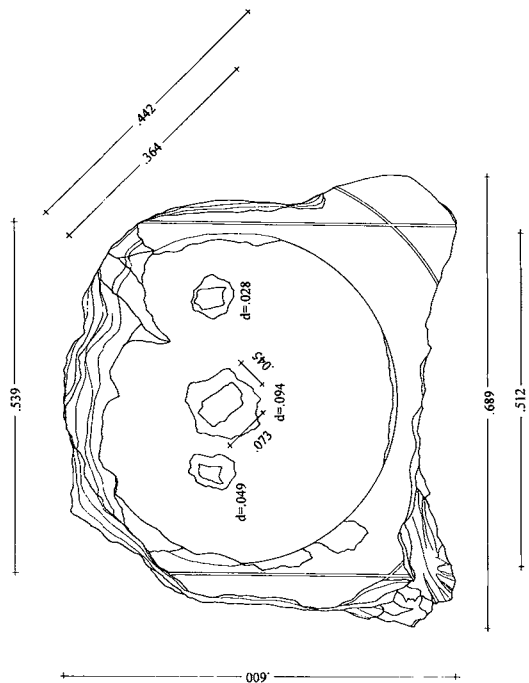




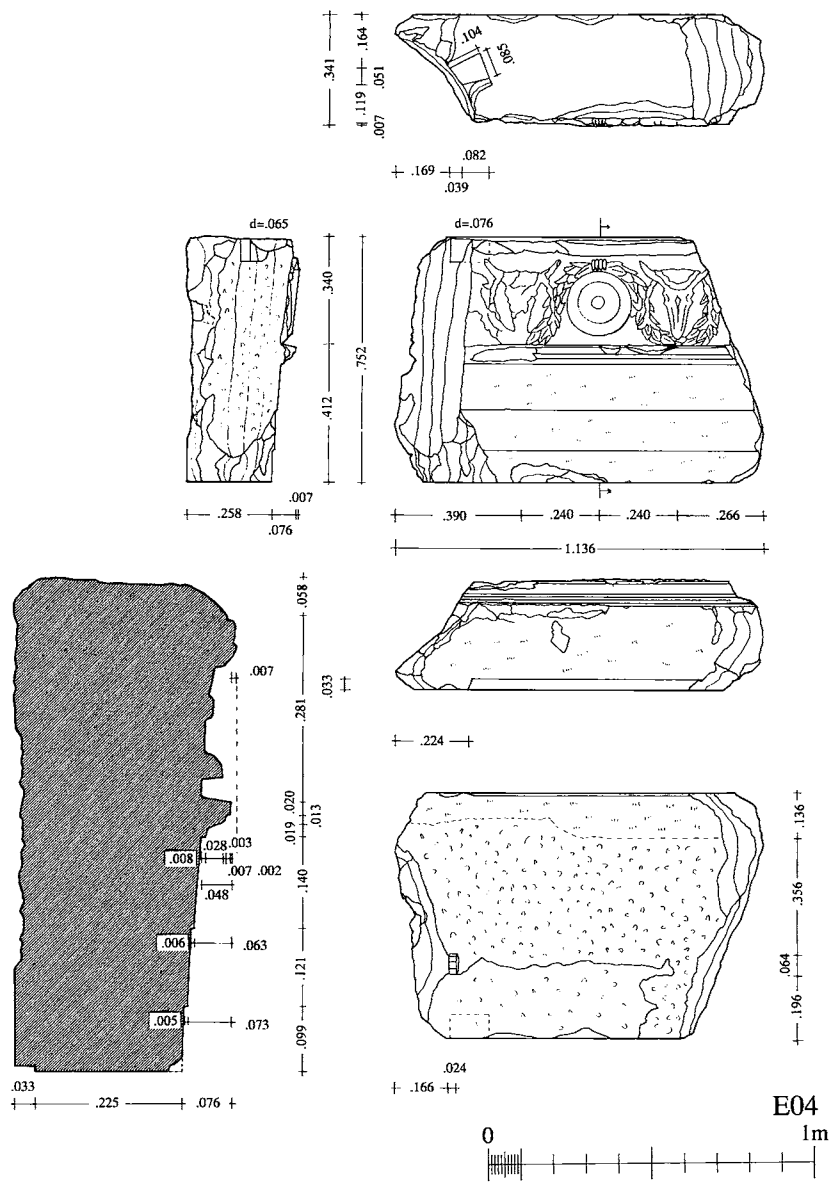


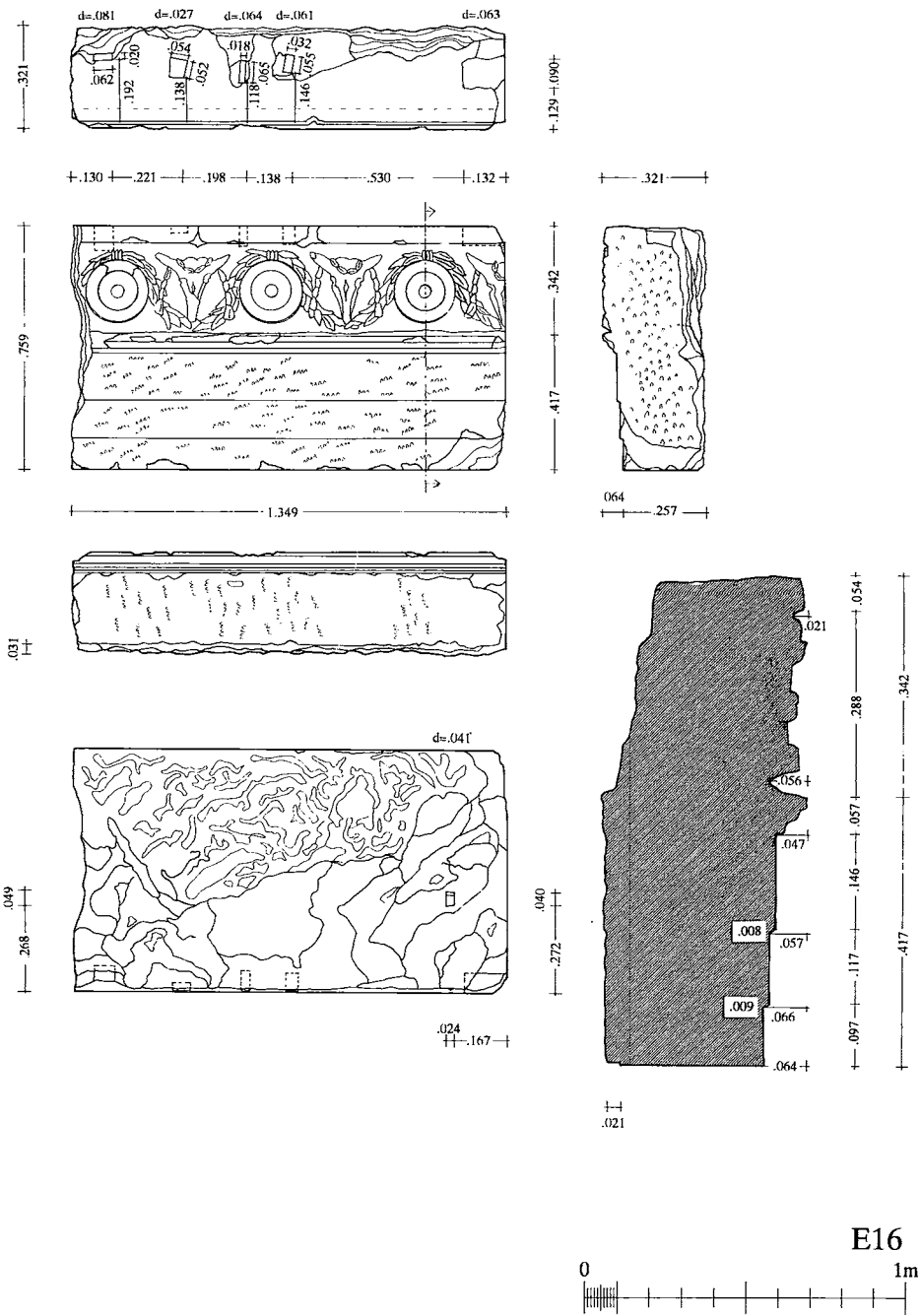


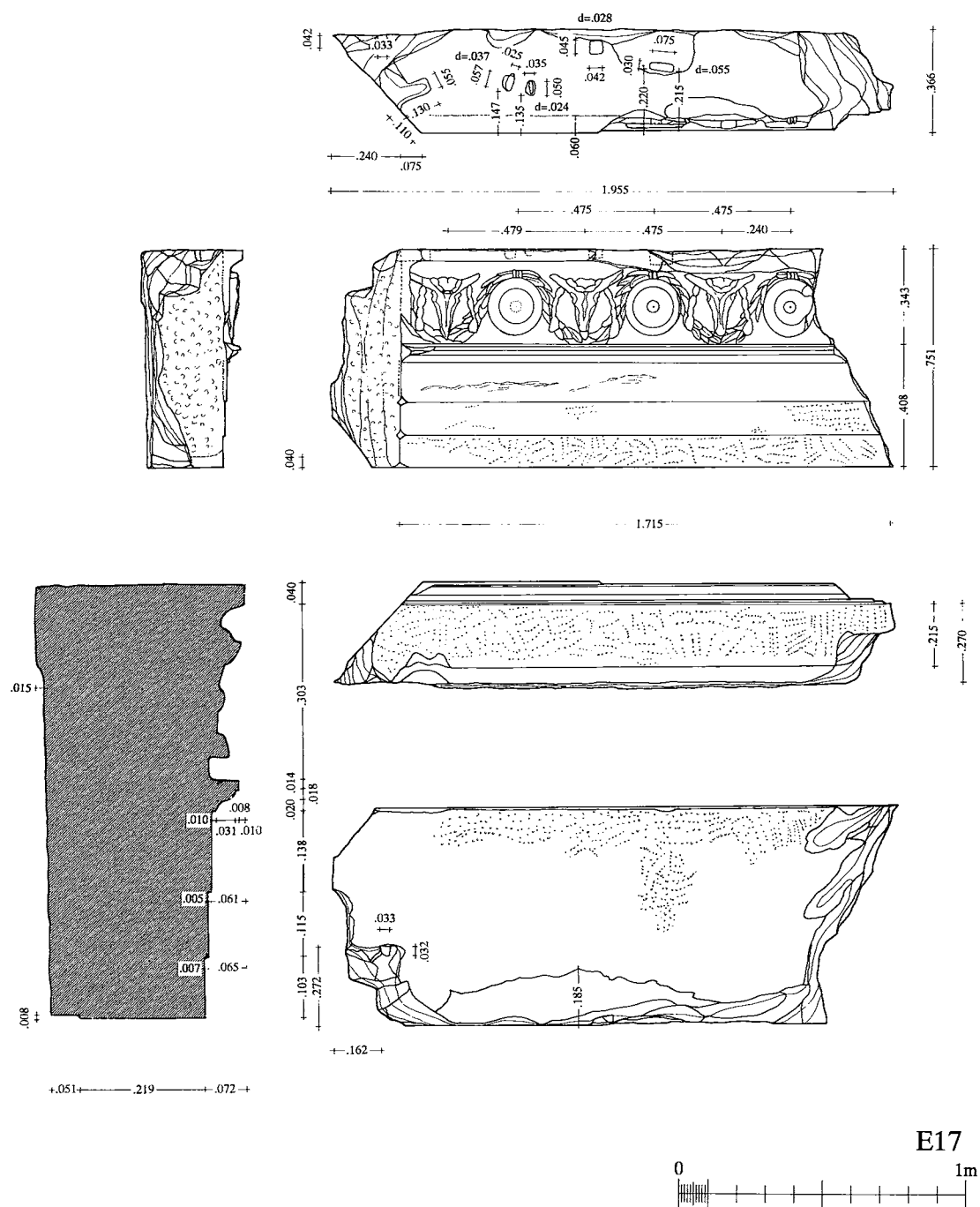
C30
Corinthian Capital Restored
0 0.5m

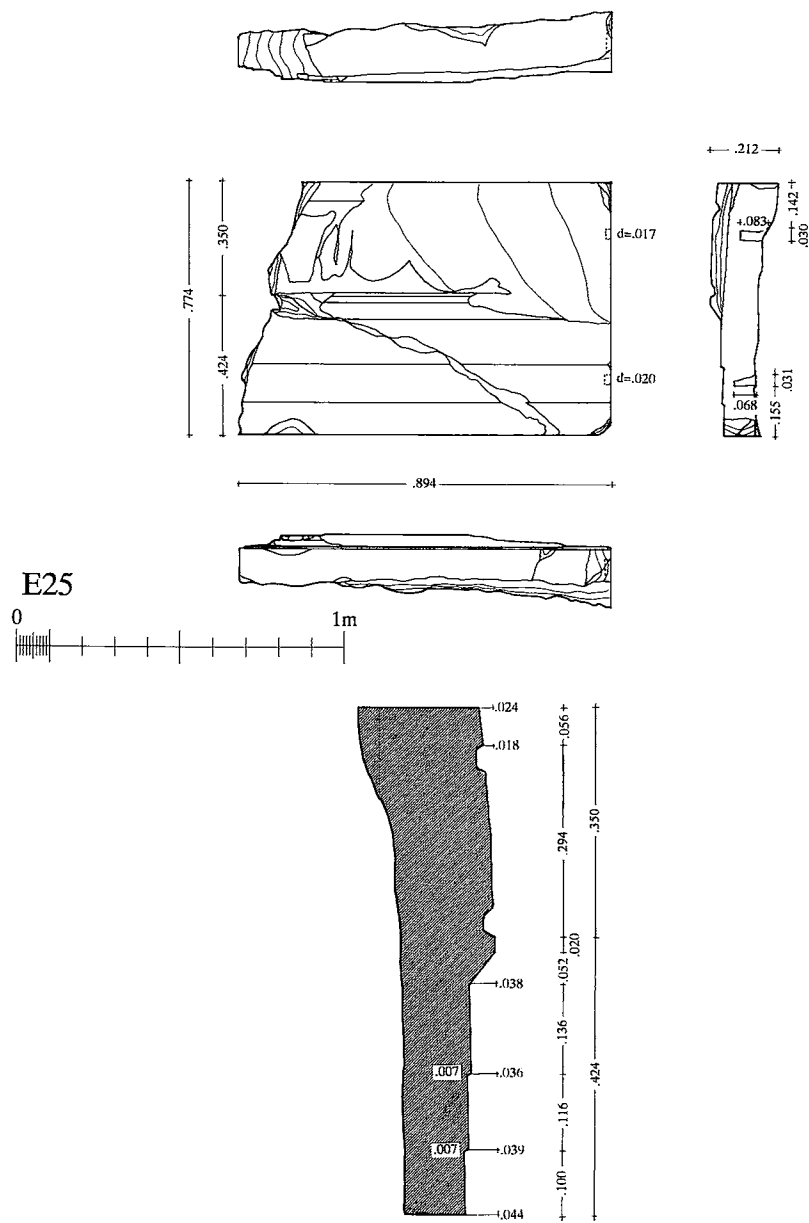


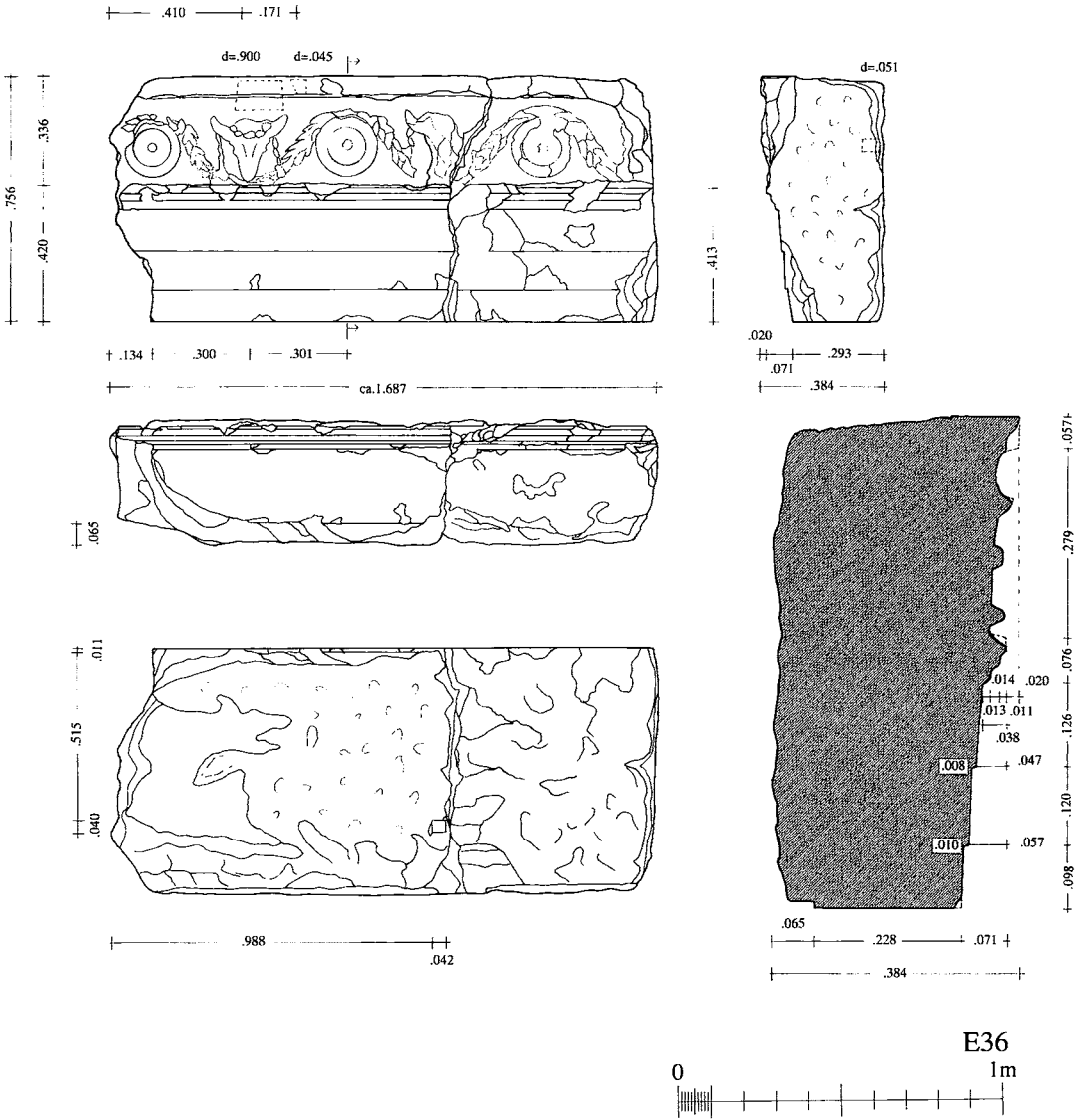
C30
Corinthian Capital
0 0.5m

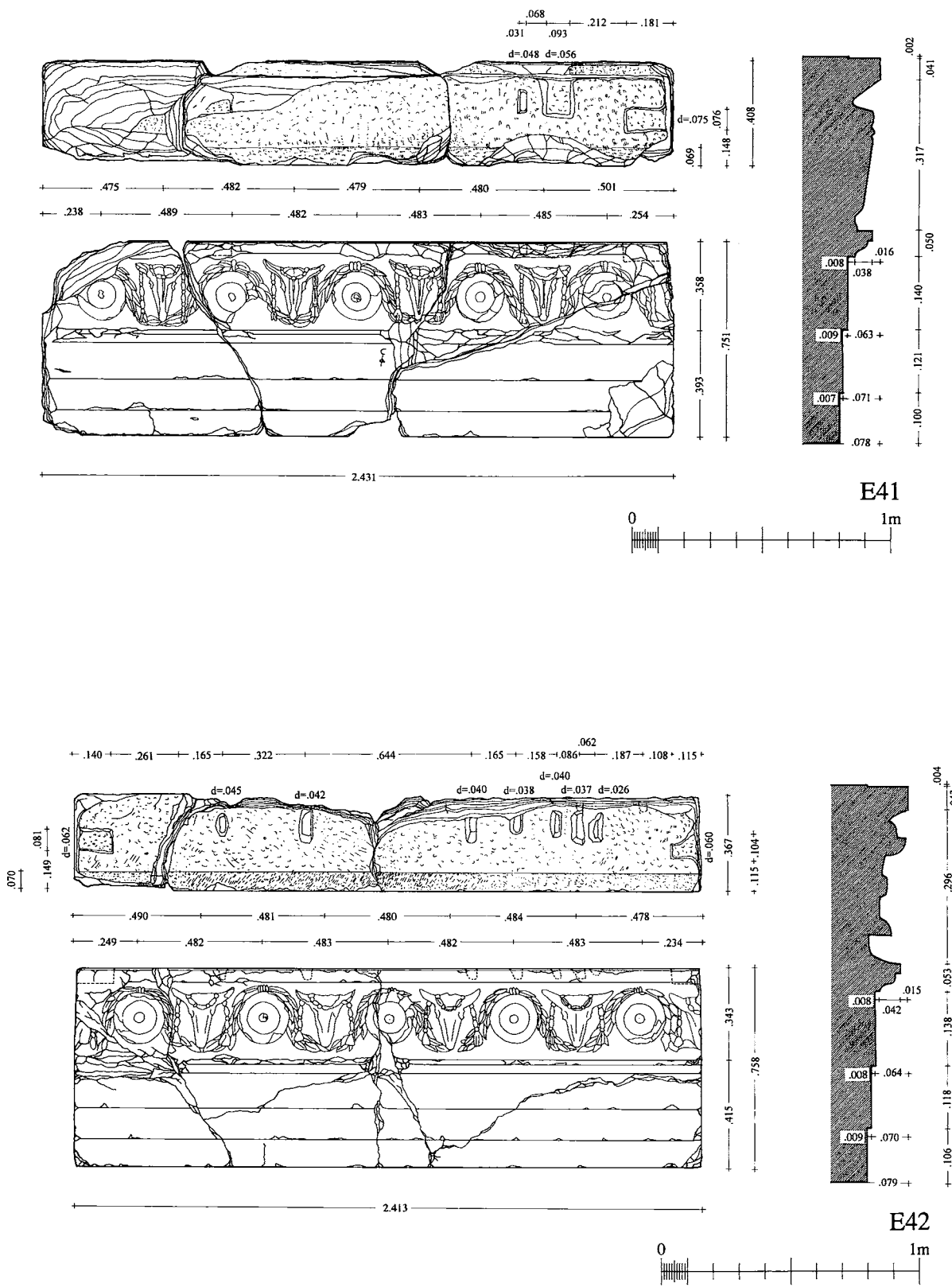


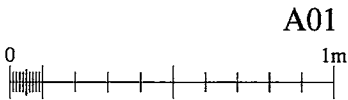
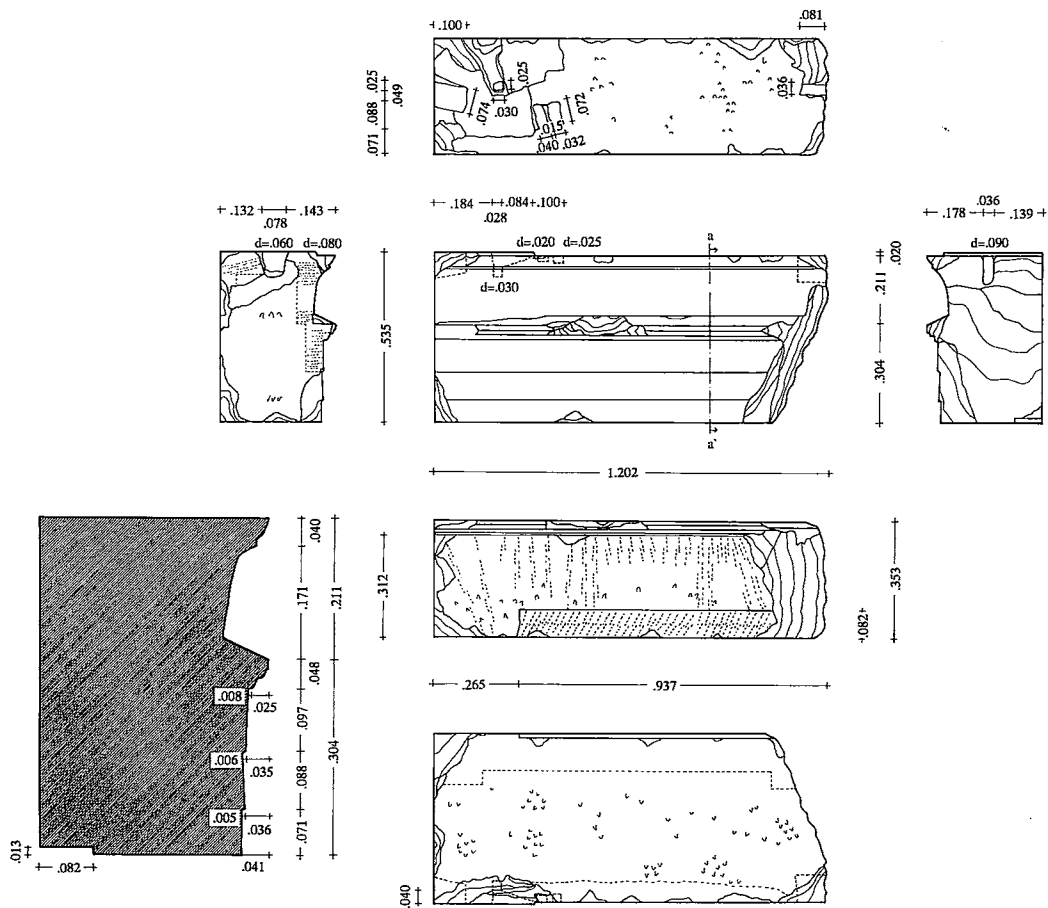


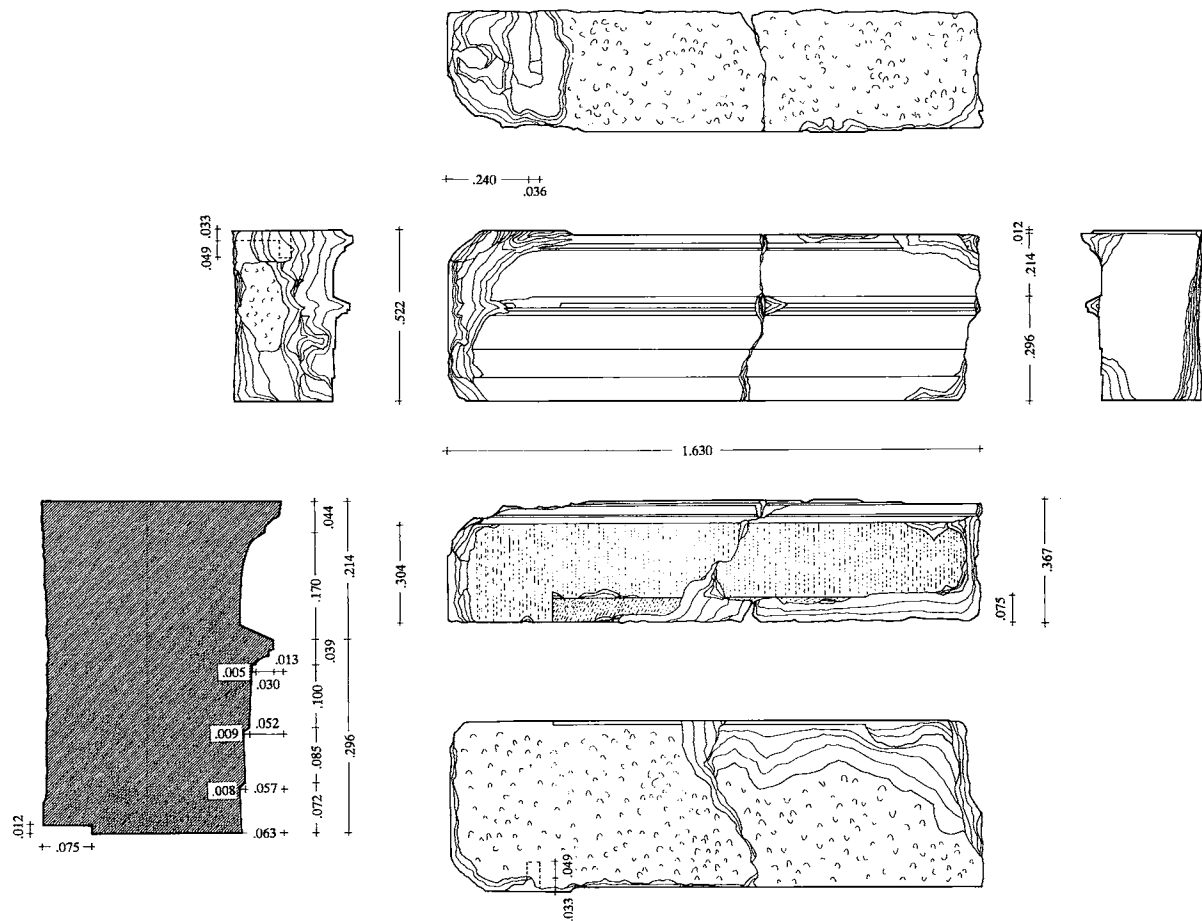




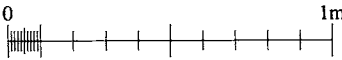


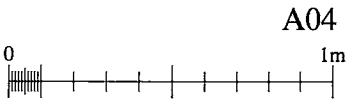
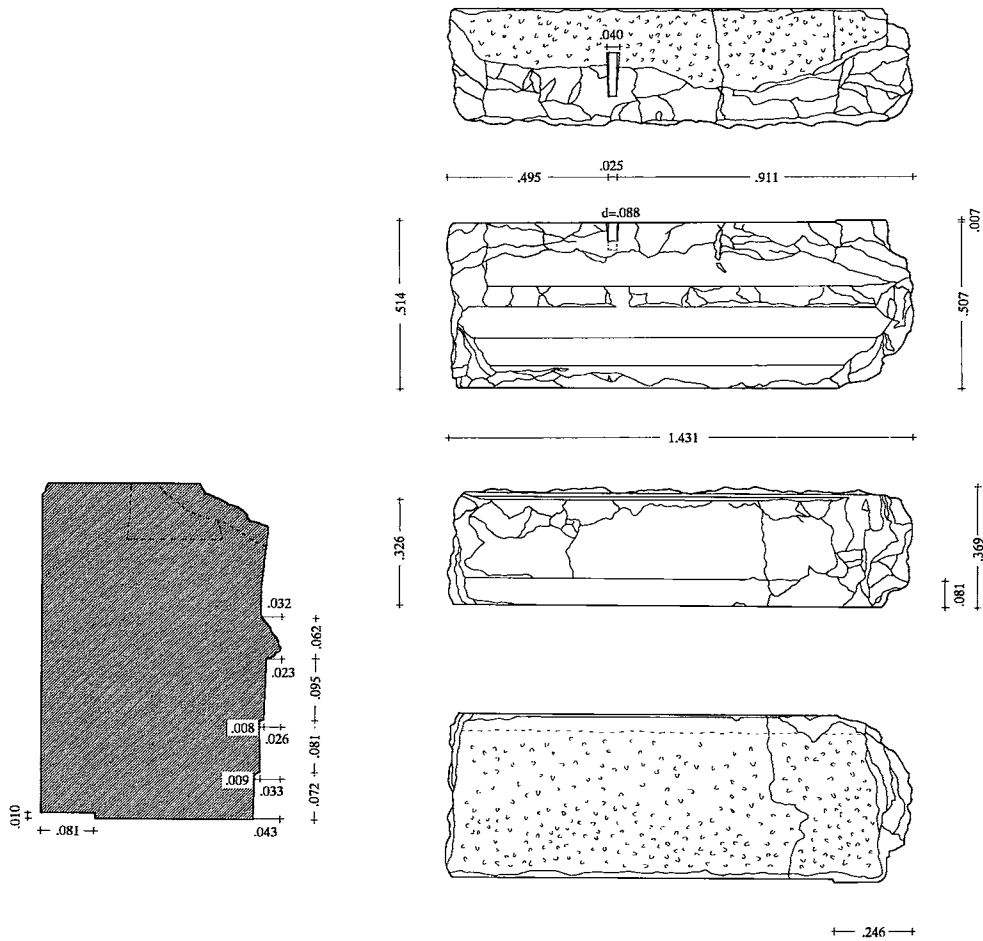


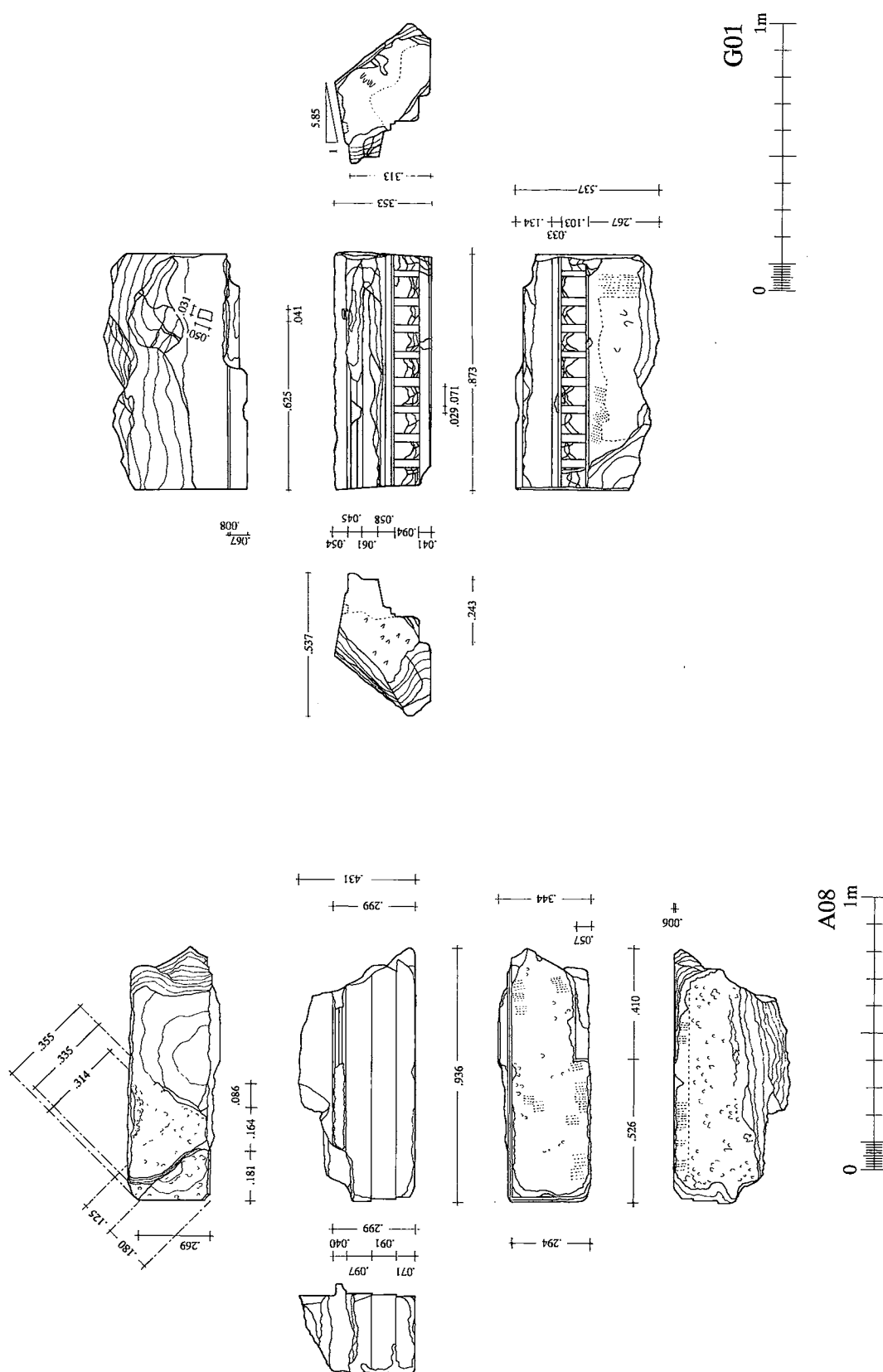


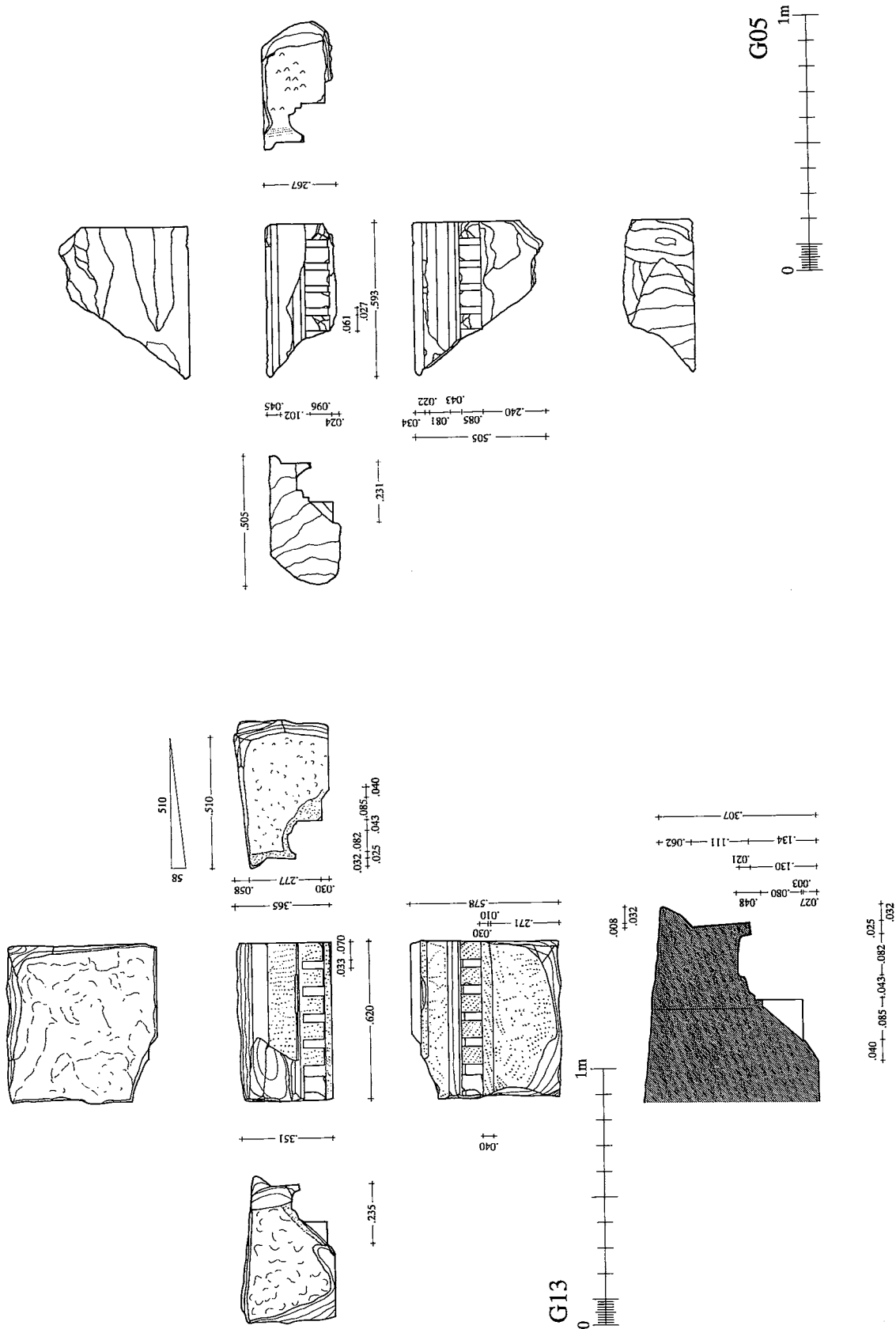


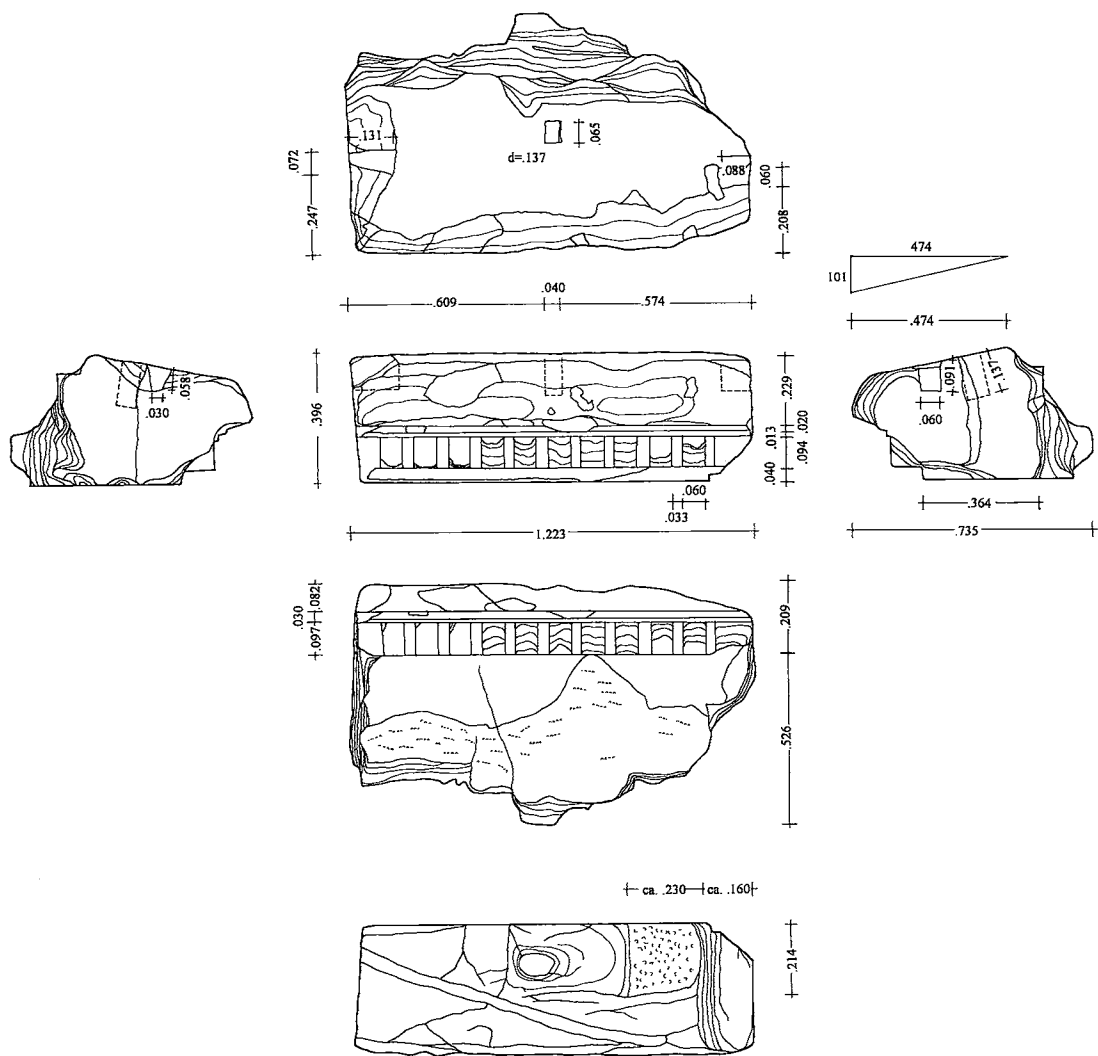
A02



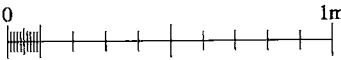


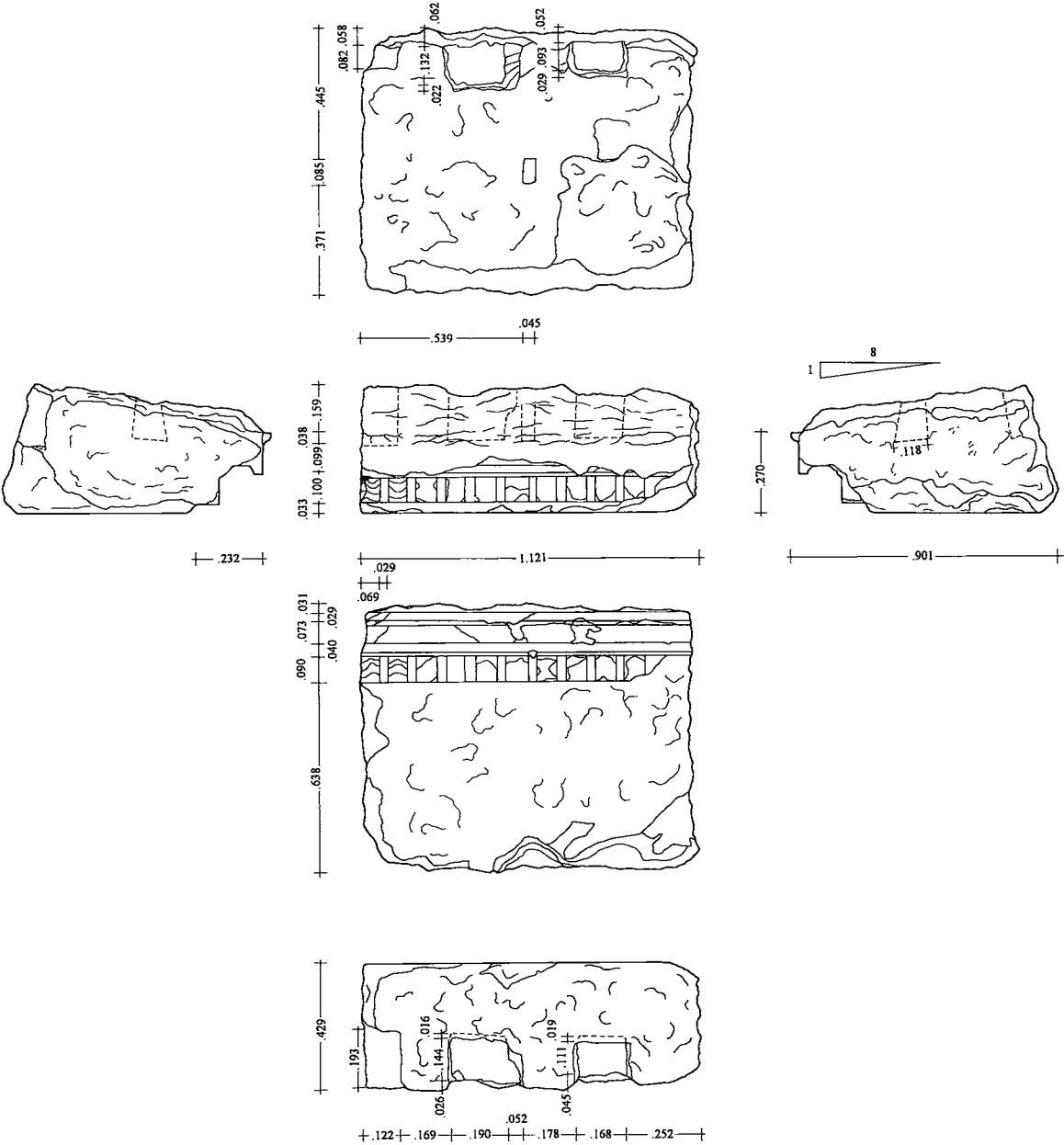




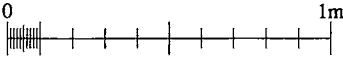


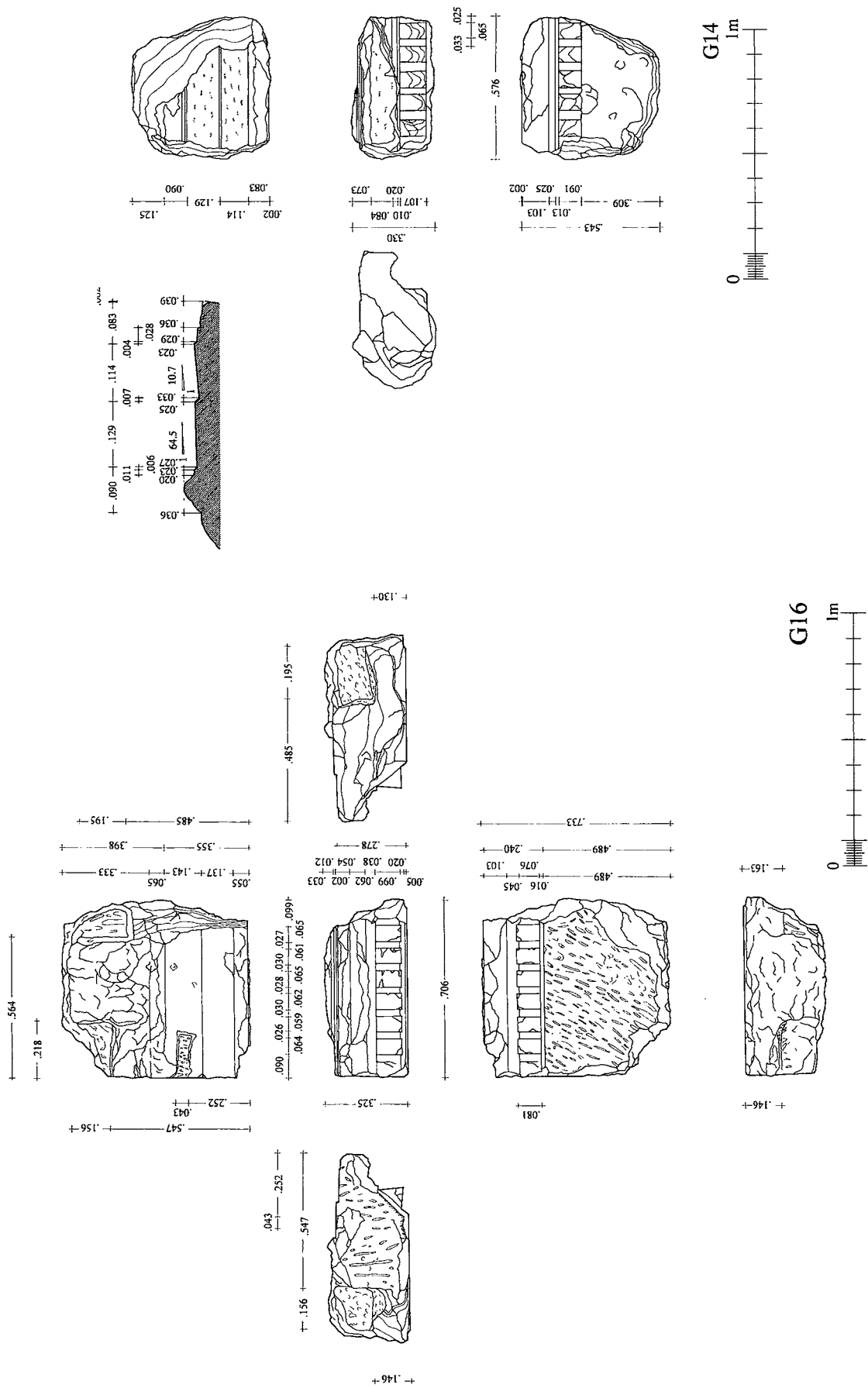
G11

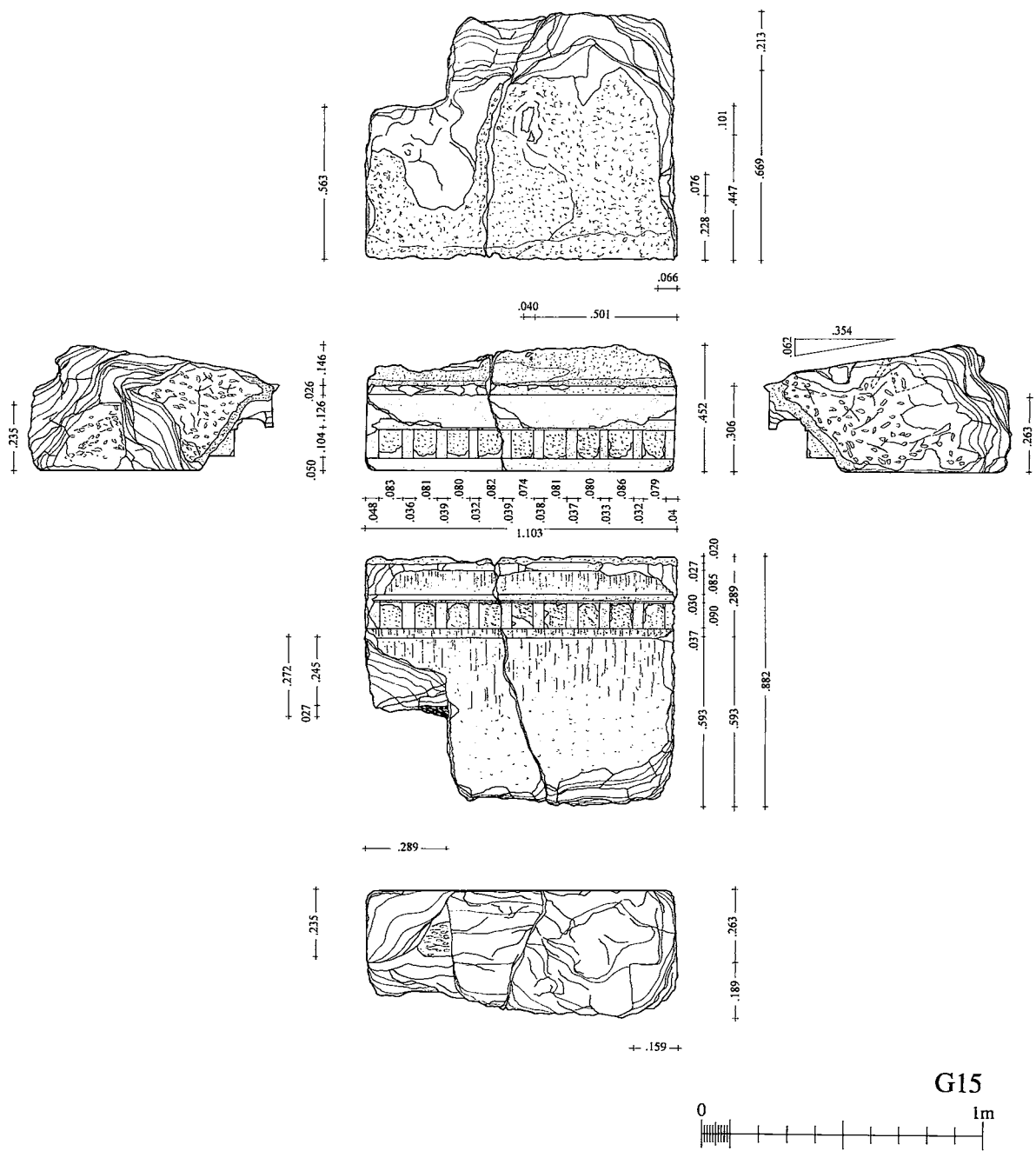


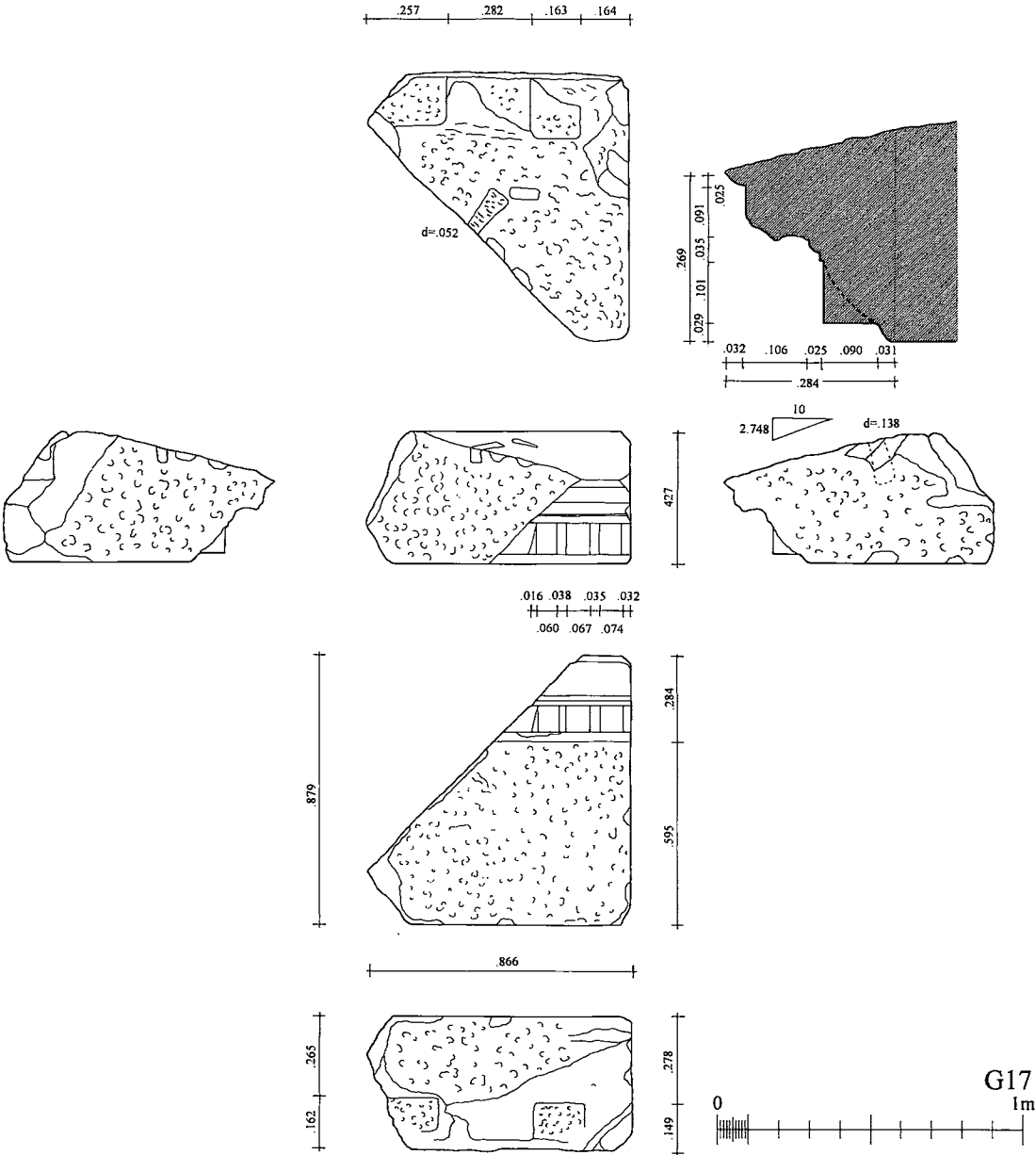


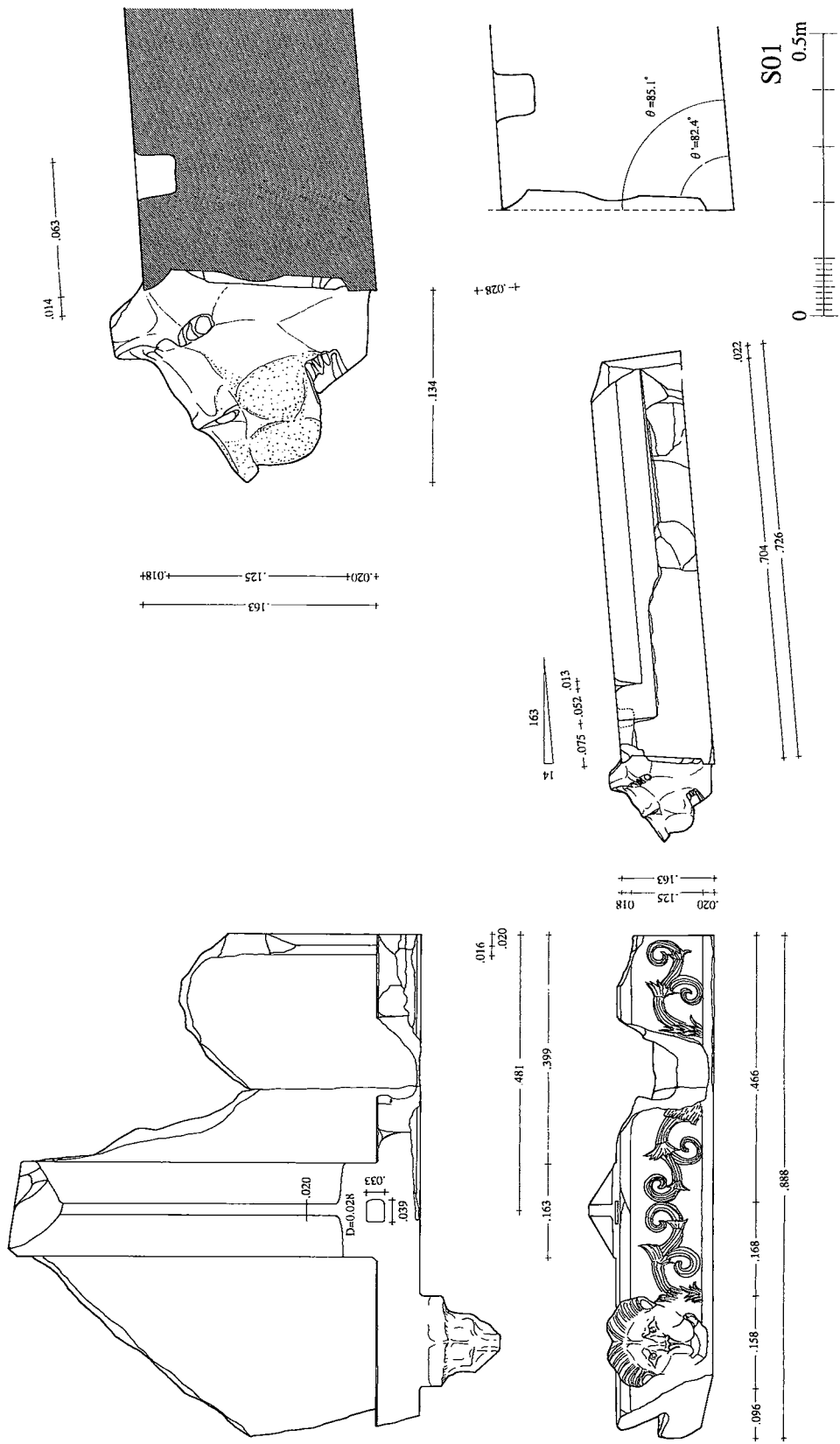
G12

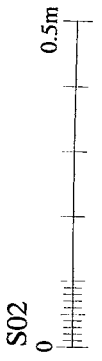
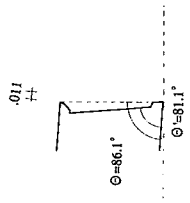
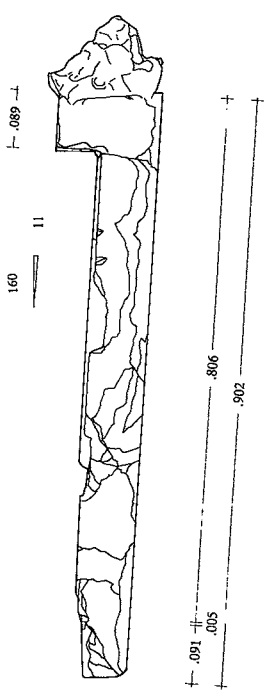
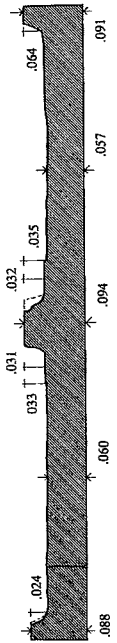
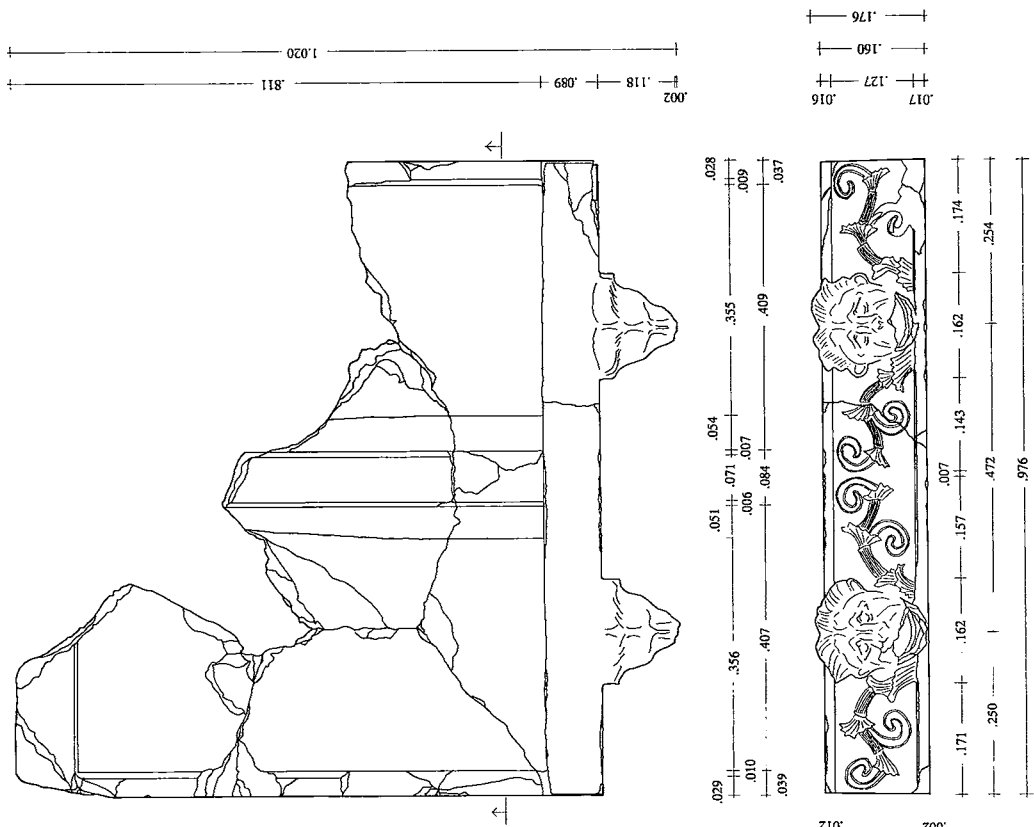


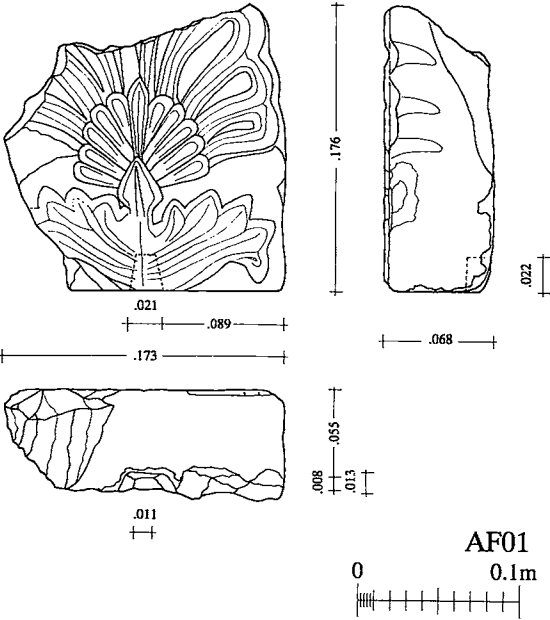
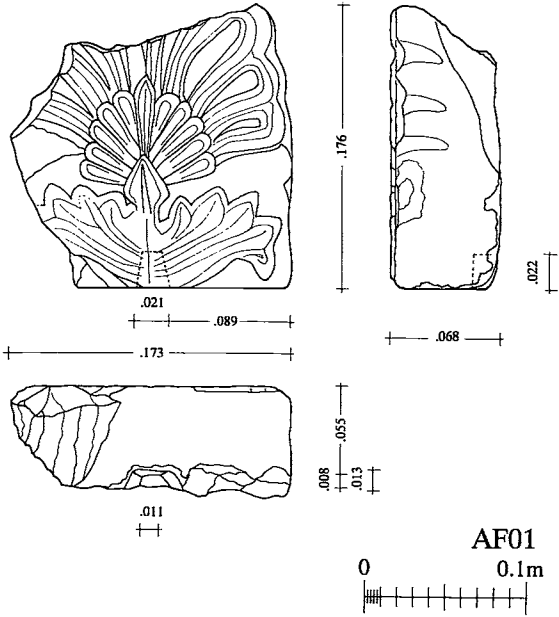


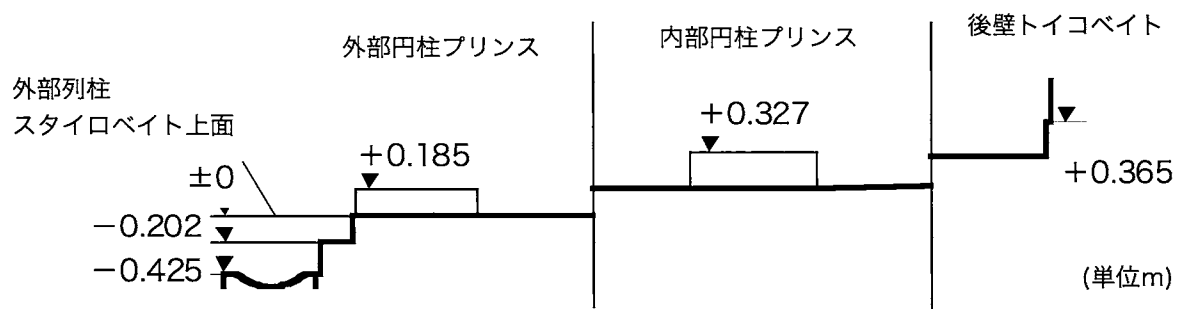




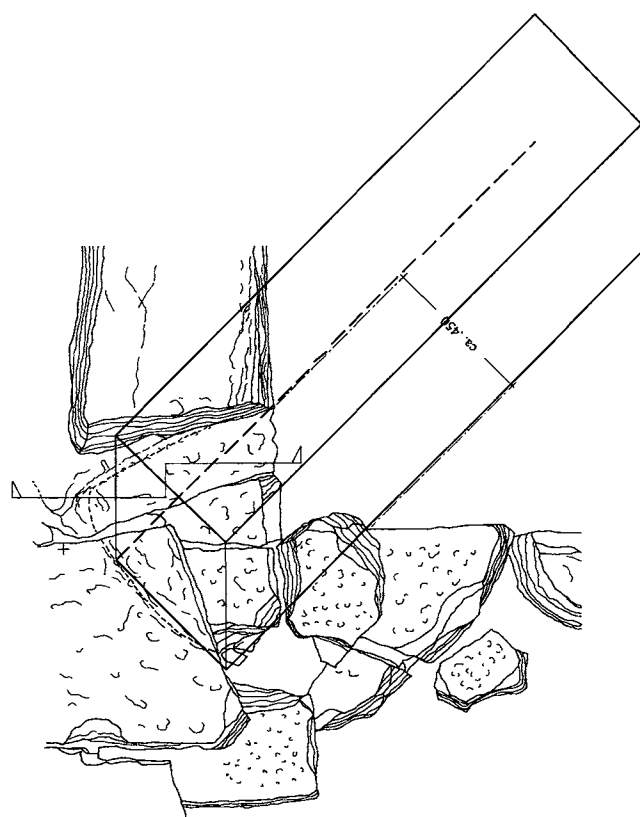




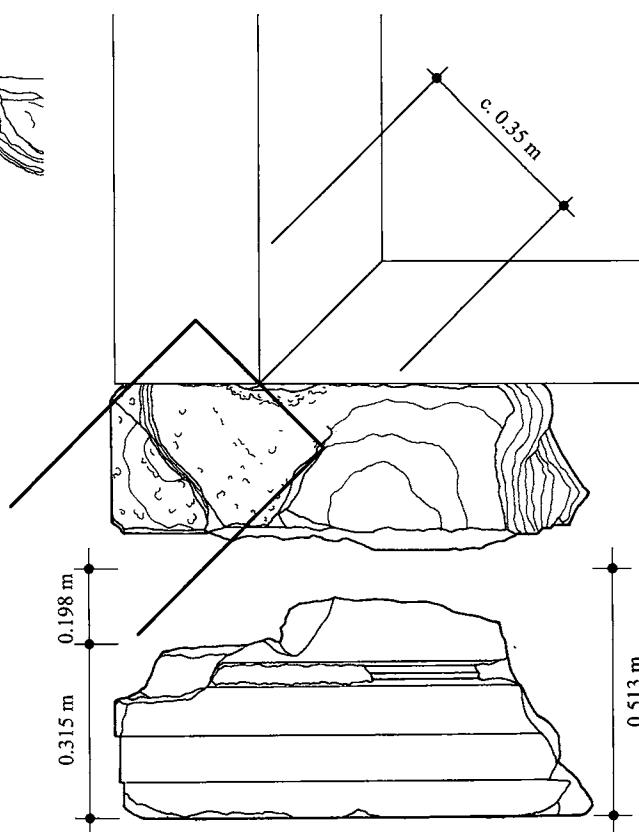




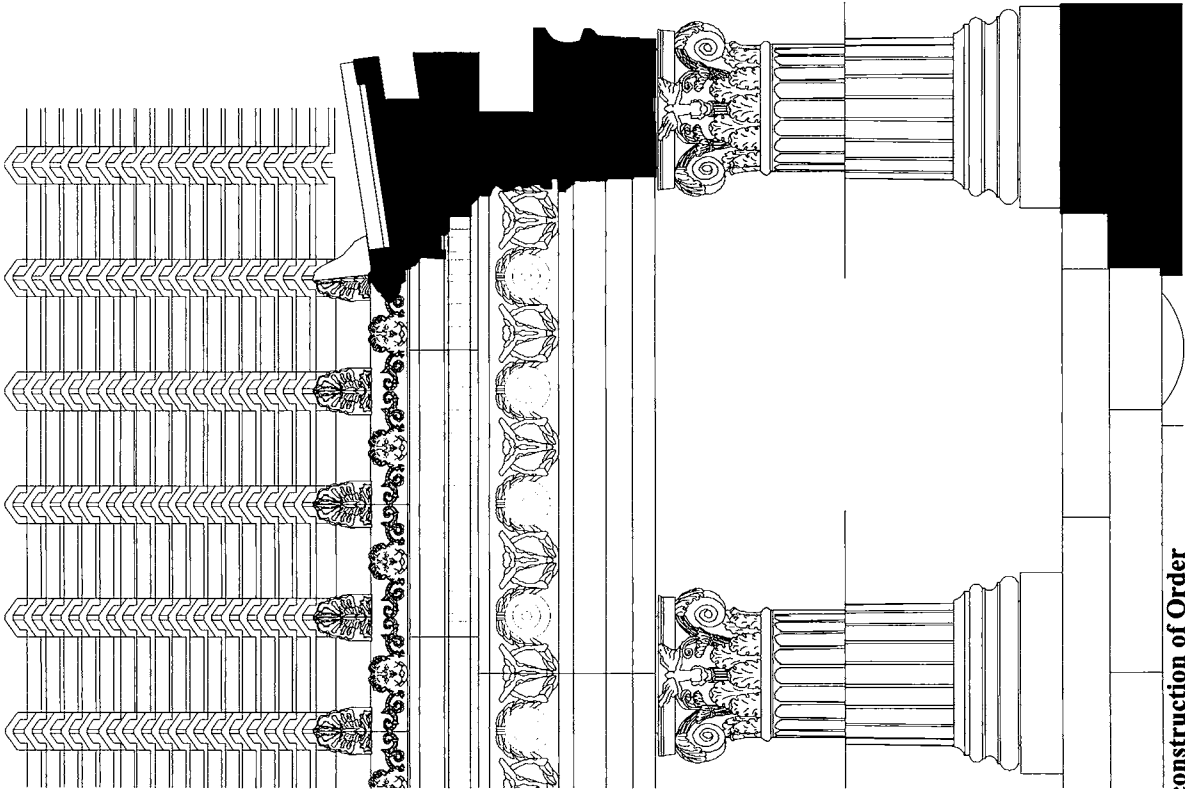
a. Relative height of Floor



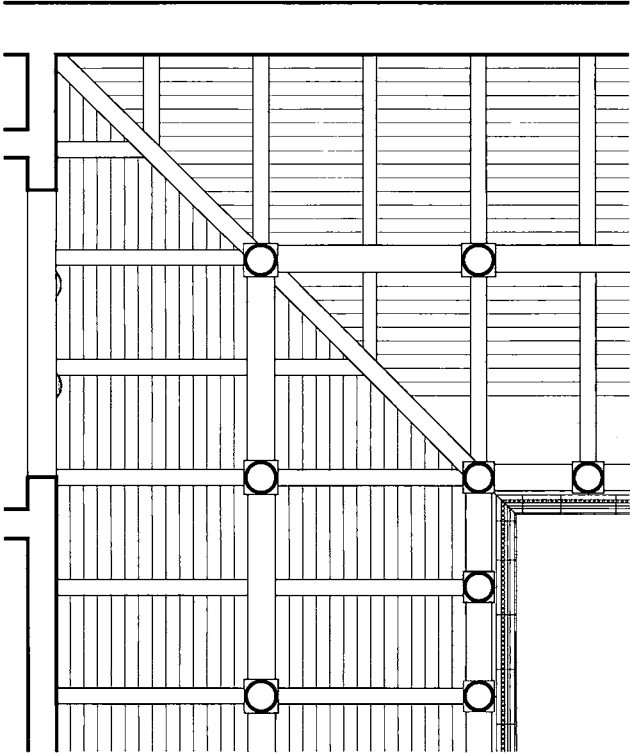
b. Northeast corner of back wall



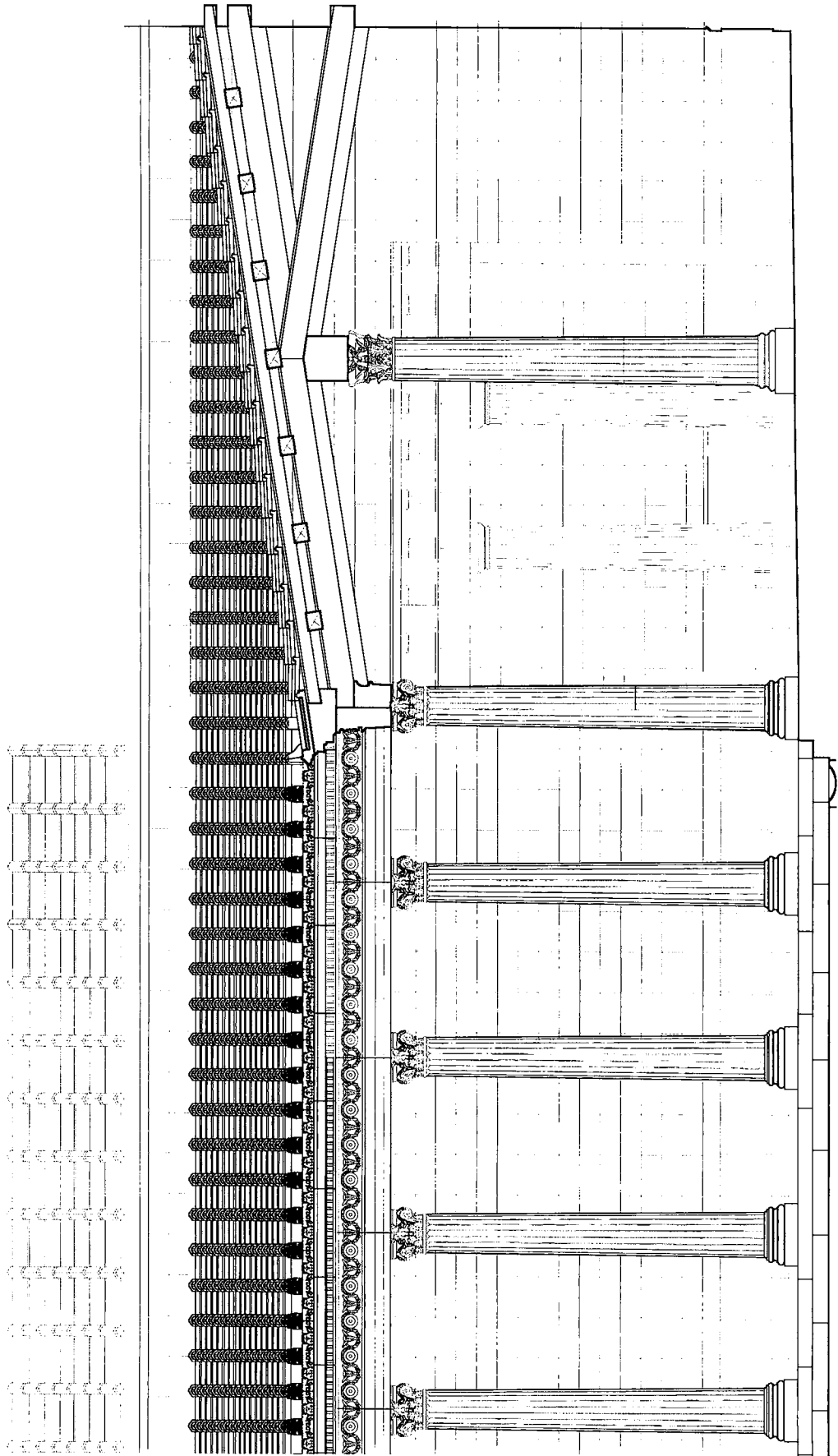
c. Corner block of backer



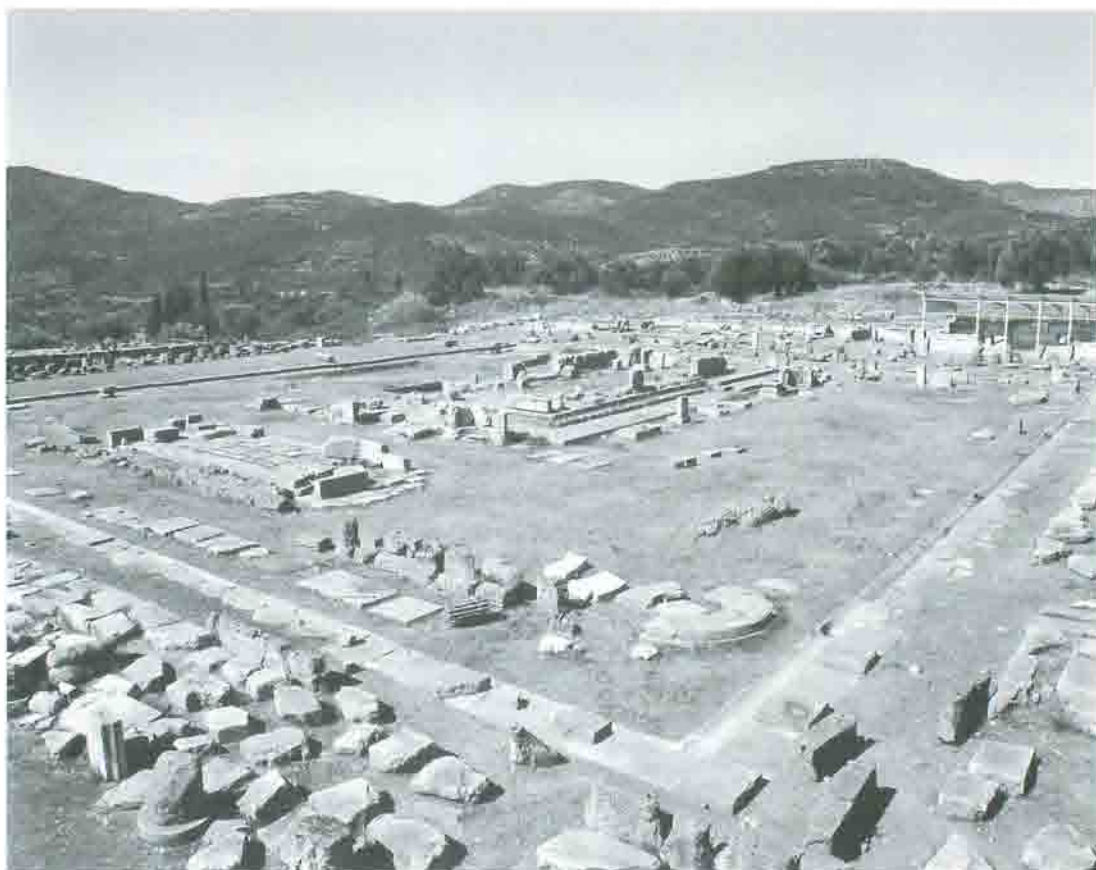
a. Reconstruction of Order



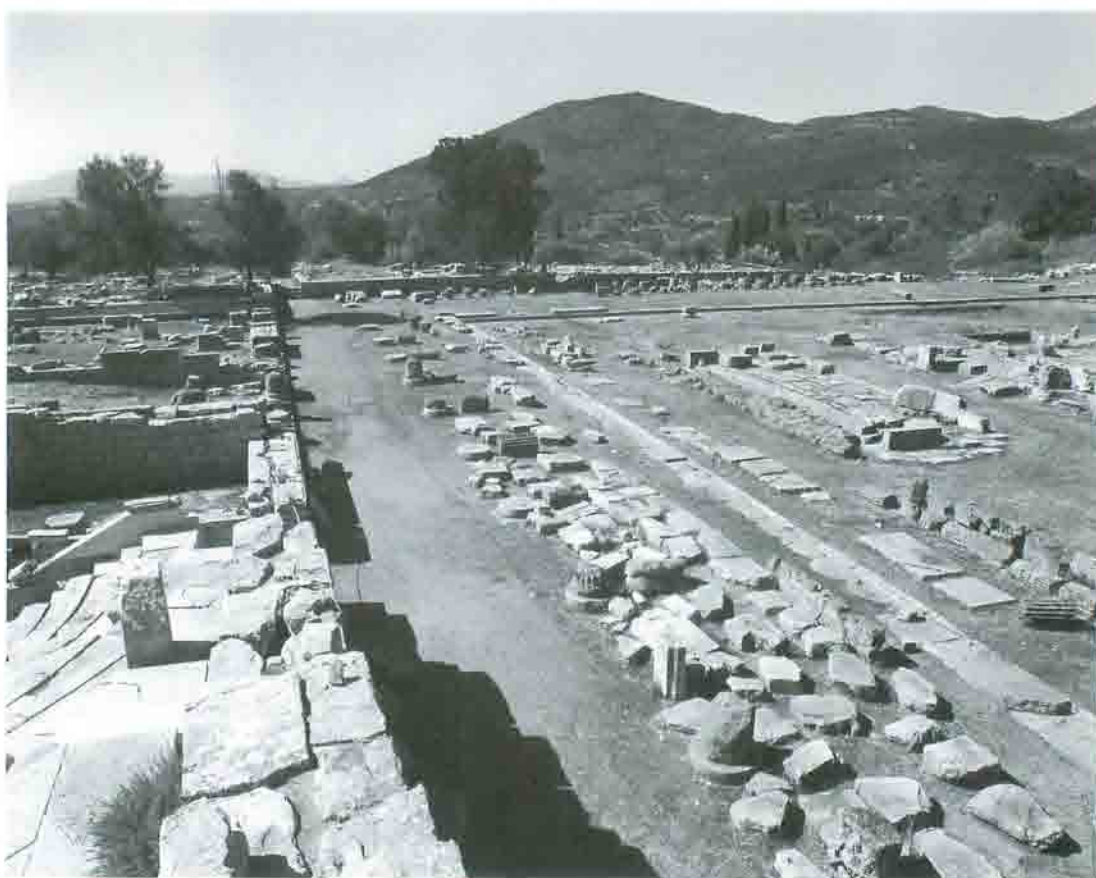
b. Reconstruction of ceiling



Reconstruction of Stoa



a. Sanctuary of Asklepios



b. East Stoa from the north



a. North Stoa from the east



b. Quarry at Kaloge



a. Drain at the southwest corner



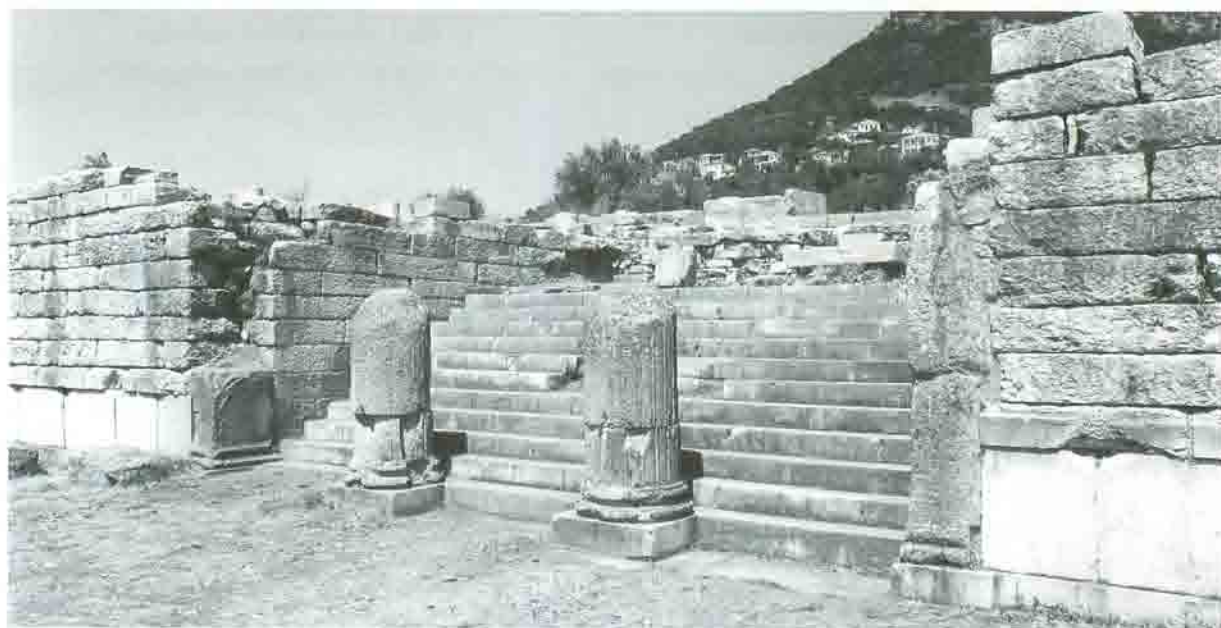
b. Drain at the northeast corner



c. Clamp



d. Crepis and dowel



e. North Propylon



a. East anta of North Propylon



b. West anta of North Propylon



c. Entrance of northwest staircase



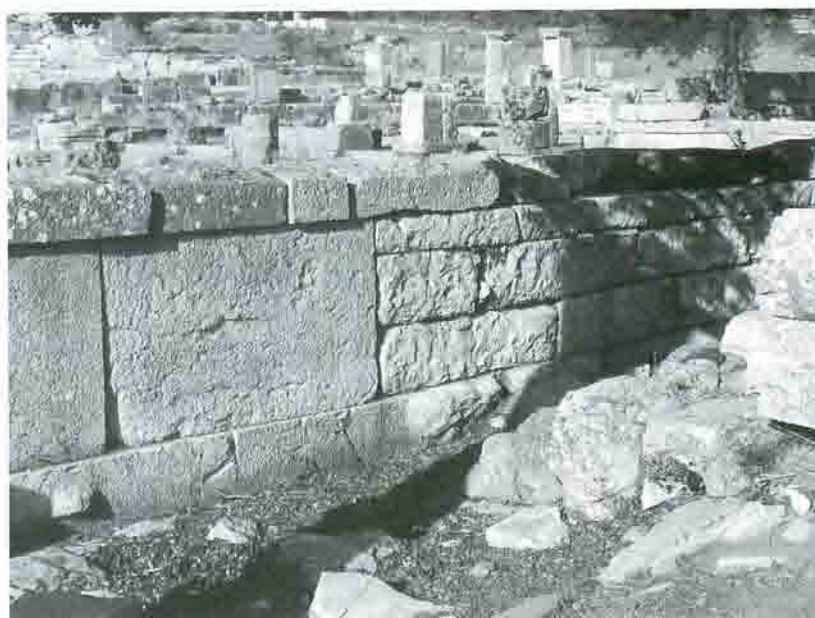
d. Wall of northwest staircase



e. Wall of Ekklesiasterion



a. Retaining wall of Soth Stoa



b. Wall of Soth Stoa near the south entrance



c. West Wall of South Stoa



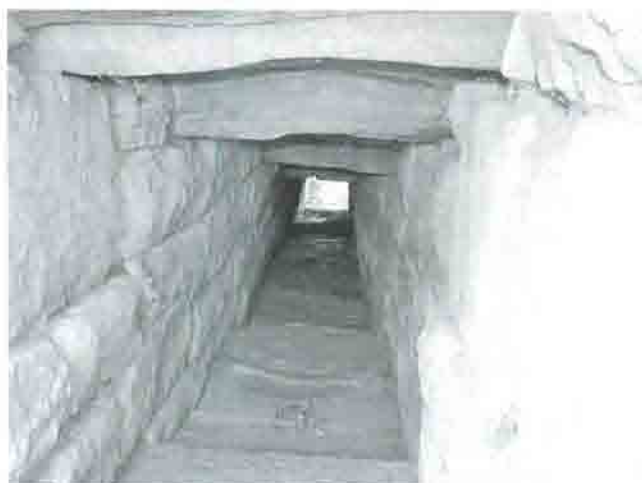
d. Wall of West Stoa



a. Wall between Bouleuterion and East Propylon



b. Drain at northeast corner



c. Drain at southwest corner



a. Block B03



b. Block B03 (detail)



c. Block B04



d. Block B09



e. Block D03



f. Block D06



a. Block D20



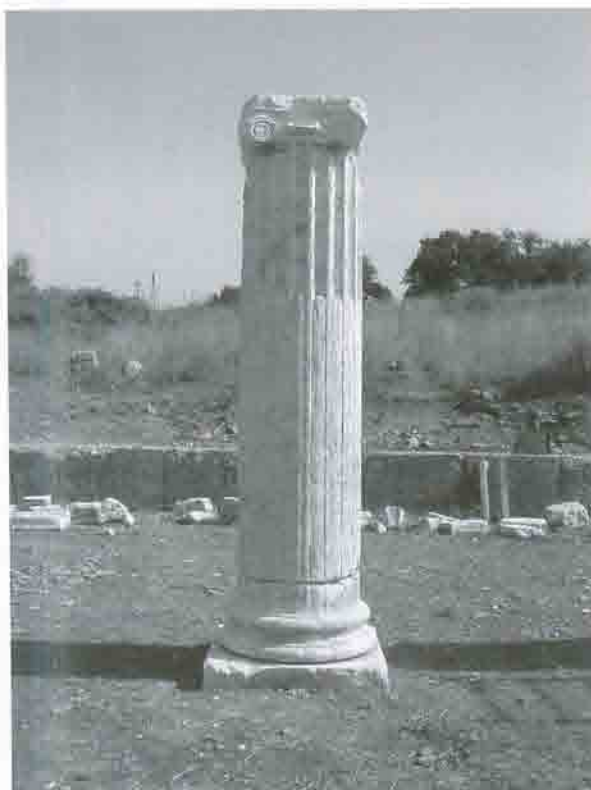
b. Block D22



c. Block D31



d. Block D48



e. Column of Stoa at Megalopolis



a. Block D39 with hole for dowel



b. Block D27 without hole for dowel



c. Block D54 with groove for clamp



d. Block D10 with stucco



e. Block C01



f. Block C02



a. Block C03



b. Block C10



c. Block C11



d. Block C12



e. Block C15



f. Block C15 (detail)



a. Block C17



b. Block C17



c. Block C21



d. Block C21(detail)



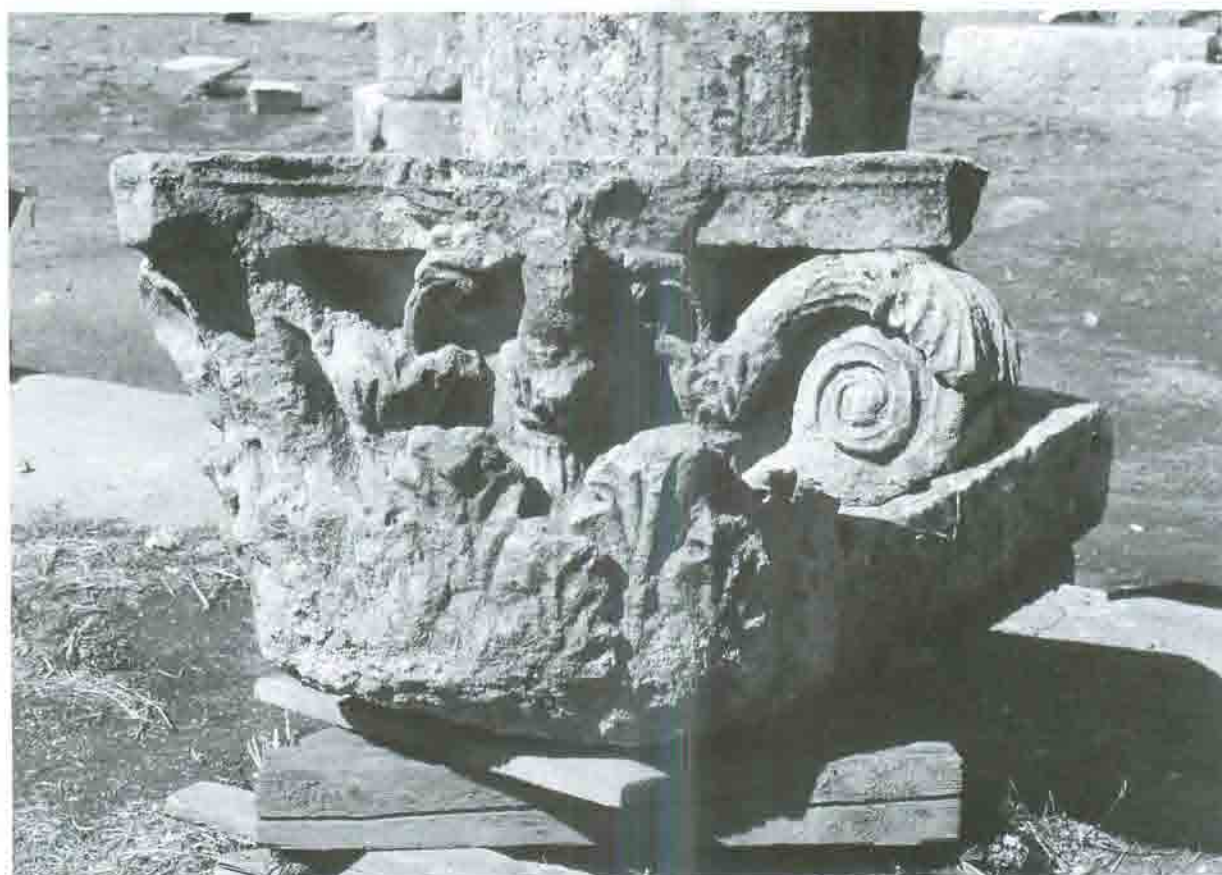
e. Block C23



f. Block C28



a. Block C24



b. Block C25



a. Block C30



b. Block C30



c. Fall of entablature at east side of Altar



d. Fall of entablature at west side of Temple



a. Block E42



b. Block A01



c. Block E27+A02 (clamp)



a. Block E09+E08 (top)



b. Block A01 (hole for clamp)



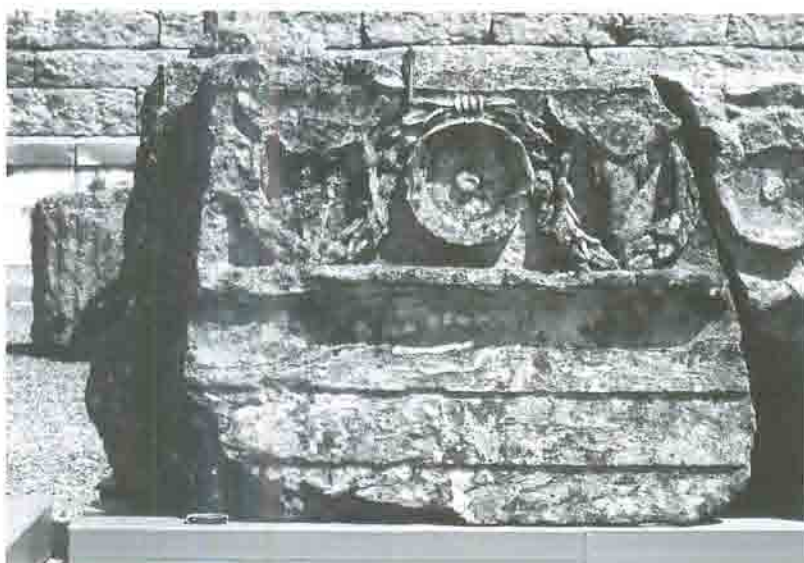
c. Block E44 (detail)



a. Block E44 (detail)



b. Block E41 (detail)



c. Block E04



a. Block E16



b. Block E16 (detail)



c. Block E17



a. Block E25



b. Block E36



c. Block E41



a. Block E44



b. Block E46



c. Block A01



a. Block A02



b. Block A08



c. Block A04



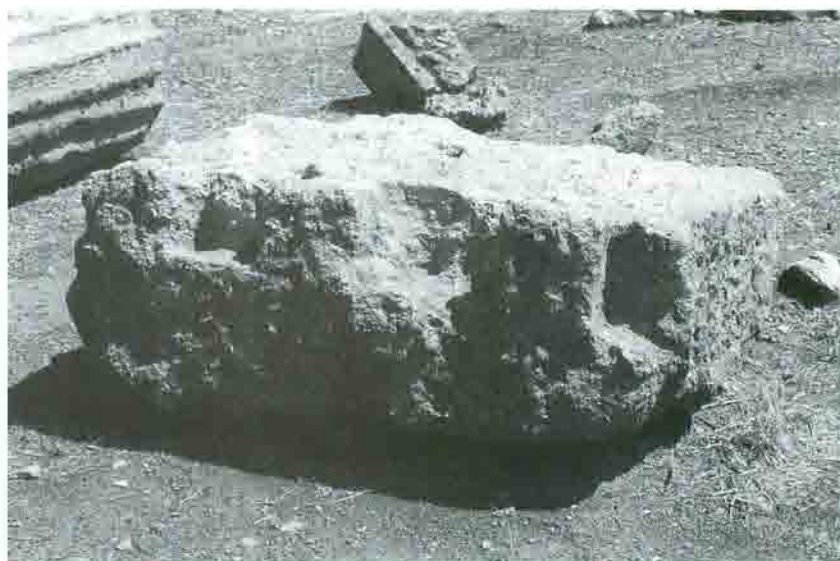
a. Block G01



b. Block G05



c. Block G11



d. Block G11



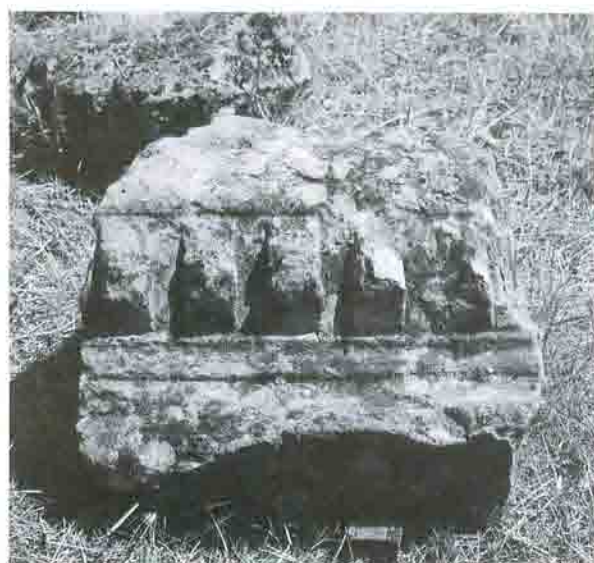
a. Block G12



b. Block G12



c. Block G13



d. Block G14



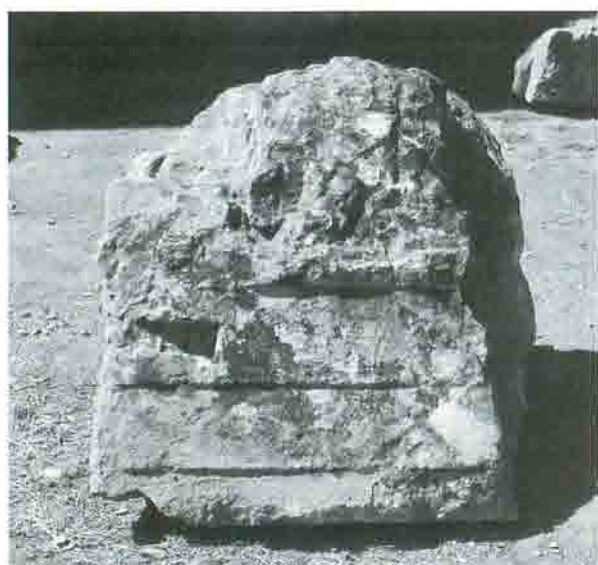
e. Block G14



a. Block G15



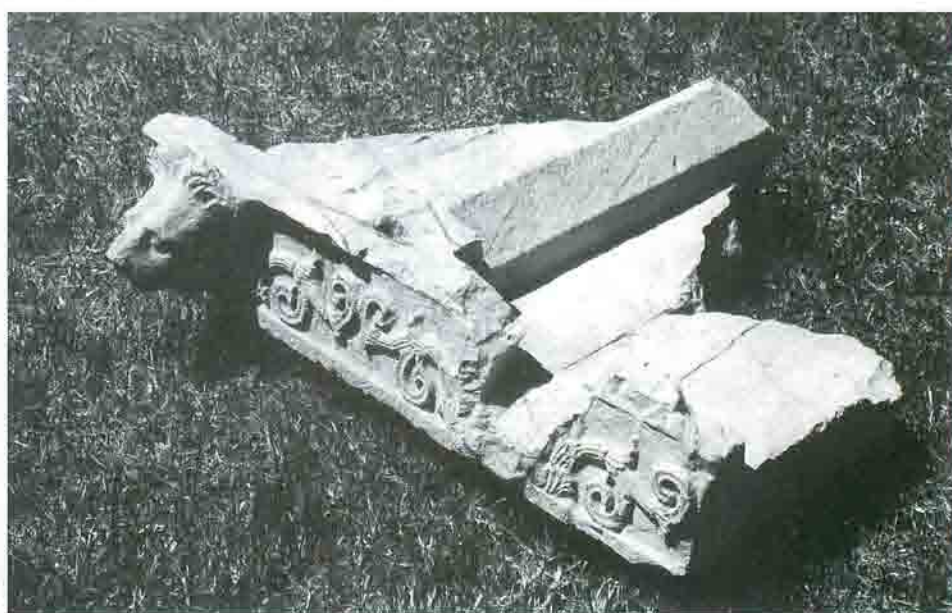
b. Block G15



c. Block G16



d. Block G16



e. Block S01



a. Block S02



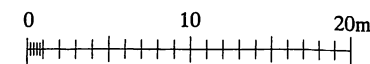
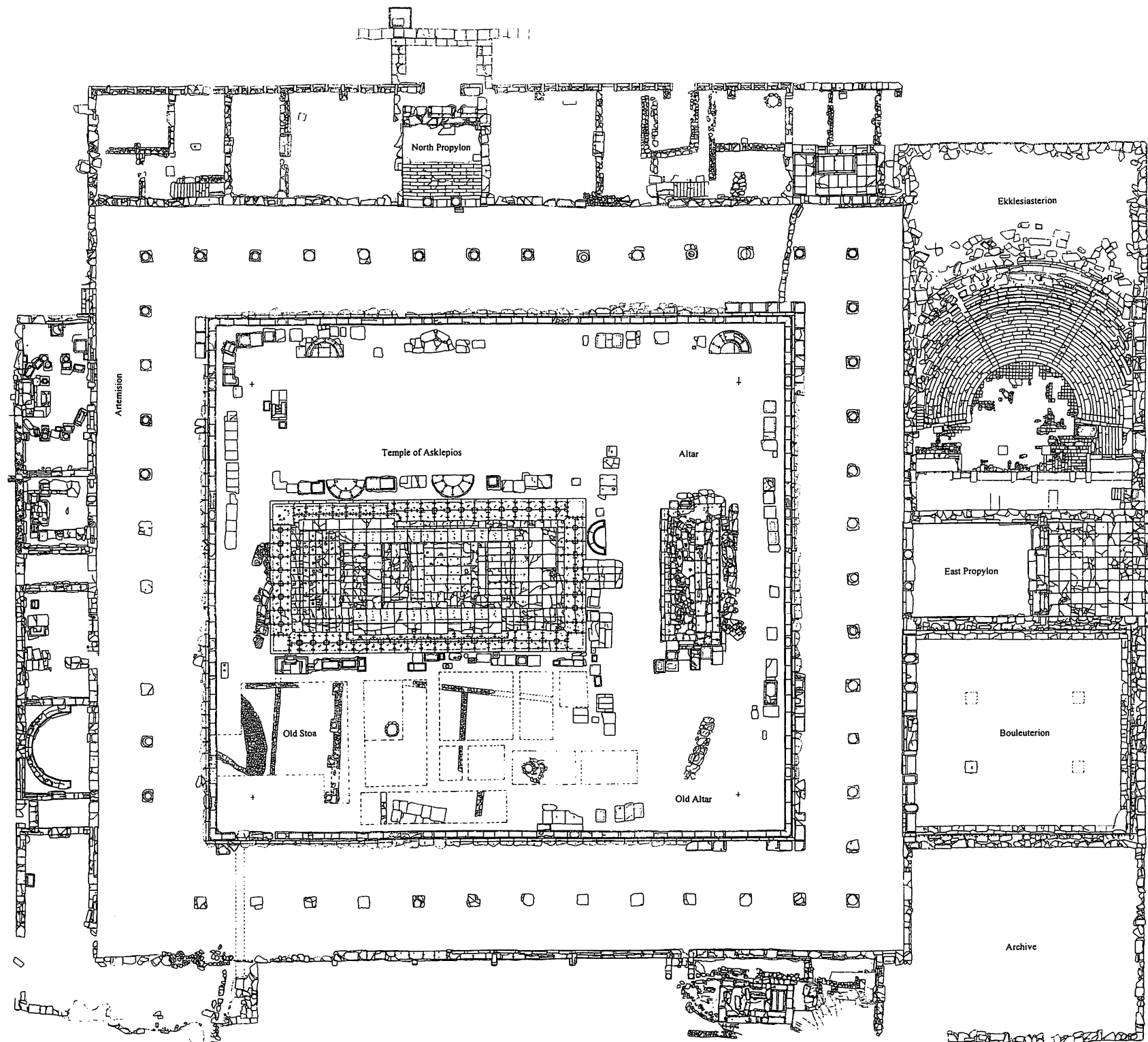
b. Block AF01



c. Block AF02



d. Top of the Rear Wall
at the NE Corner



General Plan of the Asklepieion, Messene

Japanese Architectural Mission, 2004

The general plan was drawn by Japanese Architectural Mission directed by J. Ito with the survey of the surrounding stoa and Sebastion in 2001-2003, which was also based on the following plans of the temple by E. Sioumpera and N. Asimakopoulou, the altar by A. Nalasis and D. Philotes, the East Propylon and Ekklesiasterion by P. Birtachas, the west rooms and grave on the south by E.-A. Chlepa, the monuments and foregoing buildings in the court by A. K. Orlandus.

日本学術振興会科学研究費補助金 基盤 (A) 海外 研究成果報告書

ギリシア古代都市メッセネのアスクレピオス神域の建築
及び考古学的国際共同調査 (中間報告)

編 集	伊藤重剛・林田義伸
発 行	熊本大学大学院自然科学研究科 伊藤研究室 〒 860-8555 熊本市黒髪 2-39-1
発行年	平成 19 年
印 刷	文昌堂 (宮崎県都城市中原町)